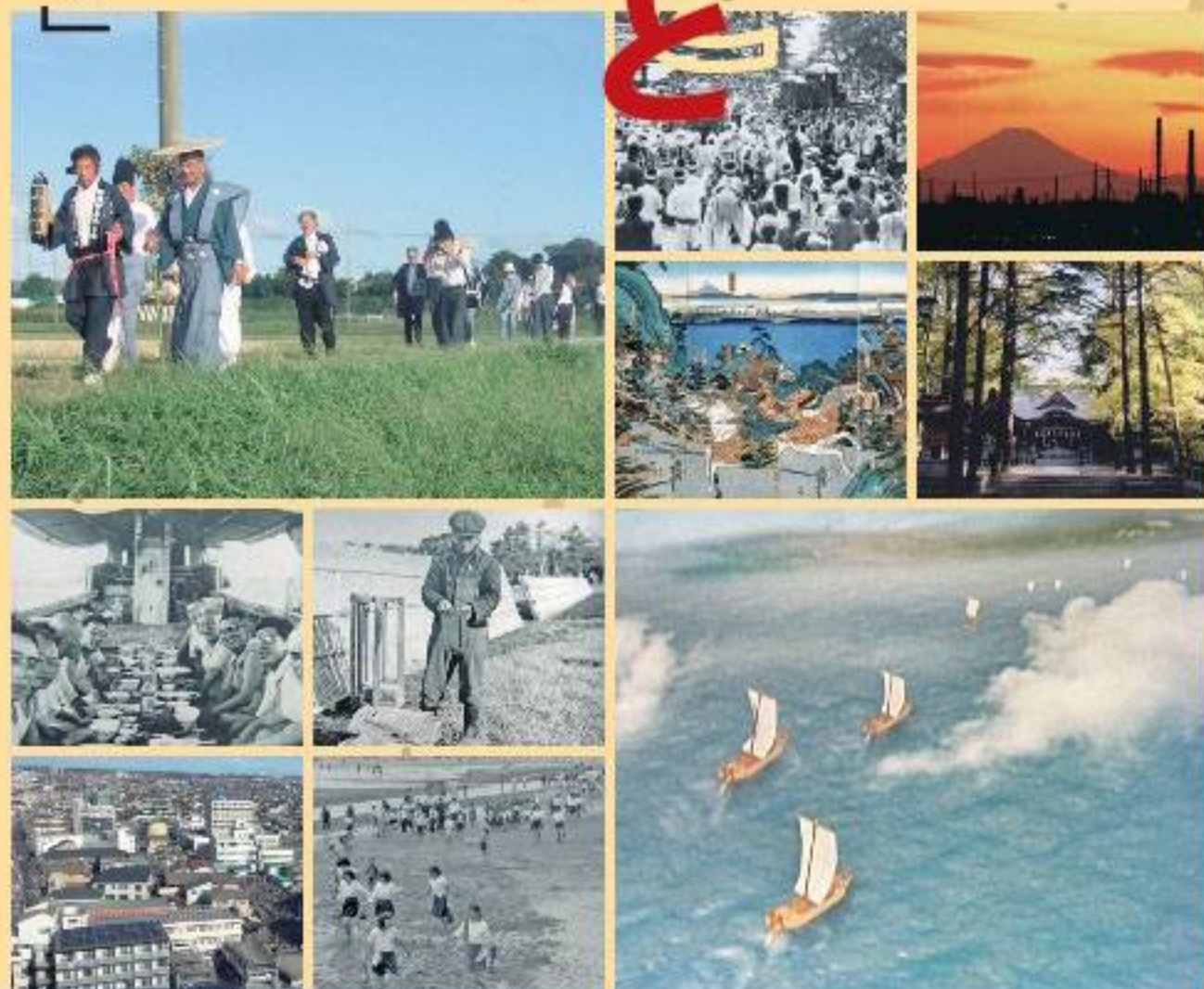


市原市立八幡公民館
閉館記念出版

八幡さまと 五大力船

市原市八幡
「歴史探訪ものがたり」



市原市立八幡公民館閉館記念出版

市原市八幡 「歴史探訪ものがたり」

八幡さまと五大力船

市原市立八幡公民館運営委員会

山岸弘明（執筆担当）

八幡公民館主催事業「八幡史学館代表講師」

市原市立八幡公民館運営委員会



発刊にあたってのご挨拶

市原市立八幡公民館運営委員会

会長 安 藤 岩 男

八幡公民館は、戦後間もない昭和二十三年六月、県下二番目の公民館として、また、県下最大の公民館として誕生しました。

その提唱者は、当時の八幡町町長菅野儀作氏で、初代の公民館長も務められています。

公民館は、八幡町のシンボルとして戦後の地域新生活運動や民主化運動の拠点となり、また、結婚式や七五三、敬老会、成人式のほか、芸能大会や講演会場、映画館として利用されました。

こうした目覚ましい公民館活動は教科書にも取り上げられ、昭和二十四年十一月には全国第一回の優良公民館表彰の栄に浴することとなりました。

昭和三十年代に入ると、八幡海岸の埋め立てと工場誘致により海の町から工業都市へと大きく変貌するとともに人口が急増し、昭和三十八年五月、八幡町や五井町など近隣五町合併による市原市が誕生しました。公民館の名称も市原市立八幡公民館へと変わりました。

その後、昭和四十七年に八幡駅前整備計画により、八幡中学校の跡地である現在の地へ新築移転、更に昭和六十一年に体育室や会議室等を増築し現在の姿になりました。

公民館の管理運営は、開館以来行政が直営で行ってきましたが、市は多様化する住民ニーズに、より効果的効率的に対応するため、民間経営のノウハウを幅広く活用し、市民サービスの向上と経費の縮減を図ることを目的に、平成二十三年四月から指定管理者制度を導入することとなり、その管理運営を八幡公民館運営委員会が担当しています。

以後三期十五年に亘り地域の皆様に愛され親しまれる公民館づくりに努めておりますが、この間平成三十年十一月には主催事業をはじめとする公民館事業が地域住民の学習活動に大きく貢献していると認められ、六十九年ぶり二度目となる優良公民館表彰を受賞することができました。

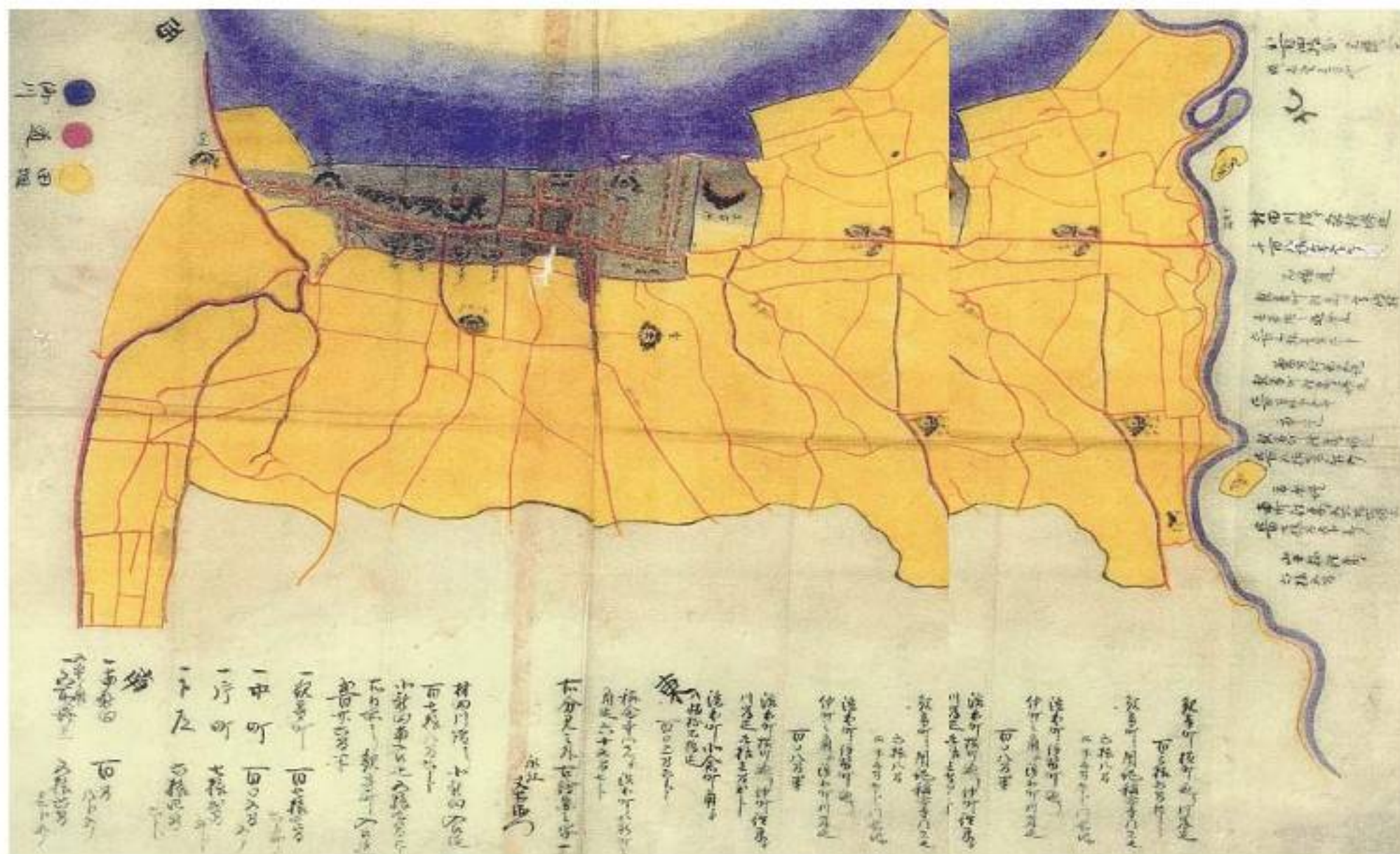
さて、八幡公民館は、市が実施する八幡宿駅西口公共施設再配置計画に基づく複合施設の建設に伴い、令和八年三月一日をもって七十年余りの長い歴史に幕を閉じることになりました。そこで、この度閉館を記念して、地元八幡地区の歴史文化をまとめた『市原市八幡「歴史探訪ものがたり」八幡さまと五大力船』を発刊することといたしました。

制作にあたっては、八幡地区の歴史文化を研究されている山岸弘明氏に全面的にご協力をいただきました。

ご高覧いただけましたら幸いです。

最後に、これまで公民館をご利用くださいました皆様に心より感謝申し上げ、発刊にあたっての挨拶といたします。

令和七年十月



「八幡村古図」の写し

(江戸後期写しか=飯香岡八幡宮絵図)

B 4 和紙を2枚貼り合わせた中型図で、中央に大きく村絵図、道路や家並みが詳しく読み取れる。2辺の余白に分見（詳しく見る）。下段に「右分見の外、古地図の写し。承仕（じょうじ=神社の職員）又右衛門（作図）」。

古図は現存しないが、河岸地の近世的町割り、江戸前中期に遡るか。右段「240度の見盤をもってこれを量る」。見盤は江戸時代の測量器具。目標物の相似三角形を利用して距離を計算した。村田川端より五所村境まで1183間5分7厘（0.57間）などを記録、「1厘（0.3mm）1間（1800mm）なり」、原図縮尺は6000分の1となる。



飯香岡真景 南総八幡

(明治43年=飯香岡八幡宮版本)

南総は上総のこと。八幡宮の高台から、洋々と広がる東京湾と富士山を遠望。かつての八幡海岸が偲ばれる。



戦後、八幡町の司令塔だった初代公民館

初代公民館＝昭和23年6月、菅野儀作町長の呼びかけに応えた職工組合と町びとたちの奉仕作業で創立、土地は八幡様、木材は旧習志野連隊解体残材を活用した。公民館の特筆活動に「新生活運動」があった。「公民館結婚式」や「合同敬老会」が各地に広がり、文部大臣賞に輝いた。

第2代公民館＝昭和47年、駅周辺整備事業のため八幡中学校跡に移転。61年図書室、体育館を増築。引き続いて地域文化の発信基地として貢献した。平成30年地域と密着した取り組みが評価され、2度目の「全国優良公民館文部科学大臣賞」に輝いた。



八幡村五大力船々揃え図

(寛政6年＝飯香岡八幡宮大絵馬)

初代登亭北寿画。ピカソに影響を与えたとされる葛飾北斎の門人で、北斎の洋風版画を引き継いだ個性的逸品。市原台地の日の出、青松林の遠近法などに片鱗。11代将軍家斉代、江戸廻船問屋・角屋十兵衛せがれ寄進。春季大祭の船揃えを画く。船名や帆印、積み荷、服装や合図の手信号などが詳しく描写されている。



平成30年度



昭和24年度

八幡公民館
2度の
文科大臣表彰



山口達画伯の「四季草花図」
畳60畳の大天井絵が
八幡公民館のシンボルだった



山口達画伯の「浜辺にて」(八幡公民館展示)

書生会・浅見喜舟の板書
「八幡町建設のうた」

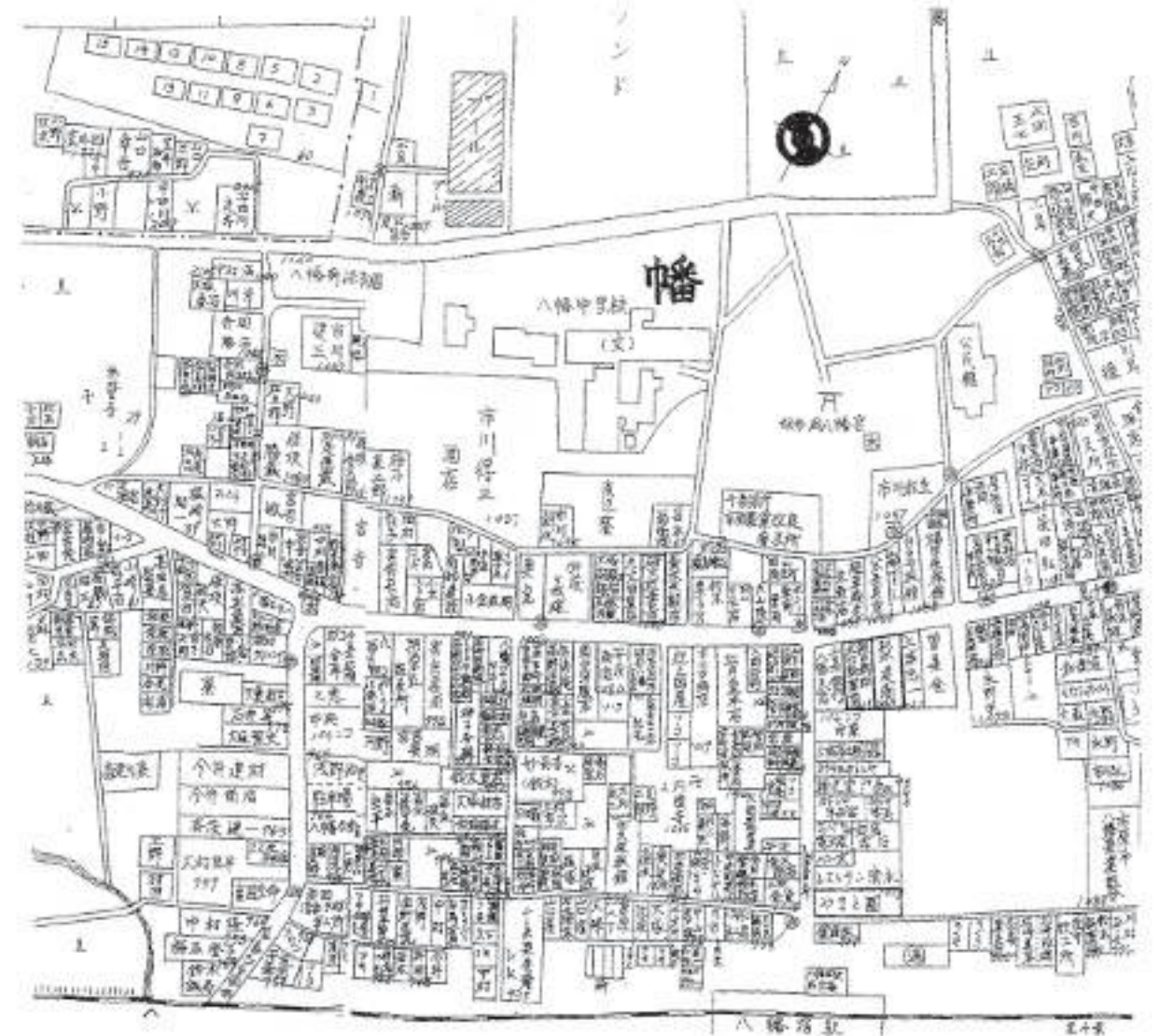




八幡海岸通の埋立て



工業都市として躍進する現在の八幡



発展途上、昭和40年ころの八幡町

一寒村から一大工業都市へ。昭和30年代に始まった「京葉臨海工業地帯造成事業」は八幡の町を一新させた。潮干狩りやのり養殖で賑わった八幡・五所海岸は真っ先に埋め立てられ、巨大プラントが次々と建設された。昭和38年、市原（八幡）町は五井、姉崎町などと大同合併、旧市原郡1郡1市の市原市が発足した。町は大きくさま代りしようとしていた。

八幡さまと五大力船

もくじ

発刊にあたってのご挨拶

市原市立八幡公民館運営委員会

会長 安藤 岩男

写真ページ

「八幡村古図」の写し

八幡村五大力船々揃え図

八幡海岸風景

八幡公民館所蔵書画

飯香岡八幡宮の御由緒と御伝承

国府総社 飯香岡八幡宮

宮司 平澤 牧人 14

はじめに

市原八幡宮から飯香岡八幡宮へ

20

飯香岡八幡宮

神やとる国府八幡宮の杜 22

飯香岡八幡宮境内図

36

- ① 華麗な「元禄拝殿」 37
- ② 力づよい「重文本殿」 39
- ③ 足利義満寄進みこし 40
- ④ 武運長久、家康大太刀 42
- ⑤ 足利義明と大般若経 43
- ⑥ 五大力船やお伊勢参り大絵馬 45
- ⑦ 桃山時代の当世具足 47
- ⑧ 安産願う夫婦いちょう 48
- ⑨ 頼朝伝説と上総広常 49
- ⑩ 一の鳥居と海中鳥居 51
- ⑪ 古式手水石の秀作 53
- ⑫ 往還側大鳥居参道 54
- ⑬ 道標庚申塔と道祖神 56
- ⑭ 漁業協同組合記念碑 58
- ⑮ のり養殖記念のこま犬 60
- ⑯ 地域教育の父川上規矩 62
- ⑰ 地域発展の母菅野儀作 63
- ⑱ 放生池と清見の滝 64
- ⑲ 「神仏分離」で消えた鐘楼 65
- ⑳ 直木賞作家立野信之碑 67
- ㉑ 日清、日露戦争凱旋碑 68
- ㉒ 207柱が眠る忠霊塔 69

- ㉓ 八坂神社と蔵島神社 71
- ㉔ 天神社などの摂社 72
- ㉕ 六所御影神社 73
- ㉖ 三山三段塚と行屋 74
- ㉗ 富士信仰と富士塚 75
- ㉘ 大山石尊、山祇神社 77

- 八幡宮別当寺霊応寺 78
- JR八幡宿駅 82
- 神道中教院 86
- 八幡小学校 88
- 八幡中学校 92
- 市原青少年会館 95
- 八幡幼稚園 96
- 八幡公民館 98
- 八幡町、市原町役場跡 106
- 市原市制と市原支所 112
- 八幡海岸通 116

こらむ

海苔養殖でにぎわう八幡五所の人びと

市原市立八幡公民館運営委員会副会長

八幡史学館講師 時田 光夫 120

信楽山宝樹院無量寺 124

龍燈山光明院稱念寺 132

地福山満徳寺、御墓堂 140

泰廣山圓頓寺 148

八正山妙長寺 156

こらむ

昔懐かし子どもの遊び

時田 光夫 164

八幡村と八幡宿 170

八幡を所領した大名と旗本 176

房総往還と宿通り 186

高札場と継立て伝馬所 189

寺嶋医院と旗本村上家名主文書

194

- 八幡梅谷家文書 198
- 金杉浜塩田の開発 200
- 猿田彦神社 203
- 八幡港と五大力船 206
- 明治の市原出途と南町 214
- 市川本店と市川石三 220
- 市原市教育センター 222
- 明治市原の中心街 224
- 戦前は煙突の町 228
- わたつみ神社と力石 231
- 八軒町と「魚惣」 232
- 五大力船の町「浜本町」 234
- 観音町入口の道標兼庚申塔 240
- 観音町稲荷神社と児童公園 242

- 八幡の太平洋戦争 244
- 昭和後期の八幡宿駅と商店街 248
- 胴埋塚 252
- 五千坪と五十谷 254
- 土地改良区農魂碑 257
- 石塚公園庚申神社 258
- 石塚小学校とスポレクパーク 260
- 村田川と渡船場跡 262
- 五所村 266
- 五所四反田遺跡 269
- 市原条里制遺跡 272
- 五所歴史ストリート 275
- ご協力いただいた方々 280
- 主な参考資料 281

飯香岡八幡宮の御由緒と御伝承



国府総社
飯香岡八幡宮宮司

平澤牧人

御祭神

主祭神三柱

誉田別命（ほんだわけのみこと）
息長帯姫命（おきながたらしひめ）
玉依姫命（たまよりのみこと）
相殿七柱
日本武命（やまとたけるのみこと）
足仲彦命（たらしなかつひこのみこと）
経津主命（ふつぬしのみこと）

猿田彦命（さるたひこのみこと）
天穗日命（あめのほひのみこと）
中筒男命（なかづつのおのみこと）
事代主命（ことしろぬしのみこと）

八幡神（はちまんしん）は応神天皇のご神霊であり、欽明天皇の時代（571）豊前国宇佐に初めて示現されたと伝わり、以来奈良・平安・鎌倉・室町・江戸の各時代を通して皇室、武家

から篤く尊崇され、さらに庶民からの信仰も加わったことにより全国的に信仰されるようになりました。総数約11万の神社の内、八幡神社は4万社を数え、その信仰がいかに盛んであったかが伺えます。

この飯香岡八幡宮も創建以来歴代の將軍家から篤く崇敬され、とくに足利將軍家よりは御神輿・御社殿をはじめ数多くの寄進をうけてきました。またこの八幡の地名の由来ともなった鎮守の氏神であり、別名「子育て八幡宮」とも呼ばれ、安産・子育ての守り神として現在に至るまでひろく尊崇をあつめています。

御由緒

飯香岡八幡宮として鎮座する以前は六所御影神社と称したといわれ、白鳳年間（675）一國一社の八幡宮として勧請されたことに起源を持つと伝わ

ります。天平宝字3年（759）、全国放生の地に鎮座する国府八幡宮と定められ国府司祭の放生会を現在に伝える上総国の古社の1つであり中世以降、上総国総社としての機能を持つようになり、その名残から現在も「国府総社」と尊称されています。

また、保元3年（1158）、山城国の石清水八幡宮「諸国莊園官符」に「上総国市原別宮」と記載され、石清水八幡宮別宮の市原八幡宮として中世以降、源氏・千葉氏・足利氏・徳川氏など武門の崇敬厚く、殖産工業・海上守護・安産子育ての神として広く庶民の信仰を集めました。とくに歴代の足利將軍家より深い尊崇を受け、中でも三代將軍足利義満公より御神輿4基、8代將軍義政公より御本殿の寄進を受けました。江戸時代には徳川家康公より所領150石を安堵され、10万石の格式を与えられ明治にいたりました。



市原の柳桶神事絵巻（石井成兒画伯作品）

「飯香岡」地名由来の伝承

「飯香岡八幡宮由緒本記」や「飯香岡八幡宮御伝記」などの文献によると、八幡大神がこの地に鎮座される以前は、御影と石握という2つの地名があったといわれています。六所神が石握には鎮座していました。六所神が石握には鎮座していましたが、垂仁天皇15年に伊静武彦という人物が現在の飯香岡八幡宮の場所に六所神を遷し、六所御影神社と称されるようになりました。現在でも、八幡石塚にある庚申神社が飯香岡八幡宮の元宮であるという伝承があります。が、実はこの六所神が石握から遷座してきたことに由来するのでしょうか。

景行天皇43年、この地へと東征してきた日本武尊は六所御影神社のある小高い丘の上に陣を構え、国見をして国褒めの言葉を発せられました。その時に六所御影神社の社人であった豊永武彦という人物が日本武尊に酒や飯を奉ったところ、尊は飯の香りを褒め称え

られてこの丘を飯香岡と名付けたと伝えられています。

六所神は全国各地の国府の側に祀られる神で、六所は録所の意味から派生したとされています。現在も本殿の裏手に鎮座している六所御影神社は上総国内の神社を管理統括していた上総国総社でしたが、後に八幡大神が勧請されて一國一社の八幡宮に定められて、総社としての機能も八幡宮へと移管されてゆき、飯香岡に鎮座する六所御影神社から、飯香岡に鎮座する八幡宮へと変化していきました。

御伝承 御創建伝承

上総国国府と柳楯神社

柳楯は全部で25本の柳の枝で作られています。この柳の枝の本数には、上総国に25の豪族がいたことに由来するとも、通常の年の12か月と閏年という13か月ある年の月の合計数に基づいて

いるとも言われております。柳楯を製作する柳の枝は、「当社年中神祭行事」によると「遊海山麓字柳沢」という場所の柳が用いられていました。遊海山は市原地区の丘陵のこと、この地には上総国国府がありました。

柳楯は上総国の国司の權威の象徴とされ、国司が行うべき放生会（ほうじようえい）生き物を海や野に放し、殺生を戒める行事）を実施するために海へ向かう行列の名残です。放生会の実施のため毎年国司が上総国総社である八幡大神を伴って海岸沿いの離宮に向かっていたのが、時代が降るにつれて、離宮とされていた御社殿の規模が大きくなり、現在の飯香岡八幡宮へと発展していきました。柳楯の道筋が、市原・五所・八幡とたどるのは八幡大神が市原から八幡へと遷ってきた歴史を伝えているためです。

市原地区には、柳楯の製作に係わる

司家という家があります。毎年司家が製作した柳楯は、飯香岡八幡宮の旧鎮座地と伝えられる市原八幡神社や「万葉集」に詠まれた阿須波神社を経由して五所に向かいます。五所では御三家と呼ばれる家が預かりその地にて泊ります。大祭当日に五所御三家が同行して飯香岡八幡宮に届けられ大祭が始まる慣わしになっています。

五所御三家に伝えられる伝承を記したと考えられる「八幡宮御伝記」によると、白鳳2年3月、中村・麻野・中嶋の3名は花見をしながら、都の古社への参拝、更には筑紫へと足を伸ばそうという話に盛り上がりました。3人は阿須波神社に詣で、道中の安全を祈り旅に出発します。その旅で筑前の宮崎八幡に参拝し、3人は是非とも故郷に八幡大神を勧請したいと考えました。3人は参拝の夜に見た夢の中で八幡大神が出現し神前に捧げられていた神璽



石清水八幡宮別宮から飯香岡八幡宮へ

飯香岡八幡宮は白鳳年間、上総惣社、国府八幡宮として誕生した歴史ロマンの古社だ。本殿は千葉県最古の神社建造物として国の重要文化財に指定され、伝室町3代将軍・足利義満寄進みこし4社を所蔵する。江戸時代は徳川家康が社領150石を安堵して、神域は社領2万8000坪、海岸除地20万坪とも謳われたが、明治維新、戦後の土地改革などで大半を失った。かつて「八幡様の杜」「柳楯神事、放生の八幡海岸」と親しまれたが、海が埋立てられて往時の面影はない。

飯香岡八幡宮と神やどる国府八幡宮

八幡の町名となった飯香岡八幡宮は白鳳年間（奈良時代、7世紀後半の私年号）に創建。「上総惣社」は律令時代、一国のすべての神様を集めた国府神社で、「国府八幡宮」は聖武天皇の国分寺詔（みことのり）にあたって「国府守護」のため創建された八幡宮をいった。京都・石清水八幡宮「別宮社」として成立、

「市原八幡宮」を称した。その所領は養老川から村田川にかけての湾岸部で、八幡郷、府中（能満）、惣社、菊間、村上、山木、五井、五所に及んだといわれる。

「国府」は律令時代、各国に置かれた行政府で、国衙（こくが）国府をいった。その国の政治、司法、軍事、宗教の中心地で中央から国司が派遣された。「上総国府」所在地はいまだに未詳だが、市原台地上を郡本古甲→市原→能満と移動したとみられる。同名市原八幡宮が台地上に現存するが、より広く発展的な八幡・五所説も有力で、今後の研究進展が期待される。

鎌倉幕府創設の最大功労者・上総広常滅亡後、上総守護職となった足利氏の準本拠地で、尊氏が鎌倉幕府を倒して京都に室町幕府をひらくにおよんで、市原八幡宮との関係が深まった。3男・義詮が2代将軍となり、幼弟基氏が関東公方（鎌倉将軍）に任じられ、尊氏母方の上杉家が補佐役（関東管領）となった。当初は両足利家が「一心同体」で、市原八幡宮はあたかも

直轄八幡宮のように扱われている。3代将軍・義満に始まった「市原八幡宮造営工事」は「一国国役」と呼ばれた大事業で、応永年間（1394）に完成、実質「上総国一の宮」を意味した。

八幡海岸は、国司最大任務である「放生会（ほうじょうえ）」の聖地で、御影山に築いた離宮（社殿）が次第に発展して現在の飯香岡社になる。柳楯は八幡神（はちまんしん）の乗り物で、市原、五所、八幡を辿るのは八幡宮の変遷を示しているという。「重要文化財修理工事報告書」による現存本殿の創建は長祿3年（1459）で、JR八幡宿駅東口「御墓堂遺跡」などの八幡町町並み形成期とも整合している。また、これより早い至徳3年（1384）義満銘寄進「南北朝期みこし4基」が現存、建築様式や墨書銘のほか、部材年代鑑定で、至徳年代直近伐採が証明された。もし義満寄進が実証できれば、町の歴史は大きく塗り替わることになる。

さて、国府の最後にも触れる。国府は律令制度の崩壊でその役割を終え、鎌倉幕府の「守護、地頭」配置で衰退した。国府の多くは戦国時代までに滅亡しており、上総国府の最後も同様運命をたどったか。

上総介や下総守、安房守の国司官位は明治維新まで使われたが実態はなかった。

市原八幡宮の没落を物語る記録が「由緒本記」などにある。元亀2年（1571）「織田勢兵火発し、家財、旧記焼失」を記す。当時、安房・里見義弘と北条氏政+千葉・原軍が浜野、小弓（生実）周辺で血みどろの死闘をくりかえし、一時期生実城を占領されたりもした。里見氏が道筋にあたる市原八幡宮を焼失させていても不自然ではない。前宮司家所蔵の「誉田家系譜」は第49代正邦から50代正好の相続に違和感があり、○印記号が新しい家系に引き継がれたことを示しているようにもみえる。

家康が関東に入府した天正後期（1590）の八幡は、八幡宮門前町として、八幡港河岸場としての町場形成が進んでいた。家康の150石安堵の背景にはまた、飯香岡社（当時八幡郷八幡宮）がすでに市原八幡宮没落後の後継神社として公認されていたことを物語っている。

石清水八幡宮別宮から飯香岡八幡宮へ。その歩みは悠久の歴史ロマンの杜深く閉ざされながら、令和7年、鎮座1350年を迎えた。

（このページは第2版で一部を更新しました）

飯香岡八幡宮

神やどる国府八幡宮の杜

(八幡1057)

八幡は「飯香岡八幡宮」の門前町、歴史ロマンの町として発展した。白鳳年間創建と伝えられ、鎌倉、室町幕府からあつく保護された。江戸時代は殖産興業、海上守護、安産、子育ての神として広く庶民の信仰を集めた。

また、江戸・明治時代、市原最大の五大力船河岸地として発展、昭和は潮干狩り場、海岸埋立て後、京葉工業地帯中堅都市として展開した。本書は先人たちの残した豊かな歴史文化にスポットをあてる。

「やわた」の地名は飯香岡八幡宮の「八幡」に由来した。文字どおり八幡のシンボルとしてその発展を見守ってきた。「この地は御影山と称し、六所御影神社が鎮座していたが、白鳳4年(675)天智天皇の勅命により八幡宮として創建されたという。また、天平宝字3年(795)には国府総社とされ一國一社の八幡宮として、また上総国の総社として広く信仰を集めてゆくこととなった(当社案内看板、由緒沿革)」。

「国府八幡宮」は全国の国分寺創建にあたり守護神として「八幡神(はちまんしん)」を奉祠した

国府付属の神社で、「総社」は国に植えたとされる「逆さいちよう」や、鎌倉幕府を創設して神領150町石を寄進したことなどが八幡宮旧記に伝わる。

八幡社は全国10万余の神社の中で4万4000社をかぞえ、ランキング第1位。中でも大分の宇佐八幡宮、京都の石清水八幡宮、鎌倉の鶴岡八幡宮が知られている。

弓矢の神様で、源氏の氏神となつて以来、武神として尊崇されたのでしばしば歴史の表舞台に登場した。

往古、「六所御影神社」の時代、いる。改めて八幡宮文書を見直し、日本武尊(やまとたけるのみこと)が東征のとき着陣し、社が差し上げた飯に「この飯の香りしごとくよろし」と宣(のたま)われ、「飯香866」。「八幡宮領内御除地絵図面」に注目した。前者の「撰社5社の分」は御影社、若宮社、武内社、天神社とともに「(ひとつ)別宮社平行き6尺、妻行き9尺3

初めに石清水八幡宮別宮ありき

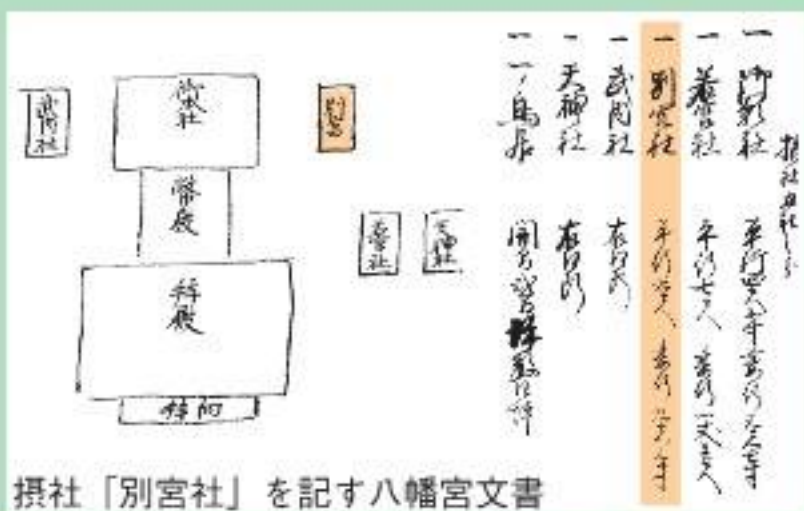
飯香岡八幡宮の前身は京都石清水八幡宮の「別宮社」で、市原八幡宮とも呼ばれた。市原台地上に同名社が現存するが未解明、八幡地区も主要候補地の一つになって

寛政2年(1790)「寺社御奉行所あて、御本社ならびに撰社建前模様書上げ」と、慶応元年(1866)「八幡宮領内御除地絵図面」に注目した。前者の「撰社5社の分」は御影社、若宮社、武内社、天神社とともに「(ひとつ)別宮社平行き6尺、妻行き9尺3

八幡大神 市川邦教画



正面参道からみた飯香岡八幡宮



撰社「別宮社」を記す八幡宮文書

寸と記載、後者は本殿に並んで「別宮」を記すが、明治維新のころ撤去された。

撰社は元宮、祖神など神社とくに関係深い神様をいう。資料は、江戸時代、別宮社が創建神社として公認されていたことを示す。新しい神様を迎えて撰社とされ、時代とともに抹消された、歴史的神社の変遷を垣間見せている。

市原別宮の初見は平安末期、保元3年（1158）石清水八幡宮「諸国莊園管符」にみえる上総国市原別宮である。別宮は石清水八幡宮の所領形態で、石清水宮別当と醍醐寺院主を兼務した法印勝清が知行して代々が相続した。その所領は、養老川から村田川にかけての湾岸部で、八幡郷、府中、総社、菊間、村上、山木、五井、五所におよんだといわれる。

市原別宮は平安時代後期以降、石清水社、醍醐寺別当領として展開したが、元久元年（1204）には、安居神事役（税負担）を拒否して訴えられ、頼朝政権、初代執権・北条時政に教書（命令書）を発給されたりもした。

南北朝時代の観応元年（1351）、別宮の別当職に醍醐寺、地藏院覚雄が補任された。これは足利幕府の勢いに連動した動きといえる。尊氏は鎌倉倒幕をはたしたが、すんなりと武家政権を引継げたわけではなかった。後醍醐天皇の「建武の新政」こそ2年で崩壊したが、その後の「南北朝の動乱」は60年続き、3代將軍義満の代にやっと統一した。京都にあつて足利方祈禱の中心となった地藏院が認められ、のち清浄光院、三光院へと移動していった。

江戸時代に飯香岡社の別当寺となる霊応寺も新義真言宗で、醍醐寺に属した。「八幡宮御縁起」によれば流鏑馬（やぶさめ）役を奉仕していた円蔵が、剃髪して円蔵坊源明となったという。円蔵坊はその後霊応寺へと継承されていく人物で、地藏院から派遣された別当（社僧）とみることができる。

「市原八幡宮」の創建

源頼朝は清和天皇の孫経基に始まる清和源氏嫡流第9代で、平清盛を倒して鎌倉幕府を拓いたことはよく知られる。室町幕府創設者の足利高氏（尊氏）も、頼朝4祖義家の子義国に始まる源氏名門の一つ、義康が頼朝の拳兵に従がい、承久の乱の戦功で、上総・三河の守護に補任され、市原地区、わけ

ても市原八幡宮（飯香岡八幡宮の前身）との深い関係が結ばれた。頼朝の血縁が3代で途切れ、執権政治が始まると北条氏と姻戚関係を結んで幕府内に重きをなした。市原市の歴史資料館「アイミュージアム」の展示資料は「市原八幡宮は京都石清水八幡宮の別宮として誕生した国府八幡宮で、鎌倉・室町幕府から篤い保護をうけました。（中略）一宮の玉前神社をよりどころとした上総千葉氏の滅亡後、北条氏と足利氏の支配下で国衙が運営され、幕府と関係深い市原八幡宮の立場が上がったと考えられます。門前には湊町が発展し、現在の八幡の基礎ができあがりました」と記している。

足利3代將軍義満、4代義持時代に始まった市原八幡宮造営工事は、御宝殿1宇、大宮殿3基、内



上総一の宮玉前神社



市原八幡宮別当職贈与状



足利尊氏



後醍醐天皇



京都・石清水八幡宮

廻廊 36間、正面鳥居などが「一国平均役（上総国税）」で、御副殿緒本紀」で拾うと、3代將軍義満1字、御拝殿1字、若宮御殿1字が「市原庄役（別宮領税）」、みこし殿寄進がある。

宮Ⅱ飯香岡八幡宮との関係を「由政大臣征夷大將軍源朝臣義満公、当社厚く信仰にあらせられ、御祈願感応成就によりて、御冥助報賽として、みこし4社新造立、寄進奉るものなり。」

本来、一国課役は、一の宮の造営にあてられるべきもので、市原八幡宮がすでに上総一の宮玉前神社をしのぎ、実質「上総一の宮」

「至徳元年（1384）9月、太政大臣征夷大將軍源朝臣義満公、当社厚く信仰にあらせられ、御祈願感応成就によりて、御冥助報賽として、みこし4社新造立、寄進奉るものなり。」

の地位を固めていたことを示す。室町幕府を創設したものの未だ天下を統一しきれない足利氏にとって、発祥の下野国に次ぐ準本願地での、「上総国衙」掌握にむけての威信をかけた工事でもあった。

奉行上杉中務禪助（朝宗）」みこし4基は現存、建築様式や墨書銘から制作年代を南北朝時代と推定されている。平成26年の本殿修復作業の時、みこし隅木からサンプルを採取、奈良文化財研究所埋蔵文化財センター年代学研究室で鑑定を実施したところ、年輪年代1318年、1341年、1380、90年代の伐採の木材が使用されているという。至徳期み

足利義満みこしと義政の本殿寄進

改めて、室町將軍家と市原八幡

こしが実証されたといえる。

奉行の上杉朝宗は鎌倉公方2代氏満、3代満兼の執事（関東管領）で、のち上総に隠居、長柄町に墓がある。

「長禄3年（1459）3月

征夷大將軍朝臣義政公御代太田左衛門佐殿へ右新造立仕りたき旨、願奉るところ、早速聞こし召され、御上聞に達され、よって小笠原源左衛門御見聞有らせられ、すなわち御造営金千両御寄付下し置かれ、頂戴、神前へ備え奉り、早速御本殿御修復を加え、幣殿、拝殿、向拝ならびに神前石壇、敷石その外、瑞垣などまで美を尽くし、あらたに造立奉るものなり」。

昭和29年の「重要文化財飯香岡八幡宮本殿修理工事報告書」によれば、三宝院文書にある市原八幡宮当時のものとは考えられず、長

禄（1457）もしくは文明（1469）改修を建立年代と解してよいであろうとされた。

平成26年の本殿修理工事では、本殿内陣などから試料を採集、

「炭素14」年代調査を実施したところ、本殿丸柱が最外年輪層で1403、38年、大斗角が1411、28年など、室町時代中期の伐採であることも判明、「由緒本記」に記す長禄3年と考えるのが妥当であろう。（鎮座伝承からみた飯香岡八幡宮）

古河公方と足利義明

「八幡公方」を称して五所に居城を構えたとされる足利義明は、室町幕府の創設者足利尊氏の4男基氏から始まる関東足利氏Ⅱ鎌倉公方の直系6代、古河公方足利政

城を構えたとされる足利義明は、室町幕府の創設者足利尊氏の4男基氏から始まる関東足利氏Ⅱ鎌倉公方の直系6代、古河公方足利政



足利義明「国府台の戦い」討死の図

足利氏系図





「令和元年房総半島台風」前の飯香岡八幡宮の杜



600年以上続く特殊神事「柳楯神事」

氏の次男に誕生した。

京都の将軍家と鎌倉公方家の関係が良かったのは公方家3代まで。以後、将軍家・上杉管領家対公方家の構図で争いが激化した。4代持氏は「永享の乱」に敗れて自害、5代成氏は「享徳の乱」で、鎌倉の本拠を古河に移した。以後関東を東西に2分、本格的な戦国時代に突入した。

永正15年（1518）、足利義明は兄高基と対立して八幡郷に下り、のち千葉の小弓（生実）城に移った。真里谷武田氏、安房里見氏を配下に、小弓公方を称して房総3か国の大半を領有したが、関東覇権を賭けた小田原北条氏との「国府台の合戦」で敗死した。ゆかりの当社領内に八幡御所跡、義明夫妻五輪塔などの所伝がある。しかし、当社の江戸時代以前の

史料は極端に少ない。正史にあたる「由緒本記」も元禄時代のもので、当時伝わった神話や伝承を基に纏められたものであろう。

由緒本記に元亀2年（1571）の神社破壊と造営伝承がある。「天文、永禄に至り国乱甚だしく、元亀2年織田家の軍兵、兵発におよび（中略）社頭は次第に破壊」「天正4年御造営自力叶いがたく、

菊間の若宮八幡神社にも同様、時に治乱盛衰極みなく、元亀2年織田氏のために押領せられ、神主なども散ぢりになると云々」との伝承がある。天正年間徳川家康から菊間郷の内20石を寄進され、平重元神主家再興、社付きの子孫また相尋ね集め、爾来神勤し



北条氏政



豊臣秀吉



八幡宮新市での「守護不入」を布告する原胤栄印判状

て、不易永続せり（同社社格昇進願い）。

元亀2年は戦国時代の末期で、「天下布武」を掲げた織田信長が室町幕府最後の将軍・足利義昭を擁立して入京した。文意は不詳だが、市原八幡宮の没落をイメージさせる。

小田原分国として原胤栄が領有

一方、足利義明後の八幡地区は千葉、原氏を配下とした北条氏の分国で、生実城主原胤栄（たねよし）が領有した。このころ両総進出を窺う安房の里見義堯、義弘が攻勢に転じ、都度北条氏が援軍を送った。元亀2年、生実地区が里見軍に占領されたことなど、生実も安全の地でないと判断した胤栄は、本城を千葉氏の本拠本佐倉城

に近い白井城に移した。市原北部は両軍境目にあり、八幡、市原地区が戦火にまみえた可能性も否定できない。

市内姉崎の榊原家が所蔵する「飯香岡八幡宮旧蔵文書」に關係史料がある。天正4年（1576）の胤栄印判状は八幡宮修築のための「諸郷勸進免許状」で、9年は「守護不入と新市免状」、守護使の立ち入りを禁止、諸税を免除するなどの保護政策を講じている。

徳川家康150石を安堵

天正18年、その原氏も豊臣秀吉の「小田原征伐」で北条氏、千葉氏とともに滅亡、徳川家康が関東8か国、江戸250万石に封じられた。八幡は重臣の本多正信、正

純、永井直勝所領となり、当社は社領150石が安堵され、格式10万石の待遇を受けた。

天正19年秀吉は朝鮮出兵を命令、家康も肥前の名護屋に出陣した。

青年旗本であった正純は飯香岡八幡宮に家康の武運長久と戦勝を祈願して「家康銘太刀」を寄進、現存している。正純は家康側近、幕府創設期の首席老中として権勢をふるったが、2代将軍秀忠の忌諱に触れて失脚、雪深い出羽横手の配所で不遇の最後を遂げた。

江戸時代当社は、殖産興業、海上守護、安産子育ての神として広く庶民の信仰も集めた。延宝2年（1974）「黄門さま」で知られる元水戸藩主・徳川光圀が『大日本史』編集取材の道すがら立ち寄り、葛飾北斎や小林一茶などが参詣している。

軍事大国から民主国家へ

明治4年当社は廃藩置県後の新政府方針で社領を失ったが、引き続き郷社、26年県社に列して国家の保護下に置かれた。当時わが国は日清、日露戦争の勝利から満州事変、大東亜戦争へと戦火を拡大していた。当社も戦勝祈願や出征兵士の出陣式など「軍事大国」の苦しい時代を体験した。昭和20年終戦。八幡宮にとっての戦後は、国民の神社離れなど苦難の再出発となった。

昭和23年、六・三制への「学制改革」で新制八幡中学校が誕生したが教室はない。学校建設用地として当社南東側、浅間神社前を提供、工事は職工組合の奉仕的作業と町民の勤労奉仕で完成すると、



戦時下の八幡宮社頭



戦前「絵はがき」の飯香岡八幡宮



徳川家康



本多正信



150石寄進を記す家康判物

次いで公民館、町民グラウンドと次々と拡大した。「境内に学校校舎を建設するがごときは、境内の風致を害し、神職としては絶対反対なるもいかんとも致し方なし」町の総意に英断した内田羊之助宮司が「社務所日誌」に記した。樹齢数百年の大本が次々と切り倒された。「許されよ、神木倒すも国育委員会連名の「史跡解説板」ものため」町の神木供養句会で菅野儀作町長が詠んだ。

昭和29年当社本殿が国の「重要文化財」に指定され、町は喜びに沸いた。当時の社殿は老朽化のため雨漏りや床抜けがあり、屋根の垂れ下がりや鉄柱を支えるなど憂慮すべき状況にあった。42年すべてを解体して調査・修理に着手、翌43年10月旧規に復した。

『飯香岡八幡宮本殿修理工事報告書』による本殿の建立年代は室

町中期で、「様式、工法、墨書銘」などから、「社記」にある長禄3年(1457)もしくは文明元年(1469)改修を建立の年代と解してよいとした。

社頭左手の角柱は記念碑。正面「重要文化財飯香岡八幡宮本殿」を刻む、並んで千葉県と市原市教育委員会連名の「史跡解説板」も設置されたが現在はない。

八幡海岸を埋め立てる

昭和20年代から30年代にかけて、八幡宮除地跡の「八幡海岸」が、東京最寄りの潮干狩り、海水浴場として観光バスを連ねた小中学校生徒たちで賑わった。岸壁にせり出して着替えや食事を提供する「海の家」が立ち並んだ。八幡中学校運動場は臨時のバス駐車場と代わ

り、多い日は30〜40台にも達した。

昭和31年、千葉県は「臨海工業地帯」建設を骨子とする「産業振興3か年計画」を策定、その事業規模は浦安から千葉、市原、袖ヶ浦、木更津、君津におよぶ内湾部全域を埋め立てるといふ膨大なもので、八幡地区は当社海岸など干潟地全域におよんだ。八幡五所漁業協同組合が最初の交渉地となった。

海を埋め立てるといふ突然の計画に町の人たちはとまどった。年寄りたちは先祖からの海をなくしてはいけなさと反対したが、若者たちの考えは違った。のりや貝に頼る将来への不安と雇用拡大による新しい町づくりにかけたのである。

柴田等千葉県知事と鈴木敬介組合長との調停書調印式は昭和32年10月千葉県庁応接室で行われた。

補償金は12億5000万円であった。足利義満に始まるとされる

「海面烏居」はこの年2月に撤去された。埋立て工事はすぐに始まった。大型浚渫船で吸い上げた海底の土砂が送泥管で埋立て現場に運ばれ、天日乾燥されて工場用地が完成、昭和34年旭硝子を皮切りに、大日本インキ、富士電機、古河電工、三井造船などが相次いで操業を開始した。

秋季大祭に柳橋神事

当社の祭礼は3月15日の春季大祭と旧暦8月15日仲秋名月の日(現在は直近日曜日)の秋季大祭で、1万人近い人出で賑わう。氏子は町内ごとに

一の宮Ⅱ浜本町地区
二の宮Ⅱ五所地区



600年続く「柳橋神事」



埋立て工事が始まる



潮干狩りで賑わった八幡海岸



飯香岡八幡宮の重要文化財指定書

三の宮＝観音町地区

若宮（四の宮） 南町、南新田
五の宮＝本町（旧仲町、片町）

明治35年新設

にわかれ、八幡宮を起点に町内を渡御する。秋季大祭の特徴に県の無形文化財指定の「柳楯神事」と放生会がある。柳楯は当社の創立神話に由来する神事で、大祭前日市原地区氏子の「柳楯司家」で調整された柳の楯が五所地区の氏子に引き継がれ、当日神前に奉納される。柳楯が到着しなければ渡御が開始できない慣例になっている。

鎮座1350年の歴史刻む

「放生会」も全国放生の地に勧請された、という当社の創設神話に基づいている。放生は旧暦8月15日、作善のため、捕らえられた

生物を放ち逃す儀式で、かつて境内であった八幡海岸で行われた神事が、いまは放生池に引き継がれている。

1月14日の「鎮火祭」はお飾り焚き、どんど焼きともいう。秋季大祭後本殿に奉安していた柳楯をこの時にお焚き上げる。1月15日の「筒粥神事」は作物や経済などさまざまな事象について、その年の吉凶を占う。

2月の立春、「節分会」。節分は本来、季節の始まりの日のことだが、江戸時代以降立春の前日を指すようになった。当社では夕刻、神前の特設舞台から氏子総代や氏子青年会員らが福豆や菓子、福引券などを入れた小袋を「福は内、鬼は外」の掛け声で撒く。1000人近い人出で賑わう。

「卯の日祭り」は2月初卯の日

が誕生日の八幡神のお祝い。かつて地区ごとでも行われたがいまは神事だけになった。「神立祭」は旧暦9月末日、この日は神々が出雲へ旅立つ日で、10月には出雲で、全国の神様により縁談を取り持つといわれる。このため当地の未婚の子女を持つ家庭では飯香岡八幡宮に参拝して良縁を祈り、おでんを食べる風習がある。

令和2年、市川一夫宮司が高齢のため勇退され、平澤牧人欄宜が宮司に就任された。新宮司は市原市出身、國學院大學文学部卒、「上代文学」を専攻した。八幡公民館では「八幡史学館」、「古事記講座」などを担当された。飯香岡八幡宮では煮込み祭り、風鈴祭り、ライダー神社など、開かれた神社をめざして精力的に取り組む。

飯香岡八幡宮の歴史は、

歴代八幡宮司

江戸後期	市川 信明
明治17年	石原 常春
昭和2年	内田 羊之助
昭和27年	市川 教生
平成13年	市川 一夫
令和2年	平澤 牧人

- ①京都・石清水八幡宮別宮として誕生、市原八幡宮を称す
 - ②足利將軍家準本拠地として、手厚い保護を受ける。市原八幡宮を造営、実質上総一の宮となる
 - ③市原八幡宮の没落と八幡町並みの形成
 - ④徳川家康の150石安堵と慶長期の飯香岡八幡宮名乗り
- など悠久の歴史を織りなしながら、令和7年「鎮座1350年祭」を迎えた。



柳楯をお焚き上げる鎮火祭



「福は内、鬼は外」の掛け声響く
節分会

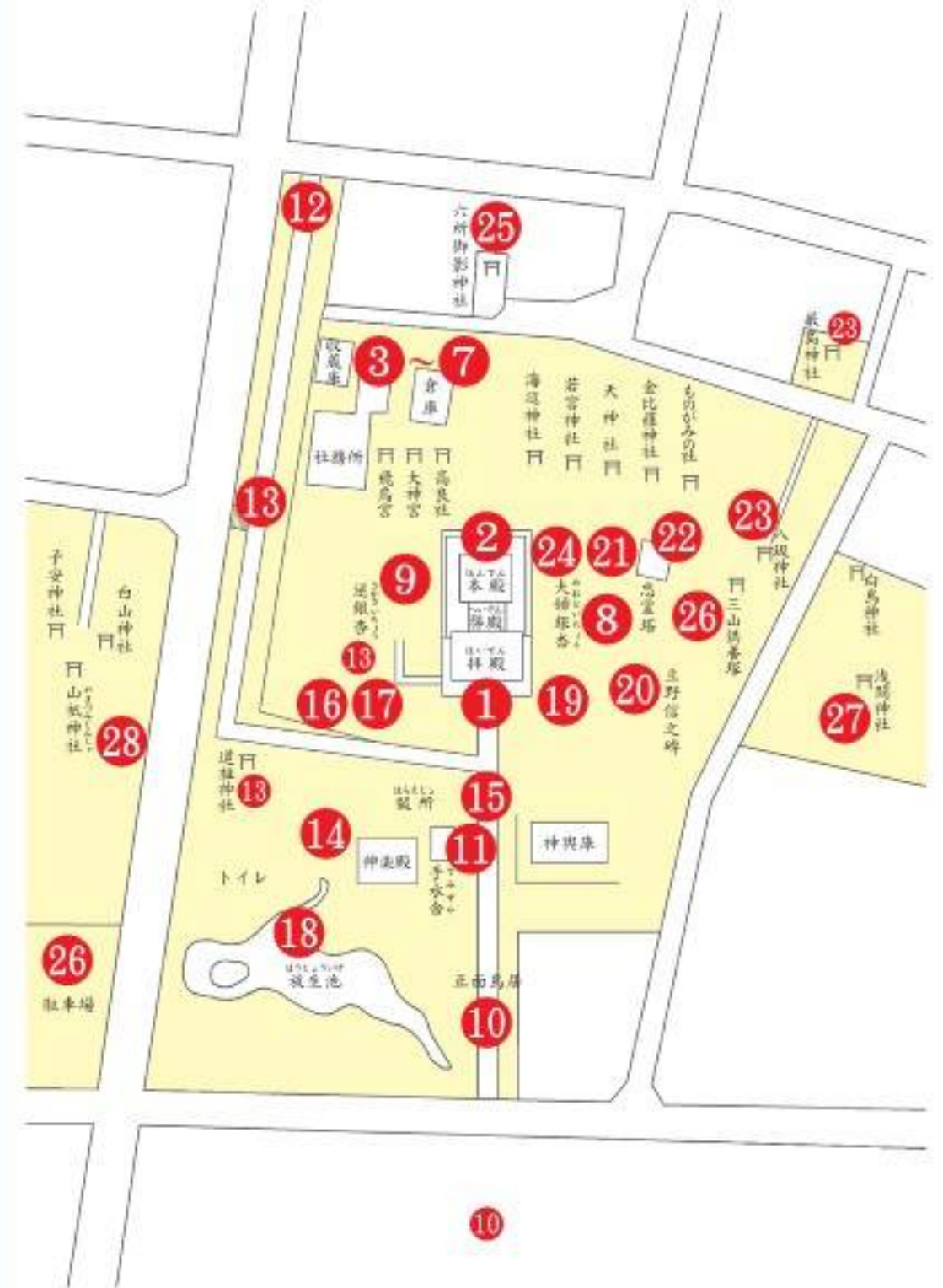


秋季大祭の宮出し



創設神話にさかのぼる放生会

飯香岡八幡宮境内図



1 華麗な「元禄拝殿」

飯香岡八幡宮の建築様式は拝殿、幣殿（相の間）、本殿が直線に並び「権現造り」で、日光東照宮と同じ、権現の名も家康に因んでいる。拝殿は参拝者の席で、本殿は神様のお住まい、真ん中の幣殿は宮司が祝詞（のりと）をあげ、供物や献上物を受け渡しする部屋となる。

現在の拝殿は元禄4年（1691）再建、県の有形文化財に指定されている。ともに八幡藩1万石領主であった堀直良と大久保忠高が造営料として蔵米を寄進、町の氏子たちが助力した。

屋根「入母屋（いりもや）造り」、当初は油性の濃い檜を薄い手割板にして敷詰めた「檜皮（ひ

わだ）葺き」で、天保6年（1835）銅板平葺き、開発されたばかりの水車式伸板造り銅板が使われた。幕府や有力社寺以外にはない貴重品の時代であった。屋根に飾り破風（はふ）が2か所、向拝軒唐破風と中央の千鳥破風が並び、菊花紋と桐紋が輝く。菊表16葉の皇室紋に葉数だけが変わる。皇室との深いかわりを示している。

正面5間、側面3間の母屋は畳30帖分の板敷き、向拝庇と廻り縁が付く。葺戸（しとみど）は古代や中世貴族の絵巻きなどにみえる。総丹（に）塗り。にかわに顔料を混ぜた伝統的な朱色で、魔除けのほか防虫、防腐、保存性にすぐれる。向拝の柱や海老虹梁に見られる獅子と象、波などの彫刻は極彩色で華麗な元禄文化の建築美を伝えている。



拝殿内部から本殿をのぞむ



入母屋屋根の飾り破風が美しい拝殿

3 足利義満寄進みこし

往還側大鳥居参道の黒塗り冠木門内に「宝物殿」がある。平成3年3月に竣工。屋根宝形造り、正面3間、側面2間、奈良・正倉院を模した鉄筋コンクリート、床面積およそ50㎡。正面展示室壁面いっばいにガラス張りの展示ケースがあり、中2階収蔵室手すりを利用した3面に五大力船などの大絵馬が飾られている。展示室は20人が入れるかどうか。普段非公開だが年1回3月の春季大祭の午後、一般公開される。

展示台中央の大みこしは、室町3代將軍足利義満寄進4基の一つ「二の宮みこし」。当社由緒本記によれば、「至徳元年（1384）9月、太政大臣征夷大將軍源朝臣

義満公当社御信仰厚く（中略）みこし4社造立、寄進奉るものなり」とある。みこしは神幸（じんこう）のとき神様が乗る輿（こし）をいう。災害や疫病、穢れを清め、豊作を祈願する。天平勝宝元年（750）大仏建立時、聖武天皇が鳳輦（ほうれん）で巡行したことに始まる。現存最古は紀伊・鞆淵（ともふち）八幡神社みこし、平安時代安貞2年（1228）、国宝に指定されている。

展示の一の宮みこしは高さ1m65、台輪1m14を測る。4面に鳥居、格狭間（こうざま）をくりぬいた板玉垣を廻すが、階（きざ）はし「昇殿階段」はない。また、本堂は開き戸に作るが固定されている。後世の修理で取り換えた、神紋デザインの金襴緞子（きんらん）どんす「金糸を使った高級織物」

が張られている。屋根下に並行垂木、墓又が覗く。屋根は頂上に擬宝珠、唐破風型の「照り（反り）起（むく）り屋根」で正面に菊紋と桐紋を交互に配す。南北朝、室町前期の建築形式と一致、曲線美が強調されている。露盤裏面の墨書銘から慶安2年（1649）宝暦9年（1759）に大規模な修理が行われたことがわかる。

由緒本記によれば、鎌倉大倉法華堂下中小路、大工藤原清久が制作、「御みこし海面幸行、汐こり除地お定め、ことにもつばら祭祀すべくの条御免仰せ付けられ、厳重の祭祀執行これあり」。鎌倉から船で渡御し、汐こり後、行列を整えて八幡宮に入御した。

正面参道脇のみこし庫に、残りの至徳度みこし3基と、江戸後期弘化2年（1845）新調みこし

4基が現存、その後の一の宮平成9年、二の宮、三の宮は昭和40年、若宮は28年、五の宮40年、行徳の浅子、後藤神輿店で再築された分、あわせて14基を収蔵する。いずれも至徳度以来の伝統的形式を踏襲している。

義満寄進の一の宮は宝物殿展示のため現代工法で修復、残る3基も数百年間にわたる使用で、老朽化しており、修理、改変が多いといわれる。中で、若宮は多くの部材が原形近く保管されている。

近年の笠部材年輪調査の結果、鎌倉末期文保2年（1318）伐木とわかり、伝承年代とも一致した。専門学者による「南北朝みこし」復元が可能である。現存みこし4基は千葉県指定文化財に指定されているが、将来「重要文化財」昇格が期待される。



三の宮みこしの年輪年代調査



三の宮みこし



南北朝みこしの伝統を踏襲する一の宮みこし



露盤裏面の墨書と釘跡



現存の一の宮みこし

4 武運長久、家康大太刀

宝物殿の注目展示品に徳川家康寄進大太刀と判物（はんもつ）がある。大太刀は、天正20年、豊臣秀吉の「朝鮮侵略」で名護屋城に出陣した徳川家康の武運長久と戦勝を祈願した「奉納太刀」で、全長1m63、刃渡り1m30、反り3・5cmを測る。

太刀の神社への奉納の歴史は古く、『日本書紀』の磐代垂仁天皇に始まる。家康が絡む奉納刀も日光東照宮などにある。当社由緒本記は「徳川大納言様当社御信仰厚く思召しあらせられ、これにより御太刀一振り御寄進あらせられる」、太刀銘は「大納言源家康、武運長久、持つ者今度唐（中国）ここでは朝鮮半島）入り早速凱陣

丹誠の旨趣、よってくだんのごとし。上総国市原郡八幡宮寄進奉るものなり」。使者本多弥八郎正綱（正純）、鍛冶工平井和泉守とする。寄進刀は実用性のない美術品として大きく華麗に作った。

朱印状は將軍が発行した朱印公文書、判物（はんもつ）は花押を付した公文書をいう。江戸入府翌天正19年、家康から拝領した神領判物には「寄進、八幡宮、上総国市原郡八幡郷内、150石のこと。いよいよ武運長久の精誠をぬきんと、ことに専ら祭祀すべきこと」とある。展示の家康判物は残念ながら写し。明治新政府は徳川家朱印状の回収を命令、菊間県を経由して提出したが、大正12年の関東大震災で諸大名朱印状とともに焼失してしまった。

5 足利義明と大般若経

だいはんにやきょう

宝物殿左ゾーンに経櫃（きょうびつ）と義明関連ページを開いた經典が展示されている。櫃（ひつ）は上に開く木製の箱で、収納容器、かつ担いで運搬にも使う。経櫃は經典を入れた。

足利家の根本（こんぽん）家臣南小曾禰与三郎信直が八幡宮に寄進した「大般若波羅密多經（はんじょうさんざう法師）が纏めた「大乘仏教」基礎教義經典。わが国では、書写、転読に始まり、鎌倉時代、奈良興福寺を中心に版木印刷が行われ普及した。經典は折

本型刷本で、開いたページは第500巻、巻末の奥書部分。寄進の趣旨「願文などを記している。

「義明征夷將軍（小弓公方）御家繫昌、子葉孫枝榮花（華）、松椿亀鶴の算（そろえ）、高基大樹將軍（古河公方）、兩君羽翼のごとくして関東八か国掌中に握る、扶桑（日本）六十州幕下（ばっか）に待す、（中略）ことには俗名（本名）南、在（地）名小曾禰与三郎信直、武運長久、家門富貴、衆人愛敬のため興（つつしみ）て、保生庵建清（号か）、懇志をもつて需（もとめる）。全部600巻、匣（こう）数60箱、櫃3合、八幡宮宝殿へ寄進奉るものなり」残念ながら寄進の年号月日はない。小曾禰氏は藤原秀郷末裔といわれる。群馬、栃木地方に多く、足利市には小曾根町があり、小曾根



家臣が奉納した義明銘
「大般若經」



經文を納めた經櫃



家康の150石寄進判物



朝鮮の役、武運長久祈願した家康銘大太刀

城跡がある。足利郡は足利氏発祥地であり、主従関係が推測できる。鎌倉中期足利氏の上総守護職就任以来の家臣（地頭）だが、在地領主として「一所懸命」守った「南」なる本願地は未詳である。

大意はまず義明公方一家一族子々孫々の繁栄を願う。兄高基公方とは両翼のごとく、將軍家を支えあえることを祈る。高基、義明兄弟が戦いを繰り広げる現状を憂い、両家の和解、繁栄を祈願している。

義明の長男義純は「国府台の戦い」で父と運命を共にしたが、次男頼淳は里見氏の本拠安房に引き取られ、庇護のもと成人した。天正18年（1590）「小田原征伐」で天下統一をはたした豊臣秀吉は、頼淳の娘・島子（月桂院）を側室とした。島子は弟国朝と古河公方足利義氏の娘氏姫との婚礼を願

出て許される。高基、義明両公方家はおよそ70年ぶりに和睦、足利家を再興して、秀吉の家臣に取り立てられた。

八幡地区は義明ゆかり地で、御所地名伝承や白幡神社、八幡宮一の鳥居、屋根張替え寄進、夫妻墓などの所伝がある。

江戸時代は徳川家康から喜連川（さくら市）3000石高家、10万石格旗本として明治維新におよんだ。経典を寄進した信正の子孫か、小曾彌胤盛の名が義明の遺児・頼淳の重臣「社家奉行人」にあり、天正9年太田道灌の祖孫で反北条方武將・資正あて頼淳副状に連署している。以後、消息は未詳だが、足利家再興にも尽力したことだろう。根本家臣としての多年にわたった父祖の思いがようやくにして実現した。

6 五大力船やお伊勢参り大絵馬

絵馬は祈願や報謝のため社寺に奉納する絵額のことをいう。往古神様は馬に乗って降臨したと考えられ、神様の乗り物として「神馬」が献上された。生き馬はやがて板絵馬に代わり、江戸時代には専門の絵師に書かせた大絵馬が神社仏閣に寄進され、展示のための絵馬堂が作られた。

当社では、現在の手水舎あたりに「額殿」が置かれた。これと言った娯楽もなかった時代、せいぜい社頭に掲げられた立派な大絵馬をみるのが庶民の身近な楽しみであった。

平成元年、土蔵改築の時、筵（むしろ）に包まれた状態で20点余が発見された。絵馬堂の展示期

間も短かったが、多くが原色に近くすぐれたコンディションで保存されたことがわかる。

当地の絵馬の特徴は江戸後期から明治期の町絵師堤派の作品が多いということがあげられる。初代堤等琳は室町時代の水墨画家雪舟後裔を称して刷り物やうちわ絵、貼交絵（はりまぜえ）を描いた。3代が堤派を代表し国宝もある。姉崎で正月飾りなどを商う際物業嫡男に生れた辻豊次郎が、江戸で師事して堤等月と雪山の名乗りを許され、2代等義、3代等儀らが地元で活躍した。残念ながら、当社絵馬の多くは無名で、姉崎堤派作品であるかどうかは確認できない。

常設展示中の大絵馬

①八幡村五大力船船揃え図（横1m 54、縦94cm）寛政6年（1



瀬田の大橋を画いた「お伊勢参り」



拝殿を飾る3代堤等琳「源為朝」大絵馬



生実（北小弓）城大手門跡



義明居城跡の森川藩陣屋図

794) 江戸廻船問屋角屋十兵衛せがれ冬木源左衛門が寄進、八幡様の春の大祭を奉祝した船揃えを描く。木更津とならぶ上総最大の港町だった八幡湊の「本株(権利者)」30艘、当時(実働)13艘(天明7年八幡村村鑑明細帳)と整合、船名や帆印、乗組員や積荷など資料価値が高い。葛飾北斎門人・初代登亭(しょうてい)北寿作。北斎の影響を受けた遠近法で、地平線と雲の表現が特徴的な独自の名所絵を確立して人気を博した。

②伊勢参宮絵馬とお伊勢参りのほぼ同じ構図が2点。文政13年は南町岩松ほか13人。天保2年は浜本町国太郎ほか7人、ともに堤栄川。伊勢講を組織して積立て、抽選のあたり籤が生涯一度の参詣の旅を楽しんだ。

③牛若丸と弁慶。京都五条大橋での義経と弁慶。文化元年。堤秋泉作。次郎吉ほか20人寄進。

④曾我物語朝比奈草摺引き。歌舞伎名場面。享和2年。堤等舟筆。江戸寺本茂十郎ほか1人寄進。

⑤常盤御前親子都落ち。幼い今若乙若、牛若を連れて吉野を脱出。安政4年。探秀守雄作。南町市川大造寄進。

⑥鷲。天保2年、堤等榮筆。8給総代名主平兵衛ほか1人寄進。常設展示していない大絵馬。

①五大力船と蒸気船。富士山の雄大なシルエットを背にした五大力船と外輪蒸気船。類似2点。明治24年。

②荒海に突き進む五大力船。明治36年、船主浜本町根本吉太郎。

③上総名所八幡神社。明治19年の八幡宮境内図などがある。



明治20年代の「五大力船と蒸気船」



荒波を突き進む五大力船

7 桃山時代の当世具足

当社には室町時代から桃山時代、江戸時代に至るよろい、かぶと当世具足11領(セット)が保管されている。当世はこのごろ、具足は簡略した甲冑、よろいをいう。織田信長によって始まった近世の戦いは、それまでの弓槍刀の戦いから鉄砲隊による大軍団戦争と代わり、武具もまた、鉄砲に耐える丈夫さと、軽快さが求められた。

市指定文化財当世具足(下段写真より右から)

- ①紺糸(こんいと)素懸威(すがけおとし)二枚胴具足(桃山時代)
- ②朱漆縫延(しゅうるしのべ)素懸威二枚胴具足(桃山時代)
- ③黒漆伊予札(いよざね)紺糸素

懸威胴丸具足(桃山時代)ほか8領を保管している。

並んで四神、仮面などがある。

- ①四神(ししん)天の四方を守る(霊神)。大祭の時、四神旗に取り付けた青龍、朱雀、白虎、玄武におに、おきな。寛文10年、裏面に天下一若狭守の焼き印がある。
- ③槍。寛文4年陸奥守包保作。江戸前期大坂在住の名刀匠。
- ④神饌品用水器、古壺。
- ⑤光善寺薬師如来縁起。柳楯神事の起源を誌す。元禄13年書写。
- ⑥北斎漫画。上総八幡のいちよう。
- ⑦立野信之文学碑記念ショーケース。書簡、写真、出版図書など。また、当社では2代將軍徳川秀忠寄進軍扇、生実藩11代藩主森川俊徳寄進ほか太刀8振り、脇差、短刀などを収蔵している。



8 安産願う夫婦いちよう^{めおと}

八幡宮社殿の両側にメ縄を張ったいちようの太木が2本ある。向かって右が千葉県指定天然記念物で「夫婦いちよう」という。

社伝は「神社神話」の白鳳4年、八幡宮勧請の時、桜町中納言季満手植えとする。2本の巨幹が根元から分岐するところから夫婦いちようとなづけられ安産子育てのシンボルとして人気がある。

昭和10年県の天然記念物に指定され、戦後の56年県市の教育委員会看板も立った。樹高17mと16m、目通し幹囲11mあった。いちようの寿命は数百年という。平成後期から衰えがめだち、令和に入ってから枯れの危機に直面したが、樹木医の手厚い治療で再び息を吹き

返しつつある。

いちよう樹に寄りそうように自然石碑が2基。

「君がためきよう植えそえし銀杏樹（ちちのき）」に、いく世経んとも神宿るらん」を刻む。まえがきは「白鳳4年勅使・桜町中納言が自らいちよう樹を植えて詠ませたまひし歌なり」と添えている。明治24年、総高2m47、著名国学者の落合直亮が書いた。

夫婦いちよう囲い内右側の自然石は明治33年建立の「御影山歌碑」。源建通（たけみち）は江戸時代の公卿関白、明治の公爵。一条忠良の子で侯爵久我通明養子になった。従一位、勲一等、内大臣。「御影山、神のめでにし飯香岡、むかしをかけて世に匂いけり 源建通八十六齡」を刻んでいる。

9 頼朝伝説と上総広常

社殿左、社務所前のいちよう樹を「逆さいちよう」という。当社看板は「治承4年（1180）源頼朝は石橋山の合戦に敗れ房総半島に逃れてきた。当時飯香岡八幡宮は源氏との縁も深い石清水八幡宮別当で、頼朝は源氏再興を祈願して本宮にいちようを逆さにして植えた」と伝えられる。その結果いちようは根付き源氏も無事に再興された」とある。社伝によれば宮司らが武蔵との国境隅田川まで従い、のち上総国8庄11郡のうち150町石を寄進された。

市原は頼朝の進軍路にあたったため多くの頼朝伝説がうまれた。八幡近く君塚に白幡伝説がある。頼朝は「竹塚」という所に着

くと、日本武尊を祭神とする「武の塚大権現」が祀られていた。この地で千葉常胤一族200余騎の参向を得た頼朝は大いに喜び神社に白旗を奉納したため、「白幡大明神」、また頼朝の喜びようから「喜見塚」と呼ばれるようになった。

八幡の海岸近くに字五千坪という地名がある。五所では五千坪が頼朝支援のときの功績で与えられた土地と伝える。

房総平氏の上総広常は頼朝の鎌倉幕府創設の最大功労者だが、頼朝に誅殺されて、鎌倉幕府の正史「吾妻鑑（あづまかみ）」から抹消され、あしざまに書かれたことで正しく伝わっていない。

上総と常陸、上野の3か国を「親王任国」という。親王の経済



安産、子育てのシンボル
「夫婦いちよう」



戦前の「夫婦いちよう」
絵はがき



ちちのき碑
拓本風景



源頼朝



頼朝伝説の逆さいちよう

基盤として国司(守)に任じられ、代理に目代(もくだい)を派遣した。広常は上総国ナンバー2であった。上総介常澄6男として誕生、一族骨肉の争いを経て家督、東上総を勢力圏とした。居城は陸沢の大柳館といわれる。市原の国府近くにも居館(介役所)を構えたと考えられている。

「吾妻鑑」による頼朝の上総通過は治承4年9月13日、300余騎の精鋭を率いて上総に入ったとするが詳細な記載はない。広常軍がこれより先、邪魔者の目代・平重国を殺害して頼朝の上総国府通過に備えており、「市原市史」は上総国府で上総氏、千葉氏の参向をえたと考えるのが順当であろうとしている。

19日広常は2万の大軍勢を率いて隅田川で合流、模様見の関東の

諸将も相次いで加わった。頼朝は遅参を咎めたとするが有りえないこと。「常胤を父と思う」とする頼朝の名セリフも、「頼朝を世にあらせむ、世にあらじは兩人が意なり、広常をば父とたのむ、常胤をば母と思うべしと宣(のたま)いける(延慶本平家物語)」を曲筆したものであろうか。

猜疑心の強い頼朝は弟の義経、範頼を殺害したが、頼朝死後には後継者の頼家、実朝が抹殺され、有力家臣も次々と粛清された。その第1号が上総広常で、梶原、比企、畠山、和田、三浦、上総千葉氏(常秀)などなど続いた。露骨に内部抗争を繰り広げた鎌倉幕府の「権力争い」は元弘3年(1333)足利、新田氏の謀反による「北条得宗家の滅亡」でようやく終わった。

10 一の鳥居と海中鳥居

江戸時代当社の敷地面積はおおよそ2万8000坪だが、海岸除地は20万坪ともいわれる。いまふうならさしずめ「東京ドーム(1万5000坪)15個分」とでも数えるか。明治3年、菊間御藩御役所に差出した「神社由緒など取調べ差出帳」によれば

「社地間数

表海辺通り〓西より北へ2000間裏、町並み通り(旧道バス通り)

〓東より南へ222間

北の方、妻通り〓76間

南の妻通り〓55間半

ただし海面戌亥の方見通し汐干し權(かい)立てまで(除地)

(別当寺分〓八幡宿駅周辺)

表町並み通り〓西から北へ101

間

裏の方〓東より南へ102間南妻通り53間、北妻通り52間

2点法で概算すると社殿側が1万3000坪、別当寺側が5300坪、合計2万8000坪になる。

社殿は江戸湾に向かい立ち、鎌倉鶴岡八幡宮、深川富岡八幡宮(元宮)と正対、「関東三が岡八幡宮」と謳われた。

海岸線は養老川三角州「五井鼻」にそって松林が続く「白砂青松」の地、江戸湾に帆船が浮かび、遠く富士山が裾野を広げた。一の鳥居はかつて海岸前にあったが、埋立てで景観が一変した。一の鳥居のおよそ1km先の干潟地に「海中二の鳥居」があった。近くに自噴井戸があり、汐ごり場とされた。鳥居は神域を示す門のこと。2本の柱の上に笠木を渡し貫を通し



戦前の一の鳥居絵はがき



「神額」は上り龍、下り龍を配している



昔は海岸前だった一の鳥居



頼朝源氏再興の道



悲劇の武将・上総広常

た。一の鳥居は前後に稚児柱を接続した「両部鳥居」で、また権現鳥居という。台石に「天保12年再建、石の願主南町丸屋伊兵衛、世話人観音町虎市ほか16人」を刻む。以後、昭和16年、47年に再建、神額は中央に八幡宮、天保9年神道長卜部（吉田）良芳筆、左右に上り龍下り龍を刻む。八幡宮創建に遡る「表参道鳥居」で、天正19年図に見える。

社伝による海中鳥居は嘉慶元年（1387）足利義満が境内海中へ二の大鳥居新造立、天正図は「汐ごり場かい立て除地、千葉介富胤造建」とある。明治維新以降は中絶、昭和16年植草辰五郎が八幡五所漁業組合員308人の賛同者を得て再建したが、昭和35年海岸埋立てのため撤去された。秋季大祭でみこしの海中渡御も行わ

れた。参道にみこし建造記念碑や石とうろう、置きとうろうが並ぶ。大正2年の「みかげ石のきふしゃ」は川上南洞の筆、昭和18年の「一の鳥居新築記念」碑は千葉書生会の浅見喜舟が揮毫した。

参道階段左右に江戸中期の石とうろう2基がある。とうろうは仏教とともに伝来した照明器具で神社や庭園に広がった。一見普通の春日型だが、返り花座は古式蓮弁を刻んでいる。右は「奉寄進八幡宮、御宝前、石灯籠、生国は紀州宇賀郡（現五條市）、住所上総国八幡村杉井甚七郎内徳兵衛」承応4年（1655）、左は「奉寄進石灯籠1基、杉井三左衛門常政」元禄4年（1691）。常政は五大力船船主で「吉原」を三日三晩貸切ったという伝説がある。

11 古式手水石の秀作

ちようす

参道左手に切妻屋根の水舎がある。むきだしの小屋組から棟札が覗き、かすかに「慶応2年（1869）、神主市川伊賀亮藤（原）2家、八幡宮領の5給。名主や総信明」両行司、総社家中、「大工代、有力商家が考えられる。棟梁三郎左衛門」が読める。元は天井板が張られていたが、蜂が巣くったので撤去した。

手水（ちようす）石は寛文2年（1662）の作で、県下2番目に古い。大型で石質、彫刻が優れる。手水はお参りの前に手や口を清めることだが、これはいったん井戸でくみ上げた水を水盤に満たし、頭から水ごりした古式のもので、戦後のコンクリート底上げと元の排出穴が残る。硬い安山岩を丁寧に加工、正面にみごとな丸型

龍紋、「御宝前、神主伊賀守」、裏

面は「上総国市原郡八幡住各13人。梅田猪兵衛、和田彦兵衛、田中五良八、石川七良衛門、田中長助」などを刻む。当時の八幡村は堀八幡藩1万石と旗本永井豊前守ほか2家、八幡宮領の5給。名主や総

江戸時代の水舎は、社務所前の井戸跡が遺構であろう。明治維新の時、水舎は拝殿脇に移されたが井戸は残り、戦後の海岸埋立て後に、地下水が枯渇した。明治26年の「千葉県博覧図」は「星の井」とみえる。昔は「昼でも井戸面に星影が写った」といわれる八幡さまの杜であった。

昭和30年代の埋立てのころ、現在地に移転。現在も揚水ポンプでくみ上げた地下井戸水が使われている。



みごとな
龍紋拓本



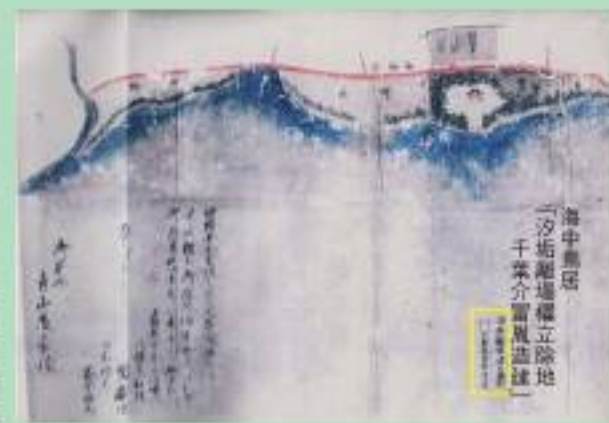
慶応2年の水盤舎



昼でも星影が写った
「星の井」廃井



昭和30年ころの海中鳥居



天正18年図の一の鳥居と海中鳥居

12 往還側大鳥居参道

埋立て前の当社境内への出入り口は往還側大鳥居参道と魚虎横の南町側参道、浜本町側参道の3か所にあった。大鳥居前と浜本町側はかつて水堀が巡ったがいまは暗渠になっている。天正20年（1592）構築の「境内構えの堀」で、堀割り（水堀）2間、土揚げ場（土塁）1間と虎口（門）の3点セット、八幡様の2辺を通って海に流した。

参道入口を詳しく観察すると、埋込まれた石橋欄干がみえる。橋長1m72、幅3m26、「再建、神田龍閑町元地上総屋清七、嘉永3年、石工安藤佐平治」などが読める。上総屋は江戸の鯨（はしけ）宿か。五大力船を通じて八幡と関

わった。橋脇に「定め、一、車馬乗り入る（下馬）こと、一、魚鳥を捕ること、一、竹木を伐ること」の「禁制高札」が立てられている。往還側鳥居は当社創建に遡るとされ、江戸時代初めの絵図にみえる。また、明治26年千葉県博覧図「飯香岡八幡宮」では往還側を裏鳥居とし、かたわらに文明開化のガス灯もみられる。

昭和15年に再建、この年春季大祭にあてた記念おねりは山車（だし）を中心は大勢の人出で賑わった。現在の大鳥居は昭和43年、明神型コンクリート造りで、高さおよそ10m、楠原政雄ほかが寄進した。平成20年改修、令和元年の房総半島台風では、鳥居が大揺れして周囲をハラハラさせた。

総高3m55の角柱「飯香岡八幡宮碑」は戦時色の濃い昭和16年、

海軍大将有馬良橘が書いた。両側1対の神前型置き灯籠（とうろう）は明治41年「日露戦役凱旋記念」を記す。翌年から、日露戦争の戦利品、20口径カノン砲、魚型水雷などを参道に展示した。

南町側参道の正面は元宮司家（通称元神主）で周辺に神官屋敷がならんで「神勤道」と呼ばれた。市川家は馬屋がついた曲がり屋で、宮司は毎朝夕、白馬に跨って出勤した（市川勝代句集潮）という。明治19年市川信明のとき退任、平成中期3孫に嗣子なく絶家した。この道は秋季大祭「柳楯」の入場口でもあった。五所との境界地で引継いだ八幡の総代らがカルサン（若衆）が担ぐ柳楯を先頭に到着、宮司によって一の宮みこしの前に据えられ、初めて祭りが開始

された。

かつて鳥居であったが、大正6年高さ4m50の「華表」（標石）に変更、「飯香岡八幡宮道、笠木に代え石材を樹る、社司石原常春」などを刻む。昭和40年代交通支障のため撤去、境内八坂神社前に野積み保管されている。

一方、同時に作成された浜本町参道華表は旧態のまま現在に及んでいる。浜本町参道虎口は山祇神社脇に江戸時代の土塁と虎口石橋が残る。石橋は長さ2m38、幅42cmの石板5枚が現存、欠落部分がコンクリート補修された。車道のため欄干は取外され、社務所前に現存する。片面は保存状態がよく「寄付、観音町、一金2両松田喜右衛門ほか40人、世話人浜本町鈴木與平次ほか20人、文化5年（1808）建立」などが読める。



浜本町参道「構えの堀」と石橋、標柱



明治20年ころの往還側鳥居周辺



昔からの定めを記す「神社禁制」



「境内構えの堀」と石橋らんかん



旧道房総往還に面した大鳥居

13 道標庚申塔と道祖神

社務所横に庚申塔を兼ねた道標がある。道標は道しるべで、元は房総往還から大多喜道（鶴舞街道）が分岐する市原出途の三差路、現在薬湯市原店とパチンコ店前のパーキングエリアにあった。昭和40年代八幡宮の現在地に移転。台石を欠落、高さ1m²³の山伏角柱碑、正面は楷書文字で「青面金剛尊」を大書、日月飛雲、1鶏と御幣を肩にした1猿。神社系の珍しい庚申塔という。

庚申講は60日に1回めぐりくる庚申の日に徹夜で会食することを特徴とする中国伝来の信仰。八幡には5基の庚申塔が現存しており、項を改めて詳解する。残る3面は道標、左側面は「左、江戸への道、

安永2年、右側面は「左（大多喜方向）かきもりへの道、右（五井方向）たかくらへのみち、願主喜兵衛ほか7人」を刻む。道標は道しるべで「坂東三十三観音」への行き方を示している。源頼朝の発案と伝わる。笠森寺は長南町にある天台宗別格本山。重文観音堂は四方懸造り、回廊から見渡す展望は雄大だ。高倉寺は木更津で、室町末期の再建、重層入母屋造り、16面取り柱88本が珍しい。

参道敷石を直進したトイレ横に道祖神と林文暁（ぶんぎょう）伝碑がある。道祖神は道路の悪霊を防ぎ道中の安全を祈願する神様でサイノカミともいった。切妻石祠、総高53cm、碑文はない。かつて出羽三山参りや富士登拝など信仰行事に参加する人たちがわらじを奉

納するならわしがあった。平成19年建替え、旧碑は「道祖神、享和3年、願主善了」などを刻んだが残念ながら散逸している。

林文暁伝碑は高さ1m⁴⁰、幅1m²⁰の自然石平石。けん題（題字）は「此君（しくん）林文暁翁伝碑」と読む。表面は経歴や功績を述べる。姓名は岸本信成、文暁はその号、越中国（富山県）佐々成政後胤に生まれる。東武、江戸、京滋で書と俳諧を学んで奥妙を極めた。文化4年（1807）大野

錦羅子翁（当社社司禰宜家か）の高風を慕い、八幡に招かれて歌や書を教えた。徳を慕って教えを受ける者300余人、天保15年（1844）齢82歳で逝去、辞世句か「ほととぎす」

安政2年（1855）、発願者は員の千葉禎太郎がてん額している。

当社（旗役家）丸邦貞。裏面は門人たちの追悼の歌など。大坪村、浜野村、松崎村、武士村、市原村など門人の人脈が広がっている。書は薫斎正祐（杉本正義）、将棋駒の書家がおもしろい。

拝殿左に「初日の出」句碑が立つ。台石とも1m²⁷、自然石を平石に切出す。

「御神楽の 拍子に昇る初日かな」御神楽は太鼓。明六つ（午前6時）の初日の出とともに打鳴らし、新しい年を告げる。一徳（当社社人 祝子家 山下庸吉）、裏面に安政2年。書は薫斎正祐、碑文専門石工で名の知れた3代目宮亀年が刻んでいる。放生池に下りる坂の途中に「ふる井のあと碑」

（明治25年）、「清見の滝歌会碑」（明治後期、大正初め）、衆議院議



市原出途に置かれていた「庚申塔兼道標」



「左 かきもりへの道」が読める



道標拓本



わらじを奉納した道中安全の「道祖神」



林文暁碑と拓本



14 漁業協同組合記念碑

境内正面参道左手に「八幡五所漁業協同組合記念碑」がある。高さ68cmの台石に1m50、幅57cmの角柱をあげる。総白御影石、ひと際格調高く周囲を圧倒する。

協同組合は共通の目的のため共にして事業を運営する組合をいう。江戸後期、下総の農民指導者大原幽学の「先祖株組合」が世界で最初の協同組合だという。明治31年、旅館と料亭を経営して町の有力者であった宮吉長五郎を組合長に創立、当時の八幡は海付き町ではあったが漁獲は少なく、新規海産事業の開発が期待された。

組合の最初のテーマは牡蠣（カキ）の養殖だった。水産講習所（現在東京海洋大学）を招致、藤

田経信教授引率の学生たちが南町海岸で試験養殖を始めた。房州石に菌を植えつける「石まき式」と呼ばれる古来技術であった。一方、神奈川金沢湾で行われた「垂下式養殖法」が成功して全国に広がった。

カキの養殖に使われた房州石の大半は埋立て地の土中に埋没したが、一部は家庭の石垣や敷石として現存している。宮吉経営の東屋旅館は寮兼研究室で、学生たちが顕微鏡で観察記録を取った。

江戸時代、品川、大森を中心に発達した「浅草のり」を房総内海に広げたのは江戸ののり問屋近江屋甚兵衛であった。市原では明治33年の青柳から五井、八幡へと広がった。のちに町の主力産業となるので、項を改めて紹介したい。あさりも豊富に取れた。仕事が

できる「浦明け」の日は組合が合図の旗を掲げた。それ以外は海に入れない規則になっていた。一般の潮干狩り場は安全な入口近くで、町の男たちはその先の海でジョレン（鉄かご）を操って小舟いっぱいにした。収穫したあさは沖の高瀬舟で待機する浦安の業者が引き取った。

お母さんたちは天秤棒の両端にザルを付けて運ぶ「二荷獲り」といった。組合の養殖場が買い取り、人出の多そうな日に潮干狩り場に撒いた。組合では種子を仕入れて品種の改良試験もやっていた。佃煮工場もあさりを使った。むき身にして甘辛く煮て八幡名物として販売した。

記念碑によれば、最終期の組合員数は779名、占有漁業権面積164万坪、生産額は年間1億数

千万円に達した。「昭和2年10月郷土の発展のため、県の提唱した京葉工業地帯市原地区造成に協力、全漁場の埋立てに同意し、ここに父祖伝来の漁業権を放棄することとなり、組合もまた58年間に亘る伝統に幕を閉じ、昭和34年7月31日をもって解散することとなった」。

側面に歴代組合長と解散期役員、裏面に「漁業権、工場用地造成計画図」を刻し、解散記念品として当社に神楽殿を寄進し、昭和35年に竣工した。

また、漁業権の補償金によって「飯香岡育英会」が設立された。毎年3月15日に八幡中学校卒業生に対して奨学金を給付してきたが、令和4年、60周年を記念して育英会から八幡中学校に100万円を寄贈され、図書や教材が購入された。



組合が記念品として寄進した
神楽殿



昭和30年ころの「のり養殖風景」



裏面の「工場用地造成計画図」



58年間の歴史を閉じた
「漁業組合記念碑」



15 のり養殖記念のこま犬

社殿前、あうん一対の石造こま犬は「八幡五所漁業協同組合」ののり養殖業者たちが立てた記念碑であることを知る人は少ない。市原ののり養殖は明治33年の青柳漁業組合が最初で、八幡は明治末年に始まった。ほとんど準備期間がなくいきなり操業に入れたのは青柳や松ヶ島、姉崎、五井といった先発組合の成功例が取り込まれたからである。

当初は竹ヒビを立て、海に浮遊するのりの糸状体（しじょうたい）が放出する胞子（ほうし）を附着させたが、昭和初め浮動式網ヒビが開発されると、以後、人工採苗の採用、六段線の発明などで急速に発展した。

「り干し台」にメグシで取付けた。日射しが品質に直結、1日中空が気になった。夕方、仕上がったのりを10枚1帖に束ねて、買取り出張の「出店のり屋」に持ち込むとその場で品質が評価されて現金になった。この日は家族総出、こどもたちも精一杯手伝ってのり屋さんについてゆくと持ちきれないほどのお菓子がもらえた。

戦後20年代から海岸埋立ての始まる30年代初めまでののり養殖のピークとなる。市原ののりは生産高第一位を誇った千葉県産の中でもとくに色つやがよくておいしいと評判がよかった。「ピカリ（ひと晴れ）1万両」、大学出サラリ1マンが月給6000円の時代。現金の高収入で羽振りが良かった。八幡地区ののり養殖についての

生産に直結する「棚場割り」は毎年8月の抽選で決まった。区画はイロハの何番と呼ばれ、幅2m、長さ5mほどの帯状で、横に舟道が作られた。持ち場が決まると2mごとに太い竹柱を立て胞子を付けたのり網を括り付けた。のり養殖は厳冬期、素手作業の厳しい仕事であった。2か月もするとのりの胞子が伸びて20cmほどになる。

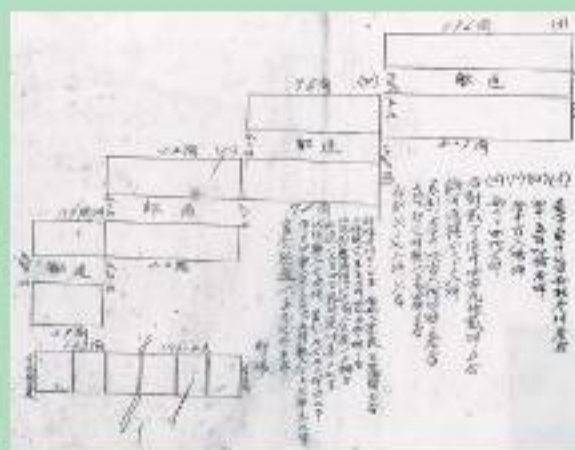
「浦明け」の日は一斉に収穫、海水で丁寧に洗って家に持ち帰った。翌朝、夜明けを待ちきれずナマのりを刻む包丁の音が町中に響いた。ついでヨシで作った「のり簀」を積み上げ、その上に木枠を載せる。海水に浮かせた刻み生のりをすばやく弁当箱のような升で掬い上げてさつと漉く。熟練の早業。最後は天日干しの乾燥。海岸や町中の空き地に並べられた「の

詳細な記録はないが、こま犬には大正4年度のり業者総代として田中豊次郎、根本吉太郎、宮吉桂太郎、近藤善太、辻井重雄の名前がある。この年、この5人を中心のり養殖業者が組織化したと考えて自然ではないだろうか。こま犬は短期間での成果を誇らしげに謳いあげている。事実、のり養殖はその後の八幡町、経済発展の一翼を担うことになった。

こま犬のあ行は1m28の台石上86cm、うん行は84cm。石工彫刻は根本吉輝と堀口弥吉、安藤硯年が連名、のり業者名簿は浜本町・関善六ほか11人、観音町・松田勝ほか19人、南町・田山常松ほか10人、新田・高山芳太郎ほか15人、五所・石川梅三郎ほか17人、合計78人、発起人堀口兼太郎ほか11人を刻んでいる。



のり養殖



昭和初めの「のり養殖棚場図」



養殖開始当時ののり業者氏名を刻む



のり業者が寄進したこま犬

16 地域教育の父川上規矩きく

神楽殿前の木陰に八幡町教育の父・川上規矩（南洞）の胸像がひっそりとたたずんでいる。規矩は幕末文久元年（1861）薬種問屋「生々堂」川上勘治郎長男に誕生、旧村田川河川敷にあった泉福寺（千葉市中央区）の天羽南翁に師事して「南洞」を名乗った。天性雄才にして温厚、和歌や俳句を良くし、和漢、書画、盆栽、撃剣となんでもこなした。

明治28年32歳の時、浜本町の旧家・村田市平創設の八幡郵便局長を引き継ぐ。自宅正面に鉄製のヨ1ロツパ黒門扉を配した、木造洋館2階建てのモダン庁舎「迎春閣」と庭園が町の人たちを驚かせた。隣接する旧邸個人宅玄関脇に

「迎春閣誌」を題字した縦横各1m10の自然石碑が保存されている。著名書家の西川元釐（春洞）が人となりを書き、天羽南翁が落慶式お祝いの詩文をよせた。

明治23年千葉神社にあった「千葉県皇典講究分所」を当社旧社務所に移転、31年私立南総学校を創立して校長となる。当時市原郡の北部に中等学校はなく進学をあきらめる学生が多かった。みかねた規矩が私費を投じて現在教育センターの地に創立、地元経済界に多くの人材を送り出した。昭和9年没、74歳。八幡円頓寺に眠る。

八幡宮の胸像は1m18の台石上、高さ75cm、幅97cm。碑文によると、昭和11年南総学校校庭に建立されたが、戦時下に供出され、戦後の25年に再建、30年ゆかりの当地に移転された。

17 地域発展の母菅野儀作

川上南洞が地域教育の父なら菅野儀作はさしずめ、地域発展の母ともいうべきだろう。2人が果たした功績はあまりにも大きい。

菅野は明治40年、浜本町で誕生。千葉中等学校（現在の千葉高校）を3年まで中退して米穀商に従事した。昭和22年、戦後最初の八幡町長に無投票当選、以後県議会議員5期、参議院議員を3期勤め、自由民主党県連幹事長、北海道開発政務次官などを歴任した。

第二次大戦後の荒廃した郷土復興に心血をそそいだ町長時代、八幡中学校と八幡公民館、町営グラントの建設工事で、自ら「ゲートル姿」で町づくりの先頭に立った話は余りにも有名。再選をめざし

た昭和30年の県議選では、「海を埋め立てて工場を誘致するから、みんなもその気になってくれ」と訴えた。「政治は奉公」を信念に、温かい義理人情の人と慕われた。戦後郷土の復興と発展に心血を注ぎ、「千葉工業地帯」の造成、「新東京国際空港」の建設を推進したが病魔に勝てず、昭和56年惜しまれながら没した。73歳の生涯だった。

立像は台石とも4m10。作者は東京美術学校（現在の東京芸術大学）卒業、市川市に在住した日展参与の彫刻家・大須賀力。和服姿が凛々（りり）しい。自らの成果の一つ、「埋立て工業地帯」を見据える。題字は内閣総理大臣・福田赳夫が書き、弔文は地元市原市出身の先輩前建設大臣・始関伊平が寄せた。



八幡の町づくりの先頭に立った菅野儀作
（左から2人め）



和服姿がりりしい菅野儀作立像



設立当初の南総学校と学生たち



川上規矩



川上規矩胸像

18 放生池と清見の滝

「放生（ほうじょう）」は功德を積むため生き物を逃がすこと。殺生を戒めた仏教の教えだという。かたわらの当社看板には「奈良朝

の養老4年（720）、九州大隅国における「隼人の乱」の犠牲者に対し、慰霊安鎮のため、宇佐八幡宮にて放生が行われ、その後国ごとの八幡宮にても中秋名月の日に行われ、放生祭と称して八幡宮最大の神事になった」とある。現在は鳥居前の海で放魚された神事が放生池で行われている。秋季大祭の日、宮司、氏子総代らが、古式にのっとり緋鯉や真鯉を放生する。

江戸時代は構え堀が直線で海に通じたが、明治30年ころ、山祇神

社裏から水路を迂回させて「回遊式庭園」とし、掘った土が山祇神社の山になった。家族連れがお弁当を楽しんだり、夕涼みなど行楽地として賑わったが、昭和48年、飯香岡通り開設にともなって改修、現在の形になった。

明治26年の「千葉県博覧図」をみると一帯は松林で、清見の滝が参道の右手にある。滝で水ごりをする人や句碑を描く。句碑は現存、高さ1m26、最大幅86cmの自然石。「こと国の 人をみめつるこの滝の 流れは御代とつきせざりけり」昇吉ほか12句、千葉禎太郎てん字、千葉は今宮本陣家13代、衆議院議員を7期務めた。

池回りに江戸後期の春日灯籠が2基、うち1基は「江戸本所三つ目、伊勢屋善治良」を刻むが、残り1基は摩耗、判読できない。

19 「神仏分離」で消えた鐘楼

当社文書『宝暦12年（1766）後留記』に、慶応元年（1865）の境内略図がある。拝殿右手前に護摩（ごま）所、鐘（つき堂）、左手前に御供所、本地（ほんじ）堂、現在社務所前に手洗（水舎）、八幡第一ホテルの地に力

ネツキ役（住居）を記している。「護摩祈禱」は1200年の昔、弘法大師空海が中国から伝えた。本尊の前に備えた炉で、さまざまな願いを書いた護摩木を焚き上げ、厄や災いを払い、本尊の加護を願う。鐘楼（しょうろう）は梵鐘（ぼんしょう）をつるして除夜の鐘や時の鐘を鳴らす。本地は仏教徒の神をいい、神道の神とあわせて権現とされた。「神仏習合」

の時代、こうした仏教施設が神社に共存していた。

吊り鐘を梵鐘または洪鐘（こうしょう）という。梵は梵語で神聖、清いなど、壮嚴な響きはわび、さび好みの日本文化に無情観を伝える。仏教とともに中国から伝来、その製法は鋳型を作り、銅と錫、ときに大判、小判を入れて溶解、注湯した。

当社資料によれば明暦元年（1655）の鋳造、大きさは龍頭（りゅうず）つり具）下3尺8寸、胴の丸（円周か）7尺9寸。鐘銘は「琴瑟（しつ）古代中国の楽器）鼓鐘、けだし（思うに）楽器のたぐい、堅壊不同、それゆえなんぞや、それ体のためなり、それ徳のためなり」と難解な七言絶句を綴った。「（別当）神光山靈応寺法印権大僧都徳雄上人、神主市



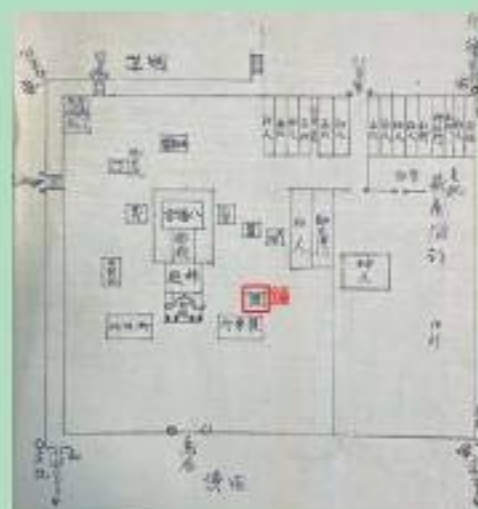
放生池



放生の由来を記す「説明看板」



「由緒本記」の梵鐘鋳造資料



慶応元年境内略図にみえる鐘撞き堂

川伊賀守藤（原）氏重義」、勸進手水舎がこれになる。者などを刻んだ。鑄師大工は武蔵江戸神田鍋町宇田川吉之丞、鍋町は神田須田町と鍛冶町の隣で鑄物の町であった。

明治元年（1868）新政府は「天皇親政」の理想実現のため神道の国教化を採用、これまでの「神仏習合」を廃止して神社から仏教施設を排除する「神仏分離令」を発令した。

維新直後の明治5年「あら絵図、八幡大神上知ならびに現今地形内外」をみると、護摩堂や本地堂、鐘楼といった仏教施設が一掃されている。梵鐘のゆくえも気になるが、一切の記録類が残っていない。代わって江戸時代、社務所前にあった「手洗（水舎）」が拝殿右脇に移る。昭和30年代、正面参道左手に3転することになる、現在の

明治26年の「神井跡碑」が元位置の夫婦いちょう横にある。総高1m10の自然石正面に大きく「神井」、裏面は「上総国市原郡八幡町五所、寄付者、井戸掘り職、中村弥吉」ほか7人を刻む。「上総掘り」は君津地方で考案された井戸掘り技術、鉄管と竹のひごを使って地下水層を掘当てた。戦後は動力の普及ではやらなくなった。

「神仏分離令」を公布したことで、仏教を排斥する風潮が強まった。一部に行き過ぎた「廃仏毀釈」がおり、当社別当寺の霊応寺も暴力的に破壊されたといわれる。明治維新後、霊応寺跡地は、神道中教院となり、二転して八幡小学校と変わる。新しい時代が鼓動しようとしていた。

20 直木賞作家立野信之碑

社殿右奥、駐車場手前に直木賞作家・立野信之の文学碑がある。

立野は明治36年、旧五井町平田で「堀の内様」と呼ばれた豪農立野与（あとう）長男に誕生。五井駅からひと駅、八幡宿の南総中学校に通ったが1年で中退した。

25歳の時、軍隊体験を生かした「標的になった彼奴」でデビュー。プロレタリア（無産者）作家として認められたが、当局に検挙された。戦後は現代史を書き、昭和27年、2・26事件を題材にした「叛乱」で直木賞を受賞、代表作に「明治大帝」、「太陽はまた昇る公爵近衛文磨」がある。昭和46年没、68歳であった。

碑は1m50の自然石に「ある日

――初夏の爽やかな日だった――高志はいつも帰る汽車に乗りおくれたので、仕方なく、次の電車までの二時間を過ごすために、海岸べりの神社の境内へ出掛けた。ほこりっぽい停車場よりも、潮の香のする緑の森の園のほうが快適だったからである」。原稿用紙風に明朝体の大活字を刻む。「文芸」昭和39年9月号「初恋」の書き出しの一節である。

傍らの看板が、目の前に八幡海岸が広がる、当時の社頭風景を描いている。ひっそりと寄り添う小碑「立野信之先生文学碑」の寄進者青木ふじは近くの老舗料亭の娘で立野の初恋相手といわれる。ふじは日本橋の魚屋に嫁いだ。立野はふじ経営の旅館の離れを書斎代りにした。ふじもまた生涯にわたって支援をつづけた。



直木賞作家・立野信之



自叙伝「初恋」を刻む「立野信之碑」



「上総掘り」の「神井跡碑」



鐘撞き堂跡周辺の戦前絵はがき

21 日清、日露戦争凱旋碑

がいせん

日本が軍事大国へと駆け上がった明治を象徴する碑が社殿右側にある。高さ3m20の自然平石、日清戦争勝利の記念碑である。明治27年、大陸進出をもくろむ日本は清国（中国の王朝）が属国として進駐する朝鮮半島で激突、日清戦争が始まったが、各地で清国を破った日本が圧勝した。

正面右肩のてん（題字）「明治二十七八年役（えき）戦争」を榎本武揚、隷書体「凱旋碑」を処士（あえて仕官しない人）西川元讓（春洞）が書き、安藤硯年が刻字した。榎本は維新の戦いで、旧幕軍勢を率いて蝦夷地を占領したが敗れて降伏、明治新政府で海軍大臣、外務大臣などを歴任した。西川は唐

津藩医の出で明治期を代表する書家。裏面は村田市平以下200人ほどが寄付者に名を連ねる。町（国）をあげて大勝利に沸いた。

社殿裏に「日露戦役記念碑」。標題は明治元勲・山縣（やまがた）有朋の筆。山縣は初代陸軍卿（大臣）、参謀本部長をへて、明治22年と31年山縣内閣を率い、明治38年の日露戦争では参謀総長として作戦指揮にあたった。乃木希典が3度の総攻撃の末旅順を占領、両軍60万人が激突した「奉天会戦」に勝利し、東郷平八郎率いる連合艦隊は「バルチック艦隊」に壊滅的な大打撃を与えた。

裏面は戦死した八幡出身の野城静近衛一等卒の英霊文、東京帝大の博士教授が撰文、「君の屍（しかばね）は奉天原上に草むすとも君の名は長（とこしえ）に郷国の

輝きぬべきなり」とある。

山祇神社前、大正11年建造の「忠魂碑」も同じくくり。始め飯香岡通りに創建、戦後現在地に移築された。自然石平石で、八幡地区最大、高さ5m20を測る。正面の大楷書は両戦争で旅团长、師团长を勤めた陸軍大将川村景明が書いた。台石に建設者、市川石三ほか45人、退役軍人宇田川卯之松ほ

か38人、分会員鈴木啓介以下あわせて300人を刻す。

忠魂碑は日清、日露戦争、忠霊塔は太平洋戦争の戦死者慰霊と区別することが多い。忠魂は忠義を尽くして亡くなった人の魂、また忠義の精神をいう。戦時下、戦死者を美化し、国民に忠誠心を養成する目的で「忠魂碑」が建造され、銃後協力の象徴とされた。

22 207柱が眠る忠霊塔

八幡町の「忠霊塔」は八幡宮社殿の右側にある。塔は高さ3m30の花崗岩角柱に「忠霊塔、鶴沢総明（ふさあき）書、昭和30年、八幡町郷友会、安藤硯年彫工」。鶴沢は長柄町出身の政治家、衆議院議員6期、勅選貴族院議員、政友会

顧問、明治大学総長などを勤めた。塔の台座部分は高さ2mの鉄筋コンクリート、英霊室（納骨堂）になっている。「常在此不滅（常にここにあって滅せず）」と掲げた銅板に戦没英霊207柱の氏名が刻まれている。

日露戦争Ⅱ佐久間吉次郎
日露戦争Ⅱ清水三之助ほか3柱
日支事変Ⅱ小出政次ほか10柱



榎本武揚てん書の「日清戦争凱旋碑」



明治元勲・山縣有朋の「日露戦没記念碑」



河村景明の「忠魂碑」



英霊室上にそびえる「忠霊塔碑」

大東亜戦争Ⅱ森軍司ほか190柱
「今次大戦に散華し一死以て国に
殉じた英霊を慰め、その遺徳を顕
彰するは八幡町郷友会結成の主目
的であった。のち町内有識者間に
建設の気運が昂（たか）まったの
で郷友会に忠霊塔建設委員を設け
実行に着手した」。総経費100
万円は漁業協同組合があたり40
00樽32万円を寄贈、採取は郷友
会員が担当した。八幡町が補助金
30万円、一般篤志家に寄付金38万
円を仰いだ。

『市原市遺族会名簿』によれば
市原地区の戦死者は237柱、う
ち八幡は陸軍67、海軍32、あわせ
て99、五所は陸軍24、海軍10あわ
せて34、草刈19、山木、郡本17、
大畹16、古市場15などであった。
昭和16年「太平洋戦争」が始ま
る。真珠湾攻撃、マレー沖海戦に

勝利した初年こそ1名の戦死者に
とどまるが、翌17年ミッドウェイ
海戦の大敗で制海権、制空権を失
うと戦況は一転する。18年ガダル
カナル、アッツ島玉砕、南太平洋
で6柱、19年サイパン島陥落、レ
イテ沖海戦大敗で、南太平洋、ニ
ューギニア、フィリピンなど72柱
にも上った。終戦の年、昭和20年
は硫黄島、沖縄戦争玉砕、東京大
空襲、広島・長崎の原爆投下、ソ
連の侵攻と続き、8月15日終戦の
日を迎えた。戦死者はこの年だけ
で121柱にも達した。



銅板に207柱の英霊名を刻む

ここにあって滅せず

23

八坂神社と巖島神社

いづくしま

京都の八坂神社を総本社とする
「八坂（祇園）信仰」は、かつて
「須佐之男（すさのお）命」と「牛
頭天王（ごずてんのう）を祀る神
仏習合であったが、明治以降に神
式に統一した。一間社流れ造り、
神額は「八坂神社」、鳥居は「大
正13年 南町十三番組合中」、か
たわらの力石は江戸後期のもので、
「寄進奉る石、当宿住人中、8斗
8升目」と読める。コメに換算、
およそ35貫目（130kg）計算に
なる。

巖島神社は宮島巖島神社の勧請。
祭神の「市杵（いちき）鳥姫命」
に由来する「開運弁財天」碑を掲
げる。裏面は「昭和32年 社殿神
池改修記念」になっている。神橋

や周囲を囲む玉垣などの商店名や
個人名は八幡に海があった当時の
もので、昔からの人たちにとって
なつかしいのではないか。この2
社は地元の「南町町会」が世話さ
れている。近年の境内整備で、見
違えるようになった。ぜひ参詣を
お勧めしたい。隣接する収蔵庫は
明治期に制作された祭礼山車や明
治後期以降の町会資料などを保存
かしている。

弁財天通りの細長い駐車場は、
「八幡宿駅西口整備事業」まで小
湊バスのターミナルになっていた。
東京の学童たちを乗せた大型観光
バスが肩をこすりつけるようにし
ながらこの先八幡中学校の「臨時
駐車場」をめざした。宿通りの入
間印刷前に「八幡宿駅前停留所」
があり、千葉方面、五井方面、牛
久方面などに路線が広がっていた。



「開運弁財天」を掲げる
「巖島神社」



京都・祇園を勧請した
「八坂神社」

24 天神社などの摂社 せつしゃ

八坂神社から左へ摂社が並ぶ。「摂社」は神社と深いかかわりのある神様を祀る社のことをいう。ものがみ社、金刀比羅宮、天神宮、若宮八幡社、海辺宮、本殿を挟んだ北側は高良神社、豊受大神宮、飛鳥宮、と続く。

「宝暦12年（1762）後留記写し」にある寛政2年（1790）、寺社奉行所あて「建前模様うちのすくね」、高良は高良玉垂書上げ」に記載された摂社は5社で、「御影社平行4尺5寸×妻行3尺7寸、若宮社7尺×11尺、別宮社6尺×9尺3寸、武内社右同断、天神社右同断」とある。

「別宮社」は、前身の石清水八幡宮別宮のこと。明治3年の「神社由緒など取調差出帳」には存在しない。市原八幡宮から飯香岡八幡宮への変遷過程で摂社とされ、消えていった盛衰が垣間見れる。また、明治26年「千葉県博覧図」の「飯香岡八幡宮図」は、社殿右側にもの神の社、金刀比羅神社、天神社、若宮八幡宮、海辺宮、社殿左に高良宮、豊受神社、飛鳥神社が並び、すでに現在の形態が整っていることがわかる。

若宮は幼い皇子、ここでは仁徳天皇、武内は武内宿禰（たけのこうらたまたれ）命を祀る。天神宮には「天御中（あめのみなか）主神」「高御産霊（たかみむすひ）神」「神御産霊（かみむすひ）神」が祀られ、「由緒本記」には康保4年（967）菅原道真公が合祀され、いまでは、学問の神様として信仰されている。

25 六所御影神社 ろくしょみかげ

神社縁起によれば、この地はもと「御影山」と称し六所御影神社が鎮座していたという。「六所神」は六柱の神を国府近くに合祀すること、全国の国府に同名の神社が点在する。御影は八幡宮創建以前の地名で、石握（いしづか）と2地区あったといわれる。

明治3年菊間藩への「由緒など取調書上げ」と「千葉県神社明細帳（県の台帳）」はほぼ同内容で「六所 御影神社」

往昔、御本社八幡大神白鳳4年御勸請以前、当国生産の祖神にして勸請、暦数不詳、もともと当国総社たること古伝にござ候」、としている。

また、前神主・市川家系図「誉田家系」によれば、垂仁天皇25年（西暦前4）、崇神天皇の4孫伊勢武彦臣（いしづかたけひこののみこ）の子・受火命（うけひのみこと）が「御影神社神官」に任じられ、その長男豊木武彦が誉田斎宮として代々宮司となり、次男誉田主膳家、3男誉田三大夫家が社家として補佐することになった。以来2000年、連綿として明治維新に及んだとしている。

現在の建屋は一間社流れ造り、明治26年図にある「奥宮御影宮」とは造りが異なるようである。あるいは昭和の再建か。神額は「宮奥御影神宮、成瀬温（ゆたか）拜書」成瀬は江戸後期から明治の書家、宮中に出仕、勅命で明治天皇に書を献じた。碑は高さ1m13の平石で「六所神、御影神社」と記す。



御影社の創建を記す「誉田家系」



白鳳年間勸請と伝わる「御影神社」



天神社



天神社など摂社7社がならぶ

◀江戸時代の「摂社・別宮社跡」

26 三山三段塚と行屋 さんぜん ぎょうや

出羽三山は山形県の中央部にそびえる月山（がっさん）、羽黒山、湯殿山をいい、かつて東国の修験道（しゅげんどう）の中心として栄えた。八幡は昔から三山信仰が盛んで、江戸時代には満徳寺の行屋で行われた「八日講」や「三山登拝」を通じて厳しい戒律を守り続けたといわれる。

明治維新の「神仏分離令」で、それまで天台宗と真言宗に所属した三山が神社となる。各地に敬愛会が発足、八幡にも「まる八敬愛三山講」が設立された。昭和34年、老朽化した行屋を山祇神社裏に新築した。木造平屋切妻屋根およそ50坪、玄関上部に取付けた飾り窓に出羽三山神社松例祭の「ツツガ

ムシ（大たいまつ引綱）」を取付けた。内部は祭壇と大部屋3室、神鏡と幣束、金剛界の大日如来像と不動明王を飾る。定例の「八日講」では行人（講員）が集まって修行、「一生に一度は出羽参拝しないと一人前として扱われない」といわれた、昭和後期は数百人を数えたがのち次第に減少、令和5年、高齢化などをうけて残念ながら解散となった。

八幡宮南側、夫婦いちよう近くに「方形三段塚」がある。塚は供養塔で、上段1m92、中段3m69、下段5m56の方形、総高2m35を測る。銘板は「寄付連名村田市平ほか125人、世話人根本磯吉ほか2人、明治25年、石工安藤源太郎」頂上に三山名を刻む自然平石碑と竹の先に和紙をくくりつけた神の依代（よりしろ）「梵天（ぼ

んてん）」を掲げ、下段両脇に石央に、月山、羽黒山を配したが、井重行ほか18人の歴代先達を記す。完成直後明治26年の千葉県博覧図「県社飯香岡八幡宮」には「三山神社遥拝所」と記す。並んで茶店が出て参拝客がくつろいでいる様子も描かれている。

塚裏側に文化9年（1812）天保2年（1831）、明治3年、無記の三山碑が4点、湯殿山を中

以降は月山神社が中心となる。明治12年碑は「先達善五郎、与助、37名」20年42名、大正13年94名など。昭和戦後期は1m50を超す大型平石碑で、「三山祭典記念」などが役員や行人氏名を刻む。行屋前に「まる八敬愛講大先達川島頼負頌徳（しょうとく）碑」、「大願成就碑」などがある。

27 富士信仰と富士塚 ふじしんぎょうとふじづか

三山供養塔の右隣に富士信仰の象徴である「富士塚」がそびえる。享保18年（1733）、食行身祿（しきぎきょうみろく）が庶民の生活苦を救わんと富士山の烏帽子岩で断食行を行って入滅したことで、江戸を中心に一気に興隆した。市

原では君塚の池田正行が山包講を房総全域に広め、富士山を模した富士塚が各地に作られた。明治に入って、山包講の浜本町と山水講の観音町が合併して「ま



出羽三山講の八日講「行屋」



最近まで行われた「八日講」



戦前の三山講のにぎわい



富士山の溶岩を運んだ
シンボル「富士塚」

に柵で囲まれた「浅間神社」があり、鳥居と数基の石碑が並ぶ。当初の富士塚もここに築かれたと考えられるが確認できない。現在の塚は大正2年構築、富士山の溶岩を東海道線、総武線を経由、前年に開通したばかりの木更津線（現在内房線）を蒸気機関車で運んだ。高さおよそ8m、房総地区最大級といわれる。

吉田口、一合目、鈴原皇大神、二合目に始まり、途中七合目の「ひと穴」に合掌した食行身縁像、山頂に「浅間神社」がある。

塚周りに新旧の碑が点在している。高さ1m04の自然石碑「移転記念碑」は「浅間神社御移転、みこし1基奉獻記念、大正2年、世話人、講社中、鈴木松次郎ほか25人」を彫る。鳥居かたわらの手水鉢は明治17年、「奉納、霊岸

島湊町下十一屋伝右衛門、小網町下総屋直次郎、越後屋芳之助」など江戸の取引先商店が寄進している。高さ1mの自然石「神井」は、「上総国市原郡八幡町、井戸職、寄付者、斎藤元吉ほか8人、市原地区22人」。八幡町の上総掘り職人と市原町の総数を記すが残念なことに露出面に製作年がない。

明治42年の「永野豊山君記念碑」は富士登山33回の記念碑で本人の和歌が添えられている。「富士の嶺の 神に願いを かけまくも みとたびあまり みたびのほりぬ」八幡町講社碑は「包正、永長、解散して君塚村（池田）正行藤咲、永野定五郎、当宿浜本町社中」などを刻んで以下埋没して解説できない。令和4年に観音町、令和5年に浜本町の講社が講員の

28 大山石尊、山祇神社

JR八幡宿駅西口から当社北側を抜け、白金通りと結ぶ幅広い道路を飯香岡通りといい、昭和33年「八幡宿駅前整備計画」により完成した。元はここに八幡警察署と初代八幡公民館があった。

北側の浜本町参道と山祇神社の周辺も神社の続き地だったが飯香岡通りで二分された。山祇神社は通称「石尊さま」といった。大山阿夫利神社、石尊権現の勧請、山岳信仰と修験道の神仏習合、江戸以降雨降（あぶり）山の観光地として賑わった。

神社は屋根入母屋造り銅板葺き（元はかや葺き）、3間1戸向拝付き、昭和51年修築。神額「至誠」社内におよそ6mの男太刀、女太

刀を収蔵するが非公開。大山では源頼朝の戦勝祈願の故事から、男太刀、女太刀を奉納する習わしだったという。かつて3月15日の祭礼は盛大で、鳥居から神社まで絵灯籠が並び、こどもの健康を願うのほり旗を立てた。お囃子や踊りが奉納され出店も出た。

階段上り口の「子安堂」は切妻屋根の1間社で高さ62cmの子安観音半か像と個人墓とみられる天和2年の如意輪観音像、中世五輪塔残欠などが納められている。各地の伝統的行事が衰退する中、浜本町の子安会は今和初めまで続いて終了した。

正面鳥居と手水鉢は大正8年で、同年の自然平石1m52「芳名録」には江戸丸、永造丸、和龍丸、弁天丸、八幡丸など五大力船らしい船名が読めて興味深い。



明治26年図の山祇神社から
八幡海岸をのぞむ



石尊さまの愛称で親しまれる
山祇神社



拓本

大正2年の
「浅間神社御移転記念碑」



人穴

八幡宮別当寺靈応寺

(八幡775ほか)

明治の「廃仏毀釈」で廃寺となる

JR八幡宿駅西口、旧道八幡宿駅入り口バス停から満徳寺参道まで、駅、西口ロータリー一帯の江戸時代は八幡宮別当寺・靈応寺の境内地であった。別当寺は神仏習合(併祀)の時代、神社の社僧で、市原八幡宮以来、京都醍醐寺の地藏院を本寺とした。

「八幡宮由緒本記」などによれば「流鏑馬(やぶさめ)役」をつとめていた肥後の人円蔵が社僧となり、のち円蔵坊源明を名乗った。天正18年徳川家康軍に提出した神領図面に宮司とともに署名押印、社領安堵後、天正坊と改め、寂光坊、円乗坊、本覚坊の4坊で社僧

をつとめ、慶長20年(1615)年番交代制とした。元和元年(1615)靈応寺方(衆徒)敷地は南北71間(うしろ82間)、東西2間(うしろ20間)を記録している。

靈応寺は、醍醐寺を本山とする新義真言宗に属し、地藏院の後に別当職を引継ぎ、飯香岡社に属して、護摩祈禱を主任務とした。「護摩」は真言密教の秘法である護摩焚きの儀式で、夫婦いちよう前に設えた護摩所において、もっぱら国家と徳川將軍家の繁栄を祈願した。

市川本店文書、元禄11年(1698)「八幡宮水帳」は「高15

0石のうち、若宮寺(靈応寺)18石、円住院14石余、神王院11石余、東覚院7石、長寿院6石余、光徳院8石余、安養院10石余、宝乗院6石、宝蔵院6石余、宝珠院2石余」となっている。

また、「旧内閣文庫」所蔵の寛政7年(1795)「関東真言宗の新義本末寺帳」は「若宮寺18石、満徳寺6石、若宮寺門徒長寿院6石余、宝珠院2石余。

若宮寺、満徳寺両寺支配寺円寿院14石、広徳院8石余、東覚院2石余、神王院11石余、宝蔵院6石余、安養院10石余、徳性院、東漸院、戒誓院」を記す。

一方、菊間若宮神社旧蔵文書江戸後期「両門徒覚え」は、「若宮寺(靈応寺)門徒12か寺寺中、長寿院、宝珠院、菊間、東善院、徳性院、福寿院

以下7か所は若宮寺の寺中にてあるといえども若宮寺と同所満徳寺両方の支配なり。

円住(寿)院、広徳院、東覚院、神王院、菊間円通寺(元禄年中戒制(誓)寺と改む)、安養院、宝蔵院

「門徒」は一門の檀徒をいい、配当はない。靈応寺の支院の多くは無住だが配当は継承された。靈応寺が若宮寺を称したのは菊間若宮神社別当職を兼務したことによる。

元禄水帳の配当を集計すると、別当側が14人102石、68%に対し、神社側は11人47石32%にすぎず、江戸時代の寺社行政が仏教優位に扱われたことを示している。神社と別当寺は本来「車の両輪」だが、社領配分や朱印改めなどで対立することが多かった。



元禄11年「八幡宮水帳」の若宮寺配当



明治7年の八幡宮霊応寺跡地



霊応寺本堂は今の八幡宿駅一画にあった



文政2年(1819)からおよそ20年間にもおよんだ「別当方、不正訴訟」はその代表的な事件といえた。神社側が寺社奉行所にあつた訴状などによると、別当職白純は祭礼や月並み神事にこれまでの慣例を無視したり、欠席、末寺8か院の内、移転、隠居などによる無住や破院分の配当を私し、必要な修理や再建を行わないといふ。

江戸時代の寺社行政は寺優勢で、社領の半分以上を受取り権力にあぐらをする別当寺、加えて当時の僧侶たちの風俗退廃が底流にあつた。いったんは和解、配当を積立て衆徒再建などを約束したが実行されることはなかった。

文政13年(1830)、神社側「冥加献金願い」が現存している。は再び白純を提訴、寺社奉行は神社側の訴えを認めて白純の僧籍を

剥奪、「江戸里四方追放」とした。後任の栄阿は病気を称して現地は通栄が代行、次の田刀も江戸にあつて通栄の代行が続いた。天保9年(1838)3度めの提訴、今度は「通栄の不正」と「田刀の管理責任」が問われた。処分を察した通栄は吟味途中に逐電、現存する「済口証文」は衆徒8か院配当67石余を以後10年間、霊応寺修復と衆徒住居の再建、八幡宮修理費の拠出などを取り決めている。この時期、全国の神社、別当寺の多くで利害対立の抗争が繰り広げられている。

八幡宮文書に安政6年(1859)に焼失、翌万延元年再建された、江戸城最後の本丸造営工事この殿舎も3年後の不審火で2の丸御殿とともにあえなく焼失、14

代將軍家茂、幕府政治の混沌とした時代、付け火や將軍毒殺の噂が広がる。以後本丸が再建されることはなかった。幕府財政は火の車、総額175万両といわれる工事費の一部が押付けられた。

「冥加(幕府献金) 献金願い」

八幡宮御朱印高150石

一、金1両 八幡宮別当若宮寺

一、金1分、銀6匁 満徳寺

一、銀15匁 円乗院(以下省略)

合わせて金3両1分 万延元年10月 若宮寺代兼 満徳寺

江戸後期、文久2年(1862)

2)、霊応寺は若宮八幡宮別当寺の権利を東漸院に譲渡、証文が「菊間若宮神社旧蔵文書」に現存する。

「一札(いっさつ)のこと。」

今般菊間村若宮八幡宮別当譲渡に

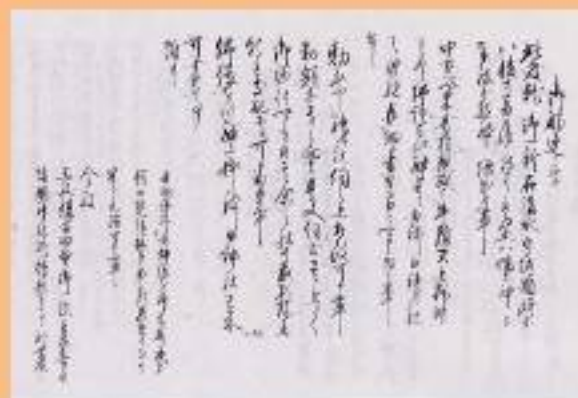
つき、別紙議定取替わしのとおりにて、職分冥加料として神主根本大隅方より金子30両八幡村若宮寺へ助合(すけごう)差出し申す。しかし東漸寺が別当寺に治まるのはわずか6年に過ぎない。慶応4年(1868)明治新政府は「神仏分離令」を発令。神仏習合の禁止、別当寺の廃止、神前の仏像、仏具の撤去などであった。社僧は復飾(有髪)して神職へ転職、還俗拒否者には退去が命じられた。東漸寺宥実住職は「生がい逆上の病いにてよんどころなく他寺に転住つかまつりたく」と福寿院留守居に隠退、一方、霊応寺は明治元年8月住職が病死、後継を名乗る市原武雄も4年10月隠居退身、この間のごたごたなど、明治初め「廃仏毀釈」の嵐の中で破壊、滅亡した。



「神社と別当寺出入り」一札



文久2年「若宮八幡宮別当寺譲渡一札」



明治元年「神仏分離お触れ達し」



霊応寺後継についての差縫れ資料

JR 八幡宿駅

(八幡775)

海運盛んで鉄道建設が遅れる

外房線「蘇我」大網間 18.5 km
の開業が明治 29 年 1 月であったが、
内房線「蘇我」姉ヶ崎間 15.1 km
の開業が 15 年もあとだったことは
余り知られていない。

これには、古くから内房一帯が
海運に恵まれたことが原因した。
八幡から江戸東京まで海路 9 里、
陸路 11 里、歩いてでもまる 1 日、明
治 26 年に開通した、東京湾汽船の
外輪蒸気船・福沢丸と飛龍丸は、
東京靈巖島（現在の新川 2 丁目）を
午前 8 時出発して、正午千葉寒川
（さんが「現在の寒川町」）、浜野を
經由、八幡港着、午後 1 時 30 分千
葉を出立、東京着した。船賃が 25

銭、明治 37 年の 3 駅合計利用者数
は 9000 人、貨物 4 万 7000
貫であった。海運が便利で、巨額
の経費をかけて鉄道を敷設するメ
リットがないと判断されたようだ。

明治 25 年に公布された「鉄道敷
設法」の内房方面に計画路線はま
だなく空白地帯として残る。明治
31 年、木更津を中心とした「房総
鉄道会社」が蘇我「木更津間の免
許を獲得したが、期限切れで失効
してしまった。

しかし、当時第 11 代千葉県知事
だった有吉忠一が注目し、蘇我「
木更津間を県営鉄道、その先木更
津「館山間を「軍事緊急路線」と

して軍や鉄道院などに呼びかけた。
あわよくば鉄道連隊の実習で工事
もやってもらえないかとの思いが
あったらしい。路線の測量や土地
買収などを行ったが、翌年、房総
一周の鉄道計画が決定されて、木
更津線工事はストップしてしまっ
た。

わずか工期 2 年で開通

明治 43 年 3 月ようやく工事が始
まる、木更津から北条（現在の館
山）、勝浦をへて大原までの区間
を「鉄道敷設法」に追加、現在の
外房線と総武線の国有化後の 45 年
3 月、蘇我「姉ヶ崎間を国鉄木更
津線として開業した。わずか 2 年
で開通した速さに驚かされるが、
これには千葉県が行っていた用地
買収などの先行事業が大きく影響

したようだ。第一工区の蘇我、八
幡宿、五井、姉ヶ崎間は株式会社
橋本店が請負い、地元業者が下請
けした。工事は台風や豪雨による
出水などで難航、職工、人夫は延
べ 1 万 9000 人に達した。

明治 45 年 3 月 28 日、国鉄木更津
線、八幡宿、五井、姉ヶ崎の 3 駅
が開業した。1 日 6 往復、もっと
も乗降客の多かった八幡宿の利用
客は 1 日およそ 170 人。蒸気機
関車と客車は国産中古車で、のど
かな房総の田園地帯や海岸を黒煙
をたなびかせながらゆったりと走
った。

明治 45 年 7 月、明治天皇が崩御
され、年号が正と変わる。大正
元年、姉ヶ崎から木更津まで、4
年上総湊、5 年浜金谷、6 年安房
勝山と小刻みに増設、8 年安房北
条まで開通して線名を「北条線」



村田川鉄橋を走る蒸気機関車
(多村勝彦画)



八幡宿駅と勢ぞろいしたタクシー



大正初めの八幡宿駅



と改称した。さらに、大正14年安房鴨川まで延長し、昭和4年外房を回った房総線と接続して、蘇我―安房鴨川間を「房総西線」とした。

大正2年「時刻表」によれば千葉発午前5時40分、8時34分、10時55分、午後1時26分、4時34分、6時46分の6往復、木更津までの最速が1時間22分、両国橋からの直通列車はまだなく、千葉乗り換え、所要時間およそ3時間10分であった。

木更津線の南下にともなって東京湾汽船は大きな影響を受ける。大正3年東京―千葉間と東京―木更津間航路が廃止された。

大正12年9月1日、「関東大震災」が起った。震度6、マグニチュード7・9、震源近い北条館山地区では、ほとんどの家屋が倒壊、

多数の圧死者が出た。トンネルが崩壊し、鉄橋が落ち、線路は折れ曲がり、走行中の列車が脱線した。市原郡では養老川沿岸を中心に死者21人、全壊640戸を数えたが、市原地区に大きな被害はなかった。北条線の全面復旧は3か月後、部分開通と同時に壊滅的被害を受けた東京からの罹災避難所となる。9月13日現在、市原郡への避難者は4844人、八幡宿や五井駅は安否を気遣う人たちでごった返した。

開業から海岸埋立てまでの八幡宿駅は単線島型ホームで、駅直前で2本にわけて、1番線の千葉方面と2番線の五井方面の乗り場を作り、列車が交差できるようにした。駅舎は西口にあり、改札口から構内踏切りの線路をわたってホームに上がった。

太平洋戦争が激しくなると、男性駅員が次々と戦場に駆出され、

勤労働員の女性たちが、出札の駅務や車掌、保線作業といった労働現場にも登場した。

昭和20年敗戦、戦後は極端な食料不足で、大きなリュックを背負った東京生活者の買出しで超満員となった。窓からの出入りは当たり前、屋根の上まで乗客があふれた。昭和21年5月、房総西線102列車の乗車率は395%に達した（千葉の鉄道1世紀）。

電化と複線化、京葉線が開通

戦後の房総西線は、春は潮干狩り、夏は海水浴客で賑わった。蒸気機関車の直通臨時列車が両国から増発されたが、八幡海岸は東京からバス仕立ての小中学校の利用

が多かった。

昭和30年代、行徳から船橋、千葉、市原、木更津にかけて「京葉工業地帯」の埋立て工事が始まると、房総西線の乗客が急増した。

八幡宿駅の1日乗車人数が昭和30年度1500人だったのが、40年度4200人、50年度8900人、60年度1万1600人と激増した。

この間国鉄では電化と複線化が内房線に進み、昭和43年君津駅まで延長、昭和56年総武快速線が千葉駅まで開通、平成2年京葉線が開業して内房線に乗り入れた。

昭和62年経営母体が国鉄からJR東日本に変遷、平成7年八幡様のいちよう葉をデザイン化したモダンな橋上駅舎が誕生した。平成24年八幡宿駅誕生から100周年を迎えた。



いちよう葉をイメージした現在の駅舎



平成7年、八幡橋上駅舎での「落成記念式典」



昭和後期の八幡宿駅



戦時下、出征兵士の八幡宿駅送り

神道中教院

だいきようせんぶ

「大教宣布」を推進するも1年で終息

(八幡1059ほか)

飯香岡八幡宮は徳川家康より社領150石を安堵され、元禄の時点で12家の社家と霊応寺を主とする10か寺の別当寺院が存在し、神社の運営に携わっていた。この社領は將軍代替りごとに別当と神主がともに上京し御朱印改めを受けることとされていた。

この社領の配当を巡って社家側と別当衆徒側で論争があったが、延享4年(1747)の徳川家重の院知の際に、上京後の手順を巡って神主と別当が激しく対立したことをきっかけにして、対立の溝は激しくなっていた。

明治維新後全国に勃興した「神

仏分離」は当社周辺にも強く影響し、檀家寺院となっていた1寺を除き霊応寺ほか9か寺が「廃仏毀釈」の風に巻き込まれていった。別当寺院の活動を伝える史料すらほとんど残されていない。

皇典講究分所から南総中学校へ

廃寺となった霊応寺の本堂および庫裏、並びに衆徒2院の居宅の処分を巡り、明治6年12月2日神主・市川信明は県令芝原和に対し「皇国」の「開教」のために払下げを願ひ、「教院御開講」にあたっては無償の提供を申し出てい

る。これは前年に教導職が設けられ、全国的に「大教宣布」が開始されたことに共鳴した動きで、千葉県では明治6年10月24日に「中教院建設御伺い」が提出され、中教院のもと、県下16大区に区分けして各区ごとに「小教院」を配し、大教宣布を実施する計画がすすめられていた。

市川信明の申請により霊応寺跡地に神道中教院が設置されるも、1年程度活動したところには大教宣布に対し、仏教勢力から神仏合同の教化体制への批判が寄せられ、大教院に替わる機関として「神道事務局」が設置され、府県の大區ごとに支局が設けられ、明治8年5月3日大教院が解散し、大教宣布は終息した。

千葉県においても中教院に替わって神道事務局が千葉神社事務

所内に設置されることとなった。中教院が消滅した後の建物は八幡尋常小学校の校舎に充てられることとなった。

千葉県神社内には明治17年に「千葉皇典講究分所」が併設され、明治19年には「神道事務局」が神道本局に組織改編され教派神道一派となったため、これまで分局が行っていた神職養成を始めとする諸事務機能は分所が引継いだ。

やがて明治22年千葉神社内の分所は川上南洞の働きによって飯香岡八幡宮内に移転し、明治31年には「千葉県皇典講究所普通学部」が開設され、その後「飯香岡普通学校」、飯香岡普通学校、南総中学校へと改称しながら、神職養成から一般教育を主とする学校へと性質をかえていき、昭和19年3月31日まで存続した。



資料発見を伝える「神社新報」



中教院の建物は
八幡小学校として使われた



中教院の大祭通知



八幡小学校

(八幡1059→530)

八幡宿駅前から東口へ移転

「村に不学の戸なく家に不学の
人なからしめん」、明治4年(1
871)「廃藩置県」を断行して
中央集権体制を固めた明治新政府
は、翌5年フランスを範とした
「学制」を発令した。児童を男女、
身分に関係なく学ばせる「国民皆
学」の方針が打出されたが国家に
予算はなく、すべての経費は地元
の寄付金と生徒家庭が負担する
「授業料」で賄うことになった。

木更津県の学校建設は実に精力的
に行われた。ただちに趣旨徹底
を通過、その具体的内容は、校舎
は寺院などを借用、教師は寺子屋
で篤実で教え方のうまい者を選ぶ
などであった。1年後の通達は、
趣旨にそむくことあれば……と不
退転の決意を伝えた。

何百もの学校を同時に創立させ
るという権令・芝原和の計画は千
葉県令就任後に引継がれ、明治6
年405校、7年805校、8年
902校と驚異的ペースで進んだ。
芝原の執念で学制発布わずか3年
で千葉県は学校設置が終わった。

市原地区では、明治6年7月に明
照院で開校した五所小学校を皮切
りに、円頓寺で八幡小学校、千光
院で菊間小学校が相次いで創立さ
れた。

江戸中後期の八幡は市原の交通、
文化の中心地であり、商業都市と
して発展したことから寺子屋や私
塾が多かった。「寺子屋」は寺院
教育から発生した私設学校で、庶
民のこどもたちが読み、書き、そ
ろばんを学んだ。生徒(寺子)は
5〜8歳で入門、3〜5年で卒業
した。授業は習字、読み方に始ま
り、算数、地理や書状の書き方、
歴史書、論語など多彩だった。男
女共学で、女子は礼儀作法や洋裁、
生け花が加わった。また、生涯学
習の場に「私塾」があった。

明治6年「設立伺い書」による
就学適齢期(6歳〜13歳)児童
数が145名であったが、「駅内、195
番小学校区連合小学校として開校
した。読書教師は旧菊間藩
生徒大野男女150名」(八幡小
学校沿革史1)地域の教育水準の
高さをあらわしている。

八幡には円頓寺、称念寺、無量
寺など僧侶を中心とした寺子屋が
発達、飯香岡八幡宮、若宮八幡神
社などの私塾に加え、明治維新期
に成立した菊間藩が藩校「明親
館」を沼津から移した。

木更津県から千葉県への移行期
に八幡宿戸長を務めた市川本店文
書「八幡小学校創立期文書群」に
「設立伺い書」案、控え7点が保
管され、慌ただしい推考の跡が窺
える。初代校地となった円頓寺で
は旧寺子屋を利用、74坪、84畳、
借家料50銭」と計算している。

八幡小学校は明治7年4月、第
22番中学校区、第193、194、
195番小学校区連合小学校とし
て開校した。読書教師は旧菊間藩
師は八幡の人永野算平、習字講師
を医師百瀬巳之助。県の学力試験



明治6年「八幡小学校設立伺い書」



明治21年改修時の八幡小学校



「八幡小学校沿革史第1号」
書出し部分

をへて教師として正式に採用された。

八幡小学校に開校以来の「学校沿革史」が保管されている。政府の立場で書かれた地元対応への厳しい「上から目線」がめだつ。

「しかるに開校の際、出校する僅々10人すぎず、またもって村民旧賃に慣れて小学を信ぜざるを徴するにたれり」と手厳しい。しかし、一方、文部省第3年報、「明治8年現在抄録」は男子50名、女子33名合計83名とする。就学率は男子69%、女子46%であった。

設立当初明治7年6月の「学校出納帳」によれば、収入は生徒授業料集金3円54銭、戸割り集金8円39銭の合計11円93銭に対し、支出は教員給料12円、円頓寺学校宿料1円、炭、茶代、半紙などの雑費6円88銭の合計16円88銭で、差

引き4円55銭不足となった。7月生徒数の増加にともない校舎を称念寺に移転した。

翌8年1月、赤字経費の負担を巡り、騒動が起こった。父兄は寺子屋にくらべて学費が高く、教育レベルが低いとして生徒の登校を拒否、4か月に渡って休校した。競合する寺子屋や私塾を取潰したうえで始めた学校創設であったが、

「明強引に進めた教育行政への「反動」ともいえた。

明治9年県から新築5年目の神道「中教院」を下付され、ようやく運営が軌道に乗る。現在、八幡宿駅西口前千葉銀行などの一画、同26年、「八幡尋常、高等小学校、八幡町役場の図」が当時の校舎を伝えている。正面入母屋造り玄関車寄せのついた建物と左右2棟が尋常科で、左手前が高等科、広々

とした校庭で和服姿の学童たちが体操している。中央に「教えの松」学校旗がほんぽんとひるがえった。

明治22年「町村制」の施行で八幡宿と五所金杉村・山木村が合併して八幡町となる。五所小学校を吸収、高等科を設置して八幡尋常小学校と改称、戦時の竹槍「非軍事教練」、出征兵士駅送りなどの苦い思い出をへた昭和30年市原町立、38年市原市立八幡小学校となった。

昭和41年、京葉工業地帯埋め立てにともなう生徒数の大幅増加でJR駅東口の現在地を選定、2年間の継続工事をへた43年、3年生と6年生を収容、1年遅れで全校生徒が新校舎に移った。昭和45年白金小学校、50年石塚小学校の新設開校にともない五所地区、観音町地区が分離したが、その後の児

童数減少にともない令和5年度現在の生徒数は382人となっている。

八幡小学校には多くの碑が建立されている。右奥駐車場入り口の平石は昭和42年駅前旧校舎から移転したことを記す「校舎落成記念碑」、校門脇の「新校舎落成記念碑」は平成14年、「師道先訓に学ぶ」碑は沿革史で、「我が政府、各地方小学校設立の命あるや、木更津県庁もまた速やかに管内に令して朝旨（ちょうじ）遵法せしむ

：「難解な漢文が並んでいる。

校庭の片隅に薪を背負いながら勉学に励む「二宮尊徳像」が制作年の紀元2600年、昭和15年を刻む。苦学の末、小田原藩に登用されて農村復興に尽力した。駅前校舎時代、「教えの松」と並んで八幡小学校のシンボルであった。



昭和43年に移転した
現在の八幡小学校



駅前にあったころの八幡小学校



戦時下、女子生徒も剣道を教わる



戦前の体育祭

八幡中学校

(八幡1050→500)

昭和22年、六・三制教育改革で開校

昭和22年4月に行われた、戦後最初の八幡町長選挙で、無投票当選した菅野儀作最初の難題が新制中学校の建設であった。この年5月、GHQ主導の「教育改革」で、小学校6年、中学校3年を「義務教育」とする「教育基本法」が制定され、八幡新制中学校が設立された。

初代校長・森操の「開校当時の思い出」によれば「開校式は5月10日、当時の小学校（八幡宿駅前）の校庭で行われた。当時の生徒数は1年3学級、2年2学級、3年1学級の6学級で全校生徒264名、教員数も8名という小規模なものであった。

校舎も小学校の3教室を借用したほかは、旧役場庁舎、円頓寺本堂、旧南総学校武道館を仮校舎とし、教員室は小学校の応接間を借りる状態であった。学用品はもちろん、教科書さえ満足にならなかったが、生徒はみな中学生としての誇りを持ち、喜々として勉学にいそしんだ。

中学校は発足したが物資が欠乏して食べ物にも事欠く時代、資材の不足、敷地の入手難、資金不足が重くのしかかった。そんな菅野町長の元に「旧日本軍兵舎払下げ」の朗報が飛び込む。菅野はす

ぐに決断し、千葉財務局と交渉、「習志野騎兵連隊」の兵舎の払下げを受けることになった。

一口に「兵舎を解体、材木を運んで再建」といっても大仕事である。もちろん当時の町に請負に出すだけの余裕はない。解体、輸送、再建までの仕事を自分たちの手でやる以外に方法はない。職工組合も一町民の立場で全面協力を決めた。解体と運搬作業を鈴木組合長以下15名の大工と各町に割り当てた1日20人が作業にあたり、町会議員が監督についた。毎朝6時半に手弁当で町役場に集合、2台のトラックに分乗して習志野に向かった。空きっ腹を抱え、往復するだけでも身に応えたが、毎朝出発する町民を励まし、ときに自らも現場にたった菅野町長と力をあわせ、一つの事業に邁進することで、

一体感が生まれた。町民の表情は明るく活気にあふれた。

当時、中学校の敷地が手に入らず悩む町村が多かったが、幸い八幡宮の広大な所有地があり、新制中学校の建設用地も神社の東南側が候補地に決まった。町の「ごり押し」は神社にとっては存亡にもかかわる苦渋の決断であった。内田羊之助宮司が「神社日誌」に「9月15日、氏子総代などにて学校増築敷地を实地踏査の決定す。境内に学校校舎を建設するがごときは境内の風致を害し、神職としては絶対反対なるもいかんとも仕方なし」と記した。

学校敷地は八幡様の杜で、大木が生い茂っていた。伐採は山木地区の人たちで、生徒たちも雑務を手伝った。きれいに整地された建築現場に習志野兵舎を解体した木



八幡公民館の所にあった体育館



八幡中学校校舎正面



町の人たちが総出で築いた
八幡中学校の棟上げ



材が運びこまれたのは柿の実も色づく秋の深いころだった。2台のトラックがピストン輸送し、町民はほとんど総出で中学校作りに協力した。新学期はぜひ新しい校舎で、工事は寒さを押し続けて続けた。

卒業式は工事中の新校舎で行われた。23名の第1期生の一人小出惣治は「工事が始まると午後は勤労奉仕、ロープで大木を引張ったり、古材の釘抜き、勉強らしい勉強もないうちに卒業式になった。私たちの中学校時代はたったの1年間、新しい校舎での授業はなかったが、生涯忘れられない思い出です」と語っていた。

昭和23年4月入学式の日、平屋3棟9教室、職員室からなる新校舎が竣工、勤労奉仕の参加者は9450人、1戸平均7人を数えた。

6月26日、公民館と合同の落成祝賀式を新しい公民館で開催、川口為之助県知事、アメリカ軍政部などが参加した。翌24年、学校に運動場がなくてはかわいそうだと、今度も町の人たちのボランティアで屋外グラウンドが完成した。

昭和30年代に入ると工場誘致にともなう人口増加に対応するため、新校舎、体育館、プレハブ校舎を相次いで増設したが、校地は狭く建物の老朽化も進んだ。昭和45年JRを挟んだ現在地に新校舎を新築移転、昭和56年八幡東中学校を分離、平成8年創立50周年を迎えた。教育目標は「豊かな感性を育み、郷土を大切に作る心優しく逞しく生きる生徒」。令和5年の生徒数660名。玄関正面に創立40周年記念「校歌碑」、50周年記念「未来に向かって碑」が建つ。

市原青少年会館

(八幡1126)

「青少年の健全育成」をすすめた

青少年会館は「青少年の健全育成の場」を提供することを目的に、小学生から25歳くらいまでを対象としたが、部屋があいていれば一般の利用も受付けた。八幡公民館と向かいあわせたことから、文化サークルやダンスサークルなどの併用も多かった。

昭和54年、建物は千葉県が建て、市原市に貸与、その後「指定管理者制度」導入にともない市原市退職校長会が受託、その運営を行った。鉄筋コンクリート2階、1階は玄関ホール、事務室と選挙投票場などに利用された集会所、2階は会議室、クラブ室、和室、音楽

室、学習室であった。また、会館の活動として各種教室、講習会を開催、茶道、華道教室や着付け、陶芸、卓球、社交ダンスなどの教室も設けられた。令和8年、八幡宿駅西口地区公共施設集約化施設として統合された。

常設展示絵画の深沢幸雄「窓ガラスの日記」、山口達「上総の山々」が人目を集め、玄関に「ボーイスカウト千葉連盟結成ゆかり地」碑が建った。帽子を高々と掲げ力づくよく歩むスカウト像の側面に、昭和23年八幡公民館と運動公園一帯を活動拠点とした県連盟発祥の地史を刻んだ。



八幡宮と正対していた
市原青少年会館



現在の八幡中学校



町民グラウンドを兼ねた校庭

八幡幼稚園

(八幡1050)

八幡町立幼稚園として創立

八幡幼稚園は昭和32年、一足早い28年に誕生した八幡保育園敷地内に創立、八幡小学校長であった今井謙二が兼任した。初代保育園長でもあった八幡宮宮司・市川先生の回想によれば、屋根の板壁に描かれたミッキーマウスがトレードマークで、南町みおにのり採り船が係留し、「町営グラウンドの冬はのり乾し場になった。晴天の日のはのりすが整然と並び、夕方には五井の岬越しに、富士山を紫紺に染めて、東京湾に沈みゆく夕陽を眺めながら、一日の勤務から解放された身を家路に急ぐ先生方の姿などが走馬燈が廻るようによみが

えります」と記した。

昭和36年、市原市制発足にともない市原市立八幡幼稚園と改称、同44年八幡中学校移転後の、屋内体育館、鉄筋2階建て旧校舎一部を利用、同46年旧中学校跡地に新園舎を着工、翌47年完成移転、竣工式を実施した。

「八幡幼稚園創立25周年記念誌」による園児数変遷は、昭和32年2学級80人、以後順次増加して、43年に200人を突破、昭和50年の8学級、315人をピークに減少に転じ、記念誌発行年56年の園児数は147人であった。

わが国の本格的幼稚園の歴史は、

明治9年東京女子師範学校附属幼稚園（現在お茶の水女子大学付属幼稚園）といわれる。戦後の昭和

22年「学校教育法」が制定され、幼稚園が学校教育機関として位置づけられた。全国的に幼稚園の数が増えるにしたがって教育内容も大きく変わり、こどもの目線に立った教育、遊びを通した教育となっていた。

昭和中期後期からバブル期の高度社会は幼稚園におよび、狭き門となった有力幼稚園の入園願書受付に徹夜で親たちが並んだ。昭和後期から平成時代、少子化時代を迎えると一転、保育園は園児不足に悩まされた。平成後期に認定こども園制度が導入され、市立幼稚園は平成31年閉園、創立61年、最後の教職員は石井千佳代園長以下3人、終了園児は男児6名、女児

6名の計12名であった。

「認定こども園」は、幼稚園と保育園の機能をあわせ持つ施設で、幼児教育や保育、地域の子育て支援などを行う。市原市では平成末期、それまでの市立幼稚園などを閉鎖、市原支所に隣接した八幡保育園跡において「市立八幡認定こども園」を開設した。

八幡観音町の私立「袖ヶ浦幼稚園」は、東京浅草で親や身寄りのない孤児の世話をしていた「同情園」が、昭和2年当地に移転して幼稚園を併設したことに始まる。戦後26年、福多テル先生の死去で閉園したが、地元のつよい要望で、「市立袖ヶ浦保育園」として復活、平成30年まで続いた。

八幡宿駅東口の私立心花幼稚園は、昭和50年に開園、創立50年、現在に至っている。



昭和5年の袖ヶ浦幼稚園卒園式



昭和47年、中学校跡新園舎落成式



保育所と一緒にのころの八幡町幼稚園



八幡公民館

戦後の郷土復興と町おこしのシンボル

(八幡1057→1050)

八幡町の戦後は八幡公民館と菅野儀作抜きに語ることはできない。八幡公民館は終戦直後の昭和23年、郷土復興と町おこしをめざした八幡町長・菅野儀作と提唱に応えた職工組合の奉仕的作業と町の人たちの勤労奉仕で作られ、町のシンボルとして成長していった。

わが国の公民館の発祥もまた、戦後の米軍GHQ政策にあった。昭和21年7月の文部省次官通牒(通達)の書出しは「国民の教養を高めて、道徳的知識的、ならびに政治的の水準を引上げ、また町村自治体に民主主義の実際の訓練を与えるとともに、科学的思想を

普及して平和産業の基礎を築くことは新日本建設のためにもっとも重要な課題と考えられる」、また、別紙「設置運営要綱」の具体的な目的として

- ① 民主的社會教育機関
- ② 町村民の社交機関
- ③ 産業振興の原動力
- ④ 文化交流の場
- ⑤ 郷土振興など7項目を挙げた。

この次官通牒は法的な裏付けがなく、占領軍当局と文部省と都道府県が市町村に自主的な設置を呼掛けたに過ぎなかったが、各地の青年団や婦人会、文化団体の活動拠点として大きな反響を呼び、各

地で公民館設置の気運が高まった。

なにしろ、敗戦後まだ日も浅い混乱の時代で、財閥解体、農地解放、公職追放など「GHQ」による大改革が相次いで指令された。

大都市は空襲で廃墟と変わり、人びとは焼け跡に建てたバラックで生活した。食料を求めてヤミ市をさまよひ、パンパンガールと呼ばれた街娼たちが横行した。人々の生活は苦しく気持ちも荒みがちであった。

習志野連隊の兵舎を利用し、中学校を建てたばかりの町には使い残しの材木がいっぱい残った。だからからともなく「次は公民館だ」と、みんなの意見がまとまった。用地は当時八幡様の境内、現在飯香岡通り、浜本町側鳥居と境内社の山祇神社の間、周辺は八幡宿駅と駅前商店街に隣接した、八幡町

の中心街で、町役場や県の地方事務所、警察署、小学校などが一画をなしていた。

工事は息つく暇もない「昭和23年4月1日午前9時、公民館地鎮祭執行、内田宮司奉仕、4月23日公民館上棟式執行(社務所日誌)」建設委員長は中学校に引続き白鳥孝治、作業は職工組合の鈴木委員長らが中心であるが、このほか毎日、町民20人、30人が勤労奉仕で協力した。

白鳥は明治28年材木商だった父定吉4男に誕生、近衛工兵大隊除隊後、家業を継いで土木建築の請負のかたわら地区の在郷軍人会長を務めた。公民館の建設工事は総責任者となった。使命感に近い情熱を燃やした。できあがった舞台を作り直したり、その夢は次々と広がった。見かねた議会は2度も



八幡公民館を視察された
秩父宮妃殿下



公民館表彰で昭和天皇に
拝謁する菅野館長ら



創立当時の八幡公民館



交代を求めたが菅野は抑えて自ら資金集めに走り回った。菅野、白鳥の絶妙コンビが生んだ「傑作公民館」はこうして誕生した。白鳥はのち県公民館連合会初代会長として後輩公民館を指導した。昭和44年没、73歳であった。

勤労奉仕延べ4750人

八幡公民館は昭和23年6月26日に落成式を挙行了した。わずか3か月たらずの工程で、勤労奉仕は延べ4750人、職工組合の奉仕的作業、それに材木、電気設備、綴（どん）帳なども町民が寄付した。木造2階建て延べ237坪、1階は1300人収容の吹抜き大ホールに、間口6間、奥行き2・5間の舞台、事務室など、2階は200人収容の観覧席のほか図書室、

40畳敷きの集会室、とくにあの時代、3枚のどん帳、3枚のスクリーンを備えた舞台はめずらしく話題になった。

「こけら落し」は実りの秋を待った9月30日に行われた。東京から歌舞伎の中村吉右衛門と雁治郎の一座がきた。本物の歌舞伎などみたこともない人たちがほとんど。近郷の人たちも押掛けて大変な賑いになった。

菅野が翌昭和24年度に掲げた「八幡公民館活動方針」は教養、自治、産業、生活改善と体育、レクリエーションであった。青年学級、婦人会、ボーイスカウト、文化体育サークルが次々と誕生した。八幡公民館の特筆すべき活動に「新生活運動」があった。最初のテーマが「結婚式の簡素化」、当時、披露宴は三日三晩ぶつとお

し、莫大な経費をかけた「どんちゃん騒ぎ」をやめようとの呼びかけに、多くの若者たちが「公民館結婚式」を実践した。午前八幡様での神前結婚式で午後は披露宴。「式は陽のあるうちに始まり、陽のあるうちに終わる」。参加者は平服、料理は赤飯と1汁3菜、面倒はすべて婦人会がみた。ついで合同敬老会、成人式、七五三と慶弔冗費節減運動がひろがった。

このころわが国は食料危機下にあった。八幡でもやみ米売買が行、供出米の収率が45%を割った。町は農家1軒1軒を説得、供出米、甘藷（かんしょ）さつまいもを早期完納した。

「公明選挙」を推進、投票率は常時90%超え、参議院補欠選挙は県下第一位の99・67%を達成した。昭和24年、「全国優良公民館」と号をもって休刊となった。

して「文部大臣賞」を受賞、11月3日の文化の日、菅野町長兼館長が皇居で昭和天皇に拝謁した。創設当初、5年間は公民館がもつとも輝いた時代であった。館長兼務の菅野町長は八幡中学校、八幡公民館、町民グラウンドといった大仕事を矢つぎ早に完成、自ら率先することで町の人を掌握していった。そこにはある種のカリスマ的資質があった。その発信力となったのが昭和25年5月に創刊した「八幡公民館新聞」であった。

B4判8頁12ページ。第1号の紙面構成は八幡町の概要、職業調べ、公民館ができるまで、生活刷新要綱、公民館予算、公民館行事予定表などであった。昭和26年菅野町長が次の選挙で県会議員に転身することとなり、惜しくも第5号をもって休刊となった。



「新生活運動」の柱となった
「公民館結婚式」



公民館(赤枠内)創立ころの「八幡宮境内図」



菅野館長が作った「公民館新聞」第1号



公民館行事写真帳

昭和20年代、30年代の八幡公民館は町のシンボルであった。舞台大ホールは小中学校の入学式や卒業式、学芸会、ナトコ教育映画館となり、NHK「三つの歌」中継、市原出身の人気浪曲師・春日井梅鶯、小唄勝太郎、藤山一郎、浅草女剣劇界の草分け不二洋子一座が観客を沸かした。

なかでも人気を集めたのが映画会だった。青年団が活動資金集めに主催、千葉の映画館にフィルム代、映写機、上映技師料込みで契約、税務署で検印を受けた前売り券を販売した。時代劇や青春もの、アクションもの、コメディもの、恋愛ものなどの人気映画や名作映画を上映した。

西口開発事業で中学校跡に移転

昭和30年代から40年代にかけて日本経済は急激な発展を遂げた。一方、八幡町にあって市原・菊間村との合併にともなう市原町移行、漁業権放棄、八幡海岸の埋立て、工場誘致とその後の開発ブーム、市原市制などなど。短期間で起こった急激な変化は、町の人々の生活を一新した。文化的な新築住宅に新車、公民館時代のことも世代は東京の大学へと進学して行った。

昭和47年、八幡公民館は八幡宿駅周辺の区画整理事業のため創立の地を改め、八幡中学校跡地に移転した。鉄筋コンクリート2階作り、敷地面積972㎡、総建坪は999㎡であった。昭和61年市原支所を併設して模様替えオープン、新たに体育室と視聴覚室を加え、図書室を増強した。

昭和64年1月、昭和天皇はご病氣のため崩御された。明治34年大正天皇長子として誕生、大正5年立太子、10年摂政をへた昭和元年、第124代天皇となる。昭和恐慌、日中戦争から第2次世界大戦と敗戦を体験、戦後は象徴天皇として国民から慕われた。

皇太子・明仁親王が即位、元号は「平成」、「国の内外、天地ともに平和でありますように」との願いが込められた。前期はバブル崩壊から「失われた10年」とも呼ばれた平成不況期、団塊ジュニアにとって「就職氷河期」で、政局もまた波乱含みに推移した。

平成前期の公民館の特筆すべき活動に「登録団体連絡協議会（サークル連協）」の創立があった。「文化祭などの企画、運営を自分たちの手で」という伊藤功ら

準備委員会の呼びかけに104サークルが応じた。平成9年10月の第1回文化祭は一挙に盛り上がった。参加サークルの急増で展示用パネルがたりず借り集めた。それまで講堂で開催した発表会も体育室の仮設舞台に移した。模擬店は料理サークルを中心に五目御飯や焼きそば、ケーキやパンが登場し、サークル連協は文化祭の成功をもって大きな第1歩を記した。

「八幡公民館運営委員会」が受託

平成23年、市原市は「指定管理者制度」を導入、「八幡公民館運営委員会」にその運営を移行した。その趣旨は「公民館は生涯学習社会において、時代の変化や市民ニーズを的確にとらえた主催事業、地域づくりのサポートなど、社会



昭和47年、駅前整備事業のため移転

◀当時の公民館案内



公民館をぎっしり埋めた「合同七五三」

「供米推進活動」を讃えるGHQ軍政部表彰状



的要請に応えられるような社会教育活動を積極的に展開すること」にあった。

平成23年3月11日、八幡公民館直営最後の月に「東日本大震災」が起った。宮城県沖で国内観測史上最大、マグニチュード9.0の巨大地震が発生した。宮城、岩手、福島3県などで大津波が起り、死者、行方不明者が1万8000人余に上がった。東京電力福島原発では全電源を喪失してメルトダウン、1、3、4号機が水素爆発して放射性物質が大量に空中に飛散した。

市原市では五井南海岸の「コスモ石油化学千葉製油所」のLPGガスタンク10基余が、余震の続く夕間の中爆発炎上、直線距離およそ3kmの八幡公民館も爆発のたびに真っ赤な炎光と熱波の衝撃が窓

ガラスを叩いた。八幡公民館は休館、以後直営館として再開することとはなかった。

平成23年4月1日、引継ぎや研修期間もほとんどないまま指定管理人制度がスタート。この日の「広報いちばら」で開館を知った利用者から問い合わせと予約電話が殺到した。午後3時第1会議室で入社式を挙行、安藤岩男会長の訓示のあと全職員に辞令が交付された。新体制による移行1週間は戦場のような喧騒が続いた。新スタッフは直営時代に公民館経験のある河野一雄館長以下19名での門出となった。

6月、運営委員会が「八幡公民館だより」を創刊、安藤会長は「生涯学習拠点として地域に親しまれる公民館をめざしたい」とあいさつした。

創立70周年の平成30年、菅野館

長時代以来、69年ぶり2度目の「全国優良公民館」文部科学大臣賞を受賞、11月、東京・文京区日本青年館ホールで開催された表彰式に池田好徳館長が出席した。地域と密着した「八幡史学館」を中心とした取組みが評価された。

令和元年9月9日早晩、千葉県を襲った台風15号は飯沼八幡宮や円頓寺などに重大な被害をもたらした。また、市内各地で大規模な停電が発生し、交通信号や一部家庭のライフラインが混乱した。幸い公民館に停電はなく、ただちに休館して、和室や会議室、講堂が市の避難所となった。

令和元年に中国で確認された新型コロナウイルスの感染はあつという間に全世界に拡大した。日本でも7次にわたるピークを繰り返

しながら多くの犠牲者を出した。

八幡公民館では入館者の健康確認、入室者数制限、主催事業や行事の中止、休館などの措置をとった。地域の成人式や大祭、港まつりなどが中止された。

平成30年から「ワークショップ」形式で検討された、八幡宿駅西口の「公共施設再配置」構想は、八幡公民館、市原支所、市原青少年会館など6施設を集約して、新しい価値を付加した複合施設を整備することになり、八幡公民館も令和8年3月をもって、その歴史に終止符を打つことになった。「八幡公民館」が歩いた創立78年の足跡は、戦後の混乱期から経済成長期をへて、今日へと導いた「わが国の昭和、平成、令和史」そのものであった。



八幡公民館運営委員会総会



「2度目の文科大臣表彰」に輝く



「公民館運営委員会」が創立



平成23年、東日本大震災で休館

八幡町、市原町役場跡

旧庁舎かたすみにも明治の記念碑

八幡1102ほか↓
1023

江戸時代の村長は名主だが、八幡村は相給のため9人もいて、うち1人が年番名主を勤めた。明治維新の改定で名主が廃止され、戸長になった。「戸長（こちょう）」は、明治5年、大区小区制の小区の長をいった。「大区小区制」は、従来の制度では効率的な行政を実施できないとして、フランスの地方行政方式を取入れたが、長続きせず、明治11年に廃止された。

木更津県時代の指示で、千葉県令に提出した「上総国第33区八幡、五井地区1宿29か村戸長、副戸長選挙人名書上げ」（市川本店文書）によれば「第33区、市原郡八幡宿

戸長市川甚太郎、副戸長山下賢治、村田市平、松原市郎、加藤久平、丸治郎、米澤利吉郎、川上新平、市川一学長男平吉、中島徳太郎」と、旧名主クラスが名前を連ねた。

明治6年7月、木更津県と印旛県が合併して千葉県が発足、区画は第5大区2小画に代わった。（大）区長に松田嘉一郎（八幡宿）、戸長に市川甚太郎が就任した。「戸長役場」は明治時代、村の行政事務を取扱った役所のこと、戸長の自宅があてられた。

戸長役場には、公選後知事によって任命された戸長と副戸長、書

記載の筆生、雑用掛りの小走が置かれた。しかし事務量の増加にともない小村での運営が難しく、明治17年、おおむね5町村、500戸をめどに1人の戸長をおく「連合戸長役場制度」に変わった。現存する「領収の証（八幡・梅谷家文書）」は、「市原郡八幡宿外四宿込みにひっそりと現存している。高さ1m40、幅70cm、厚さ20

正方形の正面に、豪華な唐破風屋根玄関が目につく。50〜60坪ほどの母屋に別棟がある。庭木を配して、踏み石を敷き詰めた前庭右奥に1本の碑がみえる。

戦後、移転した第2代八幡町役場跡、旧庁舎横、駐車場との間の

明治18年、最初の「八幡町役場」が、現在、八幡宿駅西口、北島写真館ビルと飯香岡通りなどの一面に竣工した。元八幡宮別当寺・霊応寺の跡地で、明治7年八幡宿村に下付された八幡小学校の一部が割かれた。明治26年の「千葉県博覧図、八幡尋常高等小学校および八幡町役場の図」に詳しい。木造寄棟屋根平屋、明治期らしい和洋折衷建築で、ガラス戸が南面を囲む明るい間取りになっている。

「ようを通わし、安を計る」と読む。本文もまた難解、最初の部分は、「維新以来、道路・橋梁の構造、官舎・学校の建築、日に進み、月に興り、商沽（しょうこ）の利、農産の殖、ことごとく挙がらざるなし、ああ、何ぞそれ盛んなるや」。

要約すれば、当村は明治維新後、



明治6年、「戸長選挙人名書上げ」



「千葉県博覧図」の町役場



「八幡宿村会の碑」拓本

野儀作であった。固辞する本人をなんとか承諾させたのが届け出、切り日の直前であったという。町長選挙はほかに立候補者がなく、町議選挙も定員同数のため無投票となり、菅野を推した郷明会8人も当選した。

当時の町会議員は高山真蔵（議長）、鈴木万蔵（議長）、宮原政雄、今井惣一、浅野好道、木口辰五郎以下14名。町職員は助役・岩田直吉、収入役・野城恒吉以下、男子職員石川謙識、浜田 隆、長谷川捨一、杉井三郎、根本 親以下5人、女子職員人間はな、宮本ひさ以下4人、農業委員会越川善一、教育委員会森 操であった。

当時八幡町職員で、五所満蔵寺住職でもあった石川賢識によれば「菅野先生が町長になられたころ、役場はいまの市原支所（現在八幡

町商工会）のところにありました。元漁業組合の建物で木造2階建て、1階が事務室、2階が会議室になっており、延べ50坪もあったでしょう。いまから考えると大変粗末な役場でした。菅野町長は毎日役場に出てこられました。もちろん町長室といった部屋はありません。炊事場の隣に6畳の和室があり、よくそこに座っておられました。イガグリ頭に戦闘帽、国民服にゲートル、地下足袋が日常のスタイルでした。（菅野先生を偲ぶ）」。菅野は八幡中学校、八幡公民館、町民グラウンドを相次いで完成させるなど精力的な活動で町民の圧倒的な支持をえていた。

昭和26年、推されて県議選に出馬、定員3名の現職は市川得三ら自由党が独占、菅野の出馬で4人になる。結果は菅野が圧勝、現職

南北両軍の衝突に端を発した「朝鮮戦争」の特需景気は、日本に奇跡的な経済復興をもたらせた。26年、吉田茂内閣が、サンフランシスコ「対日講和条約」に調印、国際的にもようやく認められつつあった。

鈴木八幡町長と宮吉市原町長

3人はいずれも落選した。菅野政界入りの第1歩であった。

菅野の後任を決める町長選挙は菅野の推した鈴木貞一に対抗馬はなく無投票当選が決まった。鈴木は明治42年、八幡本町の屋号「陣屋」分家・鈴木盛一長男に誕生。本家は名字帯刀名主で、領主から陣屋地を拝領、陣屋名乗りを許された。

鈴木町政は3年間と短い。「八幡浦干拓事業」を完工させたが、昭和27年の衆議院選挙で、千葉第1区から出馬、落選した始関伊平派の選挙違反に連座、29年判決に先立って辞任した。出直し選挙は、元八幡町長の鈴木敬介が当選した。昭和25年、朝鮮の38度線上での

八幡町もまた、変換の時を迎えていた。昭和30年、八幡町と菊間村が合併して市原町が誕生、翌31年市原村の大部分が加わった。市原町発足にともなう町長選挙は立候補が宮吉長門一人で無投票当選となる。宮吉家は元飯香岡八幡宮の旧社家。明治39年、料亭旅館業を営み、八幡町長、初代漁組合長を務めた、宮吉長五郎長男に誕生。宮吉の町長時代、「京葉工業地帯造成にともなう漁業権の放棄」や「市原市誕生」のかじ取り役を担うことになる。



旧八幡町役場の現況



戦後の八幡町中心部



鈴木貞一



菅野儀作



市川得三

市原市制と市原支所

(八幡1123↓
1050)

まる7年かかった市原市制の誕生

昭和30年代に始まった「神武景気」「東京オリンピック」「大阪万博特需」をへて、田中角栄の「列島改造ブーム」、およそ20年間にわたった好景気を「高度成長期」という。この間、日本経済は年平均10%をこす経済成長をはたし、国民総生産GNPは世界第2位の「経済大国」へと上り詰めていた。エネルギーは石炭から石油に代わる。「京葉工業地帯」進出企業の多くは増設につぐ増設をくりかえし、製造ラインがフル稼働した。

京葉工業地帯完成に向けて急激に変貌する湊町。一方地元町村で

市原、五井地区での「漁業補償協定」が調印され、造成事業が軌道にのりつつあった昭和32年、千葉県の柴田等知事は市原町、五井町、姉崎町の町長、町議会議員を参集して、3町合併による市原市制を勧奨し、さらにその規模を三和町、市津町を加えた5町に広げた。これが町村合併と市原市制問題の発端となる。

知事まで乗出した、市制問題

だがすんなりとはまとまらない。

急浮上して、あつという間にまと

「総論賛成、各論反対」、まる7年

間にもおよぶ「町村合併論争」が

巻き起こった。それぞれの言い分は

①知事推奨の北部5町村合併

②南総、加茂を含めた大同合併

③千葉市長提案の100万都市構

想

④五井、姉崎町の先行合併

などであった。議論は主導権争いや思惑違いもあって難航した。昭和38年にいたり、世論の高まりの中、早期解決への気運が生まれる。民間の「市制促進協議会」(会長・鈴木貞一)が提案した

昭和38年5月1日、県下19番目の「市原市」が誕生。姉崎町長だった小泉茂を市長職務代行者として、五井小学校講堂で職員500人への辞令交付と「市原市制誕生祝賀会」を開催した。人口7万2788人、世帯数1万4382戸、面積185km²であった。こえて昭和42年10月、残る加茂村と南総町が市原市に合併、この結果、総面積362km²、総人口12万3232人となり、県内第一の広域都市となった。

「近い将来、全郡1市への「大同合併」をめざしつつ、ひとまず北部の市原、五井、姉崎、三和、市津、5町村が合併、早い機会に南総、加茂の南部2か村を迎え入れ

第1回の市長選挙と市議会議員選挙は昭和38年6月に行われ、元八幡町長の鈴木貞一が2万4000余票を獲得、対立候補の小宮久に9000票以上の大差をつけて



国分寺台に11階建て「新市庁舎」が誕生



昭和38年、市原市制誕生祝賀会



市原市制問題を伝える地元紙



2区市原地区は、定員8人に2倍の16人が立候補する激戦となったが、竹野嘉博、小林喜一、井原恒治らが当選した。鈴木は「広報いちばら」の創刊号で「市原市が世界的規模の臨海工業地帯の中心地として新しい工業都市のモデルケースとなるような都市作りをしてゆきたい」と決意を語った。

五井駅西口にあった五井町役場が市の本庁舎となった。古い木造建物で、その後、増設を繰返したので内部は迷路のように入組んでいた。

市は合併前の旧町ごとに支所を設置した。市原、姉崎など4支所が誕生、市原支所は、元の市原町役場があてられた。八幡様の浜本町側、「八幡町商工会」の看板を掲げるが、普段は使われていない。寄棟屋根スレート葺き。2階建て、

板壁、前と右横にガラス戸の庇を伸ばした。「市原市市原支所」の看板は付替えたが、庁舎は以前のまま、1階は前面に窓口カウンタ1が3、4か所、奥は仕切られて会計コーナーになっていた。窓口は女性が多かった。2階は待合いコーナーと会議室が2つ。町会との打合わせや行事の準備などに使用された。

昭和43年、市原市は人口16万人をこえ、工業生産高が2500億円へと拡大した。旧五井町役場を利用したプレハブの継足し庁舎は手狭で老朽化が激しく、複雑化する地方行政への対応は困難になっていた。市民サービスの向上という点からも一大行政センターの建設が緊急の課題となった。昭和46年、市は国分寺台地を選んで市原

市役所新庁舎建設工事を始めた。昭和47年9月、1年余の工事期間をへて地上10階塔屋2階の「白亜の殿堂」が完成、力づよい市原市の未来を象徴しているとして話題を呼んだ。

一方、従来からの宿場町の面影を残す八幡宿駅周辺の整備事業は、駅舎の移転改造、八幡小学校移転と駅前広場の整備、白金通りと飯香岡通り開設などであった。支所の新築工事は八幡公民館の第2期工事と同時に行われ、昭和60年起工、翌61年に竣工した。鉄筋コンクリート2階、八幡公民館体育室と結合した。1階は受付カウンタ1と事務室で、2階は会議室など。令和7年5月現在の支所管内は大字八幡、市原、菊間など3地区、戸数2万6067戸、人口5万386人であった。

支所前に「ふるさと創成事業」の歴史記念碑を建てた。昭和63年、竹下登内閣が全国の市町村に1億円ずつを交付し、地域振興を進めた。碑は市原地区が古くから上総の歴史文化の中心であったことを記した。

「市原地区付近には上総国府跡があり、古くから上総の文化の中心地であったことがうかがわれる。飯香岡八幡宮は本殿が国重要文化財、拝殿は県指定、中世よりのみこし、柳楯神事など、神域全体が歴史を物語っている。

また、かつての八幡港は五大力船による海運の要衝として栄えた。昭和は京葉工業地帯造成のなか、漁業権を放棄した。それまで、この地区の海岸は遠浅で、潮干狩り、のり養殖などにぎわいをみた。」と記した。



現在の八幡宿駅周辺



昭和末期のころの八幡町の中心街



市原支所外観



昭和61年、市原支所が竣工式

八幡海岸通

(八幡海岸通)

潮干狩り場から一大工業地帯へ

八幡さま正面、八幡運動公園のコンクリート岸壁はかつて海岸線であった。江戸時代、八幡海岸は「みこし幸行汐垢離（しおごり＝清め）場」として八幡宮の「除地」にされた。除地は幕府から朱印地以外で年貢を免除された土地をいった。

八幡宮「由緒本記」によれば
天正18年3月、豊臣秀吉の「小田原征伐」で先陣をつとめた徳川家康の家臣、青山藤藏（忠成Ⅱのち老中）にあて差出した書上げと添付絵図面が根拠になっている。

「天武天皇御祈願所、
征夷大將軍源朝臣義満公御寄進

一、八幡宮宝殿みこし4社
一、同神領、八幡郷のうち12町石、境内西表海通り西より北へ197間、南方妻通り55間

一、同境内、同東裏通り南より東へ222間、北の方妻通り76間
みこし幸行汐ごり所

一、同海面除地 当社前海面幅200間、戌の方沖、見通し櫓（かい）立て御除地おのおの1間6尺5寸間（尺）なり」

また、添付絵図面には、「海内戌の方見通しかい立て御除地、相違ござなく候、このたびお尋ねにつき絵図面をもって申上げ奉り候」との2通を差出し、同年5月、小

田原陣中において、御祈願所を仰付けられたといわれる。「海面200間、かい立て」は6尺5寸間尺（197cm）で200間（394m）、干潮の時、舟のかいが立つ深さは180cmほどか。海岸除地は20万坪にもおよんだとみられる。

干潟地のおよそ1km先に海中鳥居とコンコンと真水を湧出した海中井戸があった。八幡宮記録によれば、鳥居は当初足利義満が寄進し、その後、足利義明、千葉富胤が再建したが、明治維新以後は中絶していたという。昭和16年植草辰五郎を中心とした「八幡五所浦漁業協同組合員」が拠金して建立されたが、18年後の昭和35年2月、「京葉工業地帯」造成にともなう埋立て工事のため撤去された。部材断片が八幡宮などの関係先に保

存されている。

海中井戸は、至徳元年足利義満の代理者上杉朝宗が海面幸行汐ごり地と定めたといわれる。かつて秋季大祭でみこしの海中渡御「お浜おり」も行われた。

江戸時代は土堤で明治20年代にコンクリート堤防になった。かつて養老川の三角洲が作った「五井鼻」にかけて松林が続く「白砂青松」の地で、目の前に広がる海はあくまでも青く、遠く近く汽船や帆船、小型船が行き来した。遠く富士山が裾野を広げ、丹沢山塊が連なった。

八幡さまの岸壁から海へつき出すようにして「納涼台」と呼ばれた海の家が並んだ。運動公園のバックネットあたりに魚惣、左へしらとり、鶴岡、石井支店と並んだ。まんなかの無料脱衣所は漁業組合



戦後の八幡海岸



賑わった戦前の「八幡海岸」



嘉永2年海岸深さ図



の小屋で、「浦明け（海入り許可）を知らせる小旗を屋根に掲げた。

東京からバスを連ねた学童たちは連日数千人にも及んだ。昭和30年ころの納涼台利用料は30円、貝を取る熊手「マンガ」が15円、貝をいれるみやげ用の網が5円で、漁業組合に払う漁業権料が30円だった。納涼台は着がえ、シャワー、売店では軽食や飲物、菓子やすいかを販売した。

観光客の潮干狩り場は1kmほど先の海中島居と井戸のあたりだが、地元の採貝業者はその先の深場を漁場とした。海はあざりとほまぐりの宝庫で生業の場で、生活の場でもあった。

昭和31年、千葉県は「臨海工業地帯」建設を骨子とする「産業振興3か年計画」を策定、その事業規模は浦安から船橋、千葉、市原、

木更津、君津におよぶ内湾部400万坪を埋立てるという、膨大なもので、八幡地区が最初の交渉地となった。11月、県は「八幡五所漁業協同組合」に対し、八幡浦の埋立てを提示した。海を埋め立てるといふ県の方針に町の人たちはとまどった。年寄りたちは「先祖からの海をなくしてはいけな」と猛反発したが、若者たちの考えは違っていた。のりや貝に頼る将来への不安と雇用拡大による新しい町づくりにかけたのである。市原地区の埋立てを推進したのは前町長の菅野儀作県議であった。川鉄が操業を開始してまもない昭和29年、友納武人県知事から「旭硝子と昭和電工が進出を希望している」との打診があったので、早速漁協幹部との接触を開始、再選をめざした30年の県議選挙で「埋

立て、企業誘致」を呼びかけた。

県議選が終わると埋立て構想が具体化した。昭和32年10月、千葉県知事と八幡五所漁業協同組合の間で補償協定が調印された。埋立て面積390ha、補償額は12億5000万円、補償対象者は正組合員669人、準組合員124人であった。

補償費はのり養殖者が200万円、採貝者40万円、その後、近隣埋立地区とのバランスをとる関係で若干の積上げがあった。いくばくかの補償金を手にした組合員の家庭にクルマのセールスマンや銀行員が押掛け、一部の豪遊ぶりが「五井さま」の異名をとった。千葉の歓楽街でチップをばら撒いたり、株に手を出して大損した「にわか成金」もあったが、大部分は誠実に道を選んだ。当時大部分の

家庭が「半農半漁」、所有した農地が、開発ブームで値上がりして、地元民の生活が裕福になった。

埋立て工事はすぐに始まった。大型浚渫（しゅんせつ）船で掬いあげた海底の土砂が送泥管で造成地に運ばれ、天日で自然乾燥した。昭和34年12月、進出企業の第1陣として旭硝子千葉工場が操業開始、従業員702人、事業内容はソーダ灰、塩安、液炭であった。旧海岸除地では三井造船、古河電気工業、昭和電工、富士電機製造、東京電力、大日本インキ工業などが相次いで誕生した。

「八幡海岸通」が町名になった。昭和38年、市原市五所・八幡地先公有水面埋立て地に起立。昭和41年一部が白金町4丁目となる。面積4・6km²、令和初めの人口は45人であった。



現在の臨海工業地帯

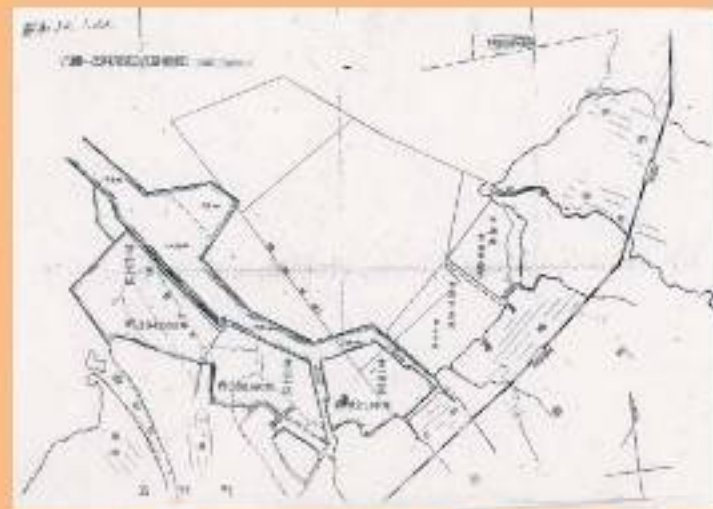


埋立て工事が進む八幡海岸通り

埋立て調印を伝える地元紙



漁業組合の会議に配布された埋立て計画図





海苔養殖でにぎわう八幡五所の人びと

時田 光夫

市原市立八幡公民館運営委員会副会長
八幡史学館講師

江戸に近い下総方面で生産されるものを「江戸前海苔」、上総方面で生産されるものを「上総海苔」と呼ばれた。昭和前期、八幡海岸の風物詩だった海苔干しを、「海苔養殖ものがたり」で振り返る。

波静かで遠浅、あさりやハマグリがとれた

江戸時代の八幡五所海岸は遠浅で波静かな干潟地ではあったが、漁獲はなく漁業は

成立しなかった。江戸時代の後期、五所村名主が領主に提出した「村艦明細帳」（村現況届け）には「農業の間稼ぎ（副業）に男女とも浜に出て、あさり、ハマグリをとり、男は野方へ持ち出して商い」と記している。ひたすら課税の口実とならないよう海浜の小寒村を強調している。海では自家消費程度のハゼやカレイなどの小魚がとれ食卓をにぎわした。

明治31年、宮吉長五郎を組

合長に「八幡五所漁業組合」が創立、五所海岸での水産講習所（現在海洋大学）カキ養殖を支援したが、成功前に神奈川県金沢湾に移った。

明治の末期から八幡五所で海苔養殖が始まる。江戸後期の文政3年（1820）、江戸前の「浅草海苔」を房総で作ろうと悲願に燃えた江戸商人の近江屋甚兵衛が江戸川河口の行徳・浦安に次いで養老川の五井村で養殖を持ちかけたが理解を得られず南へ南へ

と下った。小糸川河口の人見村でようやく許可が出る。初めて立てた竹ヒビに海苔が付着、成功を見た村人たちはこぞってこの技術の教えを乞い、次々と内湾沿岸に広がった。

市原では明治33年の青柳漁業組合が最初で大正時代に五井・姉崎・八幡・五所へと続いた。市原の海苔は生産高第

1位の千葉県の中でも特にツヤがあつておいしいと評判が良かった。

厳しい厳冬の海苔養殖作業、昭和33年最終期の八幡五所漁業組合は2389戸、多くは兼業海苔養殖関係者で、共有漁業権面積1647万坪、生産額は「海苔・魚介」1億数千万円であった。海苔養殖

に直結する棚場割は、毎年8月の抽選で決まった。一区画はイロハの番号と呼ばれ、長さ50m、幅2mほどの带状で真ん中に舟道が作られた。持ち場が決まると2mごとに太い竹柱を立て（写真①）、種

菌を付けた海苔網を括り付けた。海苔養殖は厳冬期、素手作業の厳しい仕事（写真②）



海苔胞子のサイクル

出典 海苔PRESS増刊号「海苔の基礎知識」



写真①



写真②



写真③



写真④



写真⑤

であったが一日一日が勝負、早朝シガ波の中、ベカ船を走らせた。しばらくすると海苔の胞子が伸びて網にぶら下がる。20cmほどで収穫、夜明けを待って大きな包丁で刻む(写真③)、次いでヨシで作った海苔簾を積み上げ、その上に木杵を乗せ、海水に浮かせた刻み海苔の桶から、弁当箱

状のマス一杯、熟練の早業で漉く(写真④)、最後の工程は乾燥、海岸や町中の空き地に並べた海苔干し台にメグシで取り付けた(写真⑤)。夕方仕上がった海苔(写真⑥)を点検、10枚1状に束ねて海苔屋さんを持ち込むと品質が評価されて、その場で現金が貰えた。

八幡運河がかつての海岸線、トライアル・ボートピア・県営住宅の再開発前は水田で海との境に土手(古堤)があったが、八幡運河の先は葦の生い茂る干潟地で満潮時は土手近くまで波が押し寄せた。夏の海は子供たちの天国、海で泳いだり、舟で競争したり大自然を満喫した。

海苔「潜水艦」で収穫

漁業権放棄による海岸埋め立ては、昭和33年千葉県が進めた「京葉工業地帯」造成計画に協力して漁業権を放棄、海が埋め立てられ旭硝子・大日本インキ・富士電機・昭和電工・古河電工・三井造船な

ど相次いで操業を開始した。機械化された近年の海苔養殖方法を見よう。木更津・富津・君津では、現在は竹ヒビを使わずに、海面の広い範囲に網を張り海苔採取船、通称「潜水艦」(写真⑦)を網の下部に潜らせ、海苔を刃で切り落として収穫する。「ベタ流し」という方法が採用されて

いる。「ベタ流し」は昭和60年ころからすでに実験的に行われていた。富津岬下州海岸においてである。尚、現在では海苔の種付け、裁断、乾燥、などの一連の作業も機械化されている(写真⑧)。一軒当たりの海苔の収穫枚数は、最盛期には1万5000枚から2万枚に上がっている。



写真⑥



写真⑦



写真⑧

信楽山宝樹院無量寺

(八幡29)

ご本尊は海中出御の阿弥陀如来

無量寺は浄土宗で、山号を信楽(しんぎよう)山、院号を宝樹院という。京都知恩院末山、千葉市中央区の大蔵寺末寺とする。

本堂前の歴史博物館「アイミュージアム」 「歴史遺産標柱YW02「無量寺」には「白鳳年間の創建といわれる浄土宗寺院で、前身は「宝樹坊」を称したとの伝承があります。本尊は地元漁民が海上で大波を受けた際、海中から出現し救ったとされる「阿弥陀如来」です。飯香岡八幡宮の前身市原八幡宮と密接な関係にあり、近世の町場の基礎を築いた千葉氏系原氏の影響下にあったとされます。境

内には千葉(馬加)康胤と子の墓とされる五輪塔があります」。

また、「当山由緒」は「当時、八幡の中心地は石塚で、魚漁を稼ぎとして、8張りの網屋よりその船24艘、漁師400人をかぞえたという。白鳳元年(7世紀後半)いつものように海で漁に励んでいたと難風がにわか吹出し大波が船を覆した。漁夫たちは逆巻く波に漂ったとき、この危急を救ったのが海中より出現した「阿弥陀如来像」であった。漁師たちは涙を流して喜び、石塚村に持帰り、宝樹坊に祭祀を託し、安置したのが無量寺の創めである」。

寛平2年(890)平高望が

父高見王のため堂宇を建立し、その後現在地に移転したこと、弘安(1278)のころ千葉宗胤が本尊仏を寄進したことが伝わる。現在地への移転時期は、「市原郡誌」が、「源頼朝公、神勅によりて当寺をこの地に移したまうが故に、元地をもって「古屋敷」と称し、いまに鎮守稲荷を存せり」とする。

一方、飯香岡社「由緒本記」は「当御神領、境内の内、竪55間3尺、横65間4尺。このところは、往古より当社神官衆葬祭の霊場地で、去る康正2年(1456)千葉介平康胤主従あまた討死にあり、よりて寺境内に分け遣わすすなわち信楽山宝樹坊無量寺と号す」とある。無量寺などに現存する小型五輪塔の作成年代15世紀第2四半期とも符合、この時代での、

八幡の町場形成を物語っている。

中世戦国期、両総国境に立地する市原北部地区は上総、安房勢と下総千葉氏を支援する小田原北条氏争奪地であったが、織豊期は戦国大名北条氏の勢力圏で生実(小弓)城と臼井城に拠った原胤栄(たねよし)が支配していた。

胤栄は熱心な浄土宗信者であったという。妻が薬も祈祷も効かない重病に陥ったとき道譽上人の説法と念仏によって快癒したことで帰依し、千葉の生実に招いて大蔵寺を建立した。原氏は浄土宗の上総進出拠点として無量寺と稱念寺を支援、またこのころ「八幡宮造営」の諸郷勧進や新市、「守護不入」印判状を発するなど、八幡の町並形成に貢献している。

天正18年(1590)「天下統一」をめざす豊臣秀吉は最後まで



本堂内部全景



白鳳年間創建と伝わる無量寺



無量寺正面



抵抗する北条氏を攻め、千葉氏と原氏も北条氏と運命をともにした。

江戸時代、幕府は「キリシタン対策」のため宗教統制をつよめ、寺院の本末組織を明確にした。寛永9年（1632）芝増上寺が幕府に提出した「浄土宗諸寺の帳」は「御朱印所 下総生実郷、東山知恩院末山、大巖寺。寺領100石。同末寺、上総八幡・稱念寺、無量寺、五井・理安寺、姉崎・最頂寺、椎津・端安寺」を記す。従来の本末関係は創建過程での法縁と地縁で構成されたが、中央集権的な寺社行政の一環として、宗派内の全寺院を本山（本寺）↓中本寺（地方本山）↓末寺↓孫末寺のピラミット型組織に改編、ここに大巖寺は中本寺で、無量寺や稱念寺は末寺であった。

本来、寺院をタテ関係に統制する仕組みであったが、末寺間のヨコ組織で作った下部組織によって支えられた。江戸後期天保年間（1830）大巖寺の「末寺組合」をみると、無量寺は八幡・稱念寺、生実・大覚寺と「近末3か寺」を形成、これら3か寺は本寺大巖寺との関係がもつとも深く、年頭登山、寒暑見舞いはもとより、本寺の諸仏事出仕が義務付けられた。時に檀林（宗派の養成機関、学問所）住職の代説をつとめるなど。地方本山の一翼を担ったことがわかる。

開創450年記念誌「大巖寺史話」の「末寺からのさまざまな願い出」の項に、文化10年（1813）の「本堂修復願い」がある。本堂の規模が「貧寺不相応」であり縮小、改修したいとしている。

江戸時代は「寺請け制」で、現

合計 32戸116人。

在の戸籍にあたる「人別」を寺が管理した。当山では弘化3年（1846）の飯香岡八幡宮領「宗門

無量寺檀家は八幡宮関係者が多く
社人 杉本刑部45歳 家族6人

846）の飯香岡八幡宮領「宗門御改め帳」を所蔵、「神社仏閣同

市川山城38歳 6人
山下左近36歳 4人
宮内後家31歳 1人

宿、沙弥（しゃみ）仏門に入り剃髪した男子）ならびに道心者（帰依者）、行人、浪人、虚無僧、山祭移行期に、満徳寺檀家であった

がみえる。明治維新後の神職神葬
宮司市川信明、社家市川三太夫以下が当山神葬祭に改宗している。

幡村の全5か寺が連印している。八幡村のおよそ8%にあたる15

慶応4年（明治元年1868）
徳川幕府が崩壊、明治4年「宗門人別改め制」が廃止され、封建制

0石を社領とした八幡宮がその人別を幕府に提出したもので、宗派寺院別内訳は、

下の寺檀関係は解消されたが、寺と家を結ぶ檀家制は引継がれた。5年教部省、10年内務省社寺局と変わり、県の管理下に置かれた。

無量寺（浄土宗）9戸、人数34人
稱念寺（〃）4戸、15人
満徳寺（真言宗）12戸、52人
円頓寺（日蓮宗）6戸、14人
妙長寺（〃）1戸、3人

千葉県文書館に県の「寺院明細帳（台帳）」がマイクロフィルムで保存されている。明治12年8月「乙第123号に基づく寺院明細



寛永9年、「浄土宗諸寺の帳」



明治2年、「大巖寺絵図」



ご本尊の「阿弥陀如来像（市調査報告書）」



ご本尊をまつる須弥壇

帳」とあり、市原は「上総国市原郡1、2」に収載されている。

無量寺を開くと「千葉県管下、上総国市原郡八幡宿字南新田。浄土宗大巖寺末。本尊〓阿弥陀如来。由緒〓そもそも当寺本尊阿弥陀如来は御長2尺4寸にして、いずれの御作なることを知らず、当浦海中より出現の尊像なり。本堂〓間口6間×3尺奥行き5間3尺（大正6年暴風雨倒壊）、間口5間×奥行き4間（昭和15年再建）、庫裏〓間口5間×奥行き4間。境内〓561坪、檀徒人員〓350人」などである。

無量寺の本尊は白鳳元年、八幡の海から出現した「阿弥陀如来像」で、近時は延慶（1308）12のころ千葉家14代千葉介平胤宗が千葉県内に7体奉建した阿弥陀仏の仏像の内の1体（房総叢書）とされる。

「市原市内仏像彫刻所在調査報告書」によれば、本尊の阿弥陀如来は座像3軀、中尊68cm、観音43cm、勢至43cm、木造、玉眼、金泥漆箔、制作年代を室町時代とする。像背面の朱漆銘に「上総国市原郡八幡村、信楽山無量寺、御前立本尊、当山26代文久3年6月仏師性誉天祐修復の仕口、ただし3体なり」とあり、ほかに閻魔（えんま）十王像、奪衣婆（だついはばあ）像、善導大師立像、法然大師立像などがある。いずれも江戸時代の作で、木造、玉眼、彩色仕上げされている。無量寺の年中行事は、1月1日修正会、3月5日御開帳、4月8日花まつり（現在中断中）、8月7日おえんま様、8月16日施餓鬼（せがき）会、11月16日御十夜会といっ

た江戸時代からの伝統行事がある。

「御開帳」は本尊が白鳳元年、海中から出現したことになむ。普段は秘仏である阿弥陀三尊像の厨子のとばりが開かれて住職の読経の中、信者らがお参りする。またこの日巨大な「涅槃（ねはん）図」が公開される。ねはんは釈迦が沙羅（常緑高木）双樹の下で入寂したときの様子を描く。元は2月15日の「ねはん会」に使われたという。明治15年、修復軸装にあたり開眼供養した大巖寺53世浄誉上人が「往古より無量寺歴代住職が護持した」ことを裏書きしている。

「花まつり」は釈迦の誕生日を祝う法会、水盤に釈迦の像を安置して小杓子（しゃくし）で甘茶をそそぐ。「おえんま様」は所蔵するえんま十王像や奪衣婆はあ像、地獄変相図などを公開する。こど

もたちが怖いものみたさに集まり、戦時中までは10軒ほどの夜店も立った。「お十夜」は過去1年間に亡くなった人を旧暦10月6日から10日昼夜にわたって供養する浄土宗の特別法要で、いずれも長い伝統を伝えたが、花まつりなどは参加者の減少や令和のコロナ禍などで現在は中断している。

不動明王など石の美術品が揃う

無量寺の石造物は正面入り口、本堂前、墓地に分散している。山門、「信楽山宝樹院無量寺」と楷書した総高3mの巨碑、白鳳元年宝樹坊として創建以来法灯を引継いだ当山の歴史を物語る。

山門横に「馬頭観音碑」がある。馬の守護神で、供養塔として発達した。中央に馬顔線画と馬頭観世



平成後期のころの「おえんま様」



弘化3年「飯香岡八幡宮領人別帳」

千葉県寺院明細帳

天保年間「大巖寺末寺組合」構成図



音菩薩、「八幡町馬車組合、昭和「日本廻国供養のためなり」、延享48年再建、田山正二」を刻む。

無縁の古碑を集石した「無縁塔」は昭和10年建立、頂上に「六道能化」、六道の衆生を導く地蔵菩薩のことで、どの顔立ちもやさしくおだやか、見比べて石の芸術品であることに気づく。近年、石仏たちが姿を消す中に、多くの無縁石仏たちが保存されていることは意義あることといえよう。

駐車場もかねる本堂前広場。経塔は正面に「南無阿弥陀仏」、左輪観音を刻む。衆生一切の願望をに「無縁法界塔」。すべての霊に満たし苦難を救うとされる。供養を施すとする。嘉永7年（1854）の建立で、「惣檀那中、世話人森田屋源治郎、角屋治兵衛、石工安藤佐平治」を刻む。

「廻国塔」は「大乘妙典」と呼ばれる経典を全国の霊場に納める。高さ70cmの「舟形地蔵尊」に

「聖観音菩薩像」は、「南無阿弥陀仏、右女念仏衆人数21人余のた

元年（1744）、建立者の南新田・円求は「六十六部」といわれた行者で、白衣を着て厨子を背負って家々を合力した。

「坂東33観音霊場」は西国におもむいた鎌倉武士たちが西国33か所観音霊場の信仰に触れ、東国での霊場開創を求めたことがおこりで、国や郡などの霊場移しが流行した。33か所を巡った南町と片町

32人が満願寺を移した。碑は如意輪観音を刻む。衆生一切の願望をに満たし苦難を救うとされる。剣をかざした「不動明王」像は江戸中期元禄7年（1694）、父家は八幡宮の祝子（はふりこ舞職）、母家は奉行（欄宜）家。舟型1m34で、細工がすばらしい。

「聖観音菩薩像」は、「南無阿弥陀仏、右女念仏衆人数21人余のた

めなり、寛文5年（1664）、施わってきたこと、毎年、念仏講の主、上総国八幡村南新田」とある。

「女念仏」は女性が集まって念仏を唱え、励まし合う、情報交換の会。寛文は4代將軍家綱代と古い。

関連して墓地入口に「子安観音堂」がある。女念仏講から子安講へと変遷か。堂内には江戸後期の子安講碑が鎮座、「南新田、女講基と小型五輪塔をまとめた「伝千中、寛政11年（1799）」を刻葉宗家一族の墓」がある。かたわ

ら「大正4年墓誌」は「享徳3姫（このはなさくやひめ）」を祭年千葉胤直ほか戦死、康正2年馬神とする。子安像や掛け軸を飾り、お経をあげて食事やお茶を楽しみながら出産や育児について語りあった。主婦の憩いの場であったが、近年では実施されていない。

本堂向かって右手に「海難供養碑」がある。かつて、はま道に置かれたが、昭和58年、開発工事で移築、「由来碑」は古来海とかか物語っている。

「三万霊位、大正10年、丸清七」ほか28人、「海難供養塔、供養日8月24日」を刻んでいる。

墓地入り口近くに中型五輪塔3基と小型五輪塔をまとめた「伝千中、寛政11年（1799）」を刻葉宗家一族の墓」がある。かたわら「大正4年墓誌」は「享徳3姫（このはなさくやひめ）」を祭年千葉胤直ほか戦死、康正2年馬神とする。子安像や掛け軸を飾り、お経をあげて食事やお茶を楽しみながら出産や育児について語りあった。主婦の憩いの場であったが、近年では実施されていない。

「八幡御墓堂遺跡」からは多量の陶磁器が出土した。これらは、15世紀第2四半期から16世紀初めの塔墓特徴を示しており、八幡がこのころ都市的發展をとげたことを物語っている。

「三万霊位、大正10年、丸清七」ほか28人、「海難供養塔、供養日8月24日」を刻んでいる。



海で亡くなった人の「海難供養塔由来碑」拓本



海難供養塔



不動明王



伝千葉氏一族の墓



千葉氏の墓拓本

龍燈山光明院稱念寺

(八幡1436)

生実大巖寺「念仏道場」として創設

稱念寺は浄土宗寺院で、龍燈山光明院稱念寺と号す。寺伝は「安土桃山時代の天正3年(1575)4月、千葉生実の大巖寺第2世であった安譽(あんど)上人虎角(こかく)大和尚が荒廃寺に「念仏道場」を創建」とし、「浄土宗全書」はその弟子、西譽虎童(こどう)開山としている。「念仏」は仏の号(みょうごう)を唱えることで、浄土宗では阿弥陀如来の「南無阿弥陀仏(なむあみだぶつ)」をいう。信仰を深め、年逝去。60歳であった。「極楽浄土」への往生を願うとされる。

本寺・大巖寺開山の道譽(どう

よ)貞把(ていは)は、永正12年

(1515)、和泉国(現在の大坂

府)に誕生、関東に出て増上寺や

飯沼弘経(ぐきょう)寺、成田山に

学んだ。天文15年(1546)諸国

行脚の途中、生実に滞在して説法

を行った時、生実(小弓)城主・原

胤栄(たねよし)妻の病状を回復

(こどう)開山としている。「念

20年、胤栄夫妻を開基、道譽を開

山上人に大巖寺を創建、天正江戸

大本山・増上寺9世をへた天正元

大巖寺2世は安譽虎角といった。

天文8年(1539)生まれ、父

は武田家の旧臣で、没落後上総

(市原郡か)中島村に移る。13歳

の時、出家を志し、道譽の1番弟

子となり、師に従った増上寺で宗

乗(奥義)を極めた。天正2年大

巖寺を継ぐと、胤栄は改めて寺領

70貫の「安堵(あんど)状」を発

給、のち徳川家康がこれに倣って

100石を安堵した。

原氏は桓武平氏庶流「千葉六

党」のひとつで、足利義明以降の

生実城と市原北部を領有した。小

田原北条氏の分国、「上総国国衆

としての、その権勢は時に千葉氏を

しのいだ。

胤栄の目は上総経営にも向けら

れた。「戦国動乱」の時代に凋落

した「市原八幡宮」の後身「八幡

郷(飯香岡)八幡宮」の修築に尽

力、天正4年「諸郷勧進(募金)

免許状」、9年「新市(参道街起

立)免状、諸役(税)免除、守護

不入(守護使など立入禁止)」を

発した。稱念寺の創立がちょうど

この時期にあたる。浄土宗の熱心

な信者で、大巖寺開山者でもある

胤栄が念仏寺の創建にも関わった

可能性が高い。

天正18年、2世安譽の時、豊臣

秀吉の「小田原征伐」があった。天

下統一をめざす秀吉が最後まで抵

抗する北条氏を攻めた。全国の諸

大名を動員した21万の大軍が小田

原城を包囲。その前年に胤栄を亡

くした原氏は嫡男胤道が主力軍勢

を率いて小田原城に籠城していた。

安譽は胤道に出城を呼掛け、一

要請している。ここに安譽の大巖

寺を守る動きがみてとれる。7月

10日北条氏直、氏照は城を出て切

腹。小田原城は開城、籠城した原

氏ら上総国衆はすべて除封された。



多数の小型五輪塔が
現存



稱念寺全景



山門と
祐天上人書の経塔



大巖寺念仏寺として創設した
稱念寺



一方、「浄土宗全書」は、
 (上) 総国千葉(市原)郡八幡
 龍燈山 稱念寺。寺中1宇、開
 山・真蓮社西譽虎童潮心和尚。安
 譽上人弟子、下総結城の人。〔潮
 心(和尚)〕真蓮社西譽、虎童を
 号す。虎角に投じて剃戒(ていか
 い)僧侶になる儀式)を受け、業
 を(飯沼弘経寺)存把(上人)に
 嗣ぎ、総州八幡稱念寺を開山す」
 「稱念寺住職墓誌」は、「開基」隠
 蓮社安譽上人雲湖虎角大和尚、文
 祿2年2月4日没、飯田虎角、55
 歳。第2世 真蓮社西譽上人潮心
 虎童和尚」としている。
 布施英俊住職によれば、「稱念
 寺の実際の創始者は虎角の弟子虎
 童上人、本来第1世の「創建開
 山」と称すべき方で、虎角上人は
 「勧請(かんじょう)開山」にあ
 たります。虎童上人が尊敬の念か

「や師匠を開山に立てた、と考えら
 れます」。本寺・大巖寺には虎角
 上人代の家康判物と、側室の阿茶
 局寄進の「家康肖像画」を所蔵す
 書はないという。
 江戸初め寛永9年(1632)
 江戸・増上寺が幕府寺社奉行に提
 出した「浄土宗諸寺の帳」には、
 「下総生実郷 東山知恩院末山
 大巖寺 寺領100石

同末寺
 上総八幡 稱念寺
 同所 無量寺
 同五井 理安寺(現在守永寺)
 上総姉崎 最頂寺
 同 椎津 端安寺」ほかを記す。
 江戸時代、大巖寺は浄土宗の学
 問所「18檀林」の一つとして、多
 くの有力僧侶を輩出した。ここで
 の稱念寺は大巖寺の1末寺だが、

無量寺とともに「近末3か寺」と
 され、檀林住職の「代説」を勤め
 た。稱念寺と無量寺は「地方本
 山・大巖寺」を補佐すべき立場に
 も置かれていたのである。

稱念寺境内に多量の玉石と小型
 五輪塔、宝きょう印塔が現存する。
 通称「伊豆石」と呼ばれる花崗岩
 だが、石なし県の房総半島には本
 来存在しない。伊豆半島か埼玉方
 面から運搬されたものであるう。
 五輪塔は総高30cmほどのもの50基、
 総数200個が現存する。関東戦
 国時代の15世紀第2四半期から16
 世紀初頭、およそ100年間の墓
 石塔の特徴を示すが、すべて無銘。
 前身、荒廃寺時代の有力檀家墓碑
 と考えられる。

大巖寺に元治元年(1864)
 の「普請申請書」が保管されてい

る。稱念寺は本堂、庫裏(くり)
 が追々大破におよび、今般、修復
 を願い出、許可された。ついでに
 住職念孝は金15両を差出し、そ
 の余は檀家一同へ勸財取集めた
 い。再建された本堂は間口7間3
 尺、奥行き6間4尺であった。
 明治15年、稱念寺は無住で、檀
 家総代、本寺大巖寺、八幡宿戸長
 が連名で、千葉市原郡役所にて
 「本堂縮造願い」を提出した。近來
 破損が激しく風雨で転倒の恐れが
 あるので取壊し、その木材で縮造
 したい。「書面の願い出趣、聞届け
 候こと」と郡長の許可印がある。
 この本堂は明治28年3月の八幡
 浜本町大火で、庫裏、薬師堂とと
 もに焼失、再建工事は明治32年5
 月に着工、7月に竣工した。当山
 では伺い書、設計書、収支決算書
 などを一括保管している。古市場



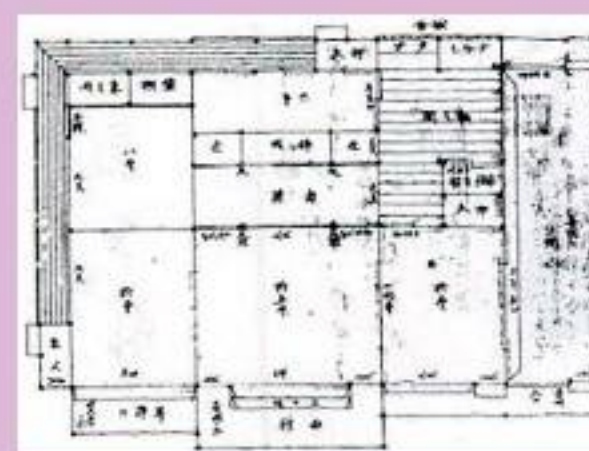
毎年8月10日の「ご開帳」



聖観音像



本堂内部全景



明治32年の再建図



明治初めの境内略図

村の古民家・杉田すみ邸を解体移築、田の字型間取りを利用、中央に内陣と仏壇を置いた。間口9間奥行き5間。総工費は1824円であった。

戦後の昭和27年、老朽化のため再建。今回は平蔵村の渡辺家住居を譲り受けて移築、一時中断したため10年後に竣工、昭和49年に内陣を拡張した。

境内中央の「山門、鐘楼、再建記念碑」によれば、「当寺は大蔵寺第2世安譽虎角上人の草創になる浄土宗の名刹として、本堂、観音堂、地藏堂その他諸堂宇を構え、口称（くしょう）念仏の法灯を継いでいたが、明治年代に度重なる火災に見舞われた。その間唯一残った鐘楼も倒壊の危にさらされたので解体保存中、ほかの金属類とともに供出された」。鐘楼と山門

の再建は昭和57年、八幡町発展の功労者・菅野儀作の一周忌菩提のため長男・昇氏から寄進された。

本尊は「阿弥陀如来像」で明治、昭和期、2度の修復をへて、現在も本堂内陣中央にさんぜんと輝いている。柔らかな顔だちには「念仏を行うものは必ず救い取り、西方浄土に往生することができ」との「阿弥陀本願」が込められている。衲衣（のうえ）僧衣）をまとった、弥陀流定印を結んでいる。脇侍（わきじ）中尊の補佐役）は向かって右に観音菩薩像、左は勢至菩薩像、秘仏の「聖観音像」は、普段は厨子に納められ、毎年8月10日にご開帳、一般公開される。今般、修復にあたり発見された「聖観音像」の体内文書「略縁起」は、「当尊像は、往古、当村の町中に鎮座す。町内守護の菩薩なり。

日々の参詣は市のごとし、これゆえその所を観音町と号す。しかるに元和4年（1618）類焼はげしく、尊体自ら龍燈山の境内に飛来したまう」。寺内に観音堂を起立し、「観音町」の町名由来となった。

伝来文書の多くは明治時代の火災で焼失したが、明和6年（1769）以降の「過去帳」などが伝来している。徳永惣右衛門孫が書出しで、観音町萬屋庄兵衛、漁師場嘉八、南紀伊国屋善八娘、観音町足袋屋久平、出戸油屋吉右衛門などが記されている。

明治2年、沼津から転封した水野藩士では「3月11日、水野出羽守内兵隊、生国三州（愛知県）西堺村、小野田定四良36歳、水野羽後守内天野紋治郎41歳以下」が記録されている。

平成22年、本堂裏2階から江戸後期を含めた100点あまりの古文書が発見された。安政6年「寺送り一札」は五所明照院からの人別通知書。「拙寺檀中清蔵せがれ清吉儀、このたび御檀中作右衛門方に縁付き申し候につき人別相除き候あいだ貴寺宗門人別帳にお加え下されべく」、ほかに安政元年、万延元年の境内土堤地開発工事、明治7年の墓地所有権係争などがあった。

稱念寺はまた、安政6年（1859）旗本1200石兩番格、村上三十郎組178石の「宗門改め（人別）帳」のコピー文書を保管している。すでに原本は散逸しており貴重な郷土史料といえる。浄土宗、日蓮宗、真言宗の各宗派別に作成した3冊を合本したもので、寺別内訳は、稱念寺（浄土



昭和初めころの「稱念寺絵図」



安政6年「寺送り一札」



文久元年「宗門改帳」の稱念寺の印



妙長寺「霊簿」に記された稱念寺創建

宗) 22戸・101人、無量寺(浄土宗) 1戸・7人、圓頓寺(日蓮宗) 19戸・70人、妙長寺(日蓮宗) 4戸・20人、満徳寺(真言宗) 2戸・3人、合計48戸・201人。

この人別帳には、高持ちと借地百姓の別が記されている。稱念寺檀家は、名主 好次郎 22歳・家族4人、年寄(名主格) 嘉平治 56歳・8人以下 22戸。百姓の内訳は高持ち本百姓7、借地百姓11、村上領高178石の全百姓あたり生産高は3・7石。税率はおおむね「4公6民」だが、借地百姓は別に小作料も取られた。あまりの生活苦から「水飲み百姓」ともいった。天保期以降、急激な貨幣経済の進展の結果、困窮百姓は土地を質入れ、資産が有力百姓に集中したことで、格差社会が進んだ。

八幡は江戸時代を通じて年貢米

積み出し港として発展した。「五大力船唄」にも「赤い夕焼け上総の空に 鐘が聞こゆる稱念寺」と唄われた。

慶応4年(明治元年) 1868)、水野忠敬(ただのり) 菊間藩5万石が成立、八幡宿の旅籠や寺院を仮陣屋とした。「菊間藩士岡田程八日記」 「海土有木村年番名主諸用向き」などによれば、先乗りした先々代藩主忠寛(ただひろ)が稱念寺に宿陣した。13代將軍家定の側用人を勤めたが失脚。養子・忠誠も第2次長州征伐陣中で病死、慶応2年に忠敬を養子に迎えたばかりで、忠寛が仕切っていた。明治7年7月、新学制制定にあたり同年4月円頓寺で産ぶ声を上げた八幡小学校の2代目校舎となり、9年神道中教院に移った。檀家で、著名な日本画家・山口

達の遺作を多数所蔵している。福岡県生まれ、東京芸大卒業後、市原中学校(現市原高校)教員、千葉大学教授を勤めた。八幡の菊間出途に居住、天井絵、ふすま絵などを収蔵している。

稱念寺の石造物は山門前、境内左右、墓地にある。正面参道の碑は「浄土宗龍燈山、大巖寺2世虎角上人創設念仏道場、光明院稱念寺」を刻む。山門の「経塔」は本山・増上寺祐天上人の書で丸みのある独特の六字名号を刻む。

山門をくぐった左手お堂内に地藏菩薩像。1m53の立像は左右に宝珠(ほうじゅ)、錫杖(しゃくじょう)を握り、柔和な顔立ちであの世りのない子の親かわりとして、社会に送り出した。昭和2年袖ヶ浦保育園を併設したが、戦後の昭和26年閉園、園児の墓、園母の墓、坂巻家の墓がある。

隣接して古い石仏が並ぶ。「聖

観世音菩薩」は、元禄5年、はもと、よこ町、中町、ご処、倉町念仏講、「阿弥陀如来像」は浜本町講中33人、講外5人、女講中26人、「1石六地藏」は、6面それぞれにお地藏様。元禄6年で、童子、童女33柱が読める。

墓地は本堂の左右、昭和60年の「墓碑整理記念碑」と「無縁諸精霊塔」がある。菊間藩士戸塚定昌、昌言父子の「行状碑」は、経歴や業績を漢文で記している。

「同情園」は観音町にあった坂巻家創設の私立孤児園。浅草の施会に送り出した。昭和2年袖ヶ浦保育園を併設したが、戦後の昭和26年閉園、園児の墓、園母の墓、坂巻家の墓がある。



聖観世音菩薩などが並ぶ



1石六地藏の拓本

地藏菩薩像



戦前の古絵はがき



阿弥陀如来迎図

郷土の著名画家・山口達之作品



地福山満徳寺、 靈堂

（八幡1086、
556）

霊応寺と八幡宮別当寺を兼帯

みはかどう

満徳寺は明治維新の「廃仏毀釈」で廃寺となった霊応寺の塔頭（たちゅう）大寺内の寺）首座で、霊応寺とともに飯香岡八幡宮の「別当寺」を勤めた。創建は不詳だが、寺名の初見は江戸時代初め、袖ヶ浦市、新義真言宗智山派、光福寺文書の元和4年（1618）「萱野善雄寺、違背について

江戸入りにともなう150石社領安堵に始まる。同社由緒によれば、当初別当職は円蔵（天正）坊と寂光坊、円乗坊、本覚坊が共同し、のち年番交代とした。覚源の墓は境外墓地に現存するが、4坊との関係は未詳である。

17年（1612）「関東八州真言宗連判留め書帳」に満徳寺はなく、寛永10年（1633）の「関東真言宗新義本末寺帳」は「一、八幡村満徳寺 本寺三寶院末寺 八幡村東学院、同所光徳院、同所安養院、同所親王院、同所円寿院、同所法蔵院、同所円通寺、同所法福院

は、天正18年（1590）の家康

これより早い醍醐寺文書、慶長17年（1612）「関東八州真言宗連判留め書帳」に満徳寺はなく、寛永10年（1633）の「関東真言宗新義本末寺帳」は「一、八幡村満徳寺 本寺三寶院末寺 八幡村東学院、同所光徳院、同所安養院、同所親王院、同所円寿院、同所法蔵院、同所円通寺、同所法福院

一、八幡村若宮寺 本寺三寶院百姓87名、この内69名門徒支配なり」としている。

若宮寺は霊応寺のこと。若宮八幡神社の別当職を兼務して若宮寺を号した。一方、満徳寺は名簿首座に記し、霊応寺とともに飯香岡八幡宮別当寺、末寺8か寺をもって、檀家の多くを支配している。

当山境外墓所「御墓堂」の「歴代住職の墓」は、①覚源上人（前出）寛永11年没）、②頼貞上人（寛永13年）、③貞宥上人（寛永13年）、④頼覚上人（承応3年）、⑤貞雄上人（延宝2年）、⑥貞雄上人（元禄14年）など。権大僧都（ごんだいそうず）や伝灯大阿闍梨（でんとうだいあかり）を刻んだ中型の宝篋（ほうきょう）印塔や五輪塔が並ぶ。霊応寺、満徳寺住職が混在している。

天和3年（1683）には、円蔵坊（霊応寺）が無住となり、満徳寺が社務を代役、元禄4年（1691）満徳寺貞雄が、若宮八幡宮別当職を兼任して、若宮寺を号した。

当山と五所・ジョイフル本田周辺のは、室町後期の「八幡公方（御所）」足利義明の御座所とされる。当地伝承によれば、古河公方

517）原氏の守る小弓城を攻略「小弓御所」と改め、権勢を振ったが、天文7年（1538）高基の子晴氏と同盟関係にあった小田原北条氏との「国府台の戦い」に敗死した。



平成中ごろの航空写真



満徳寺境内



山門ごしにみた満徳寺



近年義明の研究成果で、両総入りが武田氏の小弓城攻略後の永正15年であることが判明、しかし小弓に移座したとみられる永正17、18年までの期間、当地伝承の五所御所説が最有力候補地であることに間違いはない。

地名伝承に詳しい「角川日本地名大事典」は「(五所の)地名は戦国期に足利義明の御所が置かれたことにちなむ」、また、天保9年「五所村差出明細帳」は「古城跡除地、足利居城の由、申し伝えにござ候」とあり、少なくとも除地として公認された土地が存在したことがわかる。

八幡宮文書に「満徳寺境内図」がある。「房総往環」旧道か30間ほどの引込み道を作り、東西30間、南北30間のほぼ方形で敷地面

崎はおよそ900坪。周囲に土塁を巡らせ池が2つ、まんなかやや奥まった地に本堂、庫裏を配している。現在のJA(旧農協)までが元境内地。山門は寄せ棟屋根四脚門、表門脇には「禁制」「行人塚」が記されている。禁制は下馬や鳥魚の殺生禁止などを記した札で、行人塚は三山塚のこと、満徳寺を中心に「出羽三山信仰」が盛んであったことを示している。山門前から右側に通じる小路は「不浄道」であった。

満徳寺の江戸時代は霊応寺とともに飯香岡社の別当寺として、毎年春秋の祭事や月並み式日などの神事や武運長久、国家安穩、五穀成就、郷中安全の護摩祈祷などにあつた。「別当は神前において一拝し、衆徒一同は経堂において経文読誦(どくじゅ)、神事法式

怠惰(たいだ)なく勤行仕り候」と飯香岡社の「当社務式法記録」が伝えている。

檀家は飯香岡八幡宮関係者が多く、弘化2年(1845)「八幡を記載し、卷末に「不審なるもの(キリシタン)一人もござなく候」と、真言宗満徳寺、浄土宗無量寺、祥念寺、日蓮宗円頓寺、妙長寺の順番に署名、押印している。

満徳寺の本尊は「大日如来」で本堂正面に祀られている。如来は修行を究めさとりを開いた仏、世の中のすべての現象が大日如来の徳を開現したものだという。そのほか阿弥陀如来像、誕生釈迦仏像、子安観音像、弘法大師像などが祀られている。

明治初め、霊応寺は新政府による「神仏分離令」と「別当寺の廃止」で、「廃仏毀釈」の嵐の中破壊されたが、満徳寺はこの試練を

岩本大隅守組
八幡宮承仕・宗兵衛 32歳 6人
八幡宮承仕・長吉 33歳 4人

八幡宮承仕・吉兵衛 62歳 7人
八幡宮承仕・市三郎 78歳 6人
百姓・卯之助 29歳 5人

ほか2軒6人

八幡宮承仕・市三郎 78歳 6人
百姓・卯之助 29歳 5人

百姓・伊之助 33歳 3人
百姓代・松次郎 69歳 2人
百姓代・松次郎 69歳 2人
百姓・伊勢松 30歳 2人
ほか13軒51人

岩本大隅守組
八幡宮承仕・宗兵衛 32歳 6人
八幡宮承仕・長吉 33歳 4人



江戸時代の「満徳寺境内図」



江戸後期の満徳寺お札



ご本尊の「大日如来像」



本堂の須弥壇と天蓋



所蔵する「釈迦ねはん図」

檀家の支援で乗切った。明治以降の火災と水禍で「過去帳」を含めたすべての文書類を消失。明治15年の「千葉県寺院明細帳」は、新義真言宗豊山派、醍醐寺末、本尊大日如来、本堂間口6間奥行3間、境内303坪、住職新藤盛瞬、檀家人数225人。昭和3年、間口5間奥行2間半、四脚門9尺、横6尺を再建、住職は広瀬秀運、富田道教、大島賢昭と変遷している。

平成12年「八幡宿駅東口土地区画整理事業」にともない駅裏にあった境外墓地「御墓堂（みはかどう）」を現在地に移転。元は霊応寺の住職墓地といわれ、江戸時代の八幡村絵図に「ミハカ堂」がみえる。移転時の発掘調査で耕地、区画、排水溝群などを発見、多量の陶磁器は15世紀第2四半期から

16世紀初めのもので、当地が戦国期の村落として繁栄していたことをうかがわせる。

平成17年、老朽化した本堂を再建、解体工事で、昭和4年改築工事棟札が発見された。令和現在の檀家数は130、千葉市緑区富田町長徳寺の山口隆英住職が兼任している。

関東公方復活にかけた足利義明

満徳寺境内に多くの石造物が現存している。本堂前のお堂に鎮座する不動明王立像は、総高1m83、かつて義明の供養塔とされたが、銘文は「法印有清上人、御菩提のためなり、寛文6年（1666）」後世住職の冥福を祈願している。「不動明王」は一切の悪魔を降伏（ごうぶく）するため大日

如来が憤怒の相をしている。両牙を咬み、右手に降魔の剣を持ち、火炎の中央に座す。石質もよく細工も優れる。

霊応寺（若宮寺）は68番であった。総高2m04の角柱、右面に建立の天明4年（1784）、裏面は住職名を刻している。

不動明王堂のかたわらに遍照金剛碑と六地藏、道標が並ぶ。「遍照金剛」は光明があまねく照らし、不壊（ふえ）であることをあらわすという。左面に「移す讃岐崇徳（すとく）天皇寺、七十九番」を刻む。移しは現物になぞらえて作ること。「新四国八十八か所」の札所である崇徳天皇寺（現香川県高松市）は第75代崇徳天皇の没寺。「保元の乱」に敗れて流された。天皇さえもさすらいである。

「六地藏」は総高1m53、石幢（しょう）という、「地藏菩薩」は釈尊（聖者）の付託を受け、死後の世界にさまよう衆生を化導（善に導く）する。像は僧形、基本は左手に宝珠（災難を払う球）、右手に錫杖（しゃくじょう）厄災を払う杖を持つ。六地藏は六道の苦しみを救う6種の地藏のこと。普通は6体の地藏を並べるが石幢型は6角形の柱に6体を刻む。それぞれのやさしい表情が伝わる。正面に「奉造立供養六地藏尊像、願主御墓堂浄観、延享3年（1746）、浜本町観音講中人、同志念仏講中」などが読める。

札所は巡拝の印として納める寺をいい、四国まで行けない庶民のために作った「市原郡八十八か所札所」。ちなみに1番は釈蔵院で、

椎津「靈光寺」は、平安後期寛治



戦前の満徳寺本堂



弘化4年「旗本岩本組人別帳」



寛永10年「真言宗新義本末帳」



千葉県寺院明細帳

年間創建といわれ、「市原のご不動様」として親しまれた。明治36年に姉崎にかけて作られた道標の一つで、始め旧道バス通りに築かれたが道路工事で境内に移された。

本堂右の「御墓堂句碑」は総高1m21の自然平石、昭和7年の「足利義明450年祭」の入選句という。「松風のこぼれて涼し 御墓堂」駅裏にひっそり佇んだ義明の墓を偲んでいる。

境内奥まった無縁塔のまん中に、相倫、笠、塔身、蓮華座、基段、総高2m72の「宝きょう印角柱宝塔」がある。かつて境内中心部に置かれ葬列が3周した。塔身に「一切如来心秘密全身舍利宝篋印陀羅尼經、享保11年、願主権大僧都法印永運、現住宥珍」を刻む。周囲を囲む石仏の多くは地藏と如意輪観音で、童子、童女名が多い。不幸にし

て人生をまっとうできなかった家族を思う親兄弟の悲しみが伝わる。

満徳寺境外墓地「御墓堂」はJR線を挟んだ東口200m、「伝足利義明夫妻の五輪塔」が正面にある。「足利義明400年祭」の時、旧墓地の古池から五輪塔2基を発見、「地元伝承」の義明夫妻の墓と特定された。

また「御墓堂の由来」は「義明の遺骸は家臣によっていったん小弓御所に運ばれ、自刃した夫人遺骸とともに霊応寺の内に葬られたことからこの辺りを御墓堂と呼んだ」と記す。

かたわらの「アイ・ミュージアムYW」06御墓堂墓地五輪塔」は「室町時代に造立された供養塔で、小弓公方足利義明と妻の墓石ともいわれています。義明は古河公方足利政氏の次男で、真里谷武田氏

に招かれ、八幡、そして小弓城に入りました。天文7年（1538）国府台合戦で北条氏に敗れて没し、現在の八幡宿駅周辺にあった霊応寺（廃寺）で妻とともに仮埋葬されたと伝承されました。霊応寺にあった五輪塔は区画整理にともない現在地に移されました」とある。

伊豆石は、15世紀初頭造塔の大型五輪塔で、大寺高僧が在地有力者の「供養塔」が考えられるという。これだけの墓を建てる力をもった人たちの住む集落が当地に存在したことを物語っている。

義明が討死にした北条軍との「第1次国府台の戦い」は松戸市相模台城跡周辺での遭遇戦をいい、小弓勢は打負けて義明以下1000騎（諸説）が討たれた。同市岩・聖徳大学の「経世（けいせ

い）塚」が義明らを葬った跡といわれ、跡地に創設された「陸軍工兵学校」が昭和5年に建立した白みかげ角鍾柱石「相模台戦跡碑」が1000字ほどの追悼文を寄せている。塚は直径2m45の土饅頭円墳2基で花が供えられ、毎命日に松戸・本土寺住職の手で供養されている。

合戦で討死した義明の首級（しるし）は北条氏綱から古河公方足利晴氏に送られたとされ、「寛政重修諸家譜」は義明の葬地を十五沢村とする。義明を慕って市原に隠棲、宮原御所となる次兄晴直が遺骸を引き取ったか、宮原村とび地十五沢村も存在するが地元伝承はない。境内外墓地に檀家およそ200家の墓碑がならぶ、かつて小型五輪塔や残欠があったが、現在にはみあたらない。



東口ロータリーにあったころの御墓堂



「足利義明の墓」と伝わる大型五輪塔



六角の石柱に6種の地藏を刻む



憤怒の表情が厳しい「不動明王」

泰廣山圓頓寺

かんきよ

(八幡1015)

「七里法華」、日泰聖人閣の道場

圓頓寺は日蓮宗で、山号を泰廣山という。寺伝は室町中期、文明元年(1469)の創建で、開基を「七里法華」の日泰聖人とする。また一方、当山本堂前の江戸中期、元文6年(1741)日什聖人碑は「二位僧都(そうず)僧正次官)開基日什聖師」の2人を掲げる。

日什は室町時代初期の法華宗妙満寺派宗祖である。初め天台宗、のち日蓮宗に改宗、中山法華経寺4世日尊上人の教えを受け、元中6年(1389)京都妙満寺を興した。没後、門下の日仁らが足利將軍家に直訴諫曉(かんぎよう)として迫害されたが、その

ことでかえって宗勢を伸ばした。日什聖人の遺志を継いだ日泰聖人が上総で「七里法華」を進め、その弟子日行とともに当山を創建する。宗祖日什の「350遠忌碑」はこうした宗派と寺の歴史を、物語っている。

日泰は永享4年(1432)京都生まれ、19歳の時妙満寺10世の弟子となり、初め心了、のち圓頓房心了院を称した。師日尊の品川妙蓮寺創建に従い、文明元年下総浜村(現千葉市浜野町)に渡り、同年、廃寺を再興して布教の道場、如意山本行寺を称した。

上総との国境、古市場村境通称

「谷(や)」、現在浜野町上広、道16号線から館山自動車道合流点の地で創建、天正18年(1590)豊臣秀吉の小田原攻略の戦乱の中で焼失、江戸時代初めに現在の浜野町1252に定まった。

しかし一方、本佐倉城に本拠を移した千葉家庇護のもと編集されたといわれる「雲玉和歌集」(納叟の2宗が中心であったが、改宗さ馴窓作)は、「(日泰が)上総八幡られ、破却した寺院もあった。本行寺はその根本道場として満寺造営のため上洛し給う」(雲玉和歌集と上総国)としている。本行寺と円頓寺の創建が同じ文明元年であることにも注目したい。

日泰はしばしば品川と浜野との船便を利用したが、たまたま若き日の戦国武将酒井定隆と乗合わせ。途中にわかに難風、舟は転覆せんばかりに揉まれた。日泰はあわてず「法華経」をそらんじて祈

禱したところ波が収まり無事浜野に着いた。日泰の宗旨を目のあたりにした定隆は法華経に帰依する。のち土気、東金の城主となると日泰を土気に招いて領内ことごとくを日蓮宗に改宗させた。俗に「七里法華」「上総法華か寺」という。この地域はもと天台、真言の2宗が中心であったが、改宗さ本行寺はその根本道場としてめ(1496ころ)日泰は京都へのほり、本山妙満寺16世を継ぐが、再び本行寺に戻り圓頓寺を隠居寺とした。永正3年(1506)当山において逝去、75歳であった。

戦国時代の本行寺を護持した日行

当時、飯香岡社の前身市原八

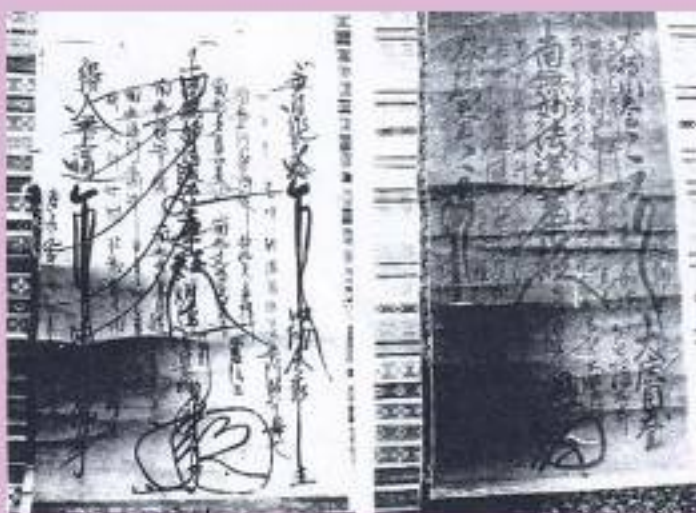
日泰聖人



「七里法華」を進めた
日泰聖人像



復興再建された圓頓寺本堂



ご本尊の日泰上人(右)と
日什上人「おまんたら」

幡宮は一の宮・玉前神社に代わ

といわれている。

る、「実質上総一の宮」に位置付けられていた。日泰の「房総布教活動」は、この八幡宮を重要拠点として展開した。延徳（1489）のころ、八幡宮の神官であった市川刑部の子が病氣となり、日泰の祈祷によって治癒したことから弟子となる。また、刑部の一族やそれを聞いた町の人々の寄進によって泰廣山圓頓寺が建立された。日泰が隠居寺として起居し、入滅の地となった。

日行は日泰の法灯を守り、両総諸寺を管轄した。のち上洛して権大僧正（大僧正の次位）にすすみ、本山妙満寺²³世を嗣いだ。また、草刈村の行光寺や山辺郡の法光寺、本福寺などを建立、永禄9年（1566）法光寺で入寂した。戦国時代の本行寺をよく護持した名僧

日行の時代に関東は戦国動乱となる。本行寺には里見方制札、後北条方禁制など貴重な「戦国文書」が保管されている。このころ本行寺は支持母体であった酒井氏から離れ、千葉氏は一族が上杉管領方と古河公方2派に分かれて争った。本行寺周辺、千葉市や市原郡北部は後北条氏の支配下で原胤栄領となった。

日泰の墓は遺言で初め生浜の北卯塔に置かれたが、平成時代に本行寺に移された。「南無妙法蓮華経、七里法華、開基日泰聖人」また、「歴代墓誌銘」は開基第一世心了院日泰聖人、第2世長源院日行聖人を、圓頓寺の「歴代住職墓誌」は「開基圓頓房心了院日泰聖人、永正3年、京都妙満寺第16世、第2世長源院日行聖人、永禄

9年、八幡宮市川刑部の子、妙満寺²³世」を記している。

圓頓寺は江戸時代、京都妙満寺派、本行寺末寺としてその支配を受けた。江戸時代初め、法華宗の諸寺に「不受不施」の教義を唱えるものが多数現れ、他宗とくに浄土宗との軋轢（あつれき）が生じた。本行寺の日違は不受不施を主唱したとして伊豆大島に流された。江戸中期、天明6年（1766）「寺院本末帳法華宗⑧、京都妙満派本末寺数帳」は「下総国本行寺末

上総国市原郡八幡村 圓頓寺
上総国市原郡下野村 本泰寺（奈良村本泉寺、潤井戸村泰行寺、古都辺村行福寺、宗角村村山寺）
上総国市原郡草刈村 行光寺（塔頭蓮成坊、草刈新田妙顕寺）

下総国 村田村 泉福寺、大金沢村 金城寺、平山村 妙本寺、白井村 妙寛寺」を記している。参考資料として（一）内に「千葉市史」の孫寺を併記した。

五井地区にまとまった檀家がある。当山発行人の「泰廣山圓頓寺縁起」によれば「泰師は、ある時五井村にさしかかった。すると道行く人影はなく、しかもほとんどの家が戸を閉めて人の気配が感じられない。不思議に思い、とある一軒に立ち寄ってみると、そこに病み疲れた老人が床に伏していた。泰師が尋ねると、「この村中にひどい疫病が蔓延し困っています。皆熱がひどく起きることもできません。どうぞ御前様のお力で一日も早く治るようにしてください」と合わせる手も震え、涙を拭いながら嘆願するのであった。



日蓮聖人と日什聖人像



須弥壇を飾る寺宝の仏像



千葉県寺院明細帳



平成後期の旧本堂

泰師はこれを開き「お困りであ
ろう」と、道をゆっくり歩きなが
らお題目を唱え、村人たちは
それにならった。すると不思議に
も今まで減入っていた病人は苦痛
が薄れ、日増しによくなり程なく
回復した」という。村人たちは信
徒になり今も親から子へと言い伝
えられている。

「過去帳」は江戸後期の天保以降
を保管している。「天保3年（18
32）11月、横町長七妻、仲町弥
兵衛、岩崎新田弥左衛門妻、12月、
片町弥兵衛子供、観音町髪結千之
助子供」が続く。町名や髪結いな
どに当時の庶民生活が垣間見れる。

明治6年、「新学制」発布にと
もなつて各地で小学校が建築され、
翌7年6月八幡小学校が当山にお
いて開校した。同校が所蔵する
「八幡学校沿革誌」によれば「第

百九十三番、九十四番、九十五番
小学区を連合して八幡小学校とし、
駅内圓頓寺を賃（やとい）て仮校
舎とし、本県士族（菊間藩士）照
島太郎、本駅（八幡宮）の人水野
算平、百瀬己之吉（医師）を招聘
して読書、算術、習字、教師とな
し、明治7年4月26日を以て開
校す。その器械書籍は村吏および
富民に募り粗具（あらそなわ）る
を得たり」とある。開校時の学童
数は10人に過ぎなかったが2、3
か月をへて100人を超えたこと
で狭溢となり、同年9月八幡稱念
寺に移転した。

当山の本尊は「十界勧請」の
「大曼荼羅（まんだら）」である。
軸装された日什聖人、日泰聖人の
大まんだらは年月をへて香煙で黒
ずむ。中央にひげ文字で「南無妙

法蓮華經」のお題目、四隅と周囲

に諸仏、菩薩、經文などを掲げて
いる。本堂正面、本仏である「一
塔両尊」の釈迦如来と多宝如来、
中央に日蓮聖人坐像と日什聖人像、
右脇に日泰聖人像が飾られている。

明治15年作成の「千葉県寺院明
細帳」によると、

「千葉県管下上総国市原郡八幡宿
（修正Ⅱ八幡町）字南町圓頓寺

浜野本行寺末、日蓮宗妙満寺派
（修正Ⅱ顕本法華宗）

一、本尊 十界勧請

一、由緒 文明元年創建、その他
由緒不詳

一、本堂ほか間数 間口6間奥行
き6間。庫裏間口9間奥行き5間

一、境内坪数1420坪

一、住職変遷

白川日照 明治15年以前〜26年
広部永真 明治26年〜大正8年

手代木通雄 大正8年〜？

大島正道 ？〜大正13年

石川顕隆 大正13年〜

一、檀徒人員623人

となっている。

明治維新後の宗派変遷で妙満寺
派は顕本法華宗を称したが、戦時
下、挙国体制の国策に沿って、日
蓮宗と本門宗、顕本法華宗の一部
が合併して日蓮宗を設立、身延山
久遠寺が総本山となるが、その後
の変遷で現在は元本寺本行寺との
関係はなくなっている。

伝来文書がなく本堂などの変遷
は未詳。江戸時代からの建物は正
正か昭和戦前期、老朽化のため再
建。戦後を知る人は「当初は屋根
が低く、昭和40年代に石段を上げ
た。旧道にあった山門は雨の日の
子供たちの遊び場でメンコやベ
イゴマに興じた」と語る。



令和元年の暴風雨被害

安政3年「八幡宮領人別帳」
圓頓寺印



泰廣山圓頓寺縁起



天明6年「寺院本末帳 法華宗」



現在住職は山津家で、関東大震災後の大正14年日昌上人が入寺、昭和53年顕妙上人をへて、平成21年顕什上人が第39世に就任された。

「令和千葉台風」で被災した本堂を再建

令和元年9月9日午前4時30分ころ、伊豆諸島を北上した台風15号が東京湾を進み、強い勢力のまま千葉市付近に上陸、県の観測史上1位となる瞬間最大風速57・5mを記録した。進路に立地した市原市では、飯香岡八幡宮境内の神木大倒木、五井ゴルフ練習場ネットの倒壊、長期間停電などの被害が出た。

住職によれば「夜になって南風は強まり、午前2時ころから5時ころまで未曾有の暴風雨となる。停電、固定電話が不通。午前6時

ころ、風が弱くなってきたので外の様子をみると、本堂前面の銅板屋根が飛び、大きく穴が開き、堂内の天井も抜けて小屋組みの間から空が見える。サッシの戸が外れ、堂内は泥水にまみえて仏具は激しい汚れ。幸い奥側の屋根は残ったので、御本尊、仏像は奇跡的に被害を免れた」との言。

庫裏の客間に御本尊、宗祖ご尊像、必要最小限の仏具を搬入し、その他の仏具は「トランクルーム」を借りて保管することにした。9月15日ようやくブルーシートによる屋根の応急処置を完了した。新本堂と客殿工事は令和5年秋に始まり、翌6年3月16日、檀家など100余人の来賓を迎えて復興再建奉告式を挙行了した。

年中行事は1月3日に新春初祈禱会、3月彼岸中日に春季彼岸法

要、8月19日に施餓鬼会法要、9月彼岸中日に秋季彼岸法要、11月19日に宗祖御会式法要を開催している。

新春初祈禱会は中山法華寺の塔中遠寿院で荒行修行を体験した住職と若手僧侶仲間による「水行」が行われる。コロナ以降一時中断したが本堂再建後再開している。

山門前のバス通りに沿って「南無妙法蓮華経」と彫られた総高2m53の巨大角柱碑が目につく。「御題目塔」といい、「法華経」に帰依することを現わす。7文字のお題目を唱えれば真理に帰入して成仏するといわれる。左右に流れる独特の書体は日蓮聖人が「佐渡が島流罪」のおり始願された本尊に由来し、功德が全世界にひろがることを表している。左右側面は「七

里法華、開基日泰上人閑居の霊場なり」、台石に「文化3年、当山27更時代日覚、施主、八幡村仲町川上平右衛門、石工佐平治」を刻む。進むと一画に宗祖日蓮聖人と派祖日什聖人、開基日泰聖人に係わる碑が並ぶ。台石上およそ2m、「日蓮大聖人立像」は、平成3年宗祖第750年、「遠忌碑」は明治14年没後600年を記念している。鎌倉時代に日蓮宗を開宗、執権北条時頼に「立正安国論」を進献したが、捕らわれて「鎌倉・竜の口の法難」を体験した。「開基日什聖師碑」は「二位僧都、明德3年に入滅、350歴の御忌なり」。日泰碑は明和6年に再建されている。墓地で特筆すべき碑に「川上南洞先生の墓」がある。南総中学校を創立、由来の地、八幡宮に銅像が立っている。



最近の「お会式」



新春恒例の「水行」も再開
(平成後期の写真)



おごそかに執り行われた奉告会



令和6年、「復興再建奉告会」を開催

八正山妙長寺

(八幡998)

往時は中本寺で、末寺12か寺を擁す

妙長寺はもと日蓮宗池上本門寺門末で、山号を八正山という。寺伝は鎌倉中期正応年間(1288)、また、室町時代正長元年(1428)創立、往時は、真里谷・妙長寺、君津浦田・妙長寺と「上総3妙長寺」とうたわれた。また、中本寺(ちゅうほんじ)地方本寺)として末寺12か寺を有したが、明治初年より寺運が衰退したといわれる。

明治維新後の「千葉県寺院明細帳」によれば、「正長元年創建、元上総国市原郡市東庄石塚村と申す村名の節、八幡山妙長寺と号し候ところ、宝徳2年(1450)

6世本成院日念代、山号の八幡山を八正山と改め、そのほか由緒これありといえども宝暦13年(1763)社地領より出火、焼失仕り候につきすでに確証これなし」としている。

古い時代の文書は宝暦の火災ですべてを消失したが、江戸中期以降の過去帳と寺の記録をあわせた法帳仕立て(A4折本)の「霊簿」2冊が伝来する。第1冊は享保6年(1721)、第12世日信が起帳、80年後の享和2年(1802)、第20世日地が第2冊を起こした。

、その構成は始めに霊簿序文、歴

代住職、ついで寺の「日めくり過去帳」、工事記録などの送り帳で、雲母張り、豪華厚紙表裏両面に記載、永年の使用で磨耗が激しいが、当山の歴史を物語る貴重な記録帳になっている。

巻頭に当山歴代20世までの住職名を記載、「開基、延命院、日行町中期、京都石清水八幡宮神前で

聖人。正長元年妙長妙全建立、両山在住35年永享6年(1434)

48(歳)化(没)す」。以下

第2世理性院日亮(文明4年)

第3世妙詮院日達(大永元年)

第4世中道院日悟(天文22年)

第5世詮量院日舜(元和元年)

第6世本成院日念(寛永8年)

第7世本隆院日永(明暦3年)

第8世壽正院日然(延宝8年)

第12世徳照院日信

第16世通円院日性*

第20世大信院日地

*印の3人には「別して丹誠(熱心)候」との特記がある。

「過去帳」は命日順に朔日、二日、三日……、十日、二十日とページ分けされ、檀家と寺関係者の法名、没年月、続柄を記している。

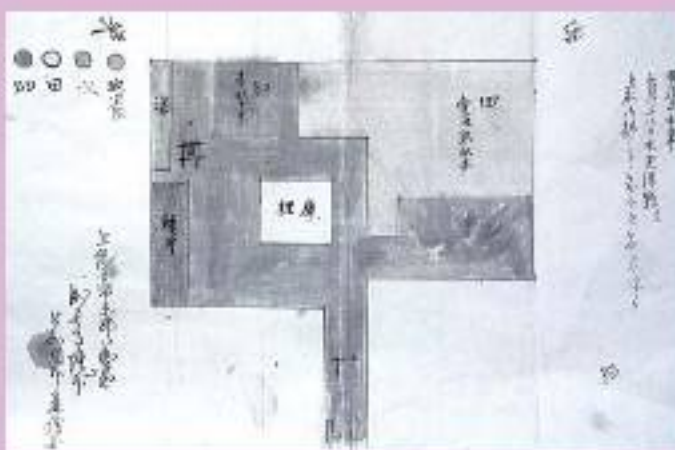
妙長寺が創建した正長年間(室任した足利義教代。専制政治は過酷な肅清を呼び、自らも家臣・赤松満祐に謀殺された。8代足利義政は芸道や娯楽に没頭して政治を顧みず、「戦国時代」へ突入する。

このころ新仏教の動きが活発で、禅宗(五山派)、禅宗諸派(林下日蓮宗(法華)、浄土宗本願寺派

(一向宗)の4派がしのぎを削つて教義の拡大を図った。中でも東

国を基盤とする日蓮宗は日像、日

親が出て全国に信者を増やした。



明治5年「妙長寺境内絵図」



八幡の寺社配置図



参道からのぞむ妙長寺



妙長寺元本山の池上本門寺は弘安5年(1282)日蓮聖人が常陸への行脚の途中有力檀越であった池上氏の館で没した時、入滅の旧跡として「大坊」を建立、文保元年(1317)日蓮聖人の弟子日朗が創建した。身延山久遠寺、中山法華教寺とともに日蓮宗の「三触れ頭」として大本山となつた。

妙長寺を開山した日行聖人は、日蓮宗本山の一つ、鎌倉両山の第6世で、法華教の上総進出拠点として妙長寺を創建、中本寺として末寺12か寺を擁した。

「両山」は鎌倉比企が谷の日蓮宗本山妙本寺をいう。日朗が妙本寺にあって本門寺を兼ね、両山一寺として教義をひろめたことで両山、また比企が谷門流ともいった。妙本寺は12世日愷が徳川家康の命

で池上に移るまで門流の本拠として栄え、たびたびの兵火と比企一族菩提寺として知られている。

日行は甲斐の人で3兄弟が身延山久遠寺の第7世日数の門下となる。兄と弟は師を後継、日行も両山に迎えられたので世人は「敷門の三貌(げいゝ高僧)」と尊称した。応永29年(1422)佐竹興義が関東管領に反旗をひるがえした時比企の諸堂も戦火にかかったが、宗祖日蓮聖人筆の蛇型まんだらが井戸に入り蛇となってこれを防いだ。この時の住職が日行であった。

妙長寺の本末関係資料は寛永10年(1633)身延山久遠寺が幕府に提出した「法花(華)宗諸寺目録」にある。

「寺領1貫200文 相模国鎌倉比企谷 長興山妙本寺」

寺領100石 武州池上 長栄山本門寺
両山諸末寺 上総国八幡 妙長寺 ほか32か寺。

また、天明6年(1786)池上本門寺が提出した「寺院本末帳114法華宗」 「法華宗池上本門寺派下ならびに兼帯所、鎌倉妙本寺院本末帳」は

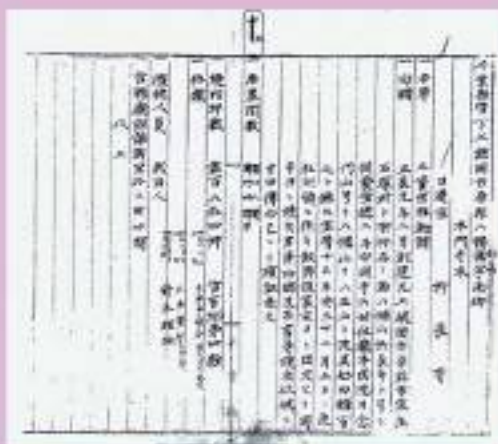
「本寺武州荏原郡池上、御朱印100石、長栄山本門寺 塔頭24宇、末寺155か寺
上総国市原郡八幡村除地 妙長寺、末寺一か寺」とする。末寺は山木妙栄(永)寺である。戦後の改訂で本末関係が解消されたが現在も交流が続いている。

妙長寺の旧寺格は中本寺だが、末寺に関する記録がなく、「雲簿」の6世日念の項が唯一の手がかりとなる。日念は「授法6万人」

江戸創成期、法華黄金時代の「傑僧」といわれた。市原では慶長2年(1597)新堀法光寺を開山、元和元年(1616)から寛永8年(1631)まで妙長寺住職を勤め、中興聖人として七堂伽藍を整備して教義の拡大に勤めた。「福増本念寺、古市場長妙寺、松崎円成寺、山木妙栄寺、加茂長永寺、新堀宝光寺を開基したが、右福増、松崎、古市場、賀茂、新堀五か寺ともいづれのころか他宗になる」という。

妙長寺の八幡村人別帳が、「文久元年旗本村上三十郎組宗門御改め帳、日蓮宗分冊」にある。

一、日蓮宗旦那(妙長寺印)百姓五郎右衛門、西36歳(家族4人)ほか3軒、家族16人。
右のとおり男女拙寺とも旦那にまぎれござなく候、もし御法度の宗



明治の「千葉県寺院台帳」



文久元年「宗門人別帳」の妙長寺印

「雲簿」を起帳した
12世日愷人の花押



雲母貼り「雲簿」の表紙と序文



門と申す者ござ候わば拙寺どもい
ずかたまでもまかり出、申し訳仕
るべく候。そのため寺受け証文差
出し申すところよってくだんのこ
とし。文久元年（月日欠）

武州荏原郡池上本門寺末寺
上総国市原郡八幡村日蓮宗

妙長寺（妙長寺印）

下総国千葉郡浜野村本行寺

上総国市原郡八幡村日蓮宗

圓頓寺（圓頓寺印）
と日蓮宗の2か寺が連印している。

明治15年の「千葉県寺院明細
帳」によると、「日蓮宗本門寺末
妙長寺、本尊三宝宗祖勸請、檀家
数は200軒、明治期は本堂がな
く、庫裏間口8間×奥行4間半、
境内敷地184坪」。住職は初め

無記入（無住か）で、
大和田順孔 昭和7年～8年

木場耀郁 〃 8年～10年
鈴木耀振（日定） 〃 10年～60年
関口尚久 〃 60年～現在
と変遷している。

第39世鈴木日定が入院した昭和
戦前期の妙長寺は、永年無住のた
めか荒廃し、小さなお堂と小屋の
ような建物であったという。江戸
時代は「七堂伽藍」に三重塔を連
ね、五大力船が八幡宮の森と妙長
寺の三重塔を目印にしたといわれ
るが、すでにその面影はなかった。

「霊簿」が妙長寺の歴史 を刻む

改めて「霊簿」から妙長寺の江
戸中後期史をたどる。

- ①享保6年（1722）、庫裏、
半鐘塔建立
- ②享保7年、新門建立
- ③宝暦13年の焼失と再建

- 12月5日明け六つ、寺の門先社
地飯野後家より出火、茂七、杉
本刑部など、民家6軒を焼失。
妙長寺は風下ゆえに防ぎがたく、
仏像、過去帳などを運び出した
が、堂、番神社、庫裏を類焼し
た。同20日、山木妙栄寺檀頭矢
城源太郎が、妙栄寺庫裏立て替
えのため買求めていた草刈村の
建屋材木を寄進、14年1月起工、
大工番匠山口修理、3月竣工
- ④明和3年（1766）、本堂再建
発起施主勝田子・平右衛門、勝
田子や椎名の人たちが大杉や檜、
竹材などを寄進。2年9月斧始
め、大工山口修理、12月棟上げ
- ⑤安永6年（1777）、本堂、
庫裏、七面堂建立
本堂諸掛り1500両余。江戸
神田鍛冶町、妙屋清七を世話人
とした「本堂建立講」が基金を

- 募り、七面堂は南町・堀田吉兵
衛が寄進。明和2年9月斧始め、
大工山口修理、12月棟上げ
- ⑥寛政8年（1796）、境内6
00坪を切興す
- ⑦文化11年（1814）、日瑞上
人の入院と庫裏普請
20世以後4、5代無住同様のた
め、本堂、庫裏を修繕
- ⑧文化12年（1815）、門石を
再興

本尊は大曼荼羅（まんだら）で
「三宝宗祖勸請」という。本堂正
面に掲げられた「南無妙法蓮華
経」の御題目、南無僧日蓮、南無
法蓮華経、南無仏釈迦の「三宝」、
両脇に釈迦と多宝如来の「一塔
両尊」、右段に南無迦行菩薩、南
無上行菩薩、左段は南無浄行菩薩、
南無立行菩薩の「四士」を配して



本堂須弥壇全景



宗祖・日蓮聖人像とお厨子



一塔両尊仏像の釈迦如来（右）
多宝如来



当山を開山した日行聖人座像

いる。本堂中央部、金色に輝く堂風お厨子は、宗祖日蓮聖人の立像で、あわせて「一塔兩尊仏像」釈迦、多宝2軀を祀る。

年中行事は1月18日中山法華經寺団参、3月春季彼岸会、8月12日新盆御經廻り、7月お盆、8月13日千葉方面お盆、8月1日新盆供養、8月12日新盆お経まわり、8月15日お盆、8月16日施餓鬼会（せがきえ）供養、9月秋季彼岸会、11月13日日蓮聖人ご命日の御会式（おえしき）12月28日浄火（じょうか）供養、12月31日24時から法要などといった日蓮宗の伝統的行事が執り行われている。

日行聖人が制作した日蓮聖人坐像

往還バス通りから境内への引込み参道にひと際大きな碑2基が並

ぶ。手前が「南無妙法蓮華經、八正山、妙長寺、文化12年、隆文院日瑞花押」90cmの3段台石に、高さ1m63の角柱を載せる。隣の「日蓮大菩薩塔」は四方唐破風位牌型で、宝珠、笠、塔身、台石総高2m90を計る。貞享元年に建立、安永6年再建。塔身正面に「南無日蓮大菩薩」、左右に開山の日行上人が日蓮聖人像を制作奉安したことを記している。

碑文の「唱（しょう）玄題（げんだい）お題目」3000部、誦（じゅ）自我偈（じがげ）法華經の中心經典「1万巻」は南無妙法蓮華經のお題目を唱え「妙法蓮華經如来寿量品第16」を讀んじるところをいう。

参道を進んだ本堂前の小さなお堂に「日蓮聖人坐像」がある。高さ51cm、右手に笏（しゃく）、左

手に巻物を持ち、頭巾と法衣をまとう。背中の銘文は「奉造題目講一結17人□仏□中也、寛文4年」が読める。お顔立ちが穏やかで光々しい。この石像は長い間行方不明であったが、昭和11年ころ本堂土中より発見された。

周辺に50年ごとに行われた日蓮聖人の開宗遠忌記念碑が並ぶ。「南無日蓮大菩薩、600御恩忌報謝、明治14年」、「立正大師、祖日蓮大菩薩、650遠忌報謝、昭和6年」、左奥「本堂再建記念碑」は「日蓮大聖人立教開宗第750年記念事業、平成6年」を刻んでいる。

かたわらの民間信仰「お百度石」が珍しい。「日切りを祈願、百度踏所」と簡潔な説明書きがある。本来人目をさけながらの日切りだが、急ぎの祈願は一日に10

0度分を回った。

本堂右側に歴代上人や檀家墓地がある。旧家が多く寛永時代の板碑型連碑や江戸時代からの戒名を刻んだ墓碑も目立つ。安藤本家墓誌の「俗名武兵衛、俳号文斎、齢80歳、万延元年」、また「陸軍一等卒菅崎仁助、征露の役、明治37年、清国旅順赤攻山」、日露戦争で乃木希典率いる日本軍が死闘を繰り広げた203高地での戦死を記している。

当山では檀家である安藤耕一家が、平成25年旧居取壊しの時出土した「円柱杭」写真を所蔵されている。直径およそ90cm、3倍長の円柱20本余。明治36年、鉄道橋脚の地盤対策として開発されたばかりの最新技術で、同45年の国鉄本更津線工事遺構として、土木史上も貴重である。



伝寺領から出土した明治の八幡宿駅工事遺構、
当時最新技術のコンクリート杭

珍しい「百度踏み石」



日行聖人が制作した
日蓮聖人像

「南無妙法蓮華經」の題目塔拓本



引込み参道に建つ2基の巨碑



昔懐かし子どもの遊び

時田光夫

昭和20年代から30年代の子供たちは外でよく遊んだ。塾やゲーム機のない時代、自然が遊び場であり友達だった。そんな時代の懐かしい「昔の遊び」の数々を、水彩画と写真で紹介します。

この「昔の遊び」は1月から12月までの1年間、その月々に相応しい遊びを選択して掲載していますが、遊びがその月限定という意味ではありません。年間を通して親しまれた遊びもありますのでご承知ください。

1月 凧あげ



昔は何でも自分たちで作ったものだ。ある時、親父が1・5メートルくらいの竹を使って骨組みを作り、それに紙を貼り、四角たこを作ってくれた。空中での安定性をよくするため、足の部分に荒縄を付け、冬の強風を待った。暫くしてゴーという北風が吹き、上げにかかる。凧は一気に10メートルくらいの高さまで上がった。ところが風が強すぎたのか、足の荒縄が短かったのか、空中で2、3回転して、地面にドスンと落ちた。ものの5秒くらいの滞空時間であったが、スリル満点だった。

2月 長馬

冬の遊びの代表格だ。10人前後の仲間が集まると2組に別れ、ジャンケンをして負け組が長馬を作る。一人が正面を向いて立ち股を開く、そこへもう一人が腰をかがめて、頭を股の下に突っ込む。その後ろに次々とムカデのように連なり、長い馬のようになる。そこへ勝ち組の連中が、次々に走ってきて、長馬に飛び乗る遊びだ。飛び乗られた重みに耐えかねて崩れつづれると、何回でも馬をやらされる破目になる。



馬の役も楽でない。足をぐっと踏ん張り、前の仲間の両股をシッカリつかみ、身体全体に力をみなぎらせ、飛んでくるのを待つのだ。今か今かと待つ緊張感や面白さは、やった者でしか分からないだろうな。

3月 竹馬

竹馬は、竹2本と板4枚、それに縄が2本あれば簡単に作って遊べる。それぞれお手製の竹馬で、竹馬競争をよくやったものだが、急ぎすぎて石にけつまずき、痛い目に合うことも度々だった。でも、なんとと言っても竹馬に乗ると視線が高くなって、普段見慣れた風景が、いつもと違った感じに見えるのが一番楽しかった。



4月 輪回し

自転車のチューブを取って、車輪だけになった輪をよく回して遊んだ。中には樽のタガを外してやっていた者もいた。ぐりぐりという音がたまらなく懐かしい。上手くやるには、なにしろ速く走って、支え棒から輪を外さないことだ。だからどっち方向に行くか分からないままひたすら走った。



5月 ポックリ下駄



缶詰の空き缶を利用、ヒモで結んだ缶の上に、足の前半部を乗せ、馬になった気分でパカパカと歩くのだ。一見単純な遊びだが、人差し指と親指でしっかりとヒモを押さえないと、足だけ外れて空を切ったり、小砂利などに引っかかり転倒したり、重心移動がうまくいかないと尻餅をついたり、意外と馬鹿にならない。

6月 ターザンごっこ

少年の愛読書「少年クラブ」にターザン物語があった。舞台はアフリカのジャングル。なぜかジャングルに置き去りにされた人間の赤ん坊を、雌ゴリラがターザンと名づけ育てる。ジャングルの動物たちと仲よくたくましく成長した少年ターザン、木の上で生活することの多いターザンの移動手段は、ジャングルにぶら下がっている太いツルだ。ツルにつかまり振り子のようにぶら下がって樹から樹へと移動する。

ある時、悪い探検家が現れ、野生人間として見世物にするため彼を捕まえようとする。その時、ターザンが「あー、あーあー」と大声で叫ぶと、ジャングルの何処からか、ゾウ・ライオン・ヒョウなどが集まってきて彼を助けてくれる。ターザンの雄姿を見る悪ガキ達は、木の枝に太いロープを縛りぶら下げ、それにつかまってターザン気取りで「あー、あーあー」と叫ぶ。この時の宙に浮いた気分はなんとも心地よく、ジャングルの王者ターザンになったような気分がしたものだ。



7月 かいぼり



「かいぼり」は、小川や池の水を汲みだして、コイ・フナ・ウナギ・ドジョウ・ザリガニなどを捕まえる遊びだ。田んぼの脇を流れる小川の2か所を、田んぼの泥で堰止め、堰の内側の水をバケツでかい出すと水が徐々

になくなる。やがてそこに閉じ込められた魚たちが逃げ場を失い、手でも簡単に捕まえられようになる。

水がほとんどなくなり、ヘドロ状態になった泥んこの中に両手を突っ込み、手探りで獲物を探すのだ。ヌルヌルしたものが触れたらウナギ・ドジョウ・コイ・フナ・ナマズだ。何が出てくるかわからない、ウナギは当時貴重だったので、捕れたら大歓迎、服の汚れなど気にはしていられない、今ではあの泥んこの匂いが懐かしい。

8月 クワガタ・カブトムシ・トンボ捕り



クワガタ・カブトムシを捕るには、早朝一番に虫のたかる樹を目指し早く行った者にはかなわない、遅いとカナブン・カメムシがいるだけだ。なにしろ薄暗いうちに行くことだ。目当てのクワガタ・カブトムシを見つけ

たとき胸が高鳴ったものだ。

トンボについては、オニヤンマ・ギンヤンマ・シオカラ・アカトンボ等々、これらのトンボ捕りの中でオニヤンマ捕りは最高に面白い。トンボの内ではでかく、風貌もなかなか怖くてごつい、色は黒と黄色のマダラが入っている。帽子でも捕まえることができる。オニヤンマは、山間のきれいな小川の上など、同じところを何回も行った来たりしているのうまくすると帽子でも簡単に捕ることができる。

9月・10月

秘密基地・栗拾い



必ずガキ大将がいて、その場を仕切っている。この秘密基地に入れてもらうには、兄貴分になにかしらかの貢物をあげたりしてゴマをすらないと、仲間に入ってもらえない。高い樹の秘密基地では、めいめいが持参した食べ物を食べ、ロ

1ソクを灯し、地平線の山々や下を見ていると、なんだか違った世界に入った気がした。

9月下旬になるとヤマグリが実る。クリとは限らず木の実を山手まで遠征し盗みに行く。高



明治、大正ころの子どもたちの遊び 伴光山人画（八幡公民館所蔵）

11月 草相撲

いところにある実は、みんなでクリの根元を一斉に蹴る。するとバラバラと実が落ちてくる。それを靴底で踏みつけ、竹へらでイガを剥くとクリの可愛い実が頭をツルツと出す。

ラジオから流れる大相撲は人気があった。特に子供たちには人気があり、吉葉山・千代の山・鏡里等々の力士は輝かしい存在であった。憧れの力士の取り組みともなると、夢中になってラジオに聞き入ったものだ。それらの力士達が使った取り口を、野原に集まっては、ハッケヨイノコッタとばかりに、足をかけたり、寄り切ったり、さば折をしたりして皆で遊んだ。



12月 めんこ

地面に置いてある相手のメンコの横に、自分のメンコをたたきつけ、その風圧で裏返しにすれば、相手のメンコがもらえる遊びだ。それにはちょっとした工夫が必要で、メンコの右端をちよいとより曲げ、風圧をより多く与えるようにして叩きつけると効果絶大、相手のメンコはくるりとひっくり返った。



八幡村と八幡宿

(八幡1050ほか)

江戸と房総むすぶ海運陸路の要衝

「八幡」は村田川下流の海岸平野に立地する。市原市の最北端、かつて上総、下総国境の境川を挟んで千葉市に接している。その昔、江戸東京湾に面した港町で、「房総往還」が町を縦断した。

天明7年(1787)「八幡村鑑明細帳」による村の広さは、南北、五所村境より村田川境まで1255間、東西、海岸より菊間村境まで555間、家屋445軒、江戸後期か「八幡村分見古図の写し」実測値は村田川より五所村境まで1183間5分7厘となっている。

織豊時代、当地は小田原北条氏

の分国で、千葉小弓城の原胤栄が所領した。「八幡郷」の初見は天正9年(1581)の原胤栄印判状で、同18年、「小田原征伐」で、19年、秀吉の命で関東入部した徳川家康の150石「寄進状」も「八幡郷の内」となっている。

「八幡村」は江戸時代の村名で、初見は文禄3年(1594)の「上総国石高村々覚え帳」、関東御縄役人、大久保十三兵衛(長安)の名前がある。村高は文禄3年1404石、元禄14年(1701)「元禄郷帳」1379石余、寛政5年(1793)「市原郡戸口録」

1255石余、慶応4年(1868)「旧高田領取調帳」1403石余で、江戸時代を通じてほとんど変化がなかったことがわかる。

家康の江戸入り直後、天正年間の八幡村領主は家康寵臣の本多正信、幕府創世期の首席老中本多正純、老中格永井直勝の3相給であったが、慶長ころ、直勝の子尚政が引継ぎ、2代將軍秀忠の幕閣となるに及んで、潤井戸に平山城2万石の老中城を築いた。

元禄のころ、八幡に堀1万石、大久保1万石2つの八幡藩があった。堀家は元来外様だが忠勤で、譜代1万石となる。寛文8年(1668)直良が居所を八幡に移し、次の直宥は領地に行くのいとま(参勤交代)を給い(寛政譜) 11年越後椎谷に封地を移された。貞享元年(1684)、5代将

軍綱吉側近で8500石の大久保忠高も加増されて1万石となる。江戸定府大名のため大名居所としての実態はなかったか。元禄10年采地を近江国に移し、常春が老中で烏山3万石に定着した。

八幡「市原市武道館」奥で、屋号「じんや」を名乗る旧鈴木康夫家が跡地とされ、文化6年(1869)名主太右衛門が、領主・旗本3400石永井鉄弥「御陳屋敷拝領絵図面」と、永223文を上納することを示す「請け書」を保管する。絵図面は竹山(土塁)と、沼、溝(水堀)を廻し、中心に東西37間×南北15間の屋敷地、供揃い(引込み)道がある。

大身旗本の地方陣屋(蔵屋敷)の造りだが、「じんや駐車場」の地下に元禄城郭遺構が発見される。鈴木家は慶応年間



寛政5年「市原郡戸口録」



文禄3年「石高村々覚え帳」



平成中ごろの八幡町



からの醤油醸造、分家で初代市原市長の鈴木貞一家は味噌醸造を家業とした。

江戸後期の八幡は、幕府直轄領、旗本佐野領、岩本領、永井領、村上領、松本領、河野領、水野領、飯香岡八幡宮領の9相給で明治維新を迎えた。

助郷と五郷組合

上総は江戸時代前期から「五郷組合」が活発だった。隣接5か村程度が連合、共通の問題を連帯して対応した。「八幡村五郷組合」

は八幡村を親村に、五所、市原、菊間、大厩、上古市場村6か村で構成した。さらに隣接する潤井戸村五郷組合などと連合した「八幡村二十五郷組合」へと発展し、五井、姉崎二十五郷組合などと市原

全郡をカバーした。五郷組合では鷹匠御用、助郷、治安維持などがテーマになった。

江戸後期、11代家斉將軍のころ、関東各地で無宿人、博徒が横行して治安が乱れた。幕府は「関東取締出役」を設置するとともに上総の五郷組合をモデルにした、「改革組合、寄せ場村」を全関東に広げた。「千葉県の歩み」による「八幡村寄せ場組合」は八幡、菊間、大馬屋（大厩）、市原、郡本、能満、山木、古市場、五所、藤井、山田橋、金杉浜、加茂、根田、惣

江戸時代の「宿駅（しゆくえき）制度」は公用通行者の荷物を宿から宿へ継立てることで、宿に休泊と輸送を義務付けた。房総往還に八幡、五井、姉崎3宿が置かれ、一般客も利用できた

八幡村の「定助郷」は菊間、五所、上古市場、大厩、市原村の5か村、大助郷は、荻作、葉木、勝間、郡本、惣社、山木村など14か村であった。助郷は宿駅周辺の村々に課された人馬の提供夫役（ぶやく「労役」）をいった。八幡の継ぎ場（伝馬所）では常時馬3匹を用意、それ以上は定助郷村が応援した。

天保9年（1838）、幕府が行った「農間余業調査（飯香岡八幡宮文書）」は奢侈取締りを意識した。「農間余業」は農作業の合間

に営む副業のこと。八幡村は家数339戸で、うち128戸、37%が該当した。しかしこれには大工や屋根職、鍛冶屋などの職人や、漁業、船乗り、駄賃稼ぎのはしけ人足、継立人足などは含まれていない。

内訳は穀商売16、居酒屋8、小

間物、荒物各5、湯屋、穀荒物各4、酒仲買、煮売屋、髪結い、穀古差屋各3、鮮商、はたご、穀荒物小間物、太物小間物荒物各2、蒲焼、菓子打卸、蒸菓子、干菓子、穀荒物小間物太物、穀金物、穀薪炭、つき米、下駄など。店主の内訳は名主6、組頭1、百姓30、借地百姓20。米穀商や太物、はたごめ、水飲み百姓といわれた「借地百姓」は小間物屋や髪結い、煮売、菓子屋を開いた。

沼津水野藩の菊間転封

慶応4年（1868）、「鳥羽伏見の戦い」に敗れた徳川15代將軍慶喜が謹慎、4月11日江戸が無血開城された。しかし、開城に反対する幕府「撤兵隊」の一部が集団



大正時代の八幡宿



八幡村組合の農間余業書上げ



鈴木康夫家駐車場



鈴木家が所蔵する御陣屋敷絵図



脱走、「義軍府」を称して木更津(宇舎)の建設は急ピッチで始まる。に結集した。八幡も混乱の渦に巻込まれた。船橋へ進む第1、第2大隊の「御組旅宿」(八幡・市川・付けた層塔や藩校「明親館」、忠本店文書)は義軍の宿割り。村人たちは不安げに見送った。しかし、旬日もなく、「市川・船橋戦した段階で中止され、資材は初代の千葉県庁舎に転用された。」

明治元年、徳川宗家の静岡藩転封にともない、旧沼津藩5万石城主・水野忠敬が市原郡に入封、先々代藩主で元井伊直弼の側近として活躍した水野忠寛が称念寺に宿陣して指揮を執った。菊間の高台を城地と決定。菊間城(藩

明治4年7月、廃藩置県にともない菊間県となり、木更津県をへた、明治6年千葉県が創立した。明治元年、村名を「八幡宿」(市川本店文書)と改称。江戸時代、房総往還が副往還のため宿名が認められず、町びとたちにとって多年の念願であった「一村限り下調べ」は「第5大区2小区、八幡宿、戸数470、口数2177人。米1289石、五大力船14艘、港湾浜本川岸、南町川岸」を報告している。



水野忠敬邸古写真



菊間城大手口の新坂



水野忠敬(手前)と忠亮

八幡村領主の変遷

☆永井直勝 天正18年 ～慶長ころ	☆本多正信 天正18年 ～元和2年	☆本多正純 天正ころ ～元和初め	飯香岡八幡宮 天正19年 ～明治維新 150石
☆永井尚政 慶長ころ ～寛永10年	永井直貞 寛永3年 ～明治維新 182石	永井直重 寛永3年 ～天和2年	
☆直之 寛永10年 ～元禄11年	直孟 直澄 直朝 直賢 直富 直親 某 某 直景		
幕府直轄 元禄11年 ～宝永4年			
佐野政国 宝永4年 ～明治維新 226石	村上正春 宝永4年 ～明治維新 178石	河野通護 宝永4年 ～明治維新 95石	水野忠顯 宝永4年 ～明治維新 89石
政長 政信 政房 某 某 某	正清 正親 某 某 某	通長 通孝 通成 通開 通訓 通和	忠富 忠英 政勝 貞利 貞篤 貞尚
酒井忠吉 寛永10年 ～元禄?	松本秀持 宝永8年 ～明治維新 166石	☆松平朝矩 寛延2年 ～明和7年	岩本正利 天明7年 ～明治維新 205石
☆大久保 忠高 貞享元年 ～元禄10年	式毅 毅実 某	幕府直轄 明和7年 ～文化8年	正倫 正倚 正遠 某
幕府直轄 元禄10年 ～延享3年		☆阿部正簡 文化8年 ～天保3年	
☆酒井親恭 延享3年 ～寛延2年		幕府直轄 天保3年 ～天保5年	
		☆林 忠英 天保5年 ～天保12年	
		幕府直轄 天保12年 ～明治維新 108石	

☆印=大名所領
無印=旗本知行地または幕府直轄領

八幡を所領した大名と旗本 (八幡村)

家康謀臣本多正信、正純親子に始まる

前ページの「八幡村領主の変遷」は、『市原市史』を原典としたが、江戸初期は空白(不明)が多く、手持ち史料などで補完した。江戸入府直後の八幡は、安房里見家と正対する、上総、下総交通要衝として、譜代重臣の本多正信、正純父子、永井直勝、尚政父子が配置されたが、泰平が続いた中後期は幕府直轄領と譜代旗本知行地へと変遷していった。

初期は中堅譜代大名領

①本多八幡藩1万石(天正18年)元和2年か正信、旗本(のち宇都宮藩15万石) 天正18年ころ

→元和ころ正純

藤原氏兼通流。本多家は三河松平(徳川)家に仕えた戦国武士団で、家康の江戸幕府創設に貢献、一族から多くの譜代大名家を輩出した。もとは代々弥八郎を名乗った鷹匠の家柄であったが、正信が三河一向一揆で離反したため追放され、大久保忠世の取りなしでようやく帰参が認められた。

甲斐経営で重臣に抜擢され、江戸入府で関東総奉行、市原の所領は八幡村など。「寛政譜」は「天正18年(1590)関東へ移らせたまう時1万石領せしよしみえたり。按ずるに「天正分限帳」上野国(上

総の誤記)八幡において1万石領せしよし見えたり。しかれどもある書、上総国八幡にして5000石を領すとありてその余を記さず」。慶長8年(1603)徳川幕府が成立すると、家康側近として幕政を主導、大久保忠隣を失脚させて大きな権力を得る。「大御所時代」は、嫡男・正純を駿府の家康の元に置き、自ら江戸の秀忠老中として家康の政策を実行した。乱には軍謀に預かり、治には国政を司る。「君臣の間相遇うこと水魚た。大坂城は「難攻不落」の名城のごとし(寛政譜)」。元和2年(1616)、家康のあとを追うように逝去。79歳であった。

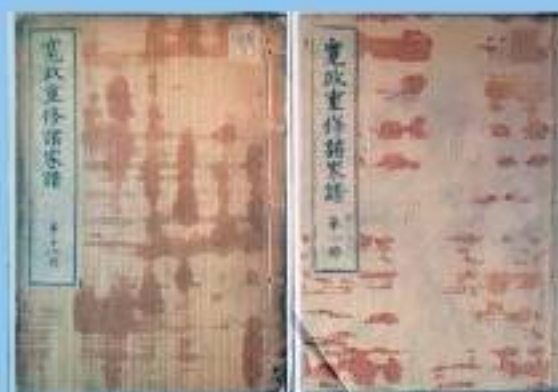
正純は幼きから家康小姓となる。家康の歴戦にしがたい、関東入部で父と同じ八幡村などに所領を与えられた。天正20年、豊臣秀吉の朝鮮侵攻で、飯香岡八幡宮に家康

銘大太刀を寄進、慶長8年江戸幕府が成立すると父子で幕府政治を取仕切り、豊臣家滅亡への秘策を巡らせた。秀吉の遺児・秀頼に臣下としての上洛を促し、一大名への降格と母・淀君の人質を迫った。京都・方広寺の「梵鐘銘」への地院崇伝だった。家康は慶長18年大坂騒擾を口実に諸大名に出陣を命令、20万の軍兵で包囲したが、豊臣方も浪人12万を集めて対抗し、大坂城は「難攻不落」の名城。大坂城は「難攻不落」の名城。豊臣方も浪人12万を集めて対抗し、大坂城は「難攻不落」の名城。大坂城は「難攻不落」の名城。

講和条件の外堀埋立ての総責任者となった正純は条約にない内濠も取壊したので、さしもの堅城もまる裸になった。翌元和元年「大坂夏の陣」再発、秀頼、淀君が紅蓮の炎の中、自害して豊臣家が滅



「寛政譜」の本多正純



「寛政譜」の表紙



文政大名武鑑の「徳川将軍家」



江戸城本丸

亡した。

正純はその後、秀忠の主席老中に進むが失脚、配流され、最後の地は雪深い横手城の裏山であった。碑のかたわらに一首、「日だまりを恋しとおもう梅もどき、日陰の赤を見る人もなく」徳川幕府創世期の功臣のさびしい最後であった。

潤井戸城永井尚政、老中となる

②潤井戸村など5000石（のち古河藩7万石） 天正8年（慶長直勝、潤井戸藩2万石（のち古河藩） 慶長ころ、寛永10年尚政恒武平氏長田流。直勝が家康に与し、関東入府で八幡村など5000石を得、累進して老中格、古河7万石。嫡子尚政も秀忠の近習で5000石、元和5年1万石を加算されて潤井戸陣屋を居城とし

た。現状は一部住宅地のほか畑、山林。大手虎口、土塁など遺構。同8年老中。井上正就、板倉重宗と「近侍の三臣」と称された。寛永3年父逝去にともないその遺領を相続、あわせて8万9000石をえた。

4代直長の時、江戸城内で乱心した鳥羽藩主・内藤忠勝に被殺、いったん城地を没収されたが、弟直円が10分の1の新庄1万石で再興、明治維新におよんだ。

堀、大久保、2つの八幡藩が成立

③堀八幡藩1万石（のち椎谷藩） 寛永10年（元禄11年、直之、直景、直良、直宥） 元秀吉の重臣・堀秀政一族、三条5万石直政の3男直之が江戸町奉行を勤め、八幡村を含む市原

郡、越後のうちに9500石を得た。次の直景の時5000石が増されて念願の大名となり、夷隅郡で「刈谷藩」を称したとされるが同地に伝承はない。

寛文8年（1668）直良の相

続にあたり、陣屋を八幡に移し、参勤交代も行った。堀藩の「八幡藩」は直宥との2代で、直央が越後椎谷陣屋に移封されたが、正徳元年隠居していた直宥が八幡陣屋で殺害されたという。椎谷陣屋は海岸線に近い丘城だが、明治維新の戦いで水戸浪士に焼かれた。

④大久保八幡藩1万石（のち烏山藩） 貞享元年（元禄）年忠高

5代將軍・綱吉の寵臣大久保忠高も1万石に達したが、りん米を含めた微妙な数字。定府大名で、国入りもなかったか。元禄10年市原の采地を近江国に移され、次

の常春が老中で烏山2万石に進んだ。堀、大久保の両家は同時期同じ「八幡藩」を称したが、城地の詳細は不明である。

譜代最大の名門「下馬將軍」

⑤酒井前橋藩15万石 延享3年（寛延2年親恭）

清和源氏義家流。「雅楽頭家」と呼ばれた譜代最大の名門。重忠が徳川家康の関東入府にしたがい川越1万石、関が原の勝利で厩橋（前橋）3万石となる。忠世、忠清と大老、病弱の4代將軍・家綱の政務を専権した。江戸城大手門下馬札前の上屋敷に因んで「下馬將軍」と恐れられた。延宝7年（1679）、内紛のあった久留里土屋藩を取りつぶし、その所領2万石を自らに増したので、土屋藩領



堀直良書状



八幡藩陣屋跡を
伝承する鈴木家



永井尚政の老中城「潤井戸陣屋跡」



豊臣家が滅亡した大坂城跡



事件の発端となった京都方広寺梵鐘

であった市原南部の23か村5000石が前橋藩のとび地とされた。

さしも権勢を誇った忠清にも最後の時が来た。延宝8年、死期が迫った家綱の後継将軍に鎌倉幕府の旧例にならって京都の有栖川宮幸仁親王擁立を提言、重臣らは同意したが、新参老中の堀田正俊が弟綱吉を主張した。正俊は一人居残ると將軍寢所に伺候した。家綱はその場に綱吉を召出し、後事を託した。死の2日前のことであった。綱吉は正俊に下馬先屋敷を与えて大老とした。

⑥松平川越藩15万石Ⅱ寛延2年Ⅰ
明和7年朝矩

この松平家は徳川家康の次男結城(松平)秀康の5男直基から始まる、通称「越前家支藩、松平大和守家」という。姫路、山形、白河、川越城などを繰返し国替えし

た。寛延2年(1749)、5代朝矩が川越15万石に転封、21年間、八幡村などを領有した。

菩提寺は川越の喜多院、家康ブレーンの一人天海の再興で、江戸城から移築した3代將軍「家光誕生の間」、春日局の部屋が現存する。奥まった「松平大和守家廟所」に墓碑5基が並ぶ。朝矩の墓は(靈鷲院殿大居士)、顕彰碑を兼ねた五輪塔でおおよそ3mある。

⑦阿部佐貫藩1万石Ⅱ文化8年Ⅰ
天保3年正簡、正あき

安部氏。3代將軍家光の老中で、岩槻9万石をえた、阿部重次の次男正春が分知して成立、宝永7年(1710)、正鎮が一時廃城していた佐貫1万6000石に移された。2000両の恩貸を受けて再築した。城跡は現在山林や農地で、大手口の石垣、土塁、空堀が現存する。

八幡村領は文化8年(1811)

1)からの2代21年間。最後の藩主・正恒は明治維新の時、佐幕方を支援、追撃した薩摩、大村、津連合軍の命にしたがって城を開放して謹慎、武器弾薬を引渡した。

意地を貫いた最後のお殿様

⑧林貝淵1万石(のち真武根藩)

Ⅱ天保5年Ⅰ12年忠英

清和源氏義光流。「寛政譜」によれば、忠政が300石で家康に仕え、3代忠勝が始めて市原に采地をえた。中興を9代忠英とする。11代將軍家斉の「側御用取次」となり、以後、加増を繰返して、文政8年(1825)木更津市で貝淵1万石、若年寄、最大1万8000石に達した。八幡村108石はその最盛期、天保5年(1834)

4)に成立するが、わずか7年で終わる。天保12年家斉が長征、大御所家斉を擁した西の丸勢力は老中水野忠邦によって追放された。忠英は若年寄を罷免され、8000石減封、差控えを命じられた。次の忠旭のとき、同じ木更津市内に真武根陣屋を興して移転。幕末風雲急を告げた慶応3年(1867)最後の藩主となった「熱血藩主」忠崇が「明治維新の戦い」で反官軍の兵をあげる。自ら脱藩して陣屋を自焼、藩兵70人を率いて箱根関所などを転戦したが「奥羽越列藩同盟」陣中で降伏、300諸侯唯一、所領を没収された。維新後は職業を転々、赤貧の生活を送った。年を取って東京豊島区の娘アパートに引取られて昭和16年逝去。行年92歳。武士としての意地を貫き通した「最後のお殿



請西陣屋碑



晩年の林忠崇



佐貫城跡



寛政譜の酒井雅楽頭家

様」のあまりにも悲しすぎる生涯でもあった。

城地は木更津駅南東5km、江戸湾をのぞむ台地上に立地。現況は畑や雑種地で、「陣屋跡碑」が立っている。菩提寺は愛宕・青松寺で、普通の角柱碑「林家之墓」を代々合祀とする。また、ゆかりの市原市石川・龍溪寺には初代忠政以下の宝きょう印塔が現存している。

明治元年、菊間藩5万石が成立

⑨水野菊間藩5万石 明治元年 4年忠敬

清和源氏で家康の生母お大の実家・結城水野家の分家。忠清が秀忠に仕えて松本6万石が与えられるが、6代忠恒が刃傷事件を起こして領地を没収される。しかし功績の家柄としておじ忠毅が旗本6

000石で名跡の相続が許され、次の忠友と忠成が老中に進んで、沼津5万石が定った。

最後の藩主忠敬は慶応2年養子相続、「明治維新の戦い」は早々と「勤皇詔書」を提出、明治元年徳川宗家の静岡藩70万石移封にともなつて、市原郡内への転封が命じられた。忠敬はいったん江戸屋敷に居住、翌2年始めての国入り。築城工事は菊間台地上の字雲の境で始まったが未完成で終わった。

6月「版籍」を奉還、菊間藩知事となり、4年7月「廃藩置県」で東京へ召集された。17年子爵、晩年は宮内庁御歌所に出仕した。40年逝去。菩提寺はお大が眠る伝通院寺中の真珠院で、「水野家之墓」に合祀されている。

江戸後期の旗本知行地

①旗本8700石水野家 宝永4年 明治維新、忠顯以下7代徳川家康のいとこで、生母お大の姉長男長勝に始まる。初め織田信長、北条氏邦に仕えたが、滅亡後、家康に与して800石、埼玉県の寄居町赤浜に陣屋を構えた。城地はよく現存している。

宝永4年(1707) 3代忠顯が定火消し6000石で八幡に采知を得、政勝、貞利が11代將軍家斉側衆に進む。隠居して大御所となった家斉は迎合上手な側近たちで、水野忠邦の「天保の改革」で失脚、貞直火消しの時、明治維新。菩提寺は寄居町の昌国寺。歴代当主墓が現存する。

②旗本7000石酒井家 寛永10年 元禄ころ忠吉、忠経酒井雅楽頭家の分家。忠利の3

男で大老忠清の弟忠吉が秀忠に付けられて3000石を分知。寛永10年八幡村などを加増され都合7000石が確定した。長く大奥財政を担当、万治2年(1659)老齢のため隠居。3女は高家吉良義冬に嫁ぎ「忠臣蔵」の敵役・吉良義央の母となった。

③旗本3400石永井家。寛永3年 明治維新、直貞以下9代古河永井直勝の3男直貞が、八幡村遺領のうちの分知されて成立。書院番、大番が多く、最後の直景は火事場見回り、使番を勤めた。

④旗本2200石、河野家 宝永4年 明治維新、通護以下7代甲斐の武田信玄に仕え、勝頼没落後家康に与した。盛政が関ヶ原合戦、大坂の陣戦功で一家を興し、次男通重も長崎奉行、檜奉行で1500石をえた。宝永年間、八幡



水野家の墓



水野忠勝陣屋跡



明治の藩士懇親会での忠敬父子ら



未完成のまま終わった
菊間藩庁予定地跡

村領が成立。子孫は小姓組、書院番で8代通訓は長崎奉行、最後の通和は歩兵奉行を勤めた。菩提寺は中野区の長龍寺。当家が開基、旧武田遺臣の墓が多い。

娘お登美が11代將軍生母になる

⑤旗本2000石、岩本家Ⅱ天明7年、明治維新、正利以下5代甲斐源氏。正次が紀伊頼房に仕え、吉宗の8代將軍就任にしたがった。当初りん米300俵の御家人であったが、3代正利の娘お登美が一ツ橋治済の側室となり、長男家斉を生んで11代將軍に迎えられたことで家運が開ける。正利は將軍義父として、側衆2000石に進み、次の正倫も小納戸御膳番、西の丸留守居を勤めた。お登美は文化14年68歳の天寿をまっ

う、上野寛永寺葬、（慈徳院殿大姉）とおくり名されたが、近年歴代正室墓に合祀された。

⑥旗本1200石村上家Ⅱ宝永4年、明治維新、正春以下6代元は小早川秀秋の重臣。関ヶ原の戦いのとき、西軍軍中より徳川家に内応した内政手腕を買われた吉正が1400石を得、采地を八幡村に移した。正清は西の丸留守居、正親が使番、先手弓頭で明治維新になった。

⑦旗本250石、佐野家Ⅱ宝永4年、明治維新、政国から7代藤原秀郷流。正重が家康に仕え、3代政国が采地を甲斐から八幡に移された。5代政信が新番組頭で明治維新となった。

「田沼政治」支えた勘定奉行

えた。菩提寺は北烏山の幸龍寺で昭和改葬の「先祖代々の墓」に眠る。

およそ5万石を支配した上総代官

幕府直轄領は「天領」ともいった。「上総代官」が、幕府直轄地を支配して民政を司るとともに、年貢の取立てや治安維持、河川、道路の修復などを担当した。勘定奉行支配。関東代官とともに定府で普段は隅田川に近い「馬喰町御用屋敷」で執務、必要に応じて現地に赴いた。

最後の上総代官は小川達太郎といった。幕府役人では最下層に属する御家人、りん米150俵にすぎなかったが、5万石以上の直轄地を支配、慶応4年、徳川幕府の崩壊でその任務を終えた。



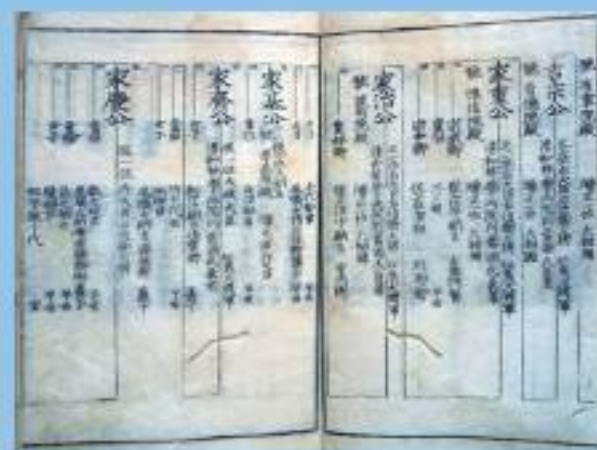
大河ドラマに登場した松本秀持



田沼意次



11代將軍家斉



文政大名武鑑の徳川吉宗と家斉

八幡村の中心部、観音町入口から南町・無量寺までのおよそ1kmが「宿（しゆく）」（場）で、往還路耕地210余町歩の水田を潤しを「宿通り」といった。江戸時代、宿の出入り口には特別な備えがあった。観音町入口の小川はゼンリンの「住宅地図」は「雁田川」だが、八幡公民館の「八幡町大観」は字名の金台川、大金台橋をあてている。いまは暗渠になったが、もとは幼稚園横町の裏側から称念寺裏、ベイシアの観音町周り「観音町船溜り」を迂回して東京湾に流した。昭和前期はのり業者が多く、のりとり「ペカ舟」が碇泊、「観音町みお」ともいった。

雁田川は慶長のころ、千葉椎名郡茂呂村の名主錫田五郎右衛門が、村田川の川水を引込んで開削した「草刈堰」の支流で、「毎年、春の彼岸入りに川水の一部を堰溜し、

秋の彼岸入りに落水をなす」。八幡側「中川溝」は菊間村、八幡村に残り水や生活排水を東京湾に流した。

宿出入口の観音町入り口は緊急時、雁田川と土堤で「防御線」を張った。また五所側、宿入口の無量寺前に升形が置かれた。大正ころまでの房総往還本道で、小沢酒店横の小路を左に折れて3、4軒先に最初のクランク（枅形）、右折して2つ目の枅形で旧道に戻った。緊急時は道路を閉鎖して関所を築き、砲陣も布ける仕組みであったが、幸い八幡が戦火にまみれることはなかった。

往還は南新田から間宿（あいのしゆく）の五所村をへて、五井村

こうさつば

つぎた

てんま

高札場と継立て伝馬所（八幡1098ほか）

高札は武道館前、伝馬所は大鳥居前か

江戸時代、「宿場」の中心で、村一番の盛り場に「高札場」が置かれた。高札は幕府や領主が定めた法度や掟書きを板書したもので、八幡宿では武道館前の小さな交差点にあった。内容は儒教道徳「五倫の奨励」「徒党の禁」「切支丹の嘉右衛門と問屋、旗本・佐野領名主（中嶋）徳太郎連名文書が2通。札場前を通るとき、被り物を取り一礼した。

高札場近くに継立伝馬所（てんましよ）が置かれた。問屋場（といやば）関係資料が八幡宮と寺嶋家文書にある。嘉永6年（1853）「八幡問屋廻状受取り」は、最後の八幡問屋である、中嶋徳「覚え、一、御廻状1通、ただし

白木御箱入り、右のとおり即刻先村へ御順達仕るべく候。以上 丑4月1日、問屋徳太郎（印）上総八幡問屋。慶応元年（1865）「八幡浦塩浜開発留記」は、八幡宮御役人中あて、幕府直轄領名主・安政4年（1857）「年貢米など取決め」連名中、佐野様組名主、組頭、百姓代の後、問屋平十郎が押印、江戸後期「問屋給金受取りは問屋弥七が八幡村名主（寺嶋）好次郎にあてている。

太郎の明治10年ころ、「八幡宿野



大正初めの「房総往還」、左が東屋旅館



江戸後期の八幡、「五所海岸絵図」



「房総往還」無量寺前の旧道枅形跡

帳」による所有地は「字片町、八幡1096番 6間×4間、1098番 7間×3間」の3筆、その後の区画整理で現在の番地とは異なる。八幡宮大鳥居前の織田自転車店、北嶋写真館ビル周辺か。元は八幡宮別当寺・霊応寺の境内地で、八幡宮絵図は、「宿方屋敷」として記している。「問屋」では馬3匹を常備、余は周辺村々が助役した。姉崎、五井、八幡の3駅は距離が短く「つけ通し」が行われたという。八幡宿には正式な本陣はなく、年番名主が兼帯したが、先を急ぐ参勤交代の大名たちが休泊することはなかった。

江戸初め、幕府は五街道以下、全国の主要道路に一里塚を築き、2、3里ごとに設けた宿場に問屋場を置いて人馬を常備し、公用の荷物、書状の継送り、公私の旅行者の宿泊などの便宜をはかった。助郷の村々が人馬を補充し、大名

が宿泊する本陣、脇本陣、一般旅行者の旅籠や木賃宿が設けられた。一方、房総往還などの小規模脇往還にはこうした制度はなかったが、参勤交代や公用旅行者があった。その規模は辛うじて人馬が用意できるものなどさまざま、市原の各宿では、名主層が慣例的にこれらの業務を引受けた。八幡問屋では馬3匹を常備、余は周辺村々が助役した。姉崎、五井、八幡の3駅は距離が短く「つけ通し」が行われたという。八幡宿には正式な本陣はなく、年番名主が兼帯したが、先を急ぐ参勤交代の大名たちが休泊することはなかった。

「若宮八幡神社旧蔵文書」江戸後期、「(助郷・菊間村)八幡役触れあて人足」には、

「2月11日2人、3月17日1人、3月21日馬1疋(匹)、人1

人、27日伝馬1匹、6日2人、9日2人、29日馬1匹、□月5日1人、16日馬1匹、27日馬1匹、9日馬1匹、1人、12日馬、1人、10月16日馬1匹、12月1日馬1匹1人。(ほかに中川人足5人)メ賃12貫724文、昼役40人、代5貫文、惣高役出銭分メ18貫584文」。助郷額を村内6給に高割りするためまとめとみられる。

「市原の古文書研究会」佐野彪

さんが明治2年旧上総(現在は千葉県市)「土気駅問屋往還御用留」全14冊を所蔵する。全607通中、八幡宿を通行する先触れは12通。もっとも簡潔な1枚を読むと「二、馬一匹 右は明22日桜井村出立、宮谷(みやざく)営まで引き上げ候あいだ、差支えなく取計らうべく候なり。3月21日

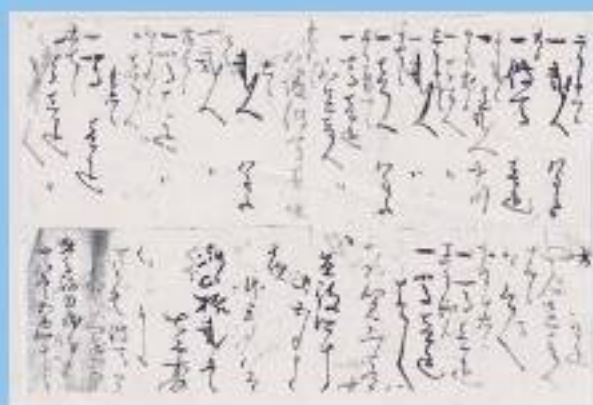
宮谷県(房総旧幕領県)付属

佐藤左衛門(印) 木更津一泊、奈良輪、姉(ケ)崎、五井、八幡、泊潤井戸、野田、土気、大綱 右宿村役人」とあり、八幡観音町入口から潤井戸に抜け、土気、大綱に通じた当時の道路マップがみえる。継送りには金銭と賃金帳が添えられていて、必要賃金を差引き、残金と封印された「御用状」を次に送ったとの記載も興味深い。

町の中心地であった高札場や問屋周辺に旅籠や木賃宿、大小商店などが立並んだと考えられるが、残念ながら詳しい村図が残されていない。明治10年ころの「八幡宿野帳」から宿通りを拾うと、現在片倉病院などのある八幡1245番地は27間×11間ほか2筆、川上親三郎所有地、家作と土地持ち。通称「丸かしや」は家紋丸柏のな



「土気駅往還御用留め」



菊間村の「八幡役触れあて人足」



八幡武道館前に高札場が置かれた



「陣屋絵図面」に記された「高札場」

まり、川上家本家で元名主家という。戦前は正金堂菓舗、戦後は小間物屋で櫛、かんざしなど装飾品、日用雑貨品を商った。

1270番地の福嶋商店は、8間間口の奥行き21間。元は切妻屋根瓦葺きの商家造りで、屋根の棟瓦と鬼瓦が宿場の名残をとどめたが、平成後期、アパートに建替えられた。当家過去帳は初代を「定平（さだべい）明治5年没」とし、代々が通称（家号）の定平を名乗る。安政7年か「酉8月29日」市川本店文書は

「覚え、一、850文行平鍋、一、500文油さし、一、180文6寸盆、一、124文菜切り包丁、一、1貫660文、内660文受取り。」

差引き960文たしかに請取り申し候。金3朱にてつり300文相

渡す。福嶋定平（印）「定上総八幡福嶋」一、明治7年「八幡小学校入費判取り帳」は「金物、福嶋定平（印）」（定武州出張上総八幡福嶋）を記している。紳士録にあたる、

明治40年「房総人名辞書」は「定、福嶋商店、福嶋定平。よろず銅鉄、刃物、銃丸、ペンキ農養具、荒物、大工一切を商う」としている。

1276番地周辺、サカモト洋品店などの一帯は、明治の八幡を代表する大富豪であった村田市平商店（村市）であった。明治26年「千葉県博覧図」「呉服太物唐物類および荒物、繭生糸売買所・村田市平商店」がその繁栄ぶりを物語る。

宿通りにそって間口5間。標章の政を染めこんだ暖簾（のれん）の下に、上がりかまちに腰をかけた婦人客と、畳敷きの店、帳場が

覗く。呉服は絹織物、太物は綿や麻織物をいう。左に分家か武治郎

の初代八幡郵便局。窓口や四角いポスト、郵便夫の服装や配達車もみて楽しい。道路に目を転じると馬車や人力車、行交う通行人にも明治八幡の活気が伝わる。

母家は2階建て寄棟屋根、大きくガラス戸を巡らす。玉石を配して噴水をあげた日本庭園に、孔雀（くじやく）や鶴が飼育されている。現存する高いレンガ塀と庭跡、鬼瓦などが盛時を偲ばせる。

房総往還の道路1本を挟んだ「向店（むかいみせ）」は生糸工場。店造りの「繭（まゆ）買入れ所」と蔵造りの繭貯場、2階建ての製糸場で大勢の女工さんたちが働いている。生糸は蚕（かいこ）が作る繭を糸にした。明治期、生糸輸出は外貨獲得産業として、国力増

強の推進力となった。

初代市兵衛は江戸後期、関西から「きせる行商」で訪れた八幡宿で良縁に恵まれて村田家に婿入りする。きせるは16世紀、南蛮人がもたらした喫煙具で、吸い口や雁首の金属部分に金銀の装飾をあしらった華やかなデザインがもてはやされた。

墓誌や子孫家などによる村田家系図は「①市兵衛天明7年没、②市兵衛文化2年、③市兵衛文化13年、④市兵衛（邦貞）慶応3年、⑤市兵衛（邦胤）明治27年⑥市平大正12年⑦市兵衛」となる。「千

葉県博覧図」の村田家はもともと華やかだった5代市兵衛時代のこゝと、市川本店や鈴木陣屋家とも姻戚関係にあり、経営は万全とみえたが、7代の子が早世して子孫が途絶えた。



大正13年の「村市商店」大売出し



明治「千葉県博覧図」の村市商店



昭和中ごろの福嶋商店前



安政7年、福嶋金物店の領収覚え

寺嶋医院と旗本村上家名主文書

(八幡 1349)

およそ1万点を県文書館に寄贈

八幡村の「領主変遷」は175ページに紹介した。それぞれの領主ごとに名主家が置かれたので、延べ数十軒にも達したが、「名主文書」を今日に伝えるのは「宿通り」に面した「観音町」の寺嶋医院一軒にとどまっている。

寺嶋家が名主を勤めた旗本村上家は「両番格」1200石。代々が書院番、小姓番など、番方を勤めた。明治維新期の所領配置は丹波国桑田郡(京都府)

柿花村105石余
鹿谷村445石余
太田村145石余
上総国夷隅郡(千葉県御宿町)

上布施村496石余
市原郡八幡村178石余
実高は1369石余であった。

江戸屋敷は本所三つ目橋791坪。現在墨田区緑4丁目、グリーンホームなど。文久3年(1863)当家由次郎が公用出張の、「道中諸人用控え」を残した。菩提寺は台東区谷中の臨済宗・臨江寺、古墓はなく平成の角柱碑「村上家之墓」が家紋の「丸に上の字」を刻んでいる。

4代庄五郎が「名字帯刀」を許される

寺嶋家は江戸時代、旗本村上組

⑧久次郎(安政4年〜大正12年)
文久元年(1861)村上組

「宗門人別帳」は、「浄土宗称念寺旦那(檀家)」

名主好次郎22歳
同寺旦那 同人父庄五郎58歳
同寺旦那 同人母ひな 53歳
同寺旦那 同人叔母うた
好次郎は古市場村・足立家の次女里子を妻とし、長女たかの婿養子鶴田省三次男久次郎が7代を継いだ。

①庄八(宝永ころ、名主)
②庄八(宝暦ころ、名主)
③庄五郎(明和〜寛政、組頭)
④庄五郎(〜天保、組頭、名主、名字帯刀)
⑤庄五郎(文化〜文政5年、組頭、名主、名字)
⑥由次郎(文政〜安政、組頭、名主、名字)
⑦好次郎(天保元年〜明治2年、組頭、名主、名字)

寺嶋家は代々、名主職のほかに、農業経営、船運、金融、醤油醸造、医師を生業とし、この間江戸中期以降の文書類を伝承したが、平成11年医院建替えにあたって、全文書を千葉県立文書館に寄贈した。史料は現在、整理作業のため非公開。幸い寺嶋雅史院長の弟滋夫さんから、「文書目録」など個人の



寺嶋家文書「名主、名字帯刀御免覚え」



名主文書を所蔵した寺嶋医院



研究データをいただいた。

文化5年、庄五郎への「名主申渡し候覚え」は「右このたび、名主役仰付けられ候、以来は別して御ため第一に存じ奉り、村方取締り、小前、百姓に至るまで非理これなきよう、大切に役儀相勤め申すべく候ものなり」。

同8年「名字帯刀御免覚え」は「右の者、（中略）名主役申付け候ところ、村方出入りがましき儀もこれなく、なおさら近來別して骨折り相勤め次第一段のことに候、右につき以来名字帯刀差しゆるし候、なお出精、取締り第一に厚く心がけ相勤むべきものなり」。

文政5年（1822）後任名主・源右衛門との引継ぎ文書は「水帳（検地帳）、人別帳、名寄せ帳など11口、延享元年村絵図、当番重郎方にこれあり候」とする。

年番名主持回りか、残念ながら現存しない。

当家が所蔵する主な名主文書は寛政2年「潤井戸組合との霞役出入り済口（すみくち）証文

文化2年ほか「先納金下知書

「3年ほか「年貢皆済目録

「11年「定免割付

「14年「地頭所類焼夫金

文久3年「將軍上洛供軍用金

元治元年「違作（不作）減免にと

もなう申合わせ議定書

慶応3年「10年間年貢書上

「4年「義軍府の戦い、地頭所

疎開家族状況報告

明治元年「八幡に陣屋取立願い

「2年「年貢先納分書上げ

「4年「高反別書上げ

などがある。

江戸時代の年貢徴収は納税額を決める「割付」に始まり、「皆済目

録」で終わる。割付は当初は毎年作柄を「検見（けんみ）」したが、

期間を定額とした「定免（じようめん）」と代わり、それまで領主が発行した「皆済証文」も「皆済目録」に領収印を付して返却された。また、本来米で支払うべき「年貢米」も米相場換算で金納となった。

一方村側も黙ってはいない。相給名主と共闘、幕末「過去10年間年貢書上げ」は、うち4年間で不作減免を認めさせた。江戸後期、農業技術の進歩は著しく、反当り収穫は大幅に向上したが税率は変わらず、本百姓の実収入が増加した。搾取する側とされる側、領主と領民の駆引きが名主文書に垣間みえる。

明治2年、新政府の宮谷（みやざく）県知県事に差出した「年貢先納分書上げ」は、宮谷県支配か

ら菊間藩領への引継ぎ資料として提出させられたものだが、巻頭の「慶応4年7月15日夕刻（着）、8月朔日にて大多喜へ御引移り、知県事柴山文平様御出張に当村東屋御宿、仮御役所寄せ場」が、八幡の明治維新史の研究資料として貴重だ。島野村「名主日記」「知県事役所より御呼出しにつき訴答、一同東屋本陣へまかり出候」とも符合する。

柴山は久留米藩士、維新の戦いが始まると「上総、房州監察兼知県事」、2年2月宮谷知県事と改称、大網白里市の本國寺を知県事役所とし、この間八幡地区が知県事支配から菊間藩領となった。このほか江戸後期「市原出途絵図」や、明治の土地造成事業などの地方（ちかた）文書多数が含まれている。



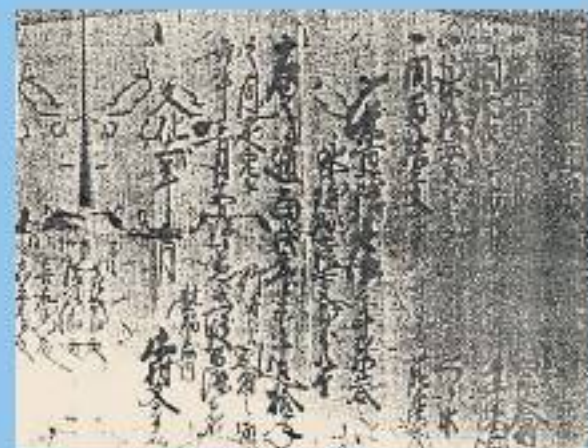
明治維新期の房総知県事
柴山 典



昭和30年代の「八幡宿観音町」



安政4年「先納金書下し」



文化11年「定免割付の覚え」

八幡梅谷家文書

(八幡1039)

庶民が伝えた庶民の記録

八幡「片町」、バス通りから1本海側に入った小路に梅谷家があった。江戸時代に遡る旧家で、元は八幡宮領高持ちの「本百姓」だが家高は伝わらない。弘化2年(1845)「八幡宮領宗門人別帳」は、「真言宗満徳寺旦那(檀家)

百姓伊勢松30歳
娘 はつ7歳、

飯香岡八幡宮の文政13年(1830)奉納大絵馬「お伊勢参り」に南町・伊勢松があり、万延元年(1860)、生実藩1万石藩主、森川出羽守当杜御参詣は伊勢松が御用掛りとして、宮経費支払いなどを担当している。

当家伝承によれば、伊勢松は伊勢神宮の「御札」を売り歩く「御師(おんし)」で、当地に滞在してムコ養子に迎えられた。「読み書きそろばん」が得意で、商才に長けたという。当地にムコ養子が目立つのはこの地方の「長子相続風習」に関係する。長子は男女を問わない第1子をいう。女ならムコ取りとなり、頭のよい働き者を選べる。地元には「ムコが3代続けば蔵が建つ」ということわざがある。

元八幡宮境内地にある当家は、明治6年「あら絵図写し」が「百姓40坪」、明治10年ころ「八幡宿野帳」が南町1039梅谷伊勢松、

11間6分×8間1分、明治13年

「地券」は、「上総国市原郡八幡宿1039、字南町、宅地3畝3歩、持主梅谷伊勢松、地価金5円27銭」、裏書は、明治10年、相続者はつのムコ養子・梅谷良蔵を記す。

当家の所蔵文書はおよそ500点、うち江戸時代のは小作米を地主に払った安政2年(1855)「明治4年」

「御年貢判取り帳」、「米を売買した元治2年(1865)「米の通い」、嘉永2年とに取引先名ページが切取られ(1849)「日掛け取集め請取りてい。この年、辰五郎舟など八帳」、雑記帳の文久元年(1861)「おぼえ」、片町かじや彦兵衛60俵、大豆3俵などを出荷、初ほか領収書がある。庶民の生活史ともいえるこうした文書類が現存するケースは珍しく、貴重な郷土資料と言える。

「判取り帳」は金銭や商品の授受で証印を請ける帳面。梅谷家は

八幡宮の本百姓ではあったが、反別は少なく、土地持ちから借地耕作もした。明治元年は、大坂屋長兵衛、米屋徳右衛門など4人に小作米として、4斗2升入り10俵余を支払った。小作米配分はおおむね領主年貢30%、地主取り分40%、小作人30%であり、ランク中田10反を小作した計算になる。

「通い帳」はツケ売り帳で、江戸の米穀商との通いだが、残念な865)「米の通い」、嘉永2年とに取引先名ページが切取られ(1849)「日掛け取集め請取りてい。この年、辰五郎舟など八帳」、雑記帳の文久元年(1861)「おぼえ」、片町かじや彦兵衛60俵、大豆3俵などを出荷、初ほか領収書がある。庶民の生活史ともいえるこうした文書類が現存するケースは珍しく、貴重な郷土資料と言える。



明治13年の千葉県地券



安政2年
「小作米受取り」



安政2年
「御年貢判取り帳」



八幡片町当時の梅谷佳弘家



金杉浜塩田の開発

(八幡海岸通)

250年前の大塩田、夢のまた夢

温暖な気候と遠浅な砂浜に恵まれた市原の湾岸部では早くから塩造りが行われた。「市原郡誌」は万治元年(1658)沿岸村むらに製塩業260余戸、塩田8町余を記し、徳川家康が江戸の塩造り拠点とした「行徳塩」が、五井の製塩技術を取り入れたと伝わる。

江戸中期、10代將軍徳川家治時代に老中となった田沼意次はまいた。元々金杉浜塩田にとって厳しい環境下でのスタートであった。天明2年(1782)、江戸金杉村(現在台東区下谷)の庄左衛門と坂本村又兵衛が八幡村から五所、金杉村にかけての干潟地に着

たり、新田や塩田開発、産業振興に力を注いだ。田沼政治が続けばもっと早い時期に「鎖国」が終了したとみる歴史研究者も多い。

当時、塩の生産地は赤穂など瀬戸内海で全国の9割を占めたが、乱開発で値崩れし、コストダウンのため薪焼きを石炭焼きに替えた。生産調整に取組んだりもしていた。元々金杉浜塩田にとって厳しい環境下でのスタートであった。

天明2年(1782)、江戸金杉村(現在台東区下谷)の庄左衛門と坂本村又兵衛が八幡村から五所、金杉村にかけての干潟地に着

眼、およそ150町歩(50万坪)の塩田開発を勘定奉行に願出て、八幡宮除地と八幡港航路を除く85町歩余(26万坪)が許可された。

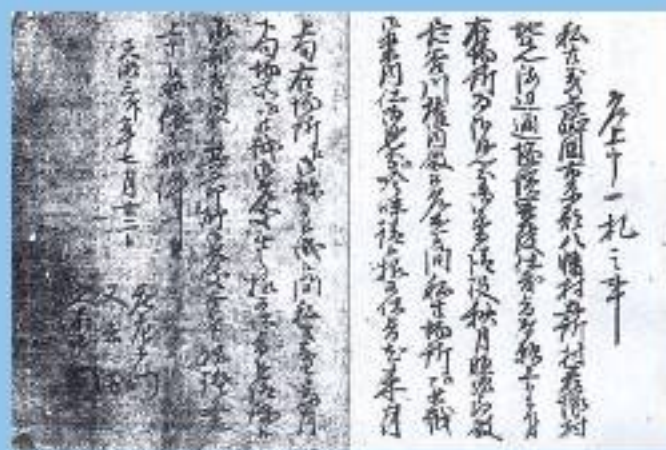
2人は現地に移り住み、江戸から手先の者多数を引連れて工事を指揮した。塩田は3年間の工事期間をへた天明6年に竣工、総工費3000両余、現在のお金で5、6億円か。江戸商人と地元有志らが金主として支援した。幕府への地代は、建設期間の3か年分38両3分と永217文余を先納、7年の役永は8年3月、8年分は翌寛政元年に皆済している。

完成した塩田は庄左衛門の出身地名をとって「金杉浜新田(塩田)」と名付けられた。参考図は明治の「迅速測図」に重ねた。現在の八幡海岸通、五井金杉、五井海岸の大半、飛び地は八幡浦と八

幡海岸通一帯で。その範囲は昭和30年代の海面埋立て地に近い。いまから250年の昔、これだけの大事業が個人の力で完成したことに感動させられる。

飯香岡八幡宮と金杉村旧名主斎藤操家が「塩田大絵図」を所蔵する。満潮時の海面より塩田が低い「入浜式」で、始めに「塩田囲い堤」を築く。潮引込みのための「大堀」が4か所、潮を隅々まで運ぶ「小堀」を通じておよそ1800か所にも及ぶ塩田に導く。海水は毛細管現象で浸潤、上昇を繰り返しながらさらに天日で蒸発して「鹹水(かんすい=濃厚潮水)」を作る。鹹水を陸上の「釜場」に運んで煮詰めた。

しかし、わずか4年後の寛政3年(1792)の高潮は、苦心、ようやく完成したばかりの塩田を



勘定奉行所あて「金杉浜塩田開発文書」



庄左衛門の「行状碑拓本」



藤田家の天明5年「棟札」



八幡宮が保管する
巨大「金杉浜塩田図」

無残にも呑み込んだ。「稿本五井21石余、44年製塩業の官営化で町歴史年表」は、「天明度開発塩すべてが廃業した。

田は寛政2年と3年、2回の洪水のため海側の塩田と水田囲い堤が破壊された」。寛政3年9月4日の角柱碑、正面「天明8年12月19日の台風は海鳴り、江戸湾一帯に高波が押寄せた。返しの波に行徳、昨居士」を刻む。没後の台風被害船橋塩浜一円につぶれ民家流出す、をどんな思いで見守ったことだろう。残る3面は功績を讃える行状そのほか家屋吹損じ、川々水あふる（続徳川実記）。未曾有の大災禍で、十三回忌の寛政12年、碑文害に金杉浜塩田も壊滅的被害を受けた。書き、養子敬義が立てた。

明治5年「木更津県庁あて金杉浜新田塩浜起立取調べ」によれば、「塩浜元反別85町余、文化、安政3口田畑起返し反別16町余、引残し反別68町余、当時塩稼ぎ反別19町余、浪欠け荒浜反別49町余」と総括、13年「千葉県統計」は五所金杉村、君塚村など郡内塩浜43町余、竈（かまど）数37、製塩量7

庄左衛門の墓は五所共同墓地の斎藤一久家墓所にある。高さ70cmの角柱碑、正面「天明8年12月19日の命日と院号「自性院念譽道」を刻む。没後の台風被害船橋塩浜一円につぶれ民家流出す、をどんな思いで見守ったことだろう。残る3面は功績を讃える行状そのほか家屋吹損じ、川々水あふる（続徳川実記）。未曾有の大災禍で、十三回忌の寛政12年、碑文害に金杉浜塩田も壊滅的被害を受けた。書き、養子敬義が立てた。

庄左衛門の子孫は、2代吉左衛門安政3年没、3代留五郎明治6年没と続いた。開発者の一人又兵衛の子孫は今井芳雄家で、金主の藤田常治家は旧母家の棟札「藤田善六、せがれ同徳兵衛、天明5年春家作」を所蔵する。詳細は「市原の古文書研究第2集、金杉浜塩田資料集成」を参照されたい。

さるたひこ

猿田彦神社

唐破風庚申塔と遷宮記念碑

(八幡1)

八幡と五所の境界、いわゆる市

「第1番(地)、5等乙(等級)、字南新田町、地主村田市平(村市)

田3反7畝3歩、

この収穫米3石3斗6合

地価金137円68銭1厘

同3(%)税金4円13銭

同2半(明治10年の変更税率)

税金3円44銭2厘

「福来橋」といった。兩岸には糸をくりなす青柳が茂り、水車が回る景勝の地であったという。夕涼みの家族づれで賑わったことなど、いまや偲ぶ縁(よすが)がない。

南新田は江戸時代の開墾、戦後まで農地だった。「村市」は明治八幡屈指の大富豪で、生糸、呉服太物、農業経営などで財をなした。

明治10年ころ「(八幡宿)地価「街区」という呼び名があつてやや一筆限り帳、第1号」(八幡・寺こしい。南から北へ、南新田、南嶋家文書)によれば



昭和40年ころの八幡1番地



平成10年ころの海岸埋め立て地



埠頭裏海面の金杉浜塩田跡

町、浜本町横丁、八軒町、蔵町、伊勢町、山之内、新道、周地、仲町、観音町、観音町横丁、北町、北新田などである。

白金通りと国道297号線（通称大多喜街道）交差点横、ステークガスト、住宅情報館が、猿田彦神社と同じ3番地で、離れの三角街、大塚写真機店とレストラン・ピーターラビットの間に当社がある。

「猿田彦」は、天照大神（あまてらすおおかみ）の孫、瓊瓊杵尊（にぎのみこと）が高天原から日向の高千穂に降臨されたとき先導したとされる。容貌は人並み外れて大きく、鼻は天狗のように高い。のちに道の分岐点を守って邪悪の侵入を防止する道祖神として「庚申信仰」と結んだ。

「庚申塔」は庚申信仰の供養塔

で、庚申の日に講人たちが集まり、経文を唱え、懇親しながら夜を明かした。像は憤怒相の「青面金剛（しょうめんこんごう）」で、3目6手、右手の①は欠落、②は三又の鉾、③矢、左手は①羅索（けんさく＝わな）、②輪宝（車輪型の武器）、③弓を持っている。通常

付属する神使いの猿や鶏、邪鬼はない。左右側面は童子像と「元禄4年、真野五郎右門ほか11人を刻む。彫は優れるが、もとは路傍に置かれたので保存状態はやや劣る。総高1m30。

境内に「遷宮記念碑」が2基ある。大正6年の自然石は台石とも1m54ある。

「大正6年10月1日、台風にわかに起こり、怒涛（どとう）をついて来たり、河水膨溢（ぼういつ）し、堤を決（壊）し、福来橋畔の古

祠まさに害を被らんとす」、大正6年の高潮は八幡町一帯に床上浸水などの被害をもたらせた。家が浮いた、胸まで浸かった、五大力船が町に流れた、などの伝承がある。

昭和36年「遷宮記念碑」は「往昔（おおせき）以来、福貴橋畔に鎮座まし、明治年間に至る。世話人堀口兼太郎、大野富蔵の両氏を始め信徒一同により初めて社殿を造られる。ついで大正6年来襲せる大具風（高潮）損壊、改築して現在に及ぶ。

昭和20年以後国情の大変革にともない農地の改革、海面百余万坪の埋立て、京葉工業地帯造成による道路の新設、新川の掘削に、三度社域を更（かわ）うるに至る。

幸い市原町長宮吉長門氏の配慮により代替地として現地の奉獻あり。長（としえ）に神慮（しん

りよ）を安んじ奉ることを得たり。昭和36年5月、社司市川教生氏厳かに遷宮式を行う」。

一方、飯香岡八幡宮「由緒本記」は、寛平2年（894）、猿

田彦太神が当地青野が原（市原橋周辺）への「漂着神」として、合祀伝承を次のように記している。

「吾は伊勢国五十鈴の川上に坐す猿田彦神なり。国家安泰、五穀豊穰、悪魔降伏のためここに顕る。

この地狭し、速やかに大神の広前（ひろまえ＝神仏の前庭）に遷座あるべし」と宣（のたま）う。早

速飯香岡八幡宮へ御遷座あらせられ、すなわち八幡宮の御相殿に鎮座奉る」。

境内に「馬頭観音像」が1基、総高69cmの駒形文字塔で、正面馬顔線画と「馬頭観世音」製作年号の嘉永6年を刻んでいる。



「庚申塔」と拓本



遷宮記念碑



神社鳥居と「猿田彦庚申塔堂」



「猿田彦神社碑」

八幡港と五大力船

(八幡1179ほか)

江戸の生活物資集積港として発達

「市原歴史博物館（アイミュージアム）」を訪れた人なら、巨大使って船溜りに戻った。スクリーンに登場した「五大力船」の迫力に、きっと感動されたに違いない。市原にはかつて、八幡、五井、姉崎、青柳、今津、椎津の6港（湊）に五大力船が所属、その象徴として発展したのが八幡港であった。

八幡港は江戸時代から明治時代、木更津と並ぶ上総屈指の物資津出し港であったが、干潟地で直接大船を接岸できず、あらかじめ人工運河の溜（みお）を掘り、小型の船（はしけ）舟を使って積荷を揚げ下しした。帰港は、あげ潮を利

用、帆柱を籠（こも）らせ、棹を揚げる。江戸（東京）での荷降ろしと荷揚げも同じ。佃島を中心とする江戸港は小網町の「川船積問屋」と

「はしけ問屋組合」が権利を握っていた。船乗りははしけ作業を待って、小網町河岸の八幡港専用杭に固定した。船乗りの定宿は「はしけ宿」で、市川本店文書は、「定宿、霊岸島湊町の上総屋久兵衛」を記している。

八幡港は浜本町みおと南町（八幡宮）みおの2か所にあった。五所から八幡宮にかけて微高地で、中世から港があった可能性が高い。

天正18年（1590）徳川家康

の江戸入部で、徳川家直轄領と中堅譜代重臣領となった。市原から江戸への「年貢廻米」はこのとき始まった。「飯香岡八幡宮」に慶長19年（1614）の「大坂冬の陣」直前、南町みおが領主年貢米の津出し港として開掘されたことを示す「（新規みお堀割）拝借地証文」が保存されている。

「八幡宿駅西口複合施設」隣り、市原看護専門学校とトリアルへの引込み道と延長する埋立て地区、白金通り交差点の一角で

「八幡宮御除地見通し480間（長さ）、上中町間、地底尻8間（堀巾）、山岸（字名）南堀間、同東西16間、このたび御運送みお地、書面の通り拝借申すところ実正なり。右冥加として1両ずつ年々相納め申し候」と年月日、村

役人惣代善六、利兵衛、羽左衛門、運送、蔵地守善右衛門押印、あて先八幡宮御役所となっている。

また、同社「由緒本記」は、造立につき、蔵屋敷に貸地の分、間地、堅90間、横19間、本多佐渡守（正信）、本多上野介（正純）永井信濃守（尚政）3給地頭方へ貸地なり」と、幕府創世期の重臣でもあった、八幡村の初期領主名を記した。中期は堀、酒井藩、旗本永井家などをへて返還、大正、昭和時代はのり採り舟が占めた。

一方浜本町みおは、南町みおと同時期か、それ以前か、船仲間が管理した。みおすじ跡は、国道16号線の飯香岡橋先三差路信号と「八幡水門」が目印。正面に広がる水路は「八幡運河」で、右折して東京湾に導かれる。かつて一面



ベイシア周辺の「船溜り跡」



東京湾の潮の香り漂う「みお筋跡」

慶長19年
「新規みお拝借地証文」



の干潟地に開いたみお筋跡で、五大力船はこの運河を伝って河岸地をめざした。京葉臨海鉄道の貨物線に沿った小公園のコンクリート岸壁に昇ると、目の前に真っ青な海面が広がる。海鳥が飛び交い、潮の香りが漂う。多数のレジャーボートが係留、釣人の人影が写る。

アイミュージアム 「八幡港跡標柱」

みおすじから一直線、水神様と堅みお、白金通り交差点一帯は横みお（船溜まり）であった。水神横に歴史博物館アイミュージアムの史跡標柱YM-04「八幡港跡」が建つ。スマホをかざすと堅みおごしに臨んだ大正時代の八幡港の古写真と簡潔な解説がある。

「江戸時代以降、江戸・東京との海運拠点として五大力船などが碇

泊し、上総国内からの年貢米などを集積する港でした。周辺は五大力船の船主や商家、料亭などが立ち並びにぎやかな界隈となっていました。港は戦後に埋め立てられました。港は戦後に埋め立てられT字型となっていました。」

「堅みお」は陸地に作った引込み水路で、現在は区画造成されて住宅街になっている。「横みお」は「船だまり」で、五大力船の母港。入り切れない船は雁田川と接するベイシア裏や称念寺裏などに停泊した。

「横みお」いっぱい瓦ぶき、なまこ壁や板張りの、廻送問屋や船主などの倉庫が並んだ。荷物ははしけ船が中継、五大力船に荷揚げ、荷おろしした。八幡1179番地、浜本町町民館の「小字図」は共用の「荷揚げ場」になっている。

江戸時代、五大力船で到着した荷物の配達は「継立伝馬所」の仕事で、ときに馬方や大八車が五井や茂原、一の宮などに運んだ。

江戸と房総結ぶ 「小回し廻船」

「五大力船」は、江戸を中心とした海川両用の「小回し廻船」で、積載量50〜200石、掘割に乗り入れるため喫水が浅く、弦の外側に「棹走り」を設けた。わずか3〜5人の乗組員が多量の物資を運んだことから、その力強さを「五大力菩薩」に讃えた。

上総の表玄関、水陸海陸交通要衝に立地し、市原最大の港町であった八幡宿の繁栄は五大力船とともにあった。八幡港の河岸地である浜本町（街区）には廻送問屋と船主、船乗り、荷揚げ人足、船

大工のほか、穀物商、薪炭商、太物、小問物、薬種などの問屋商店や旅籠、湯屋、居酒屋、菓子屋などが軒をならべた。五大力船は年貢米や市原の特産物である炭や薪、木材、竹材、わら製品を積み、帰り船で衣類や薬、酒、日用品と「江戸文化」を持ち帰った。

天明9年（1787）「八幡村村鑑明細帳」による五大力船数は「一本株（株仲間数）30艘、当時（実数）12艘」、飯香岡八幡宮所蔵の寛政6年（1794）「八幡村五大力船船揃え図」は13艘を描き、最盛期の明治後期は30艘を数えた。

明治45年国鉄本更津線（現在の内房線）が開業、鉄道区間の広がり、自動車の普及につれて東京への物流は海運から陸運へと代わった。すでに津出し拠点港としての基盤を失った五大力船は、大正中



昭和初めの八幡港「横みお」



アイミュージアム
「五大力船」の1シーン



町の人たちが集まった「船おろし」



船を固定する「ぼん木立て」の
集まり

期から昭和初めにかけて次々と廃業していった。

八幡宿船改め所文書群を 発見

八幡公民館を本拠とした「市原の古文書研究会」が実施した八幡・市川本店文書調査の結果、明治6、7年の「千葉県八幡宿船改め所文書群」およそ1000点を発見、船数や航海記録、積荷明細などの詳細が明らかになった。

市川本店は八幡宮旧社家で、江戸後期から醤油醸造と酒類元卸を兼ねた。廃藩置県直後の第1回戸長（村長）選挙で市川甚太郎が八幡宿戸長に就任、「港内取締規則」で定められた取締実務を移管された。文書群は「五大力船台帳」便名と積み荷を書上げた「出帆台帳」全7冊、「出帆届」「帰帆免船荷丸」「120石、乗組5人、

状」、壬申戸籍を原典にした番地、職業付き「八幡宿住民名簿（部分）」などであった。

明治6年起帳の「木更津御県庁船印鑑連名帳（五大力船台帳）」に登録された船名は

- ① 高砂丸 140石、乗組5人、松田喜三次船（船頭 沖船頭）
- ② 八幡丸 80石、乗組3人、木村善吉船（船主直乗り）
- ③ 長寿丸 120石、乗組4人、宮原六郎平船（直乗り）
- ④ 明王丸 60石、乗組2人、大宮常太郎船（直乗り）
- ⑤ 海世丸 80石、乗組3人、白鳥留次郎船（直乗り）
- ⑥ 住吉丸 100石、乗組3人、丸長次郎船（沖船頭）
- ⑦ 太神丸 100石、乗組4人、永野善五郎船（沖船頭）

松田豊吉船（沖船頭）

⑨ 神力丸 120石、乗組4人、石井仲藏船（直乗り）

⑩ 泉徳丸 80石、乗組3人、小林七次郎船（直乗り）

⑪ 明徳丸 90石、乗組4人、藤本五郎治船（直乗り）

⑫ 千年丸 100石、乗組3人、伊藤久次郎船（直乗り）

⑬ 水生丸 100石、乗組4人、白鳥喜八船（直乗り）

⑭ 神在丸 115石4斗、乗組3人、城谷伴藏船（直乗り）

⑮ 神徳丸 100石、乗組4人、石橋清次郎船（直乗り）

⑯ 文久丸 100石、乗組3人、白鳥喜一郎船（沖船頭）

⑰ 住吉丸 90石、乗組3人、雪本権次郎船（直乗り）

⑱ 平寿丸 81石、乗組3人、北嶋巳之吉船（直乗り）

の18艘、積載量の最大は140石で最小60石、平均99石、乗組人は3人から5人で、大型船は専任の沖船頭を雇い、中小型は船主の直乗りが多かった。

八幡港を出帆時に提出した「出帆届」の一例をあげると

「日本形 出帆届、

一、八幡丸 木村善吉舟、

積石80石、乗組人3人

積荷 米39俵、種粕170枚、

から竹52束なり、間わたし竹1

000束なり、4貫炭150俵

送り状1通

松楽炭50俵（追加か）

右は当港出帆東京向け出帆御免状、

御差出し下されたく候よう願上げ

奉り候。以上

（明治6年）第12月17日、

木村善吉（印）、

正副戸長御中」



10分の1に書かれた
五大力船の設計「板図」



帆の上げ下げに使った
滑車の「テレビ」



明治6年の八幡港船改め所
「出帆台帳」



1航海ごとの「積荷明細」を記録

東京府船政所発行の「出帆免状（帰帆免状）」は

「出帆御届、上総国市原郡八幡宿、宮原六郎平船、長寿丸、積石120石、乗組4人、積荷これなし、船客これなし（あつてもなしと報告）（中略）はしけ宿行事（角印）」

出帆免状、書面の通り、当港出帆その港へまかり越し候段、願出候間免状相渡し候なり。明治6年8月26日 東京府船政所（担当印）あて先（千葉県）船政御役所」

「出帆免状台帳」に記載された明治6年10月から翌7年10月までの348日間547件、東京・横浜からの帰帆免状226点などをデータ解析した。月別では1月の59件、冬春が多く最低は7月の27件、船別では最高が神徳丸で48件、月4・2往復、最小の明王丸はこの年1往復に終わった。

出帆免状と帰帆免状の日付差を滞在日数として計算すると、0日が3件、1日65件、2日57件などとなった。0日は前日に帰船手続きをすませたか。天候次第、精々1、2日のトンボ帰りが多かった。八幡から東京まで順風二刻（とき4時間）、サイクリング並みのスピードであった。

積荷の主力は米と炭、薪。米は1万2336俵、365日換算でおよそ5500石、市原郡高5万5000石のおよそ10%。炭は20万1448俵、薪は12万1961束。その他、わら7万8000束、まぐさ1万3000束、材木1万4000本、竹材5万本、瓦5万7000枚などであった。「市原の古文書研究第7集」に運航や積荷など詳細が紹介されているのでご興味の方は参照されたい。

- 「清吉丸」船主、八幡・永島家資料をまとめた、教育委員会講座資料か、09年2月「明治末期の五大力船（清吉丸）の運航状況」には
- ①明治40年＝航海数31、運賃620円、東京戻り運賃70円
 - ②明治41年＝航海数23、運賃633円、東京戻り運賃67円
 - ③明治42年＝航海数28、運賃528円、東京戻り運賃50円
 - ④明治43年＝航海数27、運賃498円、東京戻り運賃43円
 - ⑤明治44年＝航海数28、運賃454円、東京戻り運賃74円
 - ⑥大正元年＝航海数28、運賃529円、東京戻り運賃68円
 - ⑦大正2年＝航海数27、運賃443円、東京戻り運賃58円
- 7か年平均は航海数26往復、上り東京行き運賃529円、戻り船運賃は61円であった。

出処不明で、すでに原本は存在しないという貴重コピー資料も多い。「船持ち仲間申合せ規約」もそのひとつ。「仲間」は商工業者の独占的同業組合、株仲間をいう。大正初めか。船仲間が舵取り、航夫、船番の引抜きを禁止し、違反は除名としている。

船仲間26艘は、神力丸作次郎、八幡丸清次郎、1号太神丸豊吉、2号善五郎、3号市蔵、明治丸与三郎、清正丸利七、大杉丸兼吉、神力丸辰次郎、稲荷丸藤吉、大宮丸常吉、浦吉丸甚蔵、太神丸万吉、三社丸勘蔵、大黒丸関太郎、文久丸藤吉、海寿丸吉五郎、水神丸兼吉、高砂丸秋太郎、水宝丸太吉、住吉丸金平、潤徳丸長蔵、浦吉丸伊八、清正丸喜三郎が押印、残念ながら最終ページを欠落、2艘の名前と締結年月が欠落している。



「船持仲間」の申し合わせ規則



東京（江戸）港発祥の碑



江戸小網町河岸のにぎわい



江戸東京港佃島ターミナル

明治の市原出途と南町 (八幡973ほか)

米穀買付けで中心地となる

国道297号線はかつて大多喜街道、九十九里往還、鶴舞街道などと呼ばれ、八幡の市原出途(でど)で、房総往還から分岐した。「出途」の途は道。市原村への出入口をいい、小湊バスの停留所は市原出途(でど)をあてている。八幡は市原の内陸部や外房方面からの米穀や薪炭、材木などの集散地で、五大力船が、「一大消費都市」江戸東京へと送り届けた。南町は江戸時代、八幡宿の出入口にすぎなかったが、明治6年に制定された「地租改正条令」が、町の様子を変えた。江戸時代の「村請け制」は年貢を村全体の共同責

任者としたが、新制度は土地所有者個人を納税者として、毎年土地評価額の定率3%を金納することになった。不作減免がないほか旧来以上の税収確保を目標としたため値上げの地区を中心に反対一揆がおこった。政府はやむなく税率を2・5%に引下げた。物流作業も大きな負担となった。今後は個人で現金に換えて納税することになる。浜本町に多くの米穀商店があったが、そこへ米を届けることが問題であった。朝早く大八車を引いた農家の人たちは、尋ねる店も決まっていな

されたお茶(酒)に、つい荷物をあけてしまう。より近いお店が有利、浜本町の米穀問屋は、競って南町に「買い場」を作った。より早く、より多く仕入れようとしてのぎを削った。飲めば話も早い、品質検査もそこそこ、その場で現金を渡した。仕入れたコメは倉庫に保管、米相場をみながら五大力船で東京へと出荷した。

明治22年「八幡見聞記」によれば、市原出途には横清商店(浅野) 米穀薪炭の売買、手堅しと信用多し。今井米穀商店 七転び八起き、あらゆる辛苦をなめつくしてさいた梅一輪。小倉米穀店 八幡で1と昇りて2と下がらぬ、今が日の出の家運長久とある。青木米穀店、大村米穀店が誕生、杉崎商店、中島店は市原村との境に貯蔵所を作った。

明治23年、日本は「日清戦争」に勝利、「軍事大国」への仲間入りを果たす。「軍馬の飼葉需要」が拡大し、山林たんぼで刈取られたわら草が運びこまれたが、五大力船と米穀商店の繁栄も明治まで。大正時代になると、鉄道や自動車に押され、急激に凋落していった。

「東屋にまさる旅館なし」

このころ片町の「東屋」は「千葉、木更津間にこの家にまさる旅館なし」と謳われた。元は八幡宮社家、明治維新の時、房総知藩事柴山典が本陣を張った。出途三差路の本店、道路を挟んで別館を構えた。亭主の宮吉長五郎は町の重鎮として活躍した。10帖2間続き、回り廊下のついた離れがあり、北白川宮、朝香宮などが宿泊された。



大多喜街道が分岐した「市原出途」



江戸後期の「市原出途絵図」



浅野家が所蔵する明治の「米穀薪炭商」古図面

明治維新とともに登場した人力車は、7年30台をこえ、出途の須田立場（発着所）は「鶴舞方面に便利」と評判はよかった。明治22年「千葉毎日新聞」の「八幡見聞記」は出途に「馬車のみ玉川駐車場なり、千葉・八幡間は1日10回、佐是・鶴舞間は3回、八幡・姉崎間1回の発着あり、さればこの地より千葉方面に行く人も、鶴舞に行く人もこのところより乗車するを至便なりとす」。

明治45年・八幡宿駅が開業すると、東屋は駅正面に支店を開設、乗合馬車の待合所と集会場を兼ねて、映画や芝居を上演した。大正時代、八幡町の主要旅館は東屋収容人員100人、白鳥75人、曾葉金25人の3軒であった。

東屋別館の隣に旅館（はたご）「藤田屋」があった。「農間余業調

査」に「文政11年（1828）開業、百姓安次郎」を記す。子孫6代目竹内克によれば「明治後期ころ閉店。2階屋で、正面に黒光りのする大黒柱があった」。明治元年、沼津幡主・水野忠敬の菊間移封にあたり、先遣隊が仮陣屋とした。当時、大黒柱にかけた木彫りの水野家「丸に立沢瀉（たちおもだか）紋」を所蔵、直径39cm、厚さ7cm、どっしりと重い。もとは沼津城本丸に掲げられた。

明治維新の戦いの時、宿泊した旧幕軍兵士から刃わたり69cmの銘「国綱」を預かるが、宿を出た所で官軍兵士に殺害された。当家はのち足袋、下駄屋などを変遷した。克は元サラリーマンで市原市文化財研究会最後の会長を務めた。令和5年没、跡地は駐車場などになった。

明治維新时期に醤油醸造所が4軒

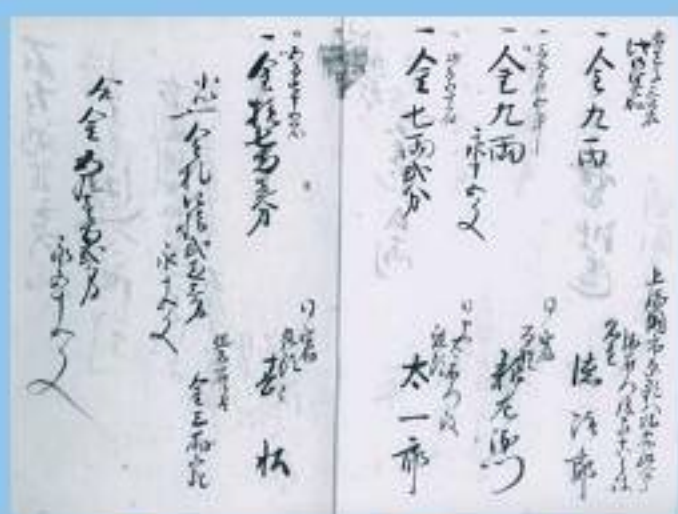
維新时期の八幡宿の醤油造り、濁酒（どぶろく）造り冥加（税）資料が市川本店にあった。市原郡八幡宿（醤油、濁酒造り）組合が（菊間藩）通商司御役所にて差出した「醤油、濁酒造り、当午年（明治3年）御冥加（税）上納帳」。通商司は経済の管理機関で、明治2年大蔵省に設置、菊間藩もならった。

「醤油造り」
造り高300石、この御冥加
一、金9両 市原郡八幡宿組合
名主（広瀬）徳治郎
同300石5升 同
一、金9両15文 同宿百姓
（川上）新左衛門（新一郎）
同250石
一、金7両2分 同宿

組頭（鈴木）太一郎
同575石
一、金17両2分 同宿
組頭（市川）甚松
ただし100石につき金3両
小以（小計）メ金札（太政官札）42両3分15文、あわせ金51両2分15文
造り高20石、この御冥加
一、金1両 市原郡八幡宿
百姓（中嶋）徳太郎
20石。1両。〃（川上）新左衛門
10石。2分。〃（玉田）藤吉
20石。1両。〃（加藤）久平
10石。2分。〃（荒川）新五郎
5石。1分。〃（白鳥）与惣五郎
5石。1分。〃（白鳥）磯五郎
同断。1分。〃（田山）利兵衛
同断。1両。〃（菊間種村）栄蔵
小以6両3分永40文



竹内家所蔵の「水野家おもだか紋」



明治3年「醤油造り高冥加上納帳」



明治の米穀店の面影残す「大村家」



駅前乗合馬車待合所を兼ねた「東屋支店」

資料から明治維新当時、市川本店、鈴木（陣屋）、広瀬徳治、川「往時、長助殿という富豪あり、宏大な邸宅は、豪華を尽したりと、今なお俗謡として「八幡長助殿の花壇場みれば梅に櫻につつじに椿、さいてからまる藤の花」と謳われた八幡長助屋敷跡と記す。また、川上新一郎の明治10年所有地は八幡1274、3筆あわせて300坪あったが、醤油工場地については特定できなかった。

前出「八幡見聞記」によると、「米徳」と広瀬徳治なり、以前は醤油醸造もやり、米穀も商ったが、いまではきわめて手堅い仕舞屋（しもたや）商売を締めた住居）暮らし、町内有数の田地持ち、金もたくさんあるとのこと、ただ妻子はなく、70の盛りをやもめ住みにて過ごす。小倉米穀店の斜め前というから市原出途の薬湯センターとなる。江戸後期、八幡寺嶋家「市原出途絵図」の「御料所（幕府直轄領）百姓佐右衛門隠家」

に符合。「市原郡誌」は、安藤石材店は、江戸後期にさかのぼる石工職人の家系で、初代佐平治、3代常太郎、4代硯年が有名、往還側鳥居石橋、日露戦役置きとろう、清見瀧などの作品が八幡宮に現存している。昭和、平成期の登は市原市文化財研究会に所属、古宝きょう印塔研究の第一人者として活躍した。

吉岡佃煮屋は、あさりをむき身

にして甘辛く煮詰めた保存食。陸海軍の需要も多かったという。佃煮、のり佃煮、初ちきり、福神漬け、はまぐりの八幡煮は、八幡名物として人気があった。近くの玉川佃煮店は吉岡にくらべて、規模が小さかった。

道路を挟んで相対する和菓子老舗のよきライバル2店、鈴木和泉は、江戸後期、初代「増兵衛」が創業、代々増兵衛と弥七を名乗り、現在も年寄りたちは屋号で呼び合う。平成の終わりにまで伝統的な木型を使った和菓子を作ったが、県の食品衛生協会長を務めた6代宏佑が急逝。妻の里子さんが仕入れ商品でお店を繋いだが、令和7年に閉じた。「川上松月堂」は明治10年創業で、和菓子の製造卸問屋、五色おこし、梅ようかんが八幡名物として有名だった。

明治7年創立の八幡小学校開校当初「学校入費判取り帳」が現存、主な買入れ先をみると「漬物・川上（印）上総八幡川重）、菓子・東風軒（上総川上）、箱膳・安藤常三郎（八幡南町石屋）、炭・炭や藤部（上総八幡炭藤）、金物・福嶋定平（前出）、炭材木・鈴木与平治（上総八幡鈴與）、紙・鈴木清七（上総八幡出途鈴木）、茶器・川上平（上総八幡川上）、炭・永野（上総八幡浜本町永野善五郎）、炭・永野（上総八幡北川岸永野豊太郎）、炭・青木屋吉十（上総八幡青木屋）、柿渋・川上新一郎（上総八幡川上）、釘・周地かじや（上総八幡鍛冶屋）、梅干し・橋屋伝八（上総八幡完倉）、葉種・伊勢屋（上総八幡伊勢屋）などが読め、当時の町の様子がうかがえる。



明治中期の「市川本店醤油醸造所」



石屋佐平治の「八幡宮手水」
見取り



大正時代の「八幡宿の町並み」



蒸気機関車が走った
昭和11年の「八幡宿駅」周辺

市川本店と市川石三 (八幡1037)

江戸時代の商家建物に現住される

バス通りから一本入った小路に、商家造りの「市川本店」がある。市川家は飯香岡八幡宮創建にさかのぼる旧社家で、代々「三太夫」を名乗った。明治維新、最後の神官は藤原大和正常忠、配当2石6斗7升、役職は「奉行」であった。

江戸後期、天保時代から醤油醸造と酒類元卸を兼ね、全盛期は明治昭和初めの石三時代。明治20年代の「千葉県博覧図」、「千葉県酒看板が飾られている。内庭と廊下が回る母家は家族の居住区、茶の間、仲の間、奥の間、台所土間を中心とした伝統的な「田の字の間取り」に作る帳場周りは明治

戸、明治期建造の歴史的建物に現住され、内部は非公開。棟門続きの2階建て「帳場」は帳付けや支払いをした所。明治を象徴するゆがんだガラス戸が歴史を感じさせるが、夜間、分厚い「大戸」を引出す、江戸商家の警固システムも現存している。

内部は帳場を中心に、見世(店舗)、カマチ(段の杵材)、見世土間が続き、箱階段や壁面いっぱい

「千葉県酒看板が飾られている。内庭と廊下が回る母家は家族の居住区、茶の間、仲の間、奥の間、台所土間を中心とした伝統的な「田の字の間取り」に作る帳場周りは明治

24年ころの再建だが、原形は江戸中後期に遡るものと考えられる。

明治6年、千葉県創設期の選挙で、市川甚太郎が初代八幡宿戸長(村長)に当選、旧八幡村名主文書、戸長役場文書、当家醤油醸造酒類販売関係資料など貴重文書4万点を保存、市の歴史博物館アイミュージウムに寄贈された。

大正から戦前期、敏腕町長として活躍した市川石三もまた、特筆すべき一人であった。慶応元年、市川甚太郎3男に誕生、明治33年早稲田専門学校(現在の早稲田大学)卒業、大隈重信が加わる集合写真が伝わる。大正2年両総電気会社を設立、五所北川協の現在ガソリンスタンドの地で火力発電所を建設、八幡、五所、五井地区に送電した。石油ランプから明るい電灯へ、あつという間に広がった。

しかし火力発電所が運転したのは最初だけ。大正5年、大型水力発電所の新増設で電力料金が値崩れ、千葉電灯社の買電に切替えた。千葉寒川―五所間に送電線を引いて、大正7年から姉崎地区などへの送電も開始した。昭和10年代の一般民家平均使用量10燭光1灯、電気料は1か月90銭であった。昭和17年関東配電社に統合、26年、東京電力となった。

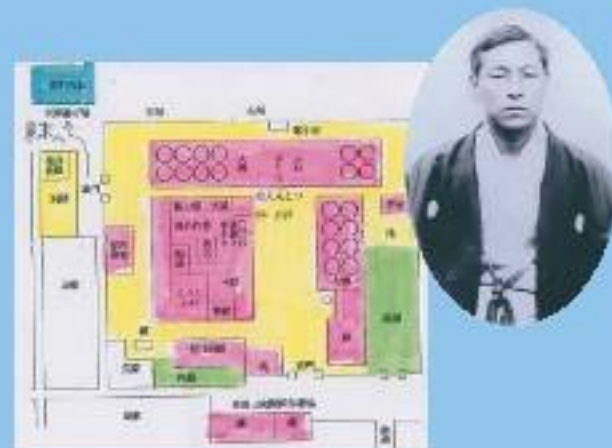
石三は町長、県議のほか、千葉商業銀行など経済界でも活躍した。石三の嫡男得三も八幡町長、千葉県議1期、趣味の16ミリ映画で戦前の八幡を記録し、当代恵三、信三さんは海岸埋立て期に多量の秀作写真を残した。令和6年敷地一部宅地化にともない試掘調査が行われたが、期待された前身八幡宮など遺構は発見されなかった。



明治のたたずまいを伝える
「市川本店」



商家大戸で囲んだ昔ながらの帳場



「醤油醸造所略絵図」と市川石三



市原市教育センター

(八幡20)

教育の父・川上南洞「南総学校」旧跡

令和の八幡宿駅西口公共施設再配置事業で複合施設に入る「市原市教育センター」は、昭和39年教育に関する研究調査を目的とした市原教育研究所と科学教育研究所として市（五井）の教育委員会内に創立、海士有木（あまありき）をへた、47年八幡公民館内に移ったが、同55年、郷土の「教育の父」川上南洞ゆかり地南総中学校跡地に鉄筋コンクリート庁舎を新築して、「市原市教育センター」と改めた。

センターの図書室に川上南洞が収蔵した「南洞文庫」の一部を保管、また、郷土史料、明治3年、「菊間藩五井村年貢割付」、明治は

じめ、五井村、村上村「地価一筆限帳」「江戸切絵図」などを所蔵している。

菊間藩の年貢割付は長さおよそ5m。残念ながら巻頭のおよそ10行を欠落するが、朱印も鮮やか、貴重な第一級郷土史料として注目されている。欠落部分は同時に発給された八幡宿割付などから復元できる。もとは

「午年貢納むべき割付のこと

上総国市原郡五井村

一、高1864石余（端数省略）

この反別228町4反余」：

で、以下が現存している。文書が長文になったのは、当初、旧領主

ごとの複雑な年貢形式を踏襲したことによる。巻末に総額「米469石余、大豆5石余、永（銭）135貫787文余」がある。

年貢は田畑に課せられた物成と小物成、運上、冥加金で、年貢率はおおよそ31%であった。最後に

「右は当年定免（定額税）、御取箇（領主取り分）、書面のとおり候条、村中大小の百姓、入り作（村外の百姓）のものまで、甲乙なくこれを割合い、極月（12月）10日限りきつと皆済せしむものなり。

明治3年10月

菊間藩庁（角印）

右村、名主、組頭、惣百姓」菊間藩庁は大文字だが、あて先は小文字で敬称はない。領主が握る強大な権力を象徴している。

当地は郷土の中等教育振興に尽

くした川上南洞「南総学校」の跡地で、建物入り口に「私立南総学校の由来碑」などがある。当校は南洞が明治31年、千葉県皇典講究所分所普通学科として八幡宮の敷地内に設立、当地に移転した（前出）。地域の有為な青年のため、中等程度3年間の教育を実施した。最盛期には生徒数約300名、卒業生は約2500名に達したが、昭和19年3月をもって、太平洋戦争の応召による教師補充困難により廃校となった。当時の市原郡にはほかに中等程度の学校がなかったため、この学校から多くの地方人材が出た。

その後の昭和27年定時制の「県立市原第一高等学校八幡分校」が開校したが、昭和40年、「県立京葉高校」の設立によって発展的に解消した。



教育センター所蔵の「菊間藩五井村皆済文書」



南総学校創立当時の校舎全景



多くの地方人材を排出した「南総学校」絵はがき



明治市原の中心街 (八幡2384ほか)

警察署、郵便局、登記所がならぶ

江戸時代の八幡宿は宿場町として繁栄、明治時代は市原の政治、経済の中心地として発展した。「宿通り」にそって町役場、警察署、郵便局、登記所が立並んだ。日本の近代警察は、海外で学んだ、旧薩摩藩士・川路利良が提案したフランス式が採用され、明治8年「東京警視庁」が誕生した。千葉県は明治7年、県内各地に設置した「取締所」を創設の日とした。明治8年、飯香岡八幡宮市川宮司宅に千葉県取締所仮庁舎を発足、同年千葉警察署八幡分署と改称、明治13年、八幡宮大鳥居近く、現在の飯香岡通りま正面に庁舎を新

築して、20年に呼び名も「八幡警察署」となった。裏手神社境内の「演武場精誠館」は、剣道が生命を自認した、岸田安貴署長が1000余円の寄付を集めて建設。戦後、GHQの占領政策で一時禁止されたが、5段だった菅野儀作が先頭に立って県剣道連盟を復活させた。

明治21年、八幡1113広瀬成吉地所に千葉県裁判所八幡宿出張所を開設、「区裁判所」は、戦前まで、軽微な民事、刑事事件の第一審を担当した。出張所は、明治20年「登記法」制定にともなう登記所で、八幡、五井、姉崎など北

部を受け持った。建物と土地権利者の申請に基づき、「登記簿」に記載した。のち八幡1351などをへた、昭和6年から45年まで、八幡1022、八幡宿駅前通りに移転、現在は、円頓寺墓地になっている。

昭和後期は五所1722の小出惣治内に移転。平成13年「千葉地方法務局市原出張所」と改め、八幡2384の現在地に移る。2階建て鉄筋コンクリートの明るい庁舎。平成の法改訂で「法務省千葉法務局」に所属、不動産、商業、法人登記業務などを担当した。令和6年NHK朝ドラ「虎と翼」のモデルとなった日本最初の女性裁判官・三淵嘉子と共に家裁の発展に尽力した野田愛子が、千葉家裁初の女性所長となる。

日本の官営郵便事業は明治4年

前島密の発議で始まり、八幡郵便局は翌5年に創設した。初め村田市平宅で事務取扱い、のち村田武治郎宅に移転、明治28年、川上規矩が局長となるにおよんで、前出のモダン庁舎を建設、平成初めころ老朽化のため、取壊された。隣の川上生生堂も規矩が経営した。諸大医処方調剤所、薬種問屋。明治の古写真は、寄棟屋根かや葺き。昭和写真は郵便局と揃いの木造洋館になっていた。

仲町駐輪場の元庭先土壇に7男、孝悌18歳、早すぎる死を悼む俳句仲間句碑が立つ。

「母親に助けられつつ縁に立ち、遠山里を懐かしく見る

昭和6年、市原郡八幡町真葛会同人」とある。父規矩は俳句にもすぐれ、日曜歌会を結成、自らの雅号を誌名にした「秀真」を発刊し



「精誠館」の寒稽古に集まった少年剣士たち



明治の「八幡宮博覧図」の八幡警察署



平成後期、秋季大祭の日の八幡町



た。ならんで高さ1m14、巾52cm、いい形の自然石、超達筆「日能(の)出やま」。八幡は昔から相撲が盛んで、八幡社大祭奉納相撲など近郷の力自慢が技を競った。

駐輪場の北隣、倉本歯科医院の庭先に「倉本謙三ドクターの碑」がある。明治2年、山本村東條医院次男に誕生、菊間藩士家養子となる。17歳で開業医試験に合格、政府からハワイ日本人街の「慈善病院長」を委嘱された。帰国後、八幡1047市川本店裏に倉本病院を開業、のち東條病院の渡辺武が引き継いだ。

「山倉園主、倉本杏園開拓記念、倉本ドクトルを偲びて、秋荒(れ)て山倉園は今いづこ、昭和戊辰(3年)、医学博士内田春涯」。医者仲間がともに楽しんだ、山倉園を回想している。

水野忠敬を頭取に国立銀行を設立

明治12年1月、旧菊間藩主・水野忠敬を頭取にした「国立第四十七銀行」が八幡315(旧番地か)で開業した。明治の国立銀行は「国営」ではなく、明治5年の「国立銀行条例」にもとづく民間銀行をいった。当初は規制が厳しく、東京第一(現在みずほ銀行)など4行にすぎなかったが、士族の「金禄公債(退職金)」が出資金として認められると、瞬く間に153行に達した。しかし多くが多額の損失をかかえた。政府は「日本銀行」を設立して、国立銀行の整理を決定、明治32年までに、普通銀行か廃業を選ばせた。

第四十七銀行は資本金9万5000円であったが、武士の商法で

経営は厳しかったといわれる。明治24年富山銀行と合併して、「富山四十七銀行」、戦時の合同で「北陸銀行」となった。

明治の国立銀行は、資本金に応じて兌換(だかん)紙幣を発行した。アメリカで印刷した、鍛冶屋を描いた5円券、水兵の1円券の2種類で、「大日本帝国国立銀行、第四十七国立銀行、水野忠敬、上総八幡、和数字6ケタ番号、この紙幣持参人に表面の金貨をもって交換すべし」などを記している。

千葉県的一般銀行は明治大正期の「銀行合同」と戦時の「1県1行推進」で、昭和18年千葉銀行に合同されたが、その前身にあたる第九十八銀行と千葉合同銀行が八幡町にあった。

「第九十八国立銀行」は、千葉町の有力者と県内旧士族とが出資、

本店・千葉町、出張所・鶴舞町など。明治30年一般銀行となる。八幡支店は明治44年、八幡1277で開業、大正11年八幡宿駅前入口角の八幡1067、現在駐車場の地に、鉄筋コンクリート3階ビルを興し、昭和18年千葉銀行八幡支店となり、昭和50年ころ、西口整地に移転した。

一方「合同銀行」は、大正7年成田銀行などが合併して総武銀行となり、昭和3年大同合併して千葉合同銀行となる。八幡支店は、大正8年八幡1350村市前で開業、11年八幡1281、現在小口海苔店の地に移った。2階建て外観が銀行時代の面影を伝えている。戦後の昭和24年、1県1行方針が緩和され、現在八幡には京葉銀行八幡支店が設置されている。



「駅西口整備事業」と建設直後の千葉銀行



水野国立銀行が発行した5円「兌換紙幣」



明治「博覧図」の八幡郵便局と川上生生堂



当時斬新デザインの「八幡郵便局」

戦前は煙突の町

(八幡1357ほか)

黒煙は繁栄の印、自慢の盛り場

大正昭和期はじめの八幡町は、煙突が立並ぶ「工場の町」で、もくもくと立ち上る黒煙は、市原最大の「盛り場」としての町びとたちの自慢であった。昭和戦前期の「千葉県市原町烏瞰」には、南から吉岡佃煮工場、市川醤油醸造所、田山醸造場(紀伊国屋)、鈴木、木口製油県内大手のキッコーマン、ヤマサ、小川醸造場などの煙突が高さと煙勢を競い合った。

煙突の中心は醤油工場であった。江戸中期、大消費地であった江戸の醤油需要は下り物といわれた関西系うす口醤油から、野田、銚子を中心とした濃い口に移行した。

八幡は江戸に近く、原料の大豆、小麦、塩の生産地を抱えるなどの条件にもみたまされたので、明治、大正、昭和期に地場産業として栄えた。八幡の醤油は、いずれも戦時下の醤油造り統制で中断、製造設備の金属類供出、職人の戦没など、それぞれに理由はあったが、最後の煙突は八幡1357の小川醸造所で、角ばったレンガ造りを空高くそびえたが、平成初めころ老朽化のため撤去された。郷土史研究家・佐倉東雄さんの「市原市八幡あれこれ」は、「(戦



「煙突が繁栄の象徴だった」
戦前の八幡宿



地から帰ってきた) 何人かの人に聞いた話であるが、観音町で醤油醸造業を営んでいた小川さんのレンガ造りの煙突をみたとき、やつと故郷に帰ってこれたんだな、と涙があふれたそうである。また戦地に向う時も、この煙突を二度と見ることはあるまい、と八幡を離れたという。まさにこの煙突は八幡の人たちの心の拠所となっていたのである。」

称念寺の当家「墓誌」などによれば、①五兵衛文政11年没、②佐右衛門明治18年、③亀吉明治27年、と続いた。亀吉は醤油造りのほか、生糸仲買や農業経営など、八幡屈指の資産家であったが、平成中ごろ子孫が途絶えた。醸造所跡はしばらく、バラ園として整備され、母屋や店、蔵、製造記録などが現存した。醤油醸造は明治10年代に創

業、「チガミ小印醤油」「ヒキ小印味噌」を製造、得意先は東京ではほぼ全量が五大力船で東京港に送られた。八幡・小川家文書「醤油船積み帳」で追うと、大正8年118670樽(4斗入り172)、五大力船運搬料316円余、100樽あたり平均船賃3円65銭、年初の3円が、3円50銭、4円と値上げされた。9年116796樽、10年118408樽、11年117959樽、12年115849樽、5年間平均7584樽、平均船賃は4円89銭。小川屋の常用船は大黒丸と水生丸、臨時船は稲荷丸など7艘であった。円頓寺入口の田山醸造所は、明治10年代創業、製造高は多くなかったが、地元向けで、得意先の信用が厚かった。浦安の醸造所から嫁入りしたという大女将は、「醤油屋のむすめといっても、仕事場



明治中期建築の母屋



列車からよく見えたという
小川醤油醸造の煙突

に入ったこともない。結婚して、醤油樽に立った時、こわくて足がすくんだ」と話した。菩提寺過去帳の明和6年(1769)に「南町・紀伊国屋善八娘」がある。初代が紀伊(和歌山)の出身であるうか。少なくとも江戸中期に遡る旧家ということになる。戦後は「スーパー紀伊国屋」を経営した。千葉ヤックス、木村屋と八幡のスーパーのはしりで、商品が多くて安い、遅くまで営業している、と評判がよかったが、平成中ごろに閉店した。現在、マンションや駐車場になっている。

菊間出途の木口製油所の創業者は木口辰三郎といった。文久2年浜本町生まれ、明治30年市原出途に出て、いまの薬湯市原店の所で製油所を創業。明治37年「百家名鑑」は「八幡製油所主、米穀薪炭

商組合、機械製油内地輸出版売」大正時代か、紳士録は「菜種油年産7200石、ゴマ油は工業用として造幣局、陸海軍、鉄道局に納付、海外輸出また少なからず、家運すこぶる振るう」とする。

昭和1ヶタ後期「八幡町々勢一覽」によれば、面積676町歩、千代田区のおよそ半分、うち田畑63%、山林・原野・雑種地31%、宅地5%で、戸数775戸、人口4021人。7割は農業だが、のり養殖との「半農半漁」が多かった。はまぐり、あさり、カキが獲れ、さしれん(干貝)、つくだに、おこし、羊かんなどに加工した。町の年間総生産額は40万円、1戸あたり510円。醤油、味噌醸造、製油が45%を占めた。原材料も地産地消、工場へは町びと家族が勤めた。

わたつみ神社と力石

(八幡) 1179地先

江戸東京湾の航海安全まもる

スーパー「ベイシア」横の竖みお跡に小さな社(やしろ)がたたずむ。一間社流れ造り、屋根銅板葺き。社頭と鳥居の「扁額」は「大海住(おおわたつみ)神」、かたわらの神名自然石碑は「海津見(わたつみ)大神、明治35年」を記す。読み名は微妙に異なるが海を司る同じ神様のこと。地元では東京湾の航海を守る「水神様」という。

江戸、明治、大正時代、五大力船関係者の信仰を集めたが、海との関係が薄れた近年では、参拝者もほとんどみられなくなった。社殿はみお廻りを数転、昭和32年、平成25年に建て替えられた。手水

鉢は「奉納、明治41年」、寄進者の松田、菊地、根本などを刻むが名前は剥落している。

地元浜本町会では毎年1月2日、八幡宮宮司を迎えて新年の神事を開いている。町の歴史的行事が引継がれていることは意義あることといえよう。

鳥居と社の短い参道に幣束を巻いた力石4個が並んでいる。最大が「奉納、八幡宮力石、50貫目、江戸霊岸島木場町」、2番目は「奉納、6月28日、47貫目、力石、田口町善太郎」、残る2個は無銘。祭りの力くらべに抱えあげたといわれている。



船乗りたちに「水神様」と慕われたわたつみ神社



工場写真のついた戦前の「木口製油所」広告



「小川醤油工場」の届出資料や製造記録

八軒町と「魚惣」

(八幡1177ほか)

廻船問屋なまこ壁倉庫街

浜本町のスーパー・ベイシア前交差点と浜本町町民会館の地は、もと八幡港の浜本町横みおで、五大力船の船溜りであった。みおに沿って、元料亭「魚惣」や民家が6軒ほど並び、八幡1154番地と77番地、通りを挟んだ1156、76の街区を「八軒町」といった。元は8軒だったか。みお側は廻船問屋や船持ちの蔵や倉庫が並んだ。

美しく火災や盗難につよい。右端は通称「陣屋」の鈴木康夫家が所有。同家伝承は、「元禄のころから代々回漕業(廻船問屋)を営み、幕府の廻米なども手掛けた。元は浜本町(八軒町)に住み、文化6年(1809)陣屋地に移動した時、(屋敷を)親戚の松田家に譲った」。

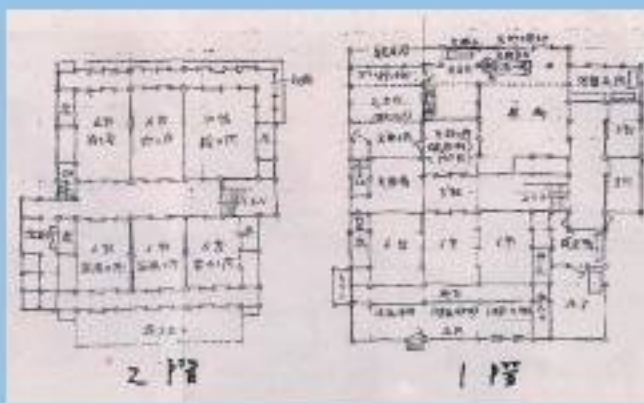
神崎区有文書の寛政4年(1732) (旗本鈴木松之助領、神崎、久々津村) 「御年貢御引請け証文のこと」、中野・中村家文書、文政5年(1822) 「(旗本)桜井鎌五郎様御年貢米請取り、通い」など手広い取引がうかがえる。

慶応元年から醤油醸造を家業とした。明治4年八幡・市川本店文書は、「醤油御免許高250石の内、大正3年増築の陸側も110年を造込高140石、この払い代金1152両、永(税金)941文余、鈴木太一郎」となっている。醤油の原料は大豆、小麦と食塩、明治38年、塩の専売統制で地区の塩倉庫となり、その管理を指導する「与平次」役となる。通称「陣屋の塩蔵」というはこのことによる。

料亭「魚惣」、明治年初代惣三郎が創業、海側半分が築130年、書は、「醤油御免許高250石の内、大正3年増築の陸側も110年を造込高140石、この払い代金1152両、永(税金)941文余、鈴木太一郎」となっている。醤油の原料は大豆、小麦と食塩、明治38年、塩の専売統制で地区の塩倉庫となり、その管理を指導する「与平次」役となる。通称「陣屋の塩蔵」というはこのことによる。

八軒町の中央に風流な高欄にガラス戸、往時のたたずまいを残す瀟洒な2階建てがある。元磯料理

美しく火災や盗難につよい。右端は通称「陣屋」の鈴木康夫家が所有。同家伝承は、「元禄のころから代々回漕業(廻船問屋)を営み、幕府の廻米なども手掛けた。元は浜本町(八軒町)に住み、文化6年(1809)陣屋地に移動した時、(屋敷を)親戚の松田家に譲った」。



築130年「魚惣」当時の間取り



魚惣や小林のり店がならぶ現在の「八軒町」



横みおに接した大正後期の「八軒町」



五大力船の町「湊町」 近世河岸場として発達

はもと

河岸（かし）は、初め船から荷物を上げ下げする船着場（港）をいったが、のち、問屋を商う商人やその蔵が集まり一つの商業集落を形成した。江戸の日本橋魚河岸や小網町河岸（米、かつおぶし問屋街）が有名だ。八幡港の河岸場は浜本町で五大力船乗りの町、特産物である米穀薪炭問屋街として発展した。

浜本町の海側、街区名、八軒町、浜本町、釘貫町、川岸の一面は、廻船問屋、船主、船乗り、船荷を上げ下げするはしけ、こあげ（船荷の荷揚げ）作業の人や船大工、湯屋など船関係者が居住、往

還側の街区名北倉町、伊勢町などは、主に米穀薪炭商などの問屋商店街であった。町は直線道の近世型街区で、将棋盤状に仕切られた。

先年、八幡・市川本店の文書調査で、野紙26ページに書かれた明治6年「八幡宿住民名簿（一部）」を発見した。新政府がすすめた壬申戸籍資料編成の過程で作成された。番地順、戸主（続柄）、生年月日、満令、職業が記された貴重史料だが、残念なことに、明治10年ころ、番地の付け変えがあり、現在の番地とは一致しない。新旧の対照ができないか随分頭を捻つ

たが結局あきらめた。興味のある方はぜひチャレンジしてほしい。

本書の構成は

①ブロックⅡ1番（屋敷）より94番（屋敷）まで（南町新田、南町）第1番は欠番（田畑か）、第2片町の中心は飯香岡八幡宮で、203番宮司市川信明、202番に市川大造長男甚太郎などを記すが、明治維新の神職解職期で無記となっている。職業別では農業51人63%、商業14人17%、工業4人5%、雑業12人15%となる。

若番号は南新田、大半が農業で、40番以降の後半は商業、工業従事者が多い。どうやらこのあたりに南町との境がありそうだ。両町を合わせた職業別分布は農業33人45%、商業14人19%、工業9人12%、医師1人1%、雑業17人22%であった。雑業はその他分類できない人をいった。八幡では五大力船のはしけ、こあげ作業の人たちが多かった。また、不明、無記は百分比から除いた。

②ブロックⅡ95番より226番まで（片町か）95番は天保14年3月生まれ、（職業無記）、中村熊五郎長男清吉（以下省略）

③ブロックⅡ227番より327番まで（浜本町か）229番は天保9年4月生まれ、船乗り渡世中嶋源次郎長男長吉（以下省略）

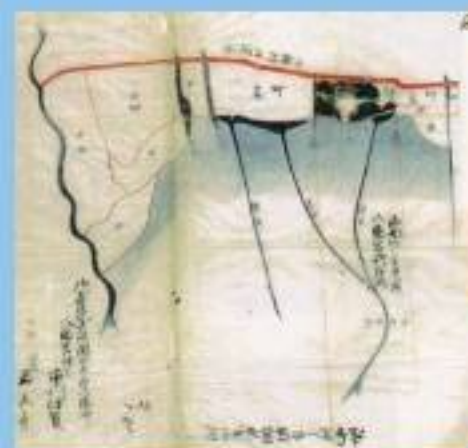
浜本町の職業別構成は、船乗り渡世28人38%、船持ち稼業7人10%、農業15人21%、工業10人14%、商業3人4%雑業10人14%であった。



明治の小字地図「浜本町」



十返舎一九「方言修業金草鞋」の八幡港



江戸後期の八幡港みお図



④ブロックⅡ328番より410番まで（観音町か）

329番は天保12年3月生まれ、商業、父川上善蔵亡新平（以下省略）

観音町の職業別構成は、農業38人63%、商業6人10%、工業4人7%、雑業12人20%となる。

③の浜本町を詳しくみると、船持ちが、木村清二郎、石井作二郎、松田喜三、丸房次、藤本米吉、宮原惣次郎、伊藤久二郎、大宮政吉、雪本惣次。船乗り中嶋長吉、石橋貞蔵など。工業は船大工の関七太郎長男七三郎、商業は伊藤吉太郎、山本喜三郎などであった。明治42年「房総人名辞書」は、米穀薪炭業として岩田長吉、今井伊之吉、石井徳太郎、米澤兼次郎、鈴木次郎吉、鈴木秋太郎、川上房吉を記している。

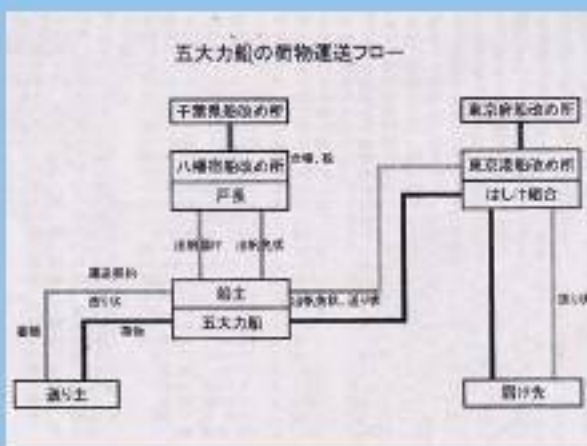
これらから南新田は農業の町、南町は商業、工業の町、片町は八幡様と農業、商業の町、浜本町は船持ち、船乗りなど五大力船関係者の町、観音町は農業の町と色分けできる。

浜本町には、今でも五大力船の屋号で通じるお宅や、帆の上げ下げに使った滑車「テビ」をお持ちのお宅も多い。船主だった丸さんは移転先の八幡北町2丁目の玄関前に第4栄宝丸の「いかり」を飾っている。しかし、文書類は、大正の水害で消失、襖の下張りに使用、蔵撤去の時廃棄したなど、保管されているお宅はなかった。

大正4年生まれ。関東大震災の記憶も鮮明だった石橋清三郎は「代々船乗りの家系。乗組みとして入りたては小僧とよばれ、飯炊きや雑用をやらされた。強い追い

風を受けての航海は怖かった。後ろをみるなどなられ、必死にしがみついた。風を頼りに走る船乗りたちにとって風向きは最大の関心事、東風をコチ、南東の風をイナリ、冬場の向かい風はナライ、逆走することをマギリ走りといった。冬はいまより寒くシガ（氷）が張った。先頭切って出る船はシガを割って沖へ進んだ」。昭和に入って船も仕事もなくなり3年で船を降りた。「もうこれで五大力船に乗った最後の方だろうな」生前、インタビューに答えた。

いまは東口に住むNさんの先祖も代々、五大力船の船乗り旧家だった。全盛期が終った、大正12年関東大震災の年に100石積み「第2栄宝丸」を造った。八幡港最後の五大力船だった。「1町2反くらいの土地が買えた。船大工は関さん。九十九里から手伝いに来た。浜本の坂を下った船おろしは盛大だった」という。しかしかつての海の賑わいがよみがえることはなかった。昭和14年ころ、沖に係留して帆を切取られ、捨て値で売却した。船下ろし写真とテビを先祖の記念品として保管する。



積荷フローシート



昭和初めの浜本町みお



明治初めの「浜本町住民名簿」

店」と先進事業を取込んだ経営がひと際目を留める。八幡宿駅開業後は鉄道貨物を一手に取扱った。

船乗りの町に銭湯はかせない。100mほどの間に3軒も風呂屋が並んだ。「亀の湯」は八幡丸の船主宮原家が経営、明治から昭和40年代まで続いた。明治4年、当家に誕生した三之助は寒川の楠原家に養子、星雲の志堅く、横浜に八幡回漕店を興し、八幡で楠原運輸を拓いた。事業の成功は八幡宮の神徳によるとして、昭和15年大鳥居を建立、戦後の28年浜本町に一の宮みこしを寄進した。同年没、69歳であった。浜本町町会が建立した胸像が八幡宮境内にある。

船大工は街区釘貫町の豆腐屋関さんと隣の床屋関さん。先祖がこの地で船大工棟梁を勤め、長さ20

m高さ5mもある五大力船を作った。「関家先祖代々の霊しょう」は、

「①船大工七兵衛安永2年（1773）没、②船大工七兵衛享和2年（1802）、③船大工七兵衛天保9年（1837）、④船大工七兵衛弘化4年（1847）、⑤（船大工）七太郎明治21年、⑥（船大工）七五郎明治21年、⑦（船大工）七平」を記録、初代以前、江戸時代前期に遡る可能性もある。

船大工は大正後期ころまで。先祖は尾張の出という、織田信長の琵琶湖水軍の流れかもしれない。文書類や船大工工具はすべて散逸したが、市川本店文書に、明治31年、関七三郎「五大力船船大工見積り」などが保存された。

「記」

一、五大力船1艘 ただし口1丈5寸くらい

一、金165円なり ただし手間

300人、1人につき55銭

右のとおり。31年2月5日

船大工 関七三郎

北嶋峯吉様

また、材木代が、①（目通り目の高さ周長）7尺。長さ7間2尺、末口1尺、代金75円（1寸5分板5枚取り、木挽き料込み）。②6尺5寸。長さ8間、末口8寸5分、元腐れ少々、60円③6尺3寸。55円。④6尺。50円。関連資料として

「船板人足控帳（11月27日～12月19日）」、記（材木加工一覽）が保存蘇我で独立、昭和10年ころ、ひかれている。しかし、帆や錨など、別勘定分が多く、本書から総額を推定することはできなかった。

諏訪からきたのり商人

大正始め、五大力船が低迷し始

めたころ、海苔（のり）養殖が始まり、多くの家庭が、農業と兼業した。当初、仕上がったのりは、東京ののり問屋が出張して買付けたが、次第に独立して店舗を構えた。市原から海がなくなって70年たつたいまでものり屋は多く、そのほとんどが長野の諏訪地方出身者であることは余り知られていない。諏訪は厳しい自然環境に加え耕地は少ない。江戸時代から「品川ののり屋出稼ぎ」が定例化していた。浜本町の小林のり店は、先々代「焼きのり」の製造業者で、店内正面の「東京湾内乾海苔問屋組合聯合会会員」の看板が、かつての繁栄ぶりを伝えている。



「八幡（江戸）の航路」



東海道五十三次の「お江戸日本橋」



明治の船大工
「五大力船見積り」



小林海苔店



乾海苔問屋組合会員の
大看板を掲げる

観音町入口の道標兼庚申塔 (八幡2049)

「左江戸道、右東金道」を記す

観音町は八幡の字名で、称念寺の本尊「聖観世音菩薩」に由来する。現存する尊像胎内文書によれば、「往昔、当村の町中に鎮座堂に庚申塔や馬頭観音などが寄り

往昔称念寺一帯を北観音町と称したともいう。

町内守護の菩薩なり。日々の参詣は市のごとし、これゆえその所を観音町と号した。しかるに元和4年(1618)町中大火の折、尊像みずから、称念寺の境内に飛来した」としている。

人々は霊験の新事に感じ、寺内に観音堂を起立、「千葉県寺院明細帳」は、およそ280年後の明治28年3月観音堂焼失を記録している。また、観音堂旧地は旧道菊間出途交差点南角の現在駐車場で、

観音町入口、旧道脇の小さなお添っている。中心の「庚申塔」は村への疫病や災害の侵入を防ぐ信仰の碑で道標を兼ねている。江戸後期、安永10年(1781)の作。正面は1面2目6び(手)の「青面金剛像」で、手に武器や輪宝、憤怒の形相で邪鬼を踏みつけ裸婦をつかんでいる。

左右両側は道標で、「左江戸道、右東金道」を刻す。往還沿いの石塔には道標を兼ねたものが多い。旅人たちは路傍のいしぶみを確認

称念寺近く、街区名「周地」の八幡1202番地、旧宮原家跡地に、大正3年の三山碑がボツンとたたずんでいる。熱心な信者であった先祖を中心に建立したもので、個人のお宅は珍しい。高さ1m、幅52cmの自然石を台石に乗せる。表面碑文は「羽黒山、月山神社、湯殿山神社、大正8年、大成教敬愛講社社長、宮原さく、73歳」「敬愛講世話人、高橋ラムネ屋、大塚元右衛門ほか」、寄付者86名を刻んでいる。有力者のない、庶民的な講のようである。

しながら目的地をめざした。江戸道は船橋をへて江戸へ向かう「房総往還」で、一方の東金道は石塚から菊間台地を迂回、潤井戸宿に抜けて東金に通じた。「伊南房総往還」は浜野が起点であり、近道か。問道はJR線までが現存、その後は菊間地区の造成事業で旧態を伝えていない。山舟型総高1m18、台石に寄進者などが彫られたと考えられるが摩耗して判読できない。

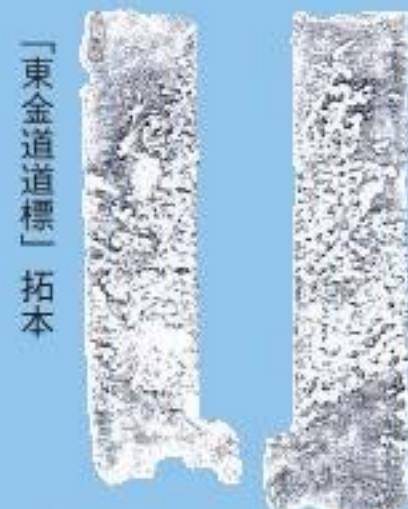
馬頭観音像は高さ39cm、寛政9年、以下剥落。子安地蔵が2基、大きい方が大正5年、森、大塚ほか、小さい方は江戸後期か、文字は判読不能。ひと際大きな碑が「題目塔兼万霊塔」で昭和43年、塔身1m22に宝珠、笠、台石4段を重ねる。「南無妙法蓮華経、法いう。界万霊大菩提なり」とある。



「庚申塔兼道標」がある観音町入口



潤井戸、房総東往還を経由した東金道



「東金道道標」拓本

観音町稲荷神社と児童公園 稲荷神の好物「油揚げ」を供える

(八幡1329、
1530)

「菊間出途」は八幡宿と菊間村を結んだ間道だが、八幡宮の天正19年(1581)図にも見られる古道である。明治元年水野忠敬の菊間藩庁舎築城にあたり、大手口にあたる「新坂」をひらいて大手道とした。

観音町稲荷神社は菊間出途三差路近くにある。稲荷神社の祭神は稲荷神で、京都の伏見稲荷を総本山とする。本来は五穀を司る神だがのち産業全般に広がり、農村部では農業神、漁村部では漁業神として信仰された。地元では屋敷神の風習があり、個人祠を持つ家庭も多い。稲荷社に付きものの狐は

稲荷神の使いで好物の油揚げを供える。

明治の「千葉県神社明細帳」によれば、飯香岡八幡宮の末社で祭神を稲荷魂命(うかのみたま)由緒不詳、社殿間数間口1間、奥行き1間3尺、境内坪数17坪、明治27年火災焼失、信徒人数32人とある。現在の建物は昭和47年の再建。屋根切妻造り、向拝、両脇半間の2間社、神額「稲荷神社」を掲げる。

竣工記念碑は総高1m13、竣工記念、飯香岡八幡宮、菅野儀作、稲荷神社建設委員会、委員長木口辰五郎ほか、鳥居と玉垣は年

に建造している。

境内に稲荷像が2対、狐像は昭和7年「奉納、当町木口剛一、鈴木芳蔵」、もう1対は61年と新しい。古碑は、境内片隅に集められている。天明2年(1782)の唐破風稲荷大明神祠、宝暦12年(1762)石とうろう、明治35年、稲荷神社祠、年号不詳痘瘡神祠など。また、樹齢数百年の老樹が戦後立枯れ、根元部分が残っている。

JR線脇の「観音町児童遊園」は日枝神社境内だが社殿はない。比叡山麓の日吉神社から始まった山王信仰で、山の神である大山咋神(くいのかみ)を祀る。「千葉0年記念、専修大学学長、道家斎一郎謹書」、裏面は現役兵、森軍司ほか18名、召集兵・松田安之ほか」を記録する。鳥居と建立記念碑は平成11年で、神額「日枝神社」を掲げている。

大きな碑が3基。

「日枝神社碑」

は高さ1m71の平石に「日枝神社、明治18年、観音町一同、有志者・鈴木一重ほか4人、世話人・荒川浅次郎ほか8人」を刻む。
 紀元2600年を記念した「国威宣揚碑」がある。昭和15年が神武天皇即位から2600年にあたりとして開催された。「国家総動員法」が敷かれる中、国体の精華と皇威の宣揚をとく目的があった。日中戦争の拡大とともに戦時体制が強まり、翌16年「太平洋戦争」へと突入していった。
 台石上、高さ1m43の自然石平石正面に「国威宣揚、皇紀2600年記念、専修大学学長、道家斎一郎謹書」、裏面は現役兵、森軍司ほか18名、召集兵・松田安之ほか」を記録する。鳥居と建立記念碑は平成11年で、神額「日枝神社」を掲げている。



JR線横の児童公園は
日枝神社を祀る



菊間出途にある稲荷神社



昭和戦前期の観音町



八幡の太平洋戦争

(八幡)

沖縄戦争で市原地区12人が戦死

昭和12年、「盧溝橋(ろこうき)や衣料は配給制となり、鍋釜や寺よう」事件」に端を発した「日中戦争」は拡大の一途を辿った。すぐに降伏するとみた日本軍の目論見がはずれて戦争は長期化し、「国際条約違反」として、石油輸出を止められた。16年、陸軍大將の「東條英機内閣」が誕生、12月8日、日本海軍がハワイのアメリカ海軍基地「真珠湾」を奇襲攻撃して「第二次世界大戦(太平洋戦争)」に突入した。

「欲しがりません、勝つまでは」のポスターが氾濫、町内会の隣組が戦時の国民生活に監視の目を光らせた。物不足が深刻化し、食料

の梵鐘が鉄兜や鉄砲弾に鋳直された。八幡宿駅から八幡小学校生徒と軍楽隊の歓呼と万歳に送られた若者たちが戦場に送り出され、八幡宮では戦勝祈願、武運長久祈願が繰り返された。

真珠湾を攻撃、太平洋の制海権を得た日本軍はマレー沖でもイギリス海軍に圧勝、香港、ルソン、シンガポールを占領、国民は緒戦の快進撃に沸いた。

「欧米植民地からの解放、大東亜共栄圏の建設」を掲げた日本軍は開戦半年で朝鮮、満州、中華民国の東アジアとビルマ、インドネ

シア、フィリピンなど西南太平洋全域を支配圏とした。元々、国力で大きく差のある米英を相手に緒戦の優位も長続きしない。昭和17年「ミッドウェイ海戦」に敗れて航空母艦の大半を失ったが、軍部は勝利と虚偽の報道を重ねた。すでに形勢は逆転、ガダルカナル、アッツ、サイパン守備隊が玉砕、最後の決戦を挑んだ「マリアナ沖海戦」にも敗れ、制海空権は完全にアメリカ軍に制圧された。

玉砕とは投降を許さず、全部隊が全滅することをいった。五所・松崎一郎は16歳で海軍志願兵(軍属)、1年後サイパン島で戦死。遺骨1つ戻ることない、余りにも惨い生涯であった。市原市遺族会の「戦没者名簿」によれば、市原地区326柱、うち八幡109、五所34、能満32...を数えた。

昭和20年、予科練卒福山航空隊に所属した八幡・大塚守勝さん(98)は沖縄本島周辺の敵艦特攻隊員を命じられる。ゼロカン(ゼロセン水上機)に250キロ爆弾を固定、片道分の燃料を積込むが機体不調とにわか雨で作戦中止、万死に一生を得た。同期戦友たちで作った「憧れの予科練 特乙四期生徒の手記」に記した。

長引く日中戦争は第二次世界大戦となり、市民生活は一層深刻化した。壮年や学生も前線、娘たちは軍需工場に駆り出された。男手はなくなった銃後は年寄と女性が守った。防空頭巾にもんぺ姿の主婦が竹やり訓練や防空演習に励んだ。

昭和19年日本軍はレイテ沖海戦に大敗。最後の切り札であった戦



出征兵士壮行会



真珠湾マレー沖海戦を伝える新聞記事



艦「武蔵」が沈没、自慢の連合艦隊は事実上壊滅した。太平洋全域の制空権を米軍に奪われ、フィリピン・マリアナ基地からの重爆撃機B29の本土直撃が始まる。翌20年3月10日、300余機の大編隊が東京下町に焼夷弾の雨を浴びせた。死者10万人。夜空を真っ赤に染めた炎と噴煙を、八幡海岸の砂浜から、ただ呆然と見つめた。

千葉県内では千葉市の七夕空襲、蘇我、船橋、銚子などで多くの犠牲者が出た。八幡は九十九里浜からの首都侵攻路にあたり、連日「空襲警報」のサイレンが鳴った。小学4年生だったという五所の小出惣治は「サイレンと同時に教室から校庭の防空壕に飛び込んだ。B29の不気味な爆音はいまでも忘れられません」と語った。八幡は海で作業中だった男性が機銃掃射

で亡くなったが、幸い町への空爆はなく、被害は軽微にとどまった。八幡「わらく」の先代、根本有造の父・衛（まもる）は、大正5年、菊間の農家4男に生れた。昭和18年、割烹旅館「しらとり」の次女律子と結婚、有造が生まれたが親子3人が一つ屋根の下に暮らすことはただの1日もなかった。戦局悪化で「軍事郵便」も途絶え、終戦1年後に戦死通知。戸籍謄本は「昭和20年7月19日時刻不詳、沖縄本島摩文仁方面において戦死」と記す。29歳。摩文仁は牛島司令官、ひめゆり部隊が追い詰められた本島最南端、沖縄軍玉砕地。市原地区出征者12人が再び郷土の土を踏むことはなかった。

沖縄戦は、米軍主力艦隊が完全包囲、圧倒的物量作戦の艦砲射撃を雨あられと打込み、上陸隊が地

上掃討した。民間人を含む日本人死者20万人。「復帰後のツアーで焼けただれた壕を案内された時、「衛さん、迎えにきたよ」と叫んだ母のひと声が忘れられません」生前、有造が話した。

昭和20年8月6日広島、9日長崎に原爆投下、8月15日昭和天皇が「終戦詔書」を発表、太平洋戦争は無条件降伏で終息した。「や」と戦争が終わった」という安堵感と先行き不安が交錯した。国内外の軍人と大陸引揚者の大移動が始まる。たまたまスマトラ隊の作戦行動で国内にいた野口彰が真っ先に帰ってきた。飛行服姿の身一つ。「足が付いてる」家族は大喜びした。一方、男子2人を失った家庭もあった。都会は焦土、住む家も食料もない。比べて八幡はまだ恵まれた。農家でフトン綿や衣

類をコメと交換した。海で小魚やあさり、のり、うごが獲れた。マッカーサー進駐軍の陽気なアメリカ兵が八幡にもやってきた。チョコやチューインガム目当ての子どもたちがジープを囲んだ。町には店も仕事もない。汽車切符や配給に並び、モノを求めて人々が群がった。

戦後復興は昭和22年ころから。予科練↓土浦海兵隊終戦した芝崎菊呂さんの戦後は秋葉原焼け跡の組立てラジオに始まる。24年八幡に戻り電気商会を開店。日本経済は朝鮮特需を契機に拡大。「力道山の店頭白黒テレビに人の山、冷蔵庫と洗濯機が連日売れた」。電化三種の神器がもてはやされた。99歳、いまでも電気工事社長として活躍されている。



商工会展示即売会にぎわう
芝崎さんのブース



根本衛伍長



沖縄戦争最激戦地だった
平和祈念公園



沖縄を完全包囲した米軍艦隊



大塚さんが写る
特攻隊出撃の記念写真



松崎さんの遺影



芝崎菊呂さんと予科練の思い出を語る大塚さん(右)▶

昭和後期の八幡宿駅と商店街

(八幡775
ほか)

八幡宿駅前整備事業と東口の開設

昭和30年代に始まった「京葉臨海工業地帯造成事業」は市原の寒村を一変させた。工事のための産業道路(現在の国道16号線)は、八幡から五井、姉崎、南へ南へと伸び、資材を満載した大型トラックが土煙りをあげて疾走した。八幡や五所海岸、かつてのり干し場であった空き地は建設従業員の仮設宿舎や資材置き場、駐車場に代わった。

なにしろ数十社にもおよぶ上場企業の巨大プラント工事が、一斉にスタート。細々とりのや貝を養殖して生活した一寒村に突然始まった「建設ラッシュ」は、戦国大

名の築城工事をも連想させる。町は「人」と「もの」が行き来する「特需景気」に沸いた。

工事の進捗状況に合わせて企業は多勢の従業員を送り込んだ。八幡の東方およそ5km、大抵、通称「辰巳ヶ原」の山林50万坪が選ばれ、昭和34年戸数9000、人口2万2000人を想定した「社宅団地」が誕生した。小中学校や支所、公民館に、千葉労災病院、シヨッピングセンターや公園が完成、千葉急行の乗入れも計画されたが辰巳団地手前の「ちはら台」で挫折してしまった。名称も「京成千原線」に変わっている。

昭和35年、旭硝子をトップに工場の操業が始まると、人生の再出発点とした人たちが多かった。町に、銀行員や保険の勧誘員、不動産業者が出入り、旧宅が次々と取り壊されて新築住宅が誕生した。先祖伝来の田んぼが高値で取引され、宅地と代わった。

急激な人口集中で交通量が増え、市原市の玄関口にあたる八幡宿駅一帯はマヒ状態となり、駅西口、東口の整備事業が町づくりの緊急課題となった。八幡宿駅の改修工事は、駅舎の移動と橋上化、複線電化など国鉄(現在JR)の輸送力増強対策ともタイアップした。西口は、始めに八幡小学校を移動し、その敷地を利用しながら駅前広場を建設しようという計画であった。駅と白金通りを結ぶ、幅員22mの「飯香岡通り」を新設。白

金通りは五井養老川から直線で千葉市中心街を結ぶ予定であったが、50年後の今日も村田川に行く手を阻まれている。昭和51年西口広場を中心とした駅周りが完成。八幡宮のいちょうをデザインした新駅舎は躍進する八幡町を象徴した。

平成5年、日本最初のプロサッカークリッグ「Jリーグ」が誕生。八幡海岸通りに進出した、古河電工を中心とした「ジェフ市原(現在のジェフ千葉・市原)」が、市原市臨海競技場(現在ゼットエーオリプリスタジアム)をホームタウンに、創立クラブ(オリジナル10)チームとして参加した。平成16年、17年「ナビスコカップ」に連覇したが、現在はJ2リーグ、早期のJ1リーグ復帰をめざしている。平成14年日本と韓国で開催された「ワールドカップ」で、千葉県



建設すすむ辰巳団地



平成初めの八幡宿駅周辺の航空写真



八幡地区 八幡宿駅



がすすめた会場候補地がのちに「スポレクパーク」となる。駅前広場に「サッカークの町いちほら」の看板を掲げた。

整備の遅れていた東口は「御墓堂墓地」の発掘調査が終り、平成12年東口500mに新設した「満徳寺境外墓地」に移転した。伝足利義明五輪塔は造塔期が古く、別当寺開祖か、中興上人の供養塔と考えられ、多量に出土した陶磁器は当地が15世紀には都市的發展を遂げていたことを裏付けた。

八幡宿駅整備後の「駅前商店街」は、駅前広場こそ一新したが、昔からのお店の継続で、駅周辺の飲食店街とバス通りの一般商店街が中心であった。平成初めの商店名入り「八幡宿商店街航空写真」には、のり・お茶の宇田川商

店、マルエイ、研文社書店、松月堂本店、洋品のカワカミ、時計メガネ精光堂、大塚写真機店、清光商事、コーヒー専科わらく、スーパーせんだうが広告している。

バス通り商店街では、食堂ビル「しらとり」が1階は都寿司で、2階は結婚式場も兼ねた和洋食堂「白鳥苑」、八幡に海があった時代は旅館で「海の家」も出した。割烹・東屋、魚虎、うなぎの寿々木が宴会で賑わった。

一方、新たに誕生した東口は空き地と駐車場がめだち、駅前スーパリーのせんだうが、新鮮で明るい評判がよかった。「歳末大売出し」は「旅行券」やテレビといった家電製品があたり、抽選会場に舞台が設えられて祭り騒ぎになった。一方、海岸近くにまとまった土地が多かった五所地区は、平成に

かけて、大型店舗や高層マンションが建った。無量寺裏は、イトーヨーカドー、ユニデ、ザ・ガーデンアイル、スーパーライアル、大多喜街道を挟んで、ダイエー↓忠実屋↓ポトピア、ジョイフル本田、県営住宅が進出した。

「品種が豊富でおいしい、24時間営業」。いまではすっかり定着

したコンビニフライチャンズ「セブンイレブン」は昭和49年、東京江東区の豊洲店に始まるが、八幡1号店は昭和55年バス通り商店街の青木米屋だった。当初は7時〜24時、まもなく24時間営業となったが、客足は伸びなかった。

平成7年、マイカーヤング層をターゲットに、開通したばかりの「高速館山自動車道」の菊間側道に進出、このころ、コンビニおにぎりやコンビニ弁当、レジ横フ

ライヤー（あげもの）が大ヒット、ATMの導入、振込み決済、公共料金、宅急便サービス、チケット発売などに業容が広がり、平成22年八幡宿駅東口店を開店した。八幡地区はセブンが多く、市原村田川店、八幡宿駅西口店を展開、ローソン、ファミリーマートと競い合っている。

平成後期コンビニは全国すみずみに浸透、町の人気スポットになった。令和5年全国のコンビニ数5万6000店、ランキング1位のセブンが2万1000店、2位ファミマ、3位ローソンの順となっている。

昭和時代は、バスの最盛期、市原を本拠地とする小湊バスは八方に路線を広げた。「昭和後期」は八幡町がもっとも輝いた時代でもあった。



セブンイレブン



東口駅前のスーパーセンドウ



現在の八幡宿駅西口ロータリー



ジェフ市原のホームタウンに

胴埋塚

(八幡北町1丁目)

村田川の戦いで敗れた千葉康胤一族の墓

胴埋塚と書いて「ドウマンヅカ」また、胴埋塚保存会の「胴埋塚カ」と読む。「村田川の戦い」で由來碑」はさらに詳しく、「戦国敗れた千葉馬加康胤の胴体を埋葬したことに因んでいる。康胤の墓は無量寺にもあり、村田川、雁田川で繰り広げられたとされる「八幡合戦」が八幡の歴史伝承に大きくかわっていることがわかる。

大正5年に市原郡教育委員会がまとめた「市原郡誌」は、「観音の処を胴埋塚と称するようになった。その後、墓守や土地の人たちが共同墓地として利用するようになり、また水難者、行路病死者等、身元不明者も埋葬されるようになった」と纏めている。

胴埋塚の中心は「南無妙法蓮華

経」をひげ文字で刻んだ供養塔で「天明2年(1782)、惣施入南北観音町、世話人新兵衛」ほか5人などを刻む。施入は財物を寄付すること。世話人が町の有志を募って碑を建立している。

延命地藏尊や国土地理院の三角点

入口近く左折、小さなお堂に総高1m60の延命地藏立像がある。新しく生まれた子を守り、短命、夭折の難を免れるという。頭を丸め手に宝珠と錫杖を持つ。残念なことに台石がコンクリート固定され、年代や施主名などが読めない。並んで出羽三山講碑。八幡でもっとも古い嘉永6年(1853)のもので、正面に「湯殿山、月山、羽黒山」、右に吉三良ほか27人の講員を刻んでいる。ほかに

馬頭観音碑が2基、総高67cmの自然石は「馬頭観世音菩提、施主大塚次郎」、切妻屋根角柱は総高38cm、「馬頭観世音、施主菊地重吉」とある。

右奥分かりにくい、明治時代、参謀本部陸軍部が「迅速測図」測量にあたって設置した国土地理院の三角点も見逃せない。三角点は位置の国家基準点をいう。明治10年代に始まり、大正2年にはほぼ設置を終えたといわれる。国土の地図作成のため1等三角点がおよそ1000点、2等が5000点、3等3万点など全国に10万点ほどが設置された。胴埋塚の三角点は2等で、金属製ふたに日本地図と「三角点、基本、国土地理院」を刻んでいる。中はみえないが永久の緯度、経度を示している。



国土地理院の「三角点」



延命地藏尊



「南無妙法蓮華経」を刻む
胴埋塚



寂しげな大正ころ「胴埋塚」古写真



五千坪と五十谷

「北部土地整理事業」で成立

(八幡北町
1、2、3丁目)

浜本町と八幡北町1丁目との境である雁田川は観音町横丁の裏を迂回してベイシアにぬける。横丁から五千坪、五十谷耕地への小橋を「富士見橋」という。川と橋は昭和41年から始まった、土地整理事業で改修、平成中ごろに一部が暗渠になった。当時、どこからでもみえた富士山をわざわざ橋名にしたのはここからの景色が特別よかったのであろう。

白金通りと雁田川に挟まれた三角地の、「金刀比羅神社」は香川県琴平町に所在する、元国幣神社で海の守り神「こんぴらさん」を勧請した。房総地方は往昔から四

国地方との船乗りたちの交流が盛んだったといわれる。

明治15年、昭和56年、平成5年の「社名碑」が3本、もっとも古い明治16年碑は台石上、高さ1m30の自然石。「金刀比羅大神、富士嶽大神、旭総漁物沐手敬書、明治15年奉祀(創立)、世話人・松田卯之吉ほか10名、石工・安藤常三郎」。かたわらに力石が2個。「35貫目、観音町」38貫目、観音丁」年号はない。

「八幡北部改良事業」は京葉工業地帯の造成にともない、資材運搬用道路としての「産業道路」(現在

の国道16号線)を急拠建設する必要に迫られたこと、これより先、用地を旧市原町が、土地区画整理を前提として関係地主から借地していたことなどが契機となる。市制最初の市街地開発工事となった。昭和39年、調査測量および地元説得に着手、翌40年総事業費9800万円、減歩率22%、施工期間3か年の「事業計画」が認可された。昭和41年起工、46年すべてを完了して竣工式を実施した。

八幡宿駅から北方およそ1kmに立地、産業道路と県道千葉勝浦線に挟まれた地区で、村田川を隔てて千葉市に接している。施工区域面積25・3ha、これに含まれる土地の名称は、市原市八幡のうち字内谷の全部、字下川端、字老川(おいかわ)、字五十谷(ごじゅうや)、字五千坪の一部、五所の内は、戦後、蓮田や材木会社貯木場、

字十二神であった。街区は短辺が50m、長辺が120mを標準とした。また、都市計画道路および既設の幹線道路を骨格として8mおよび6mの区画街路を配置し、人口計画から児童公園を3か所とした。1丁目を五千坪公園、2丁目を老川公園、3丁目を五十谷公園、村田川にかかる産業道路の橋を五十谷橋と字名が付された。

「五千坪」は頼朝伝説の地で、五所の人たちの功績で与えられたといわれる。字十二神がこれにあたるか、十二神将は薬師如来の12の時と月と方角を守るとされるが、五十谷の地名由来は未詳。産業道路から先、臨海鉄道貨物線までが八幡浦で、その先は臨海通りの飛び地になっている。

八幡どんづまりの2281番地、戦後、蓮田や材木会社貯木場、



昭和30年ころの八幡北町バス停



平成中期ころの北町交差点周辺



八幡北町周辺の旧小字



ベイサイドゴルフ練習場をへて、スーパード・ベイシアになった。裏側、雁田川と八幡運河の合流点近くにコンクリート製の小橋が架かるが老朽化のため通行禁止になっている。

橋名を「干拓橋」といった。干拓は戦後の食糧不足時代を象徴した国策事業で、海岸部を干拓して農地を造成した。工事は昭和31年に完成したが、推進者の鈴木貞一八幡町長が始関派選挙違反に連座して辞職し、あわせて「京葉工業地帯造成事業」への転用問題が起った。千葉市が誘致した川崎製鉄が操業を開始、同じ年、八幡五所漁業協同組合が63万坪の漁業権を放棄し、埋立て工事が始まった。また一方で、我が国の食料事情が好転、取り巻く環境は大きく変化していた。

昭和34年国策第1号として誕生するはずであった八幡干拓地は新たな工業用地としてその目的を180度変換することになった。現在、八幡海岸通の飛び地で、市の公共下水道ポンプ場水門、ライオン、京葉ブランピング、日本リファインなどがある。

昭和38年、市原市五所、八幡地区公有水面埋立地を起立して、「八幡海岸通」が成立、39年八幡町から八幡浦1、2丁目、46年八幡北町1、2、3丁目分離した。北町1丁目は第三商行、トヨタカローラはボウリング全盛期に「ヤワタボウル」であった。2丁目はセブンイレブン、3丁目はラウンドワン、ガスト、市原クラブ、八幡浦は工業団地として設立、現在は千葉宇徳、パチンコ・マルハンなどになっている。

土地改良区農魂碑

のうこん

(八幡687)

戦後の農林大臣賞記念碑

菊間出逢から菊間方向に向かう八幡と菊間、地境いに「土地改良区碑」がある。高さ2m60の2段台石上に2m90の角柱を載せる。正面に「農魂、内閣総理大臣鳩山一郎書」、ついで「農林大臣賞」「土地改良完成記念、市原郡八幡菊間土地改良区」とあり、農林大臣賞受賞の記念碑であることがわかる。

「農魂」は農民魂、農業にかけたたましいをいう。本文は菊間下中央耕地の歴史をひもとく。「そもそもこの耕地は連年旱害を受けしをもって、慶長年間、生実の人、百姓篠崎某、鵜田某の兩人これを

憂え、時の代官高室金兵衛の許可をえて灌漑工事を実施せり。いわゆる「草刈堰」なるものこれなり」。しかし当地は排水の便が悪く増産の障害になったという。

戦後、八幡町では菅野儀作町長の旗振りで、新しい事業が次々と展開された。昭和27年、村田川の大改修にあわせて八幡菊間改良区を設立、事業は区画整理と農業経営合理化のための集団換地であった。同29年竣工、総面積320町歩、総工費1400万円であった。碑は起案者八幡町長菅野儀作、解放地主名、発起人などを刻んでいる。



農林大臣賞受賞を記念した「土地改良区農魂碑」



竣工時の「干拓橋」、今は通行禁止



現在の新田川と「富士見橋」

石塚公園庚申神社

(八幡石塚2丁目)

八幡の本村「石握の里」

石塚の地名伝承は古く、もとは「石握(いしづか)の里」で八幡の旧地といわれる。地名研究の権威書「角川日本地名大辞典」を読むと、八幡は「古くは現在地の東方に位置し石塚村を称した。(中たという。漁師らは涙を流して略)八幡の地名は飯香岡八幡宮に由来する。同宮もと石塚に祀られていたが、のち御影山の地に遷されたという」。

『千葉県浄土宗寺院誌』は、当時八幡の中心地は石塚で「魚漁を稼ぎとして8張の網屋よりその船24艘、漁夫の員400余人をかぞえた」としている、八幡・無量寺創設伝承も石塚が関係する。白鳳

元年(7世紀後期)石塚の漁師が漁に励んでいると、俄かに嵐となった。逆巻く波に漂い、いまにも遭難の危急を救ったのが海中から出現した「阿弥陀如来像」であつたという。漁師らは涙を流して喜び、像を舟に乗せて石塚に帰り、前身・宝樹坊に祭祀を託して安置したのが無量寺の始まりになった。石塚2丁目の石塚公園にある庚申神社は、創建不詳だが当地の産土神(うぶすながみ)として古くから鎮座し、猿田彦命を祭神として悪疫除災、旅中守護神として信仰されてきた。猿田彦は日本神話における「天孫降臨」で、天照大

神の使い瓊杵尊(にぎのみこと)を高千穂に道案内したとされる。社殿は一間社神明作りで、千木(ちぎ)をあげ、向拝を付ける。扁額は「庚申神社」、飯香岡八幡宮先々代宮司市川教生が記した同社の墨書額によると、昭和51年境内地の整備と社殿改築、鳥居の建立を行い、平成23年、腐朽の激しかった鳥居を再建し、庚申神社由来碑、玉垣を構築して御遷宮を斉行した。

「庚申神社由来碑」は、「往古この付近に村落が形成され石塚村と称したという。後に飯香岡八幡宮が勧請され、八幡宮の氏子区域で八幡郷が形成されたため、石塚村は併合されて小字名のみとなった」。

江戸時代、明治、大正時代をへた昭和47年、「八幡東部土地区画

整理組合」を設立、同年工事を起こし、50年竣工、事業面積19万4000㎡余、総工費は4億5000万円余であった。

石塚公園の総高2m50、巨大自然平石、「区画整理完工記念碑」が事業の概要を伝える。この年、石塚地区は市原市八幡から分離、数百年ぶりに石塚名が復活、八幡石塚1、2、3丁目となった。

堂内に江戸後期の「舟形庚申塔」が1基、台石を加えた全高80cm、憤怒の表情をした1面6び(手)の「青面金剛像」が邪鬼を踏まえ、下に3猿、左右に2童子と2鶏を従えるが、銘文は判読できない。平成23年構築された玉垣の左部分、神水碑は「御神水、明治27年、発起人宮原徳次郎ほか7人、井戸職宇田川松(五郎)ほか、上総掘りの神水が使われた。



完工碑を除幕した
「完工記念式典」



「八幡東部土地区画工事」の
航空写真



八幡の旧地といわれる「庚申神社」



石塚小学校とスポレクパーク

(八幡石塚2丁目、
菊間)

昭和49年に八幡小学校から分離

石塚小学校は昭和30年代に始まった千葉工業地帯進出企業従業員家族に対応するため、同49年4月八幡小学校から分離、開校した。当初1年間は旧校に同居、八幡石塚の現在地に敷地面積2万150㎡、校舎3600㎡、鉄筋コンクリート3階の新校舎竣工を待つて移転した。

「待望の新校舎完成とともに、昭和50年7月15日新たな希望に胸をおどらせながら児童606名と職員23名は八幡小学校の児童、職員、PTAのみなさんに見送られ、鼓笛隊を先頭に真夏の強い日差しを浴びながら校門を入り、入

校式を中庭で行いました。(中略)校舎だけはいただきました。が備品もなく校庭は一望の草原でした。創立5周年記念誌「石塚」で初代佐久間章校長が回想した。

若鳩が天空に羽ばたく姿をデザインした校章は山口達画伯、校歌は沢田繁二先生と千葉大の山本金雄先生の作詞、作曲、シンボルのゆかりは職員手植えの記念樹で、椎の大本は廃校となった加茂地区の月崎小学校から移植した。

校舎は市原市の最北端、村田川に隣接、川向こうは旧村田川が蛇行していた影響で千葉市と市原市が複雑に入り組んでいる。南北に

国道16号線とJR内房線が走る。東端を館山自動車道がのび、西は千葉港の八幡運河で突き当たる。この間の旧村田川から八幡観音町、称念寺参道までが通学区になる。八幡の北半分、八幡石塚、八幡北町、八幡浦の4町。児童数は昭和56年度の801名をピークに減少、令和7年度は400名となっている。校庭の創立10周年「岩石園」は変成岩やたい積岩、火成岩成立の仕組みを解説、平成5年、20周年の「タイムカプセル碑」は地中にカプセルを保存したことを記す。小さな「次世代へのメッセージ」だが、夢をつなげて楽しい。

石塚小学校の東側、県立市原八幡高校とスポレクパーク、消防学校の一面は、古代の土地区画整理方式である「市原条里制遺跡」の最北端「県立スタジアム市原スポ

レクパーク地区」にあたる。平成14年、当初日本単独で開催される予定であった「ワールドカップ」の会場候補地として準備された。市原スポレク建設に先立って行われた発掘調査などによれば、縄文の古環境は海底で、海水面下5m前後にあった。のち土砂の堆積により「潟湖(せきこ)外海と隔てた浅い湖沼」から「低湿地帯」、里制遺跡」へと組み込まれたが、江戸時代「八幡村絵図」では田畑として耕作されている。

市原八幡高校は昭和58年創立の普通科進学校で、校訓は「自立、自重、自律」。生徒数は各学年200人。八幡宿駅から直線1.5km、徒歩20分。OBに猫ひろし(お笑い芸人)、鳥養祐矢、鳥海晃司(サッカー)さんがいる。



市原スポレクパーク



石塚小学校の航空写真



開校時の入校式



村田川と渡船場跡

(八幡)

両総境川を舟か歩行渡り

村田川はかつて上総、下総の国境で、「境川」ともいった。江戸時代は幕府の軍事政策として全国主要河川の架橋が認められず、村田川にも橋はなかった。旅人たちは徒歩か片道2文の渡し船を使った。かつての川筋はおおむね現在の村田川公園に沿い、渡船場は旧道バス通り「村田橋停留所」の東方100mほどにあった。

旧道「房総往還」に沿ったマンション「グランコート浜野」横に「アイミュージアム標柱YW」07「村田川渡船場跡」がある。

「河口付近が上総と下総の境を流れ「境川」と呼ばれていた村田川

は、かつて現在の村田川公園内を船場が設けられ、明治7年に架橋されるまで人びとは渡し船で対岸に渡っていました。水戸黄門で知られる徳川光圀がこの地を通過した際には、船を並べて繋いだ上に板を渡した船橋をかけて渡河し、飯香岡八幡宮や姉崎の妙経寺を訪れました。」

一方、「千葉市教育委員会」看板は「この地は南房総への交通の要所でした。明治20年ころまで船による渡しがあり、古来探訪の文人墨客、兵馬など身分の上下を問わず船で川を越しました」。

また一方、明治7年「八幡宿一村限り下調べ」は「渡し場1か所、両国境川、川幅10間、深さ3尺5寸」、参勤交代で八幡を通行した黒田久留里2万石の「藩政一斑」は「村田川歩行（かち）渡り、この川は上総、下総の境、ただし船にてもし候」、生実藩地廻り村々晃戸城明渡しに不満の幕府撤兵隊取絵図は「20間、歩渡り、但し水出候時は舟渡り」としている。

現在の村田川から、歩いて渡ることとは考えられないが、当時、草刈堰が上流にあり、「毎年春の彼退却しました。今は川筋もかわり、岸入りに川水の一部を堰溜し、秋の彼岸入りに落水をなす」。菊間村、八幡村、浜野村、村田村などの水田、あわせて5000石の灌漑用水として利用されていたことを考えれば、当時は歩行渡りできる水深だったのであろう。

「康正2年（1456）」、千葉氏

の内乱で千葉宗家胤直父子を滅亡させた馬加城主馬加康胤は、將軍足利義政の命令を受け、追討に向かった一族の東常縁の軍に敗れ、市原市八幡で戦死し、首を村田川に晒されたと伝えられています。また慶応4年（1868）4月

「（前出千葉市看板）」

明治7年7月最初の村田橋を架橋。市川本店の「八幡宿戸長文書群」によれば橋長14間、幅9尺。

材木手間代81円余、その他諸経費



明治7年「境川架橋工事費」



村田川公園と渡船場跡標柱



「20間歩渡り、船にても越し候」
生実藩絵図



を含めた総額は118両3分余であった。これを八幡宿と村田村が折半、八幡の総経費は64両余であった。当初は有料、両村が橋番をおいて通行料を徴収した。一日平均の収入が76銭。通行料を渡船代と同じ2文(新価2厘)と仮定した場合の利用者数は上下あわせて360人という計算になる。

現在の村田川は昭和28年に行われた拡張改修工事以降のもので、それ以前は新村田橋から100mほど千葉側、現在村田川公園の地にあった。川は曲がりくねり、堤防は軟弱、大雨のつど決壊して、田畑や住居が被災した。改修工事では草刈堰から八幡海岸の河口をほぼ直線で結び、20mの川幅を46mに広げた。現在の村田川公園は直線だが、周辺の地番は千葉市と市原市が交錯、入り組んだ曲線が

昔の村田川を現している。

村田川橋バス停近くの旧河川敷に、江戸中期八幡講中が立てた、駒形「庚申塔」がある。本書5基めの碑は旅人の安全を守るとともに村に災害や悪疫が入りこまないよう文字どおり村の入口に建てられている。高さ94cm、正面に憤怒の表情の青面金剛が邪鬼を踏まえて四方をにらむ。3眼6手、右手に宝剣と三又鉾、矢、左手は裸婦、輪宝、弓を持つ。日輪月輪飛雲、3猿、2童子。右側面「中町惣左衛門ほか17名。右側面「享保13年、浜本喜右衛門ほか6人を記す。現在村田地区の年寄たちが世話されている。

村田川地続きの千葉市側に何か所か八幡の飛び地がある。村田字蔵屋敷は松平大河内大多喜藩2万石蔵屋敷跡という。上総の内陸に

所在する大多喜藩が江戸藩邸との海運拠点とした。

旧村田川鉄橋が村田川の面影を残す

村田川公園の東端はJR内房線の線路敷で、陸橋になっている。急勾配に掘り下げた下(した)道はかつての村田川河川敷で、当時の面影が漂う。両岸から伸ばし、真ん中の20mほどが鉄橋で支柱が2本ある。上下2組の鉄路、西側上り線レンガ造りの方が明治45年創業時で、下り線は昭和43年の複線化で作られた。

千葉県の鉄道は明治22年の市川、千葉、佐倉間が最初で、内房線は明治45年3月28日市原の八幡、五井、姉ヶ崎3駅が開業、最初の蒸気機関車が村田川の赤レンガ橋台鉄橋を渡った。以来110余年、

八幡町とJRの歴史の重みを支えながら今日におよんだ。

JR内房線からおおよそ500m西側を並行して走る、貨物専用電車、「京葉臨海鉄道」のことはあまり知られていない。臨海工業地帯の埋立て工事が進む昭和37年、旧国鉄、千葉県および進出企業が出資する第3セクター方式の地方鉄道として誕生、主要駅は蘇我、京葉市原、浜五井、久保田で全長23.8kmある。

昭和53年、新東京国際空港への航空燃料輸送を開始したが、千葉港と空港を結ぶパイプライン輸送に移行されたため58年にその役目を終えた。ディーゼル機関車は力づく、村田川鉄橋周辺、飯香岡通り信号付近が撮影スポットとして「鉄道ファン」に知られている。



いかつい車体が魅力の京葉臨海鉄道



明治45年構築の
村田川れんが積み鉄橋



現在の村田川、新村田橋から
上流を望む



村田川改修前の長妙寺橋付近

五所村

(五所)

足利義明と金杉庄左衛門

五所は御所とも書く。『角川日581石余、人口442人であった。明治7年、五所金杉村、同22年八幡町、昭和30年市原町、同38年から市原市の大字五所となった。五所は、東京湾にそそぐ養老川と村田川の間に位置し、温暖な氣候と砂浜、遠浅という好条件を生かして、江戸時代慶長の頃から塩づくりが行われていた。天明年間には江戸金杉村の庄左衛門と坂本村の又兵衛が工事を指揮し、86町歩(26万坪)にもおよぶ金杉浜新田が開発されている。

江戸時代、享保から天保期が五井有馬藩領、明治維新时期は旗本白須氏、南条氏、森氏の相給で村高

しかしながら、塩場は台風の波浪や洪水には無力でわずか4年で壊滅的な打撃を受けたが、その後

本格的な復旧工事が行われることはなく、およそ20%が明治におよんだ。明治44年製塩業は官営となったため五所金杉にわずか1戸あった製塩家も廃業した。

その製塩法は遠浅の海を堤防で仕切り、一か所に桶門を設け、地場の一部に溝を作る。潮が満ちて桶門から導かれた海水は地場全体に広がり、まいてある砂に付着する。天日と風で水分を蒸発させた後、砂を集めて数列の畔を作り、桶をならべ、桶の上にザルをおいて砂を盛る。これに潮水を数回注ぎ、桶の中に塩分の濃厚な鹹水(かんすい)が得られる。さらに土釜に移して煮つめ食塩を結晶させた。大正時代からは海苔養殖が始まったが、市原の海苔は光沢があつておいしいと評判がよかった。昭和33年から当地地先は埋立てが始

まり、現在は工業地帯に変わっている。

ところで御所の主・足利義明とはどのような武将であったのか。義明は古河公方二代政氏の次男として誕生(生年不詳)した。幼少時に僧籍に入り、鎌倉鶴岡八幡宮若宮別当・雪下殿(社家様)となつて、八正院空然を号したが、永正7年(1510年)還俗して義明と称し、右兵衛佐に任じられた。永正9年、古河公方家に父政氏と兄高基との間で権力争いが起こると、小山に追われた父の後継者を主張して兄と対立。上総真里谷・武田信保の招聘にこたえて武蔵栗橋の御座所から利根川を下り八幡に入部し「八幡御所」を称した。市原は上総守護職を勤めた足利氏の準本貫地で、八幡宮とも深い関わりがあつた。いったん別当



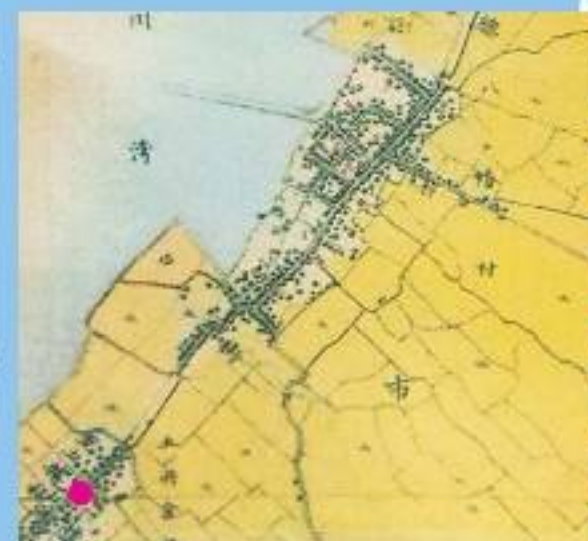
塩田を開発した庄左衛門家の墓



旧名主家に伝来した「金杉浜塩田図」



伊能忠孝八幡五所海岸図



寺・霊応寺（通称・若宮寺）内の満徳寺に入り五所に移る。永正14年上杉勢力で反古河の原氏が本拠としていた小弓城を落とし「小弓御所」と呼ばれたといわれる。

八幡御所時代の事績は未詳の部分が多く、力を出すのは小弓御所時代。その勢力基盤は上総、安房に点在した鎌倉以来の足利氏家臣層で、これに安房里見、真里谷武田氏、下総白井氏、常陸の小田氏らが加わった。下総に進攻、領国は房総3か国の大半に及んだ。

一方、古河公方となった兄高基も関東足利氏の分裂を見逃すわけにはいかない。小田原北条氏綱に接近して義明の討伐を指示、両者は決戦の時を迎える。天文7年（1538）9月、義明は里見義堯、武田信忠ら房総士卒1000余衆、北条氏綱は武蔵、相模、伊

豆の軍兵5000余騎を率いて出陣。北条軍が松戸から江戸川を越えて義明軍に襲掛かると、急を突かれた小弓勢は打負けて総崩れとなった（第一次国府台合戦）。義明と嫡子義純、弟基頼は討死、小弓方の戦死者は140人（諸説）に達した。北条軍は勝利の余勢をかって上総に追撃、小弓勢は小弓城を自焼、房州に落ちた。小弓城には旧主原氏が復帰し、以後市原北部を領有した。

後の話として、北条氏を滅亡させて天下人となった豊臣秀吉は、義明次男頼淳の娘島子を側室としたが、名家の没落を惜しんだ秀吉は、島子の弟と古河公方家の氏姫を結婚させて、足利家（喜連川）を復活させた。子孫は江戸時代も大名格として明治維新におよんだ。

（安原暉之）

したんだ

五所四反田遺跡

古代官道と柳楯の道

（五所）

「古代官道」とは、律令制時代に、都と地方を最短距離で結び、物流や軍隊の移動をスムーズに行うために当時の公道として全国規模で整備された畿内、東海道、東山道、北陸道、山陽道、山陰道、南海道、西海道の「五畿七道」をいう。

都から常陸国に通ずる「古東海道」は、当初相模国の三浦半島から直接東京湾を横断し上総国に上陸する海上ルートが取られていた。しかし、宝亀2年（771）、武蔵国が東山道から東海道に編入されると、相模国から東京湾岸に沿って武蔵国、下総国から直接常陸国に至る陸上コースが変わった。

これにより上総国への房総道は支線となり、京への道も危険な海路から陸路に代わった。

市原地域では、平成2年、五所小学校を建てる際に発掘調査が行われ、古代の道路跡である「五所四反田遺跡」が発見された。遺跡の所在する沖積平野には、1960年代の圃場（ほじょう）整備まで明瞭な条里遺構が遺存しており、道跡は条里遺構の中を南東から北西に、台地から海岸部に向かって走っている。

道跡は道幅約5・5mで両側に逆台形の側溝を持つ。側溝の幅は約2m、溝底面から道路面までの



平安京に始まる5畿7道



足利義明の居城
小弓（生実）城大手門跡



足利義明の御座所栗橋の宝聚寺

高さは約1・3mである。

この道跡の築造年代は明らかではないが周辺の条里的土地区画とは方向や間隔が合わないこと、道路面下の泥炭層が水田耕作の影響を受けず、周囲よりも高く残存していることから条里に先行して築造されたことは明らかで、条理水田が開田された9世紀後半から11世紀をさかのぼる築造といえる。

市原台地上の稲荷台遺跡でもオーブンカット式の古代道跡が検出されており、そのルートは、五所字神明地区の海岸線付近から海岸平野を抜けて、万葉遺跡である台地上の阿須波神社脇の切通しを経て、上総国の官衙（かんが）内祭祀遺跡に推定される「稲荷台遺跡」に続くものと考えられる。

この古東海道にまつわるエピソードをいくつか紹介する。

日本武尊（やまとたけるのみこと）は東国征伐の際にこの海上コースの古東海道を三浦半島の走水から船で東京湾をわたって房総に入った。途中暴風にあい妻の弟橘姫（おとたちばなひめ）が海神の怒りを静めるため海に投じ、流れついた着物の袖にちなんで、八幡五所を含む内房海岸一帯がかつては「袖ヶ浦（袖師ヶ浦）」と呼ばれた。日本武尊は八幡に宿陣し、千葉、佐原、鹿島、常陸へと北上、あらぶる蝦夷（えみし）をことごとく服従させたとされる。八幡には、尊が六所御影神社で休息した際に、社人が食事を捧げたところ、尊が飯の香りを賞したことで御影山を「飯香岡（いいがおか）」と名付けたという伝承がある。

「更科日記」は平安時代後期の寛仁4年（1018）、筆者であ

る菅原孝標の女（むすめ）が、無事上総介の任期を解かれた父に連れられて陸上コースの東海道で帰京した旅日記に始まる。一行は国司館（所在地未詳）からいったん

「いまたち」（所在地未詳）に移り、豪雨について八幡五所の古代道、境川（村田川）の国境から下総の「いかた」に宿泊した。帰り道はゆっくりで、およそ3か月をかけて京都に到着した。日記の行程には不明箇所が多く、場所探しが今日まで続いている。

治承4年（1180）源氏再興の旗を上げた源頼朝は「石橋山の戦い」で敗れいったん安房に逃れたが、先行していた三浦義澄・北条時政らと合流して鎌倉への進軍を開始した。房総には源氏に心を寄せる武士団が多く、千葉常胤・上総介広常らを引入れ、さらに畠

山重忠などの武蔵の武将も頼朝の下に降り、敗戦後わずか2か月足らずの10月7日に鎌倉入りを果たした。

「柳楯神事」は飯香岡八幡宮の秋季大祭のみこしの宮出しに際し、事前におこなわれる祭祀で、「千葉県無形文化財」に指定されている。柳楯は市原地区の司家（つかさけ）により柳の小枝25本と青竹5本を使って毎年調製され、圃場整備以前までは「ナカミチ」または「オオミチ」と呼ばれた、この古代道を通って運ばれた。かつては五所御三家、現在は町民会館で1泊した後翌朝八幡宮に向かう。現在も柳楯が八幡宮に到着しなければ、5基のみこしが街を練歩く「みこし渡御」の式典が始められないしきたりが守られている。

（安原暉之）



五所四反田遺跡のある五所小学校



上総国府周辺の古代官道



市原条里制遺跡の古道跡



関東地方の後期「古東海道」

市原条里制遺跡

(五所、八幡ほか)

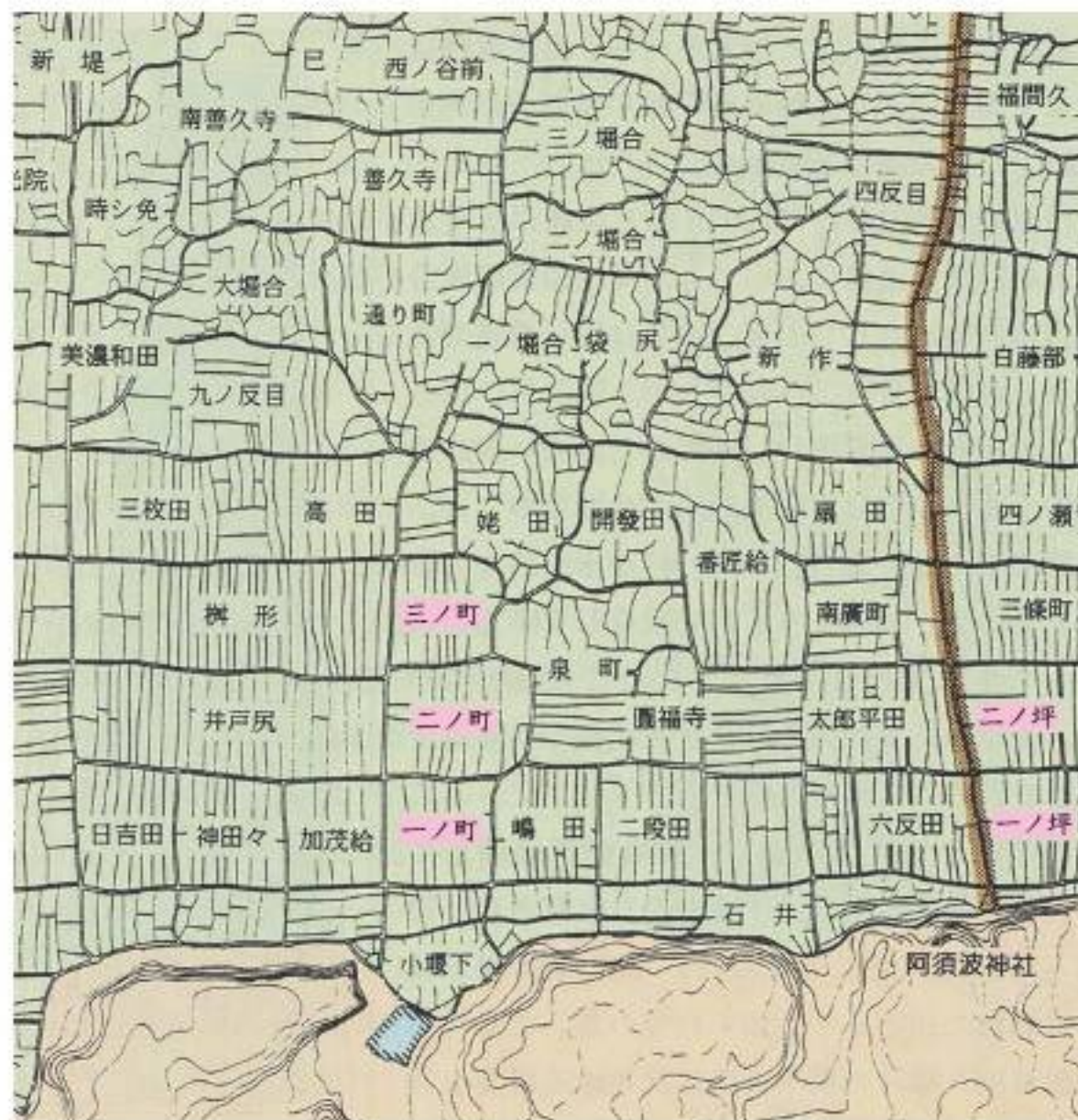
古代土地区画が昭和まで残る

「市原条里制遺跡」は、村田川から養老川にはさまれた、通称「市原台地」の北西に広がる、標高5m前後の沖積平野に位置し、北は千葉市との境から南はJR五井駅東付近、東は台地直下から西は五所小学校に及ぶ、広範囲の遺跡である。台地上には光善寺廃寺や、上総国分僧寺・国分尼寺跡、国府推定地などが所在している。

本遺跡には、1960年代の圃場整備まで、明瞭な条里的土地区画と、それにともなう一ノ坪・二ノ坪・一ノ町・二ノ町・三ノ町など数詞名をもつ小字や梶給・於局(おつぼね)給など「給免田」を

示す小字名が数多く残っていた。

「条里制」は古代からの土地区画整理方式で、従来は飛鳥時代または奈良時代初期の「班田収授制」にともない施工されたとみられてきたが、最近の考古学の研究成果によれば、条里制が全国的に広く展開し始めたのは古くとも奈良時代中期以降であり、班田収授との関連は薄くなっている。むしろ「墾田永年私財法」の施行で盛んとなった、富豪や有力寺社による墾田開発の増加にともない、統一的な土地表記法として積極的に活用された。しかし荘園の衰退とともに使用されなくなり、最近の



市原台地下に広がる「条里制遺跡」と字名

一里	二里	三里
6町	6町	6町
一条	一条	一条
二条	二条	二条
三条	三条	三条
四條	四條	四條
五條	五條	五條
六條	六條	六條
七條	七條	七條
八條	八條	八條
九條	九條	九條
十條	十條	十條
十一條	十一條	十一條
十二條	十二條	十二條
十三條	十三條	十三條
十四條	十四條	十四條
十五條	十五條	十五條
十六條	十六條	十六條
十七條	十七條	十七條
十八條	十八條	十八條
十九條	十九條	十九條
二十條	二十條	二十條
二十一條	二十一條	二十一條
二十二條	二十二條	二十二條
二十三條	二十三條	二十三條
二十四條	二十四條	二十四條
二十五條	二十五條	二十五條
二十六條	二十六條	二十六條
二十七條	二十七條	二十七條
二十八條	二十八條	二十八條
二十九條	二十九條	二十九條
三十條	三十條	三十條

条里の仕組み



五所小学校方面をのぞむ



条里制遺跡は現在も圃場として活用されている



圃場整備によってその遺構が急速に消滅している。

条里制による「坪付」は、おおむね郡ごとに耕地を6町（約654m）間隔で縦横に区切り、6町間隔の横（東西）の列を「条」「里」と呼び、1里内をさらに1町間隔で縦横に区切って36等分し、その1町平方の1区画を「坪」と呼んだ。そして千鳥式または並行式で1坪から36坪まで呼称した。

これにより1つの坪の土地表示は何国何郡何条何里何坪と番号で呼ぶことで明快な位置表示が可能となった。さらに坪内は60間×6間の長地（ながち）形（短冊形）もしくは30間×12間の半折（はおり）形（色紙形）の地割で区画される。

市原条里制遺跡の発掘調査は「東関東自動車道」の建設に先立ち

昭和63年から6年間にわたりに実施された。これまでの調査の結果、古代、中世前半、中世後半、近世の4面の水田とそれにもなう畦畔・水路を検出している。このうち中世、近世の水田跡については、ほぼ現条里と同様な形態を示しており、坪内地割りにについても長地形を基本にしたものであった。

出土遺物としては、土師器（はじき）・須恵器・瓦などが主体ではあるが、古墳時代中頃に作られた木製品が市内で初めて出土した。遺跡から木製品が出土するのは珍しく、地下水によって外気から保護されたものと思われ、二股鎌や風呂鍬・エブリ・鎌柄・田下駄などの農具や曲物（まげもの）・刀形などの祭祀遺物が出土している。その一部は「市原歴史博物館」で展示されている。

（安原暉之）

五所歴史ストリート

（五所）

神話ともののふの町を歩く

八幡さまに1枚の大絵図が保存されている。幅3m10、天地1m56、畳3枚ほどの厚手図面で、布張りの紙箱に折り畳まれていた。

「250年昔の天明年間、江戸・金杉村の百姓庄左衛門が、総工費3千両（およそ5、6億円）を投じた「金杉浜塩田図」で、広さは東京ドーム17個分（25万坪）という。五所海岸へ飛び出すように築いた出島に1000個以上の塩田を区画、さしずめ巨大団地造成を想像させる。

塩田が築かれた五所海岸の現在は埋立て工場街。大型車両が走抜ける「国道16号線」の市原埠頭入

り口から遠望。「かつて4kmにもおよぶ巨大干潟地で、満潮時は市原橋の海岸土堤まで海水が押寄せた。真っ青な大海原が広がり、富士山が丹沢山脈を従えて、雄大な裾野を広げた」あまりの激変に、実感はわかない。

塩田は「入り潮式」といった。

干潟に堤防を築き、塩田に取入れた海水で「鹹水（かんすい）濃縮塩水」を作り、「釜場」で煮詰め

た。しかし、この大工事も儚い運命に終わる。寛政3年（179

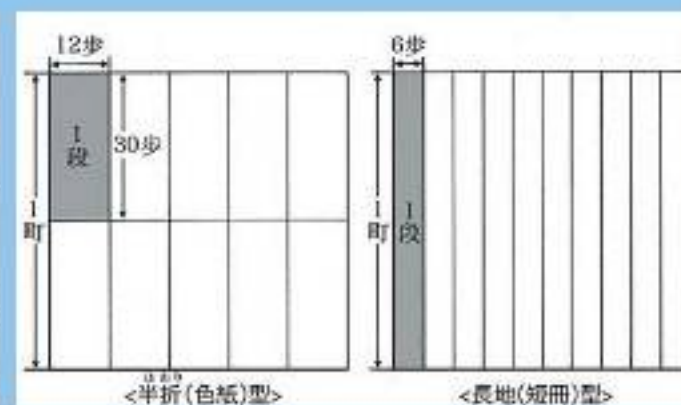
1）、関東地方を直撃した高潮が猛威を奮う。隅田川が決壊、返し



「塩田大絵図」の五所海岸と八幡海岸



条里制遺跡から出土した木製品



条里制の坪地割り

から内房に展開した塩場も軒並み欠壊、その後五所の大塩田が復活することはなかった。

ポトピアの運河沿いをすすむと北川に出る。元は市原台地裏側の能満堰を川源に辰巳方面のわき水、雨水を集めた灌漑用水路で、かつて市原、五所村などの田んぼを潤した。大正初めにのり養殖が始まると多くのお宅が農漁兼業となる。北川と金杉川はのり採り「べか舟」で埋まる。舟を川岸の杭に固定、鍵代りの「一丁魯(ろ)」を天秤棒に自宅に戻った。

大正3年、「両総電灯」の市川石三が、北川脇の現在ガソリンスタンドの地で「火力発電所」を創業、八幡五所、五井地区に初めての電灯を灯した。ろうそく、ランプの時代、あつという間に広がった。昭和初め、各戸平均20燭光が

1灯、電灯料は90銭。戦時下の国策で関東配電、戦後東京電力に統合された。

白金通りの金杉川近くに「磯邊神社」がある。祭神の塩土老翁命(しおづちのおぢのみこと)は、塩釜の神様で知恵の神様でもある。金杉浜の起立時に創建。鳥居は「大正6年、奉納清水徳次郎」とする。明治44年、国営のため廃業した最後の製塩業者の一人で、代々にわたる感謝が込められた。

バス通り脇に「五所白幡神社」がある。白幡は本来、八幡神を祀るが、当地は頼朝や義明伝承が多い。かたわらの再建碑は「この地は武威四隣を圧した足利義明公が永正14年(1517)下総生実に自立する以前に館を構えて八幡御所と称したが、後天文7年(1538)市川国分台にて北条勢と合

戦で敗卒するにおよび当御所も廃絶し地名も五所と改められ、同8年跡地の一廓に白幡権現を勧請して今日に至る」とする。

隣接するジョイフル本田一帯は金杉浜塩田(村)の旧名主今井家の所有地で、金杉川近くの旧居は「八幡御所・足利義明屋敷跡」と伝承された。昭和56年、発掘調査が実施されたが、義明代の遺構や遺物が発見できなかった。では、八幡御所はどこか、このなぞはその後も解明できていない。

旧房総往還の正式名称は「主要地方道、千葉鴨川線」という。かつて古東海道に所属、日本武尊、源頼朝が軍を進め、江戸時代は房総諸藩の大名行列が行き来した。往還のやや五井寄りに満蔵寺がある。大正までは、同じ五所に浄土宗豊山派の密蔵寺と明照院の3

寺院が併立したが、大正9年2寺が火災焼失、満蔵寺に合併した。明治の「千葉県寺院明細帳」によれば、「新義真言宗豊山派、釈蔵寺末、長谷寺末。本尊阿弥陀如来、不動明王。由緒不詳。本堂間口7間×奥行4間。客殿間口7間×奥行4間(昭和15年)。境内坪数307坪。観音堂(本尊観世音)」とする。また、境内大師堂は天明4年(1784)、釈蔵院住職らが作った「市原郡八十八か所札所」で第69番になった。

本寺の釈蔵院は大同年間(806)、弘法大師空海開創と伝わる。飯香岡社別当寺と同じ京都醍醐寺三寶院直末の有力寺院として栄えた名刹で、天正10年(1582)には最後の上総国府跡とされる府中(能満)日吉神社別当寺として所在したことが解っている。



五所唯一の寺院
満蔵寺



五所の町並み



御所跡推定地



五所白幡神社



埋立工場地帯の夕景

満蔵寺の創建は未詳だが、境外無縁墓地に、中世五輪塔残欠が確認されており、飯香岡社が意外なところにつながり、可能性もある。

普通、墓地は寺院に付属するが、五所では共同墓地が中心である。入口に「出羽三山三段塚」がある。三山は山形県の月山、羽黒山、湯殿山のこと。先達の引率で登拝し、ついでに周辺の観光地を回った。五所は三山講の歴史が古く、宝永、元禄時代に始まり、平成時代まで続いた。墓地中ほど、斎藤家の墓所に塩田を開発した庄左衛門の墓がある。正面「自性院念譽道畔居士」と天明8年の没年を刻み、3面におよそ1000字におよぶ弔文をよせている。

小湊バス「五所」停留所あたりは、間（あい）宿と呼ばれた五所村の中心地で、宿場町の名残が

ある。角地にある洋館は五所町民館、かつて「五所御三家」で行われた飯香岡社秋季大祭の柳桶「引渡し式」や「出振る舞い」が現在、はこで行われている。当地に泊した柳桶は、祭礼当日朝、供揃いで出発。超満員の祭り会場に暗れがましく入場する。

かつて町民館前の一面に御三家が並んでいた。その一つ中島家伝来文書「飯香岡八幡宮御伝記」によれば、「白鳳2年、藤ぬま池で花見で、盟友の中村、浅野。中島の3人が、これより都に上り、筑紫（福岡）のかたをも巡拝せばや」と阿須波神社に詣でて出発、筈崎（はこざき）神社で「なんじらに神前の大玉籤（くじ）」と柳の神桶を授く」との託宣をこうむる。3人は柳の桶を筏にして神宝を遷して流す。それより帰路を急げ

ば、蒼野が原（現在トライアル周辺か）の入り江で奇しき光を放つ神宝を見付ける。「おのおの悦び限りなく、藤ぬま岡に仮殿を営み、同4年蒼野が原に宮地を定め、宮祠を造営して遷宮した」。

五所には小さな神社が多い。字ごとの「地神さま」という。町の人になにの神様ですかと尋ねても大体がわからない。日本の神様は「八百萬（やおよろず）の神様」で、願い事はなんでも叶えてくれる。往還にある日吉神社は山王さまともいう。1間社流れ造り、比叡山の山王信仰を勧請している。

手押し信号の交差点を右折する。現在は路地裏道だがかつて市原台地上の国府と古東海道を結ぶ古代官道（国道）で、前出五所小学校の発掘調査で道巾5m50+側溝を計る。交差点近く、1間社流れ造

り、神社は小さいが「大宮神社」は大は大きい、すぐれるなど。かつて大宮で、「柳桶の引継ぎが行われた神社」とも伝承される。

やや進んだJR線手前左手の「若宮八幡神社」は飯香岡八幡宮の「元宮」ともいわれる。市原ミュージアム歴史遺産「YW105」を開くと「創立年代は不詳ですが、海中に光るものを地元民がすくいあげて祀ったことに始まると伝えられています。一説に飯香岡八幡宮の元の宮だったとの伝承があります。境内には「神名帳考証士代」の一説を刻んだ由来碑があり、祭神は仁徳天皇です」と刻んでいる。

八幡の歴史探訪は、神話のベールに包まれた謎の世界です。ぜひ一度、本書を片手にゆったりと町の歴史を楽しんでください。



飯香岡社元宮とも伝承される
若宮八幡神社



飯香岡八幡宮伝記



大祭当日
晴れがましく宮入りする柳桶



五所町民館での柳桶出発式

ご協力いただいた方々

編集協力

平澤牧人様、時田光夫様、安原暉之様

市原市教育委員会、市原歴史博物館アイミュージウム
県立中央図書館、市立中央図書館、市立八幡小学校

八幡公民館指導員 松濱 忍様

八幡史学館講師 田所 真様

宮本敬一様、佐倉東雄様、塚原 茂様、石井 勇様

小関勇次様、立野 晃様、辻井義輝様、松井哲洋様

八幡史学館チーム

多村勝彦様、鷺津寛子様、堆美登里様、柴田正子様

ふるさと市原をつなぐ連絡会 石黒修一様

市原の古文書研究会

秋葉 平様、今井公子様、上田洋子様、奥田宏之様

佐野 彪様、高澤恒子様、吉川綾子様

市川本店文書調査会

後藤雅知様、手塚雄太様、神山知徳様

小出惣治様

板倉 満様

竹内 克様

皆川 清様

市川恵三様

市川信三様

市川一夫様

榎原義久様

菅 勇榮様

山越国臣様

青木利一様

大岩裕幸様

寺尾泰文様

織田和孝様

高澤 毅様

西 聡子様

清水優子様

内藤敏子様

清水あき子様

黒川たか子様

寺嶋雅史様

寺嶋千津子様

北嶋勝代様

根本かつ枝様

飯香岡八幡宮様

無量寺様

称念寺様

満徳寺様

円頓寺様

妙長寺様

市原市写真連盟様

このほか取材先のみなさん、
多数の方からご協力いただきました。

主な参考資料

市原市史、市原郡誌、千葉県の歴史、千葉県の歩み

写真集 明治、大正、昭和 市原（国書刊行会）

写真アルバム「市原市の昭和」（いき出版）

写真が語る「市原市の100年」（いき出版）

八幡町と歩いた八幡公民館70年の黎明（山岸弘明）

石造物にみる「郷土史」…（史学館チーム石造物研）

市原の古文書研究②③④集（市原の古文書研究会）

市原市歴史と文化財⑨八幡…（地方史連絡協議会）

やわた名所100選（八幡史学館チーム）*

いまよみがえる「むかし八幡町」（DVDⅡ市川得三）

八幡史学館データファイル①③（CD）*

飯香岡八幡宮文書、同旧蔵榊原家文書

若宮八幡神社旧蔵文書、市川本店文書

寺嶋家文書、鈴木家文書、岡田家文書、梅谷家文書

千葉県文書館文書、千葉新聞マイクロフィルム

広報いちばら、八幡公民館新聞、八幡公民館だより

市原市教育委員会、八幡公民館保存資料

八幡中学校50年史

市原市八幡あれこれ（佐倉東雄）

菅野儀作先生を偲ぶ（菅野儀作顕彰会）

不思議な出会い（鈴木貞一）

社会教育十年のあゆみ（千葉県教育委員会）

千葉県公民館史（千葉県公民館連絡協議会）

中世都市「府中」の展開（小川 信）

飯香岡八幡宮本殿修理工事報告書

まほろしの上総国府を巡って（たからしげる）

市原条里制遺跡／五所四反田遺跡（教育委員会）

中世における上総国飯香岡八幡宮について（寺田広）

市原八幡宮と中世八幡の都市形成（桜井敦史）

市制施行60周年記念航空写真集

大蔵寺と生実郷（淑徳大学アーカイブス）

新編房総戦国史（千野原靖方）

山国からやってきた海苔商人（島利栄子）

上総広常とその時代（一宮町教育委員会）

千葉市の今むかし／我、関東の將軍にならん／千葉市の戦国時代城館跡（千葉市郷土博物館）

千葉県八幡町鳥瞰図、千葉県博覧図

国会図書館デジタルコレクション

本文記載分を省略

*本誌著者（山岸弘明）著書または共著

あとかぎ

永年親しまれた八幡公民館が令和八年三月に閉館する。戦後の混乱期、菅野儀作町長のカリスマ的リーダーシップのもと、住民総出の勤労奉仕で創建。郷土復興、町起こしを推進した。文部大臣賞受賞、菅野館長が昭和天皇拝謁の栄に浴した。海の町だった千葉県内湾に「京葉工業地帯」を実現させたのも、県議、参議院議員に進んだ菅野先生だった。海岸埋め立てから七十年、八幡に海があったことを知る人も数えるほどになった。

かつて五大力船の江戸への米穀薪炭津出し湊として発展、大正・昭和前期は、のり養殖、潮干狩り場として賑わったことなど、遠い昔話になってしまった。公民館閉館のいま、改めて町の「来しかた」を探り、その地への愛着を深めようとすることも意義あることだと思う。

最後に八幡公民館七十七年間におよぶ社会教育活動に拍手を送りたい。ありがとう八幡公民館。私たちの心にあっていつまでも不滅です。(山岸弘明)

市原市立八幡公民館閉館記念出版
市原市八幡「歴史探訪ものがたり」
八幡さまと五大力船

令和7年11月1日発行

令和8年3月1日電子版作成

市原市立八幡公民館	館長	池田好徳
	副館長	根本隆

発行者 市原市立八幡公民館運営委員会
会長 安藤岩男

編集者 山岸弘明

印刷所 千代田P・T・O印刷
〒290-0041 市原市玉前1322
TEL 0436(20)6305

歴史探訪ものがたり

八幡さまと五大力船

市原市立八幡公民館運営委員会



初代八幡公民館と菅野儀作初代館長(向かって右)

市原市立八幡公民館運営委員会

●執筆担当

山岸弘明 八幡公民館主催事業 八幡史学館代表講師